

エロゲ世界にTS転生
したので好き放題に暗
躍した結果

影薄燕 / なろう大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある世界。1人の幼い少女が前世の記憶を思い出す。

「……あ。これ、やりこんだエロゲの世界だ」

しかも今世は女の子。まさかのTS転生だった！

さらに自分は攻略対象の妹というポジション。大好きな姉やヒロインが主人公とイチャイチャするなど許せん！ 他にも女の子はいるんだから、そっちを攻略してろよ！！

そんな超個人的な理由で原作が始まる前から暗躍した結果が……これでした。

※この小説は「小説家になろう」にも投稿しております。

目次

第1章 原作崩壊上等の暗躍劇

プロローグ

第1話 『Heartギア』	16
第2話 小谷凜子	24
第3話 柊小夜——と……？	33
第4話 香坂明日奈（？）	42
第5話 利害一致の協力者	50
第6話 明日奈、思いふける	59
第7話 裏パスワード	67
第8話 花見……そして、運命の流れ	76
星	
第9話 15歳	91
第10話 鍋パーティー（前編）	100
第11話 鍋パーティー（後編）	108
第12話 地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》（前編）	118
第13話 地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》（後編）	126
第14話 原作開始	136
第15話 入学式	146
第16話 顔合わせ（前編）	157
第17話 顔合わせ（後編）	168
第18話 オリエンテーション	

第2章	SS	アルカ誕生(後編)	330	?	第28話	生徒会と柚木家集合と……	427
	SS	アルカ誕生(前編)	318				410
	SS	忍の過去(後編)	291		第27話	ヒロインたちの異能 後編	396
	SS	忍の過去(中編)	275				
	SS	忍の過去(前編)	264		第26話	ヒロインたちの異能 前編	386
	227				第25話	歴史の授業	
	SS	揭示板回 友理vs拓也		378	第24話	友理と愉快的仲間たち	
	第21話	次のステップ	217				
	198			367	第23話	この世界が何であろうと	
	第20話	柚木友理vs香坂拓也					
	第19話	模擬戦直前	187	357	第22話	苦勞する転生者たち	

第29話 絶対に言ってはいけない言

葉 | 443

閑話 悪の組織、日本上陸 | 456

第30話 今明かされる、衝撃の真

実ウ！ | 468

第31話 背景モブ | 476

第32話 DO☆GE☆ZA | 483

第33話 明日奈強化計画 | 493

第34話 当たりの無いクジ | 504

第35話 勘で戦う奴は大体理不尽

531

第36話 覚悟の在り方 | 544

第37話 憤怒の友理 | 561

第38話 あなたを信じてる | 572

第39話 何て酷いオチだっ!!

584

エロゲ世界 登場人物(第1章〜第2

章) | 599

SS レイカの心 | 625

SS 瑠維のターニングポイント(前

編) | 637

SS 瑠維のターニングポイント(後

編) | 646

SS 八千代の平穏 | 668

SS 柚木友理・非公認ファンクラブ

(前編) | 682

(後編)

S S

柚木友理・非公認ファンクラブ

692

712 S S 揭示板回 異能犯罪者スレ

第1章 原作崩壊上等の暗躍劇

プロローグ

“自分の好きなゲームの世界に転生したら、と考えたことはある”
“でも、大抵は今の自分と同じ性別で考えるもんだろ?”

——目覚めて最初に思ったのは、そんなことだった。

「……マジか」

ボクはこの家に住んでいる柚木友理^{ゆずきゆうり}。

お父さんとお母さん、それに大好きな1つ年上のお姉ちゃんを持つ、今日で5歳になる普通の女の子だ。

女の子……なんだよなー。

「ホントは男だったはずなんですけど……」

今日の朝、目が覚めれば思い出したのは前世のこと。

混乱しつつ最初に確認したのは下半身にある——というか、あったはずの我が息子さん。はい。見事に何もありませんでした。

「転生……ってやつか？」

前世では大学生だった。

最後の記憶は赤信号無視のトラックがこっちに——うん。おもつくそ轢かれてたな！ 宙を舞っていたもん。死んでいても何もおかしくないですね！

「普通ならここで現状確認なんだけど……」

どうやら必要ないらしい。

玄関にある鏡に映った自分の姿を見る。

大きな目に少しクセのあるオレンジの髪。家族構成と姉の存在。そして柚木友理という名前。間違いない。ここは——

「転生先が、エロゲの世界って……！」

気をしっかり持たないとフラつきそうになる。

しかし、転生先がかってハマったエロゲ世界の登場人物とはいったい？ どうせなら普通のファンタジー世界に転生したかった。

『ヴァルキリーダンス〜2つの月と英傑の乙女たち』

それが数年前、前世で発売されてから一躍有名になった18禁ゲームのタイトルだ。略称は『ヴァルダン』。

そして、この世界の舞台でもある。

難しいことは説明が長くなってしまいそうなのではしよるが、ようはローファンタジーな世界で選ばれた（県に約数千人）少年少女たち（普通に大人も含む）が扱うことのできる不思議な装備を主軸にしたストーリーとなっている。

幼い頃から自身と共に育てる装備『Heartギア』は1度登録を行うとその人以外には扱えず、個人によって様々な異能を発現させることが出来るという、リアルな科学なんてクソくらえ！細かいことは気にするな！考えるな感じる！な世界観を想像できるゲームならではのアイテムだ。

ちなみに公式や作中で出た説明によると『Heartギア』を通じて装備者の魂を徐々に変化させることで特殊能力を使えるようになるとのことだった。それ以上の説明は無い。選ばれた人間の基準とかどうやって作っているのかの説明もほとんどない。

なんてフワフワ設定なんだろう!!

ゲームに登場する人物は多岐に渡り、当然のことながらヒロインの数もそこそこ多

い。そのヒロインのほぼ全員が戦闘に役立つ異能に目覚めて主人公と関わるから、英傑の乙女たち〃なんてサブタイトルも付いている。

とまあ、そんなフワフワな世界に死んでしまったらしいボクは『ヴァルダン』に登場するキャラの1人——柚木友理として転生したみたいだ。

「しっかし……なぜに柚木友理?」

幸か不幸か、柚木友理はヒロインではない。

ヒロインはその姉である柚木秋穂^{ゆずきあきほ}だ。

黒髪なおっとり美人に将来なる自慢の姉。今更だけどボクのオレンジ色の髪ってどこから来てるんだろ? 両親は黒髪と茶髪だし、記憶にある限り祖父母にもオレンジ色の髪はいなかった。隔世遺伝? それとも遺伝子の誤発注? ゲームだからの一言で片づけられそうだけど釈然としない。

話を戻すが、問題は柚木友理がどんな人物かだ。

簡単に言えば、王道なエロゲに1人はいらる少しサービスシーンがあるだけで主人公と結ばれることもないクラスメイトの1人、という存在意義がやたら情報通の男子と同じぐらい微妙な位置のキャラである。

人付き合いは良く、明るく行動的。少しギャルっぽさがあつて、オシャレ好き。そして、柚木秋穂ルートに入るとより深く関わることになる。

しかし、攻略対象ではない。

もちろん人気は十分あるキャラだ。

見た目は普通と言いつつも現実でプレイする紳士たちからしたら十分美少女の分類に入る。そのため「もしかしたら隠しルートで柚木友理が攻略できるんじゃない？」などという憶測もネットで広まった。結局無かったが。

まあボクもワンチャンに掛け、柚木友理が登場するイベントを全て各ヒロイン攻略の合間に消化しておくということをや——約十時間を無駄にしただけになったという悲しい記憶が。

そんな柚木友理に転生してしまったボクだが……

「だからどうしろと?」

ライトノベルなどで転生した人物が最初に当たる壁の1つ。転生したけど、これからどうしよ?」にボクも当たってしまった。

問題無いなら柚木友理として生きていくのがベストだろうけど、ゲームで性格を知っているからつてその通り生きていかなければいけない理由もない。ぶっちゃけ意識している方が生きづらそうだ。

結論――

「バレないようにだけ気を付ける。後は保留」

柚木友理は現在5歳。

良くも悪くもそこまで個性的ではない女の子として5年間を生きてきた。よつぽど突拍子もない行動さえ取らなければ疑惑の目を持たれる心配はないはず。姉も両親も細かいことは気にしない性格だからいけるだろう。

「友理〜ごはんよ〜!」

「え!? あ、は〜い! 今いくー!」

今世のお母さんがお呼びだ。

考えたいことはまだまだあるけど、朝ご飯を食べてからまた考えよう。

何気ない朝の風景。

いつもと変わりなく両親は談笑し、テレビで天気予報を放送している。

そんな中でボクの一審の関心は、

「ん? どうしたのユウちゃん?」

「えへへ。何でもないよお姉ちゃん」

『ヴァルダン』のヒロインこと柚木秋穂だ。

画面で何度も見た姿より大分幼いけど本人だ。あのゲームで癒し系先輩のポジションにいた本物のヒロインが目の前にいる。非常に感動だ！

ボクは例外なく『ヴァルダン』のヒロインたちが大好きだ。

高校生の時からしていたギャルゲーではなく1段ハードルが高いエロゲを買ったのも、ネットで見かけたパッケージのイラストやサンプル画像に不思議なほど惹かれたからだった。後は、アレだ。ボクも年齢的にそっち系のゲームをやってみたかったという理由もある。ボクも全国にいる紳士の1人だったんだ。

ちなみに、ボクこと柚木友理には姉が言った「ユウちゃん」以外にも「ゆーゆー」とか「ゆゆっち」とかの呼ばれ方があった。

「ユウちゃんも5歳かー。早いなー」

「あー……うん。そうだね」

前世の記憶が上書きされた影響か、この5年間の記憶はダイジェスト風でしか思い出せない。5歳の女の子の記憶より大学生の男の記憶が優先されるのは当たり前だけど、それで考えると精神年齢が姉と妹で随分違ってくる。

柚木秋穂——もうお姉ちゃんって呼び方固定でいいや。

記憶の上書きと精神的なアレコレから、昨日までは「大好きなお姉ちゃん」というそれ以上でもそれ以下でもない「家族の1人」という存在だった。

しかし今のボクにとっては保護対象のような、あるいは少し離れた場所で見守るべき愛しい存在になっている。不思議な感覚だ。

今後の妹ライフ、多少なりとも意識していないと将来お姉ちゃんの性格に影響が出るかもしれないな。

柚木秋穂は元気な柚木友理の姉であろうとしたからこそ、癒し系先輩ポジとして主人公とも深い仲になって……？

「……あ!？」

「ユウちゃん?」

そうだ。そうだった。

お姉ちゃんはあのエロゲのメインヒロイン。そう、ヒロイン!

18禁ゲームに登場するヒロインたちほぼ全員に求められるのは、当人のルートに入った主人公とフラグを立て続けて仲を深めること。そして最終的にはゲーム内時間で付き合い始めて1か月も経たずに服を脱ぐようなイベントが……!!

ギギギと、錆び付いた機械のような動きでお姉ちゃんを見る。お姉ちゃんは何故かビクツツと震えた。

そりゃボクもあのエロゲをプレイした1人だから当然、柚木秋穂ルートを何度かクリアした。必然的ニヤンニヤンいやーん♪なシーンを見てきたわけだ。

その時は深く考えなかったが……

今世の実姉が、

付き合っつてすぐの主人公と、

あんなことやそんなことをする？

大好きなお姉ちゃんが？ ヒロインたちが？

「……………」

「ユ、ユウちゃん？」

「……………ブルツハ」

強烈な胃の痛みに襲われたかと思ったら、口から大量の血が出た。あれ？ もしかしなくても、これって吐血——

「友理!?!」「ユウちゃーん!?!」

あ、意識が遠く……



目覚めたら病院のベッドだった。

もしかして全部夢で、事故から奇跡的に助かったんじやと下半身を確認して——やっぱり無かった我が半身。もう永遠に戻ってこないんだな。

そして駆けつけてくる我が自慢の姉。

「もう、本当に心配したんだからね！ ユウちゃんどうして胃に穴が開いちやったの!? ストレスが原因だって話だけど、お医者さんが、何か辛いことでもあったんですか？ いやマジで、って真顔で聞いてきたよ!!」

「むしろボクが聞きたい」

いや、原因は分かっている。

『ヴァルダン』の主人公と、ヒロインであるお姉ちゃんが18禁なことしているシーンを思い出してしまったからだ。

しかも、お姉ちゃんの方が年上だからか主人公よりもそっち方面で積極的で、初体験でも未経験ながらリードしようとして——

「グフツ」

吐血再び。

「いやああああああああつ！ ユウちゃんがまたお口から血いいいいいい！！ お母さん！ お父さん！ 先生ええええええええええつ！！」

——う、ん。

ギリギリ意識はあるな。しかし5歳でストレスが原因による胃の損傷からくる吐血とか……病弱キャラで通すべきか？

速攻で1週間の入院が決まった。

分かっていたよ？ この展開。

時刻は深夜。

あつという間に1日が過ぎたな。今日のボク吐血してばっか。お姉ちゃんのトラウマにならないことを祈ろう。

「さて、いい加減落ち着いて現状の問題点を確認しよう」

1つ目にして最大の問題点はこの世界が元の世界とは似ているようで異なる世界だという点だ。

柚木友理としての記憶を洗い出し、『ヴァルダン』全てのルートの重要情報を洗い出し

たことでハッキリしたこと。

この世界、ちよつと貞操観念が緩い。

事に至るまでが早いのだ。常識的な人なら異性と付き合ってもすぐにはそんなことしない——はず！

実際、清い付き合いならしばらくはデートだけで満足するんじゃないかな？

ボクは前世じゃ年齢Ⅱ恋人いない歴だったけど、男女関係なく付き合つてすぐ「ちよつとホテルで休憩しない？」とか誘つてきたら普通に引く。

むろん例外はあるだろう。

最初からイチヤイチャしてる幼なじみ枠だったりとか、付き合う前に雰囲気しちゃつてたパターンとか。そういう人たちなら初デートでお城なホテルに向かつて不思議じゃ……ないのか？ やっぱ早いような？ ……この問題は一先ず置いておくか。

気を取り直してゲームのメタ的考察だ。

前提として美少女系エロゲの場合がそうだけど、物語の始まりから終わりまでが大体1年もなかつたりする。ハイスピードな物語になると1ヶ月も経たずにエンディング

になる。

そして、主人公はある程度の共通ルートを経てどのキャラクターと結ばれたいかを決めたら、そのヒロインの攻略に乗り出して個別ルートへ入る。

そこから数々のフラグやイベントを消化して付き合いだすのだ。

ここまではいい。

良くはないけど話が進まん。

問題なのはヒロインと結ばれるプレイヤー、もとい主人公くんである。

『ヴァルダン』の主人公は悪い奴ではない。むしろ良い奴だ。そして、優しく困った人を見たら何かにつけ助けようとする。

うん。この時点で女の子に惚れられる要素がいっぱいだな。

むしろ、なぜ中学で彼女を作らなかつたのかと問い詰めたい。

物語が始まる前に彼女がいればボクがこんな悩む必要も無かつたし、ストレスで胃に穴も開かなかつたはずだ。

そんな主人公、一見すると貞操観念も高い人物に思えるが、残念ながらというか案の定というか……ヒロインと付き合い始めたら結構積極的になる。

ルートによつては数日でヒロインとしやがる。

押し弱いヒロインには自分から徐々にスキンシップを増やすし、普通のヒロインとはその場の雰囲気でやったりする。唯一の例外はエロ方向に意外と積極的なお姉ちゃんのようなタイプで――

「……はっ！ あ、危ない危ない。また吐血するところだった」

さすがにこれ以上の吐血は命に関わる。

とにかくだ！

そんな奴にお姉ちゃんも、そして他のヒロインたちも、断じてお付き合いなんてさせてたまるか！

完つ全に個人的な理由だし理解されないのも分かっているが、それでもヒロインたちを！ 特にお姉ちゃんを！ あんな下半身と脳が直結しているような主人公（100%偏見）に渡したくない！！

性格だけはいいんだから、彼女にするなら別に他の女子生徒でもいいはずだ！ フラグ立てるんならそつちで立てろ！

ゲームの中ならともかく、転生した以上ここがボクの現実なんだ。

その場の雰囲気で突拍子も無くエロ展開になるのも、ハーレム展開になるのも、ボクの近くで起こるなぞ全部お断りだ！

そのためには今後の主人公とヒロインが関わることになるイベントのフラグを折っておく必要がある。

何人かのヒロインなら今からできることもある。それ以外の物語が始まらなければ会うことが難しいヒロインのことは、その都度考えよう。

一番最悪のパターンは主人公もボクと同じ転生者で、難易度ルナティックなハーレムエンドを目指している場合だ。

……うん。考えただけで殺意が沸く。つーか半殺し確定。

「退院したらすぐ行動しよう」

決意を胸に窓の外に広がる夜空を見る。

そこにはタイトルにあった、この世界が地球とは異なるローファンタジーの世界であることを証明する金銀2つの月が輝いていた。

第1話 『Heartギア』

1週間後、ボクは無事に退院することになった——お薬付きで。

「いや、だから大丈夫だってば！」

「大丈夫じゃないから血を吐いたんだろう!？」

「お父さんの言う通りよ! もっと自分の体を気遣って!」

「ユウちゃん、何かあったらお姉ちゃんに相談して? ちよつとした出来事でもいいんだよ? またユウちゃんのお口から血が出たら……えぐつ」

病院からの帰り道、車内は混沌としていた。

分かっていきますよ? 原因がボクだったことぐらい。

でも「5歳児がしばらく精神安定系・胃腸系のお薬を飲むことが決定」という事実が地味に心を抉ってくるんだよ。元の柚木友理というゲームキャラに申し訳ないと言いますか、吐血原因がゲームの主人公とお姉ちゃんがニヤンニヤンいやくん♪ するのを想像したのが切っ掛けだという後ろめたい理由なのが……

(むう、しかしお姉ちゃんに変なトラウマができなきやいいけど……)

この1週間、両親と一緒に病室で話し相手になってくれたお姉ちゃんに申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

普通に考えて6歳の幼女が妹の吐血シーンを2度も見るなんてあり得ない。気を付けていたはずなのに、早速今後に影響が出そうで怖いなあ。

(気持ちを切り替えよう。まずは最初にすべきことを実行するべきだ)

1週間の入院生活で暇な時間「どうすればヒロインたちを主人公の魔の手から救えるか？」ということばかり考えてきた。

ある程度の計画は立てたけど、1番必要なモノが手元に無い。

今日はその「必要なモノ」を手に入れようと思う。

「お母さん」

「どうしたの友理?」

「1週間前、本当ならボクの誕生日にもらえるはずだったモノ——『Heartギア』が欲しいんだ。ボクには適性があるんだよね?」

『Heartギア』——それは『ヴァルダン』の物語で絶対に必要なアイテムであり、メインヒロインでもあるお姉ちゃんの手首に装備された腕輪型異能発現器。

物語の舞台『アマテラス特殊総合学園』に入学するためのものだ。



(うくん……暇だ)

ボクは今、『Heartギア』の申請・受け渡しなどをするための役所にいる。病院からいったん家に戻って、昼食後すぐ家族と一緒にやって来た。

県内に数カ所しかない『Heartギア』専門の役所だけど、車でいける距離にあって良かった。ここ以外は電車使うから行くの面倒なんだ。

「ねえ、お母さん。何で受け渡しだけでこんな時間掛るの?」

「『Heartギア』は特別嚴重に管理されているから、どうしても確認することが多いのよ。去年、秋穂の誕生日に来た時も同じくらい待たされたでしょ?」

「ユウちゃん、家で待っているのが嫌だって一緒に来たのに、待ち時間が長くて『まだなの?』って涙目で聞いてきたんだよ。あの時のユウちゃん、可愛かったなく。ギョツとしたら大人しくなってる」

「……お姉ちゃんもソワソワして落ち着いてなかったような」

「え!? ユウちゃん覚えてるの!?!」

そりや大好きな姉の記憶は入院生活中に記憶の中から発掘しましたとも。

お姉ちゃんメモリー、プライスレス!!

(にしても、改めて考えると『Heartギア』って不思議程度じゃ済まないよな?)
暇すぎるので『Heartギア』について整理しよう。

本当は誕生日に手に入れるはずだったボク専用の『Heartギア』は、この場所で大事に保管されている。

役所には『Heartギア』によつて戦闘系の異能が使える人が必ず複数人いるだけで、どれだけ嚴重かが分かる。異能の種類にもよるが、ピストルを持った強盗ぐらいじゃ正面からの戦闘でも負ける確率の方が高い。

現に少し離れた場所にいる鋭い目つきの警備員の格好をしたオジサンの左腕にも、お姉ちゃんと違う色の『Heartギア』がある。

ゲームの設定ではかなりフワつとした説明だった『Heartギア』。

もう少し詳しく知りたいと思つたので、入院中お父さんのノートパソコンを借りて(家族には暇つぶしに動画見たいと説明) 調べることに成功。

結果、ネット情報で分かったことは余計ボクを混乱させる。

そもそも『Heartギア』が発明されたのは一世紀以上前、元の世界とは歴史や有名な人物が違っていたりしたが世界大戦が終わって数十年後、高度経済成長期も落ち着いて各国の足並みが揃い始めた頃だった。

突然、異能を発現できる道具『Heartギア』が世界トップクラスの頭脳を持つ科学者たちにより発表。世界を驚愕させた。

もうこの時点でおかしい。

いくら歴史が違うとは言え、当時の技術力はボクのいた時代より劣っている。調べた限り、ようやくスマホの開発に手が出そうかどうかの段階だ。

そんな段階で『Heartギア』という未知のテクノロジーによって作られた謎アイテムと、「異能」というこれまた未知の力がポンツと出てきた。

普通なら少なくとも混乱が起こりそうなもの——というか案の上起こったらしいのだが、政府の対応が異常なまでに早く・適切だったことで混乱は最低限へ。そこから数年で『Heartギア』は世界に広まっていったとき。

ここで重要になってくるのは、『Heartギア』を使える人たちが増えてからの政府の対応もしっかりしていたことだ。最初から決まっていたみたいだ。

明らかに随分と前から根回しがされていた世界規模の計画だ。

——さすがにこれは……ゲームの設定だから、じゃ片づけられない。

可能な限り調べたあとで出た言葉がそれだ。

ぶつちやけ『Heartギア』が怪しすぎる。そもそも完成品が破壊・分解不可能でだけで人類が作った物じゃないだろ感が半端ない。

転生したボクが『ヴァルダン』の物語と何も関係ない立場だったら、断固拒否したい得体の知れない『Heartギア』だけど、

「ユウちゃんのはどんな異能になるかなー?」

足をブラつかせて楽しそうに笑うお姉ちゃんの横顔を見る。

『ヴァルダン』のヒロイン柚木秋穂——お姉ちゃんの腕には『Heartギア』がある。恐らく数年以内に異能が発現するはずだ。そして、10年後には『アマテラス特殊総合学園』でゲームの主人公と出会うことになる。その場所にボクがいらないわけにはいかない。

全ては！ ヒロインたちを主人公から救うため!!

……今更だけど、超が付くぐらい個人的な理由だよなー。

だけでもう決めたこと。使えるものは何でも使う。やれることは何でもする。

ヒロインの約半分は主人公と恋仲になるにあたって大きなフラグが存在する。個人的な悩みであったり、不幸であったり、悲劇であったりと。

だから10年後までに全部へし折る！

それを成し遂げるために必要不可欠なものが、目の前にある――

「――『Heartギア』……」

「はい。こちらが柚木友理様専用『Heartギア』となります。利き腕と反対の腕に近づけていただければ、自動で装着・サイズ調整を行います」

まるでコンクリートのような無機質な灰色のソレ。異能に目覚めれば自動的に着色されるといふ未知の技術で作られた『Heartギア』。

職員が渡したそれを手に取り……左手首に装着した。

「おめでどう友理」

「おめでどう。いやあ娘2人に『Heartギア』の適性があつたなんてなあ」

「ユウちゃんおめでどう！ これで高校も一緒に行けるね！」

「……うん。ありがとう」

もう引き返せない。

その高校に行くまでが、ボクにとっての第1ラウンドとなる。

10年でどこまで暗躍できるかが勝負の鍵だ。

やることはたくさんある。けど最初に接触するべき相手は、

「『ヴァルダン』のファーストヒロイン、小谷凛子こだにりんこ」

家族に聞こえないよう、ボクは小さく彼女の名前をつぶやいた。

第2話 小谷凜子

『Heartギア』を受け取ってからしばらく、ボクは市内にある公園を歩き回って、とある人物を探していた。未だに見つからないが。

「どこにいるんだろ、小谷凜子ちゃん？」

『ヴァルダン』のファーストヒロイン、こだにりんこ小谷凜子。

ゲームの主人公が『アマテラス特殊総合学園』の入学式に向かう途中、通学路でぶつかる美少女。ゲーム内での最初のイベントという名目によって、パンツを見られてしまうのが小谷凜子である。

ちなみに、飾りっ気のない白だった。何のこととは言わんけど。

これからの暗躍で各ヒロインたちと何かしらの形で接触することになっているが、1番今のボクが接触しやすいのが小谷凜子だった。

……ゲーム内の会話で、小学校と中学校が同じことが判明しているから。

小・中が同じ学校なら市内のどこかに住んでいるのは間違いない。

ボクが通う予定の小学校はお母さんから教えて貰ったので、その学校を中心に子供が

徒歩で通学できる距離+ α が搜索範囲となる。

無論、ただ闇雲に探し回っているわけじゃない。

小谷凜子とゲームの主人公との会話で、幼い頃から家の近くにある公園で遊んでいたことが語られている。なので搜索範囲内にある公園を片っ端から見つけては小谷凜子がないか確認し、いなければ別の公園へ〜というのを繰り返している。

「だけど、う〜ん……やっぱり無理があつたかなあ」

そもそも幼稚園児の自由時間なんて限られている。足が短いから長距離を歩くのだから一苦労だ。さらに小谷凜子がいつ・どれだけ公園で遊ぶかまでは知らない。見つけること自体がすでに5歳児にとってはハードだったりする。

というか、最近空いた時間はずっと1人で小谷凜子の搜索をしていたせいで、ついにお姉ちゃんが泣いてしまった。

「ユウちゃん、どうして遊んでくれないの!! 入院前まで一緒におままごとしてくれたのにく〜! お姉ちゃんのこと嫌いになったのく〜!! うええええええええん!」なんて数時間前に言われてボクの心に突き刺さった罪悪感のダメージが半端ない。危うく吐血するところだった。

原作までに暗躍することは大事だけど、それでお姉ちゃんを必要以上に悲しませたら意味がない。

最悪予定とは狂うけど誤差の範囲だし、小谷凜子とは小学校で会うこともできる。そこで友達になってからでも遅くないだろう。

「……帰ろ」

帰ったらメチャクチャお姉ちゃんに構ってあげるんだ。どれだけボクがお姉ちゃんのことを好きか耳元で囁きまくってやる。

大丈夫。『ヴァルダン』の各ヒロインへの愛なら1日中語れる自信がある。

明日からは自分の間お姉ちゃんと遊ぶことを優先しよう。

そう思っただ道に戻ろうとして――

「みんな！ 今日で凜子ちゃんチームとドッジボールするよー!!」

――足がもつれて転けた。痛い。

（お笑いのコントかよ!? ってそうじゃなくて!）

今、どこからか大きな声で「凜子」って聞こえなかったか!?

まさか、このタイミングで? いやいやそんな都合が良すぎる。だけど、気になるし

確認だけでもしておこうかな?

地味に痛い足を動かして声が聞こえてきた方向に足を進める。

そこは住宅街のど真ん中にあるような公園だった。さっきまでボクがいた位置からだ、たくさんの家が邪魔して見つけるのが難しいそこそこ広い公園。

公園の入り口からそつと顔を覗かせる。

そこには十数人の子供たちがドッジボールをして遊んでいた。男女混合で楽しく柔らかそうなボールを相手チームにぶつけ合っている。

その中に……

「くらえ！ スーパー凧子シューートー！」

「ぐわっ!? やられた〜」

「さっすが小谷ちゃん！」

『Heartギア』も持つてるし、強いし、すっげーよなー」

すっごい見覚えのある子がいた。

幼いし、特徴の1つである長いツインテールがまだ短めだけど、あの元気いっぱい勝ち気そうな目は間違いない。ついでに『Heartギア』も腕に付けている。

ずつと探していた小谷凧子だ。

「え〜〜、このタイミングで〜？」

今度は口に出して言ってしまったよ。

だってそれぐらいタイミングが良いのか悪いのか判断に迷う。

「いや、だけど、見つけた以上は接触するべきだよなー?」

どうしようか迷っていると、遊んでいた小谷凜子の方がボクに気付いた。

「ん? キミ、この辺じゃ見かけないね。どこの子?」

「!? あ、えと、ボク、その、柚木友理つて名前で……5歳で……たまたま散歩してたら遊び声が聞こえたんで気になって見に来て……すごい球を投げている子がいたからビックリしちゃって……」

お、おとおおお落ち着け。落ち着くんだボク!

目の前に幼い小谷凜子がいる。お姉ちゃん以外のヒロインとの初めての邂逅なんだ。緊張と嬉しさとで心臓バクバクだけど気付かれるな!

「ふーん、そうなんだ——って、あ——!!」

「おうっ!? な、何だ」

「キミが腕に付けてるの『Heartギア』だよね?」

小谷凜子がボクの『Heartギア』を指さして叫ぶ。

すると、周囲にいた子供たちも「マジで?」といった感じに注目する。

「この辺じゃ私以外に『Heartギア』持っている同じ年の子っていないんだー。年上

ならそれなりにいるのに……」

「そ、そうか」

「よし！ 友理って言ったな！ 私とドッジで勝負だ!!」

「なんでやねん」

おい、思わず関西弁になっちゃったぞ。それぐらい唐突だ。

「私も友理も5歳だ！ 『Heartギア』を持っていて同じ年同士、どっちが強いかわ黒ハッキリつけようよ！」

「いや、まあ、いいんだけどさあ」

あつれー？ 小谷凜子ってこんなジャイ○ンみたいな女の子だった？

そんなことを考えている内に、ボクと小谷凜子との1対1でのドッジボール対決が決定した。1対1の時点でドッジじゃなくない？ とか、外野無しのルール無しって勝敗をどうやって付ける気なんだ？ とか、細かいことは気にしてはダメらしい。

「ふっふーん。せっかくだし勝った方が負けた方の言うことを何でも1つ聞くっていうのはどう？ この前テレビでやってたんだ」

「ほう、いいぞ。ただしボクも本気で行かせてもらおうか」

勝負に勝って「ボクと友達になってよ」って言ってやる。

……未だに勝敗の付け方が決まっていないけど。

「行くよ！ いざ尋常に勝負ー！」

「戦国時代の武士か!？」

こうして柚木友理ホvs小谷凜子の仁義無き戦いが幕を開けた。

つーか、結局のところ勝敗はどうやって付けるのさ？

〜30分後〜

「はあ、はあ、中々やるね」

「ぜえ、ぜえ、そっちこそ」

夕日が公園を照らす中、ドラマのワンシーンみたいなセリフを吐くのがやっとな程、お互いに疲弊しているボクと小谷凜子。

全ては勝敗の付け方を誰も考えていなかったのが原因だ。

延々に投げて投げ返して、打たれようがキャッチしようが、ずっと相手を攻撃し続ける終わりのない戦い。それがようやく終わった。

「2人ともすごい戦いだっただなー！」

「あつちの女の子の気迫とか凜子ちゃん以上だったね」

「……ねえ、これ凜子ちゃんとあの子、どっちの勝ちなの？」

「「「……………どつちなんだろう?」「」」」

おい、そのモブキヤラ共。

敢えて口に出さないようしていたこと言いやがって。覚悟はできているんだろうな。今のボクは疲れすぎていつもより短気だぞ。

何も言わずとも雰囲気で察したらしい子供たちが一斉に目を逸らした。

おい、こつち見ろよ。結局どつちの勝ちなんだ? ああん?

と、そこで小谷凜子が急に笑い出す。

「ハハツ、アツハハハハハハハ! あー、おもしろかった!」

「え? さっきの勝負(?)のここと?」

「うん。キミ結構やるじゃない!」

そりや、中身は元男の大学生だからな。

身体スペックが劣っていても、遊びの経験が違う。

「ねえ、また今度一緒に遊ぼうよ」

「それって……………友達になろうってこと?」

「うん! ……ダメ?」

「全然ダメじゃない」

友達のこと印ってことでボクと凜子は固く握手をした。

予想以上に疲れたけど結果オーライだな。

あとは仲を深めつつ、例のイベントをへし折る準備を進めるか。

ちなみに、急いで帰宅してからお姉ちゃんに愛の言葉を囁きまくった。

お姉ちゃんの機嫌も治ったみたいだし、姉妹の絆は保たれたのだ。

まあ、「結婚したいぐらいお姉ちゃんのが大好きだよ」は言い過ぎだったけど、嬉しそうだったし良しとしておこう。

これからも日常的に囁くってことで。

第3話 柊小夜——と……？

「オマエ、誰だよ？」「アンタ、誰なのよ？」

今、ボクは目の前の人物と睨み合っていた。

お互いに疑いの眼差し。

双方が警戒しながら言った言葉は、奇しくも同じだった。

「まさか……転生者？」

ゲームの主人公——香坂拓也こうさかたくやの義妹、メインヒロイン香坂明日奈こうさかあすな。

彼女とピリピリした雰囲気になるなんて、少し前まで考えもしなかった。

〈1時間前〉

早いもので凜子と友人になってから1年が過ぎた。

あれからお姉ちゃんに構いまくったり、凜子と遊んだり、ボクの『Heartギア』に

よって発現するだろう異能についてダメもとの賭けをしたり、暗躍計画について具体的な方針を考えたりと地味に忙しかった。

お姉ちゃんも小学校に通うようになり楽しそうだった。勉強や給食の話をよくボクに話してくれるし、友達と呼べる子も何人かできたそうだ。

お姉ちゃんのランドセル姿はキュン死ものだったな。

とまあ、概ね平和な日常を過ごしつつ『ヴァルダン』の記憶を事細かに思い出していたことで、1人会えそうなヒロインがいることが判明し、今日はその子に会ってみようと遠出の準備をしているのだ。

「それにしても友理、どうして隣町なんかに行こうと思ったの？」

「アハハ、ちよつとしたプチ旅行の気分だから？ 予定じゃ夕方までには帰ってくるから。友達の家遊びに行つたお姉ちゃんにもそう言つて」

「そう？ 何だか友理つて、5歳になった頃から何のことも積極的に行動するようになったわね。この前は確か……」

「じゃー！ 行つてきまーす！」

玄関でお母さんに別れを告げて家を出る。

（積極的に行動しないと間に合わないんだよ！）

今でも所在が掴めていないヒロインたちがいるから、行動を起こすために必要な手札

がボクには何枚あつても足りない。

その手札の1つが——お金。

自分でも身も蓋もないって分かつているけど、現実問題としてお金がないと電車やバスで遠出できないし、交友関係も築きにくい。

1年前からそれとなく毎月のお小遣いをねだり、長期休みに祖父母の家に訪れた際は媚びを売れるだけ売ってお金を貰う。クリスマスプレゼントと正月のお年玉も、現物ではなくお金にしてみよう両親と交渉した。

交渉は成功したが、代わりに「この年からお金に執着するなんて……将来が不安だ」みたいな目で心配されるといふ精神ダメージを喰らいながらも、貯めに貯めた暗躍用の軍資金で3人目のヒロイン——ひいらぎさよ 終小夜の元へと向かう。

駅に着き、特に迷うこともなく電車に乗って、隣町へ。

電車に揺れながら終小夜について整理する。

終小夜は簡単に言うと、マジメな委員長ポジションである。

エロゲのヒロインでも今時珍しいメガネキャラだが、笑った時の顔が本当に可愛らしく、ギャップ萌えによつて紳士たちのハートを掴んだ。ついでに“小夜ルート”に入つたゲームの主人公のハートも掴んだ。

——ああ主人公め、忌々しい！

そんな終小夜は読書好きの設定があり、ゲーム内の会話で小学校入学前から近所の本屋に足を運んでいたことが分かっている。

これだけだと、どこの本屋か分からないがヒントはあった。

イベントで本屋に訪れた際の背景の絵だ。

店名こそ最後まで語られることはなかったが、少し特徴のある建物だったこと、隣が和菓子屋だったことから、お父さんのノートパソコンを借りて「グ〇グルストリートビュー」で県内に存在する情報と一致する本屋を調べあげたのだ。

「すごい大変だったけど、隣町の駅から徒歩で行ける場所で良かったあ」

10分に満たない電車旅を終えて目的の本屋がある隣町に到着。

少し乗り物酔いしたらしいので、近くのベンチで休憩することに。ついでにポーチに入れてある地図を広げて場所の確認をする。

「え〜つと、駅からだと目的の本屋まで徒歩8分つとところか……ボクの足で計算したら12分ちよい掛かるかな？」

こういう時、スマホがあれば地図アプリとか使えて便利なんだけど、残念ながら6歳になったボクが持っているのは子供用携帯だ。すごい安いヤツ。アプリなんてない。

小さな画面とダイヤルキーしか存在しない。しかも裏面には自宅の電話番号がメモられている。

前世が大学生だったことを考えると、泣きたい気分だ。

6歳児にスマホなんて渡しても扱いきれないし、ニュースでもやっていた子供による課金騒動の問題だつてあることは分かるんだけど……

中学生になったら、さすがにスマホ買ってくれるよな？

「あーヤメヤメ。そんなの考えたつて仕方ない。さっさと行こ」

そうして地図とにらめっこしながら歩くことしばし。

ようやく目的地の本屋まで辿り着いた。

「終小夜いるかなー？ いるとしたら今日だと思っただけかなー？」

この日に本屋へ来たのは考えあつてのことだ。

“小夜ルート”にて、近所の本屋に行くイベントで終小夜は「子供とはいえ、立ち読みばかりするのは良くないからつて、母さんから雑誌の発売日に購入とか頼まれたの」と主人公に言つていた。

ゲーム内で1度しか雑誌名は出なかつたが問題ない。ボクは『ヴァルダン』の記憶力テストがあつたら100点を出す自信がある。当然のことながら終小夜が買つていたという週刊雑誌の名前も覚えていた。あとはネットでいつ発売なのかを調べればいい

ただだ。

(ひ・い・ら・ぎ・さ・よ、は……………いたっー!!)

水色の髪にメガネ、そして腕に付けた『Heartギア』！ 顔にも面影があるし、柊小夜で間違いない！ 何かの本を見ている！

本屋に来るまで不審者扱いになるのも覚悟で見張るつもりだったけど、初っぱなで出会えるなんて運がいいぞ。

早速、本屋に入って如何にも初めて来ましたという体で辺りを見渡しながら、徐々に柊小夜の元へ近づいていく。

と、ここで問題発生。

(……………どうやって仲良くなるう?)

まさかいきなり出会えるとは思わなかったから、深く考えていなかった。

凜子の時は向こうから話しかけてきてくれたけど、柊小夜は初対面の人に理由なく話すタイプではなかったはずだし……………困った。

(何かこつちから話しかけても不自然に思われな話題は……………。そういえば柊小夜って、この頃は何読んでいたんだろ?)

1度考えたら気になってきた。

ゲームでは難しい本や小説を読んでいたって設定だったけど…………

バレないよう、周りから不自然に思われないよう、そくつと後ろから終小夜が読んでいる本を覗き込む。

ちようど開いているページには、章タイトルがあつて――

『言い訳大全集　　第5章　これでキミも職務質問を華麗に回避!』

――さすがに予想外過ぎた。

「どんなマニアック本だよっ!!?」

ウツソだろ!?!　終小夜つてボクと同年でこんな本読んでいるのか!?

てか、章タイトル!　人生で職務質問される機会なんて滅多なことじゃないつて!　それに職務質問を華麗に回避したら後々怪しまれるだろうが!

「――ツ!?!　だ、誰?」

「あ」

ヤバツ!?!　予想外過ぎる本について大声で叫んでしまった。

ええい!　こうなったらピンチをチャンスに変えろ柚木友理!　この展開を逆手に

とつて、終小夜との会話にもつていけ!!

「あー、ごめん。本屋に入ったら同い年ぐらいの女の子が本を読んでいたから、どんな本を読んでいるんだろうって後ろから覗いちちゃって……あまりにも予想外過ぎる内容だったんで、つい。驚かせてごめんね」

「そうなの」

「えつと……いつもそんな本を見ているの？」

「いつもってわけじゃないわ。今日はたまたま目に付いたから読んでみただけ。……意外と中身はおもしろかったわよ？ 1章では学校で遅刻した時の言い訳の仕方なんか書いてあったし」

「マジで？ それは普通に気になる。どこどこ？」

柊小夜とは関係なく内容が気になった。

結果として、見せてもらった本は全体を通しておもしろい……職務質問の流れだけは理解できなかつたけど。

「はー、こんな本って売っているものなんだなー」

「だから楽しいの。今はまだあまりお金が無いから無闇に買えないけど、大きくなったら本専用部屋の本棚をいっぱいにするのが夢なの」

「……きつと叶うよ。すぐに本で埋まるさ」

ゲームでも主人公が柊小夜の家を訪れた際に、本だらけの部屋を見て驚く場面があつ

たし、高校生になるまでには埋まるだろう。

ただ、何気なく言ったボクの言葉は予想以上に柗小夜を驚かせたらしい。

「驚いた。あの子と同じことをいうのね」

「? あの子って?」

「すぐに本で埋まる」って言った友達がいるのかな?

「少し前にできた友達なんだけど、実は一緒に来ていて——」

「小夜ー? おもしろい本は見つかったー?」

その声は本屋の二階から聞えてきた。

階段を降りてきたのはすごく見覚えのある人物であり、今後会おうと考えてた人物であり、今の柗小夜とは知り合ってもいないはずの人物だった。

香坂明日奈。

『ヴァルダン』のヒロインが階段から降りてきた。

第4話 香坂明日奈(?)

『ヴァルダン』のメインヒロインこうさかあすな香坂明日奈。

彼女のキャラを一言で表すなら……ブラコンである。

5歳まで母子家庭で育ち、母親の再婚が切っ掛けで名字が「香坂」になった。それより前の名字は知らない。ゲームでも触れられていない。

そして重要なのは、再婚相手の息子が『ヴァルダン』の主人公である香坂拓也であることだ。

そう、主人公の義妹が香坂明日奈!! 全国の紳士たちが嫉妬の炎を燃え上がらせる羨ましさの関係、血の繋がらないブラコンで美少女な妹! それが香坂明日奈なのである

!!

かく言うボクも羨ましかった! 血の繋がらない兄妹でありながらも仲良しで、明日奈ルート”に入ってから砂糖を吐く甘さだった!

ええそりやもう、ブラックコーヒーが甘くなる程でしたよ!

そんな香坂明日奈と柊小夜は、同じ中学校だったことがゲーム内の会話で判明してい

る。そう、中学以前は出会っていかない。

なのに、柗小夜と親しげな様子で現れたのだ。

下の名前で呼ぶくらいの仲で。

ボクは今、目が点になっていることだろう。

内心ではどういふことなのかと思いを巡らしているが。

だけどそれは、向こうも同じだったらしい。

「——ツツツ?!?! 柚木、友理ちゃん……? 何で?」

香坂明日奈が目を見開き絶句する。

その時出たのは1度も会ったことがない今世のボクの名前。

初対面の香坂明日奈が知るわけない個人情報。

何よりも、分かってしまった。

ボクは『ヴァルダン』のヒロイン全員が好きだ。初めて会えば、嬉しさと緊張で心臓がバクバクするぐらい大好きだ。お姉ちゃんを初めて柚木秋穂として認識した時も、初めて公園で遊ぶ小谷凜子と出会った時も、そして柗小夜を見つけ出した今も、内側から

溢れ出る歓喜をボクは感じることができた。

なのに、目の前の香坂明日奈からは……何も感じない。

まるで姿だけが香坂明日奈の別人を見ているようだった。

6歳児らしい幼女姿だが、香坂明日奈本人で間違いないはず。主人公の義妹とだけあって、回想で幼い頃の立ち絵なども多かったのだから、このボクが似ているだけの他人と見間違えるはずがない。絶対に、だ。

じゃあ、この香坂明日奈は……いったい誰なんだ？

「あら明日奈。もしかして、この子と知り合いなの？」

1人事情を知らない終小夜は、不思議そうに隣のボクと階段でストップモーションになっている香坂明日奈(?)を見る。

(どうするっ?)

目の前にいる香坂明日奈の正体について、仮説はある。

だが、それを終小夜がいる本屋で問答するわけにもいかない。

(相手もボクのことを知っているから驚愕している……なら！)

無理矢理にでもこちらの盤上に引つ張るしか道はない。

「あつれー？ 明日奈ちゃんじゃないか！ こんな所で会うなんて奇遇だなー。いつぶりだ？ 元気にしてるー？」

「ふえつ?! ええつと、あの……ア、アタシ……」

「何よ明日奈、知り合いだったんなら私にも教えてくれればいいのに。ほら、いつまでも階段で固まっていたら迷惑でしょ？ 降りてきなさいって」

「いや、知っている顔だから言葉の意味として顔見知りではあるけど、会うのは初めてっていうか、ホント、何なのよこの状況!？」

「？ 何を言っているのかサツパリだわ」

「明日奈ちゃん、アナタ疲れてるのよ……」

「アンタ！ ネタを言えば何でも許されるとか思っていないでしょうね!？」
場を和ませようと言ったネタに反応したか。こりや確定かな？

元ネタの作品って、この世界では制作されていなかったんだし……

それ以前に性格も喋り方も全然違う。

「まあまあ、落ち着いて。せつかくだし、あれからどうなったのか教えてよ。隣の和菓子屋でお茶でもしてさあ」

「!? アンタもしかして……はあ、分かったわよ」

お、向こうもコチラの意図を理解してくれたか。

「小夜、ちよつと家庭のことでこの子と話したいことがあるから少し待っていてくれるかい? 隣の和菓子屋にいるから」

「いいわよ。ただし、ちゃんと後で紹介してね」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうして時間は元に戻る。

「まさか……転生者?」

お互い口にした言葉で、図らずも正体が確定した。

面倒な事態になったと天を仰ぎたくなる。

場所は本屋の隣にあった和菓子屋の飲食スペース。

幼女2人だけが店に訪れるのはさすがに珍しいのか店員が目をパチクリさせたが、愛想良く振る舞って偉人の描かれた紙を見せれば問題なかった。

とりあえず安めの和菓子を相手の分含め何個か買い、話し合いができる空気を作ることに。もちろん支払いはボクですよ? こういう時のための軍資金だし、ここに連れて

きたのもボクなんだから。

ちなみに、飲み物も売っていないか店員さんに聞いたら、店長つばいおばさんがお茶をサービスしてくれた。

やっぱ和菓子にはお茶だね。心が落ち着くわー。

「ズズズ。つはああああ……茶あうめえええ」

「何を現実逃避してんのよ。年寄り臭い」

「現実逃避もしたくなるだろうが、香坂明日奈が中身別人なんてさ……」

「そう、それよ！ そのところハッキリさせたいのよ！」

目の前の香坂明日奈（？）はビシッとボクに指をさす。

「アンタ……転生者でいいのよね？」

「おう。前世は大学生の青年だったけど、事故で死んで気付いたら」

「……ふえ!? 青年って、アンタ、男だったの!?!」

「声がデカいって。店員さんに聞かれるとマズいだが。というより、今の話からしてそつちは前世も女だった感じか？」

「ええ。アタシも事故に遭って気付いたら……」

「これで転生者はボクも含めて2人目か。」

可能性は考えたこともあったけど、いざ現れると思うことが多いな。主に本物の香坂

明日奈には2度と会えないってことに對して。

まあそれは向こうも柚木友理トモに對して思ってるだろうけど。

『ヴァルキリー・ダンス』ってタイトルの作品は知ってる……?」

「知ってる知ってる。大学に入る前から何度もプレイしてたんだから。大好きなゲームのことは生まれ変わっても忘れやしない」

「ゲーム、か。アンタはそっちの方なのね」

「そっちの方? なんの話だよ?」

目の前の香坂明日奈(仮)が心底疲れたような表情になる。

「アタシは……アニメの方が先なの」

「……………What? アニメって、何の?」

「だ・か・ら! 『ヴァルダン』のアニメよ。当然、全年齢版の。アタシは後になってエロゲが原作だって知って、ショックで事故に遭って……」

な、な、な、

「何だとおおおおおおおおおっっ!! 『ヴァルダン』がアニメ化あああああああああああああっ?! つはああああああああああああ!」

「ちよ、うるさいわよ!? アンタが静かにしなさいっての!」

これが落ち着いていられるかってんだ!?

ボクは『ヴァルダン』の情報に対してすぐ情報取得できるようアンテナを常に張っていたけど、そんな話は初耳だぞ!!

第5話 利害一致の協力者

「落ち着いたかしら？」

「ああ、悪かった」

ボクとしたことが衝撃の事実に取り乱してしまった。

だが同時に、『ヴァルダン』アニメ化の情報を知らない理由も判明した。

「まさかボクの死んだ3年後にアニメ化したとは……。3年前じゃ、まだアニメ化企画があつたかすら怪しいもんなー」

「アタシとしても死んだ時期が違っていたのは予想外ね」

そう、ボクと香坂明日奈（仮）とでは事故で死んだ時期が異なっていたのだ。

話を聞くと『ヴァルダン』のアニメは全13話構成で、作画担当の人が相当がんばり、シナリオも初見の人も分かりやすいものにしたことで予想外に広まったそう。さらにグッズ販売も成功したらしい。

ちなみに、アニメはヒロイン全員に焦点を当てた上での友情エンドで終わったみた

い。主人公と香坂明日奈の関係性の変化と苦悩が見所とか。

「あ、あ、ああ……アニメ見たかったあ……」

机に突つ伏して呻き声を上げてしまうぐらいシヨックだ。

「ちよつと、友理ちゃん姿でゾンビみたいにならないでよ」

「絶賛、大後悔時代に突入したので無理で〜つす……。あくあ『ヴァルダン』のアニメが見られるなら世界一周だろうが、どっかの海軍との全面戦争だつて辞さない覚悟だと言うのに……」

「どんな覚悟よ。あと、海軍は関係ないでしょうが」

「アニメの義兄妹イベントも、こんなんじや無理っぽいよなー」

「“こんなん”とは失礼ね!？」

「ごめんなさい。シヨックのあまり、つい本音が」

「アంతつて本当に失礼な奴!」

さすがに失礼すぎた。

いくら後悔してもアニメは見れないし、話を戻すか。

「でさ? お互いに転生者だつて分かったことだし、
“現ヒロイン”と“ヒロインの妹

”として、転生してからのこと話さない?」

「くっ、分かったわよ。避けて通れない話題だし」

それからじつくり時間を掛けて記憶が戻った時のこと、これまでのこと、今後のことを可能な限り隠さずに話し合った。

で、簡単にまとめたら……

「親の再婚時に主人公と会って『ヴァルダン』の世界と認識。ヒロインが義兄と付き合うのが心情的に嫌だと、とりあえず推しヒロインの柊小夜と友達になることで、将来の足がかりを作ることにした……か」

「5歳の誕生日に記憶を戻して、姉の柚木秋穂とヒロインたちが兄貴とイチヤイチャするのが嫌だと、ゲームの知識を使って暗躍することにした……ね」

……

「あれ？ 目的一緒じゃない？」

ハモった。

そうなのだ。

大雑把に2人とも何を目的にしているかと言えば、『ヴァルダン』の主人公とヒロインたちが付き合うのとか嫌じゃないボケ！”となるのだ。

それまでは相手が同じ転生者だとしても——否、転生者だからこそお互いに警戒していた。〃ゴイツ、ヒロインと接触して何するつもりだ……!〃と。

ボクも下手をすれば、計画が前提から崩れるのではと戦々恐々だったのだ。主人公の耳にボクの情報が必要以上に入るのは原作開始まで避けたいって。

だけど、目的が同じなら……

「なあ、いつそのこと協力関係を築けないかな？」

「……その話、詳しく」

お、向こうも乗り気みたいだ。

「ボクはヒロインたちを主人公の魔の手から守るために暗躍を始めたが、肝心の主人公への対策に関しては1歩を踏み出せずにいたんだ」

「人の兄貴を悪の手先みたいに言うんじゃないわよ。……それで？」

「そっちには主人公の思考誘導も兼ねたスパイになってもらいたい」

「なんか、アタシが悪の手先みたいになってない？」

「アホ。それでいったらボクは悪の組織の幹部じゃないか」

ボクはヒロインを護る高潔な守護者でいたい。

例え行動の原動力が超個人的な理由だとしても。

「未だに所在が掴めていないヒロインもいる中で、主人公の存在は脅威だ。最悪、原作開始までに会えない可能性が高い子もいる」

「そんな状況で、小夜のいる場所を突き止めたアンタって……」

「やかましい。いちいち話の腰を折るな」

「ま、話は分かるわ。これから何度か会って兄貴の情報を提供しつつ、必要なら原作開始時に協力できるような仲良くしましょ、ってことなのよね？」

「おう。スパイとして主人公の弱みを握れば、万一の時の切り札ジョーカーにもなる。恥ずかしい写真とか、秘蔵エロ本の種類とかな」

「アンタ最低か」

「あわよくば、主人公がホモになるよう思考誘導できれば……」

「アンタやつぱり最低か。同性愛者にする思考誘導とか無理だから。できたとしても良心が痛むし、両親の心も痛むから」

「上手い！ 座布団1枚！」

「いらないつての。もっとマシなの寄越しなさいよ」

ものすごい呆れ顔で報酬を要求された。

けどなー、コイツが喜びそうなものって……

「じゃあ『明日奈ルート』と『小夜ルート』に入らないための情報を——」

「すごいいる!!」

「交渉成立だな」

力強い即答だった。

ボクらは固く握手をした。

「これから長い付き合いになりそうだな。……えつと〜」

「どうかした?」

「今更過ぎるけど、どんな風に呼んだらいいのかなって……」

目の前にいるのは香坂明日奈だけど香坂明日奈本人ではない転生者だ。名前で呼んでいいのか悩んでしまう。

「……それだったら、普通に明日奈って呼びなさいよ。私もアンタのこと友理って呼ぶから」

「分かった。……一応聞くけど、明日奈ルートはバツサリ切っていいんだな?」

「もちろんよ。転生者だろうが何だろうが、こうして生まれ変わった以上は香坂明日奈として生きていくしか道はないんだろうけど、原作通りに過ごさなきゃいけない決まりもないし、好きに生きさせてもらおうわ。……アタシの人生はアタシだけのものよ。結婚するかしないかも、誰とするのかも、決めるのはアタシ自身なの」

「……すごいなオマエ」

ボクでもまだハッキリ答えが出し切れていないことをアツサリ答えてみせた。

ボクは今、柚木友理として生きて好き勝手やっているけど、ふとした瞬間にそれでいいのかと思ってしまうことがある。

この1年間できるだけ考えないようにしていたことに、コイツは向き合ってきた。それが酷く眩しく見えるのは気のせいじゃないだろう。

(前世の人生、か)

ボクにだって家族もいたし、バカする友人もいた。

今まで柚木友理としてやってこれたのは、記憶を思い出してから前世のことを諦めたから。転生してしまったからには、もうどうにもならないと。正面から向き合って自分の心に決着を付けたわけじゃない。心のどこかで逃げてただけだ。

(それを自覚できただけでも良しとしよう)

やっぱ転生者同士の話だと得るものが多いな。

(とりあえず、今世は柚木友理として親孝行するか)

前世でできなかったことぐらいやらないとな。

孫を見せるのは無理だけど、親孝行の仕方なんていくらでもある。ボクも満足のいく人生を今度こそおくらう。

「何をボクつとしてんのよ？」

「ん？ いやなに、オマエは香坂明日奈じゃなかったとしても、いい女になっただろうなって思っただけだよ」

「何それ？ 6歳児のセリフじゃないわよ」

「そつくりそのまま返してやる」

気付けばお互いに笑っていた。とても自然に笑えている。

「よろしく頼むな明日奈。スパイ活動期待してる」

「こつちこそよろしく友理。過度な期待はやめてよね」

こうしてボクは信用できる協力者を手に入れましたとき。

と、ここで綺麗に終われば良かったんだけど、

「アナタたち、私を置いて随分長いこと楽しそうにしていたみたいね」

「あ」

柊小夜のことスツカリ忘れていた。

いつの間にか店の入り口で、怒りのオーラを纏わせ仁王立ちしていらっしやる！

気付けば随分と長く話し合っていたようで、店内にある時計の針はかなり進んでい

た。その間、終小夜は本屋で一人きりだったわけだ。

ボクと明日奈は、仲良く土下座して許しを請うた。

店員さん？ 苦笑いでしたけど何か？

第6話 明日奈、思いふける

【side. 明日奈】

玄関で靴を履き、出かける準備を整える。

「えっと、忘れ物はないわよね？」

アタシ、香坂明日奈は出かける準備のため荷物の確認をしていた。

柚木秋穂さん——今は秋穂ちゃんか——が以前食べてみたいと言っていたお菓子が手に入ったので、お裾分けに持って行くことにしたから。

ついでに友理と話し合いをしに。

「ふふ、喜んでくれるといいな——」

「誰にだ？」

秋穂ちゃんが喜ぶ姿を想像していたら、後ろから声を掛けられた。

思わずため息がでそうになる。

「兄貴……」

「いや、その嫌そうな顔やめてくんね?」

振り向けば、そこには『ヴァルダン』の主人公でヒロインたちとイチャイチャする予定の（絶対阻止する!）義兄、香坂拓也が立っていた。

黒髪のちよっぴり生意気そうな、けど実は優しい少年に将来なる予定の男の子は最近アタシのことをよく疑う。

それというのも、

「また秘密の友達かよ?」

「そうよ。女の子同士のお喋り会。男子禁制のね」

兄貴は主人公だけあって優しいし、必要以上にズケズケとプライバシーに踏み込まない。だから、交友関係は可能な範囲で秘密にしている。

特に『ヴァルダン』のヒロインたちは原作開始まで会わずわけにはいかない。徹底してその辺がうるさい協力者もいるし。

「オレも行ったらダメなのか?」

「おバカ。女子だけなことに、深〜い意味があるのよ」

友理に至ってはTS転生なんて微妙なラインだけれど。

「ちえつ、義理とはいえ兄貴なんだし挨拶ぐらいはいいじゃんか」

「はいはい、いつかね。じゃあ、行ってきまーっす!」

「あ、おい！ 必ずいつか紹介しろよな！」

アタシは兄貴から逃げるように家を後にした。

（その“いつか”は最低でも数年先になるんだけど……）

最寄り駅まで小走りで向かい、丁度来た電車に乗った。

数分もすれば友理や秋穂さんが住んでいる隣町に到着する。

アタシは走っている電車の窓の外に広がる景色——ではなく、その窓に映ったアタシ自身の姿を見ながらここ2年の出来事を思い出していた。

（アタシもついに小学生、か。2年前よりもアニメで見た香坂明日奈に似てきているわね。本物はもつと子供っぽくて元気な顔だったけど……）

前世でアタシは少しオタクが入っただけの女子高生だった。

ライトノベルやアニメが昔から好きで、普通の友達もいれば同じ趣味を持つ友達、腐女子なんて呼ばれる子にも友達と呼べる子がいた。

そんな、探せばどこにでもいるような女子高生が前世のアタシ。

『ヴァルダン』というアニメを知った理由だって、ネットの宣伝で偶然知ったというありふれたものだった。

ただ、アタシは『ヴァルダン』に登場するヒロインたちが魅力的に見えて、ビビッと

きた瞬間の記憶は今でもハッキリ覚えている。

前世の顔だつてうろ覚えになっていていうのに、我ながら呆れるわ。

アニメが始まってからはずっと興奮しっぱなし。

すぐに大ファンになったわよ。毎週欠かさずに見て、録画したそれを何度も見直した。グッズだつてわざわざ秋葉原まで遠出で買いに行きもした。

特にお気に入りだったキャラは、柊小夜と香坂明日奈。

前者は普段のマジメな態度と笑った時のギャップ萌えで、後者は主人公との関係に悩む回での純粹さにやられてしまったわ。

『ヴァルダン』のアニメが終わった後も人気は衰えず、どつかの有名アプリゲームとのコラボ話まであったような気がする。

そんなんだから、アタシはネットでもっと『ヴァルダン』のことを知りたいと調べた。調べてしまった。

まさか原作が18禁ゲームだったなんて、予想だにできなかったわよ。

衝撃で固まりつつもマウスを動かす手だけは何故か動いて、柊小夜や香坂明日奈、それ以外にも大好きだったヒロインたちが主人公とモザイク必須の行為をしている画像

を見てしまった。いくつもエロシーンを見ちゃったのよ。

シヨックで、放心状態になった。

夢であつてほしいと思つちやうぐらいにアタシには衝撃的だった。

だからでしょうね。フラフラと外に出て、アツサリと事故に遭つちやつた。

そして、意識がブラックアウトして——幼女になつていた。

(最初は普通の母子家庭だと思つてた時期もあつたのよねー)

名字は違うし、「明日奈」なんて名前そこまで珍しくない。

そんな風に考えてた当日に親の再婚話、そして『ヴァルダン』の主人公との出会いのイベントが起こつた。

それで全部を察してしまつたわ。

混乱しすぎて壁に頭を打ち付けて病院送りになつたのは黒歴史ね。

心配して泣く母さんには、サプライズで頭がオーバーヒートしたのが原因だつて伝えた。後日、正式に兄貴となつた主人公にも謝つたわ。

……よく考えたら、ストレスで吐血した友理とどっこいの黒歴史ね。

転生者同志の黒歴史について考えていれば、電車は目的の駅に着いた。

春を過ぎて夏に向かおうとしている風を受けながら、柚木家に歩を進める。

「秋穂さんに会うのもこれで3回目になるのよねー」

転生者同士、利害の一致から協力関係になったアタシと友理。

それに伴ってアタシは小夜に友理を新しい友達として紹介し、友理はアタシと小夜を新しい友達として秋穂さんに紹介した。

2回目に小夜と一緒に柚木家へお邪魔した時は、幼い小谷凜子がいってビックリした。サプライズとして紹介したかったんだって（友理談）。

小学校に入学したばかりの時期に、アタシを含め『ヴァルダン』のメインヒロイン4人＋友理が女子会をするなんて夢にも思わなかったわ。

アタシはその女子会の時に小谷凜子と友達になれて凜子って呼べるようになったし、小夜は5人全員が『Heartギア』を所持していることに興味が出て、凜子は高校で模擬戦したい！と意気込み、秋穂さんは今から高校が楽しみだと笑い、友理は「幼いヒロインたちの女子会、プライスレス」と気持ち悪い笑みを浮かべていたのでチョップで黙らせた。

「楽しかったなー」

そう、本当に楽しい。

原作開始までにしなきゃいけないことはたくさんあるけど、例え友理の暗躍が上手くいかなかったとしても問題ない。見つかっていないヒロインがまだいても。

高校に入ればもつともつと楽しくなると確信しているから。

(友理にも、1度くらい感謝してもいいかしら?)

アタシ1人じゃこうはならなかったと確信できる。

だから、1度だけでも本音で感謝を伝えたい。

——伝えられる時に伝えた方がスツキりするし、会ったら言おう。

そう考えていれば、いつの間にか柚木家に到着していた。

「予定より早く着いちゃったけど、いいわよね?」

——ピンポン!

「明日奈でーす! 柚木さんいますかー?」

チャイムを鳴らせばドタドタと足音が聞こえてくる。

この足音は友理のかしら? アイツたまに男っぽさが出るし。

だけど、勢いよく開けられたドアから姿を見せたのは、

「明日奈ちやああああああああああああんっ!!」

涙目の秋穂さんだった。

第7話 裏パスワード

【side. 明日奈】

!? 柚木家の玄関のドアから涙目の秋穂さんが飛び出してきて、アタシに抱きついてきた

「ふえっ!? ど、どうしたんです秋穂さん!？」

「ユウちゃんが、ユウちゃんがくっくっ!」

「!? 友理が、どうかしたんですか?」

昨日、電話をした時には何もなかったけど……

友理の身に何かあったの?

「グスツ、とりあえず、2階まできてくれりゅ?」

「わ、分かりました」

今日はご両親が揃っていないらしい若干の寂しさを感じる柚木家にお邪魔して、秋穂さんの話を聞いてみることにした。

ちなみに、持ってきたお菓子は冷蔵庫に入れさせてもらう。

「実はね、ユウちゃん、小学校に入ってから何かで悩んでいたみたいんだけど、どうしても気になって……。私にも相談してくれないし……。それで意を決して『入っちゃダメだよ』って言われた時間にユウちゃんのお部屋を覗いたら、何か……。怖いことをしていたの」

「アイツが、怖いこと？」

いつからか、自室への入出を禁止するようになって心配だったとか。悪いと思いつつそつと中を覗くと、秋穂さんには理解できないことをしていたらしい。

（友理ったらお姉さんに心配させて、部屋で何やってんの？）

「悩んでいることっていうのは……」

「たぶん『Heartギア』のことだと思っただけど、よく分かんない」

そういえば前回会った時、『Heartギア』についてアニメ組のアタシにいろいろ聞いてきたわねアイツ。焦っているようにも見えたけど。

といっても、アタシは『Heartギア』について確な情報を持っていなかった。むしろ友理がネットで調べたことに驚いたぐらいよ。

そして、ついに友理の部屋の前に到着。ドアには可愛らしい文字で「ただいま使用中。入っちゃダメだよお姉ちゃん♪」と書かれた紙が貼つてある。

微妙にうざつたいと思つてしまうのは、アタシの器量が狭いからかしら？

「私、ユウちゃんのためにどうしたらいいのかわからなくて……」

「あー、とりあえず部屋の中見てみませんで待つていてください」

嫌な予感がプンプンするけど、そうも言つてられない。

アタシはドアノブに手を掛け、そつと開いた隙間から部屋を覗いて――

――パタンツ！

すぐに扉を閉めた。

………

「あー………帰りたい」

………ええ、確かに怖かったわね。むしろドン引きだったわ。正直言つて、友理と協力

関係になつたのを後悔するレベルで引く。

「ど、どうだった明日奈ちゃん？」

「………ここはアタシに任せてください」

秋穂さんは1階で待っていて、とお願いで再びドアノブに手を掛ける。

静かにドアを開け、中にいるバカに気付かれないよう注意しながら薄暗い部屋へと踏み込んだ。

そこには、

「おお、我が願いを聞きたまえ〜！ 我に汝らの力を与えたまえ〜！

valkyrie@dance@number:413587290〓〓〓YZK〓

〓〓〓second@moon.chord21271131〓〓YUR!

valkyrie@dance@number:413587290〓〓〓YZK〓

〓〓〓second@moon.chord21271131〓〓YUR!

valkyrie@dance@number:413587290〓〓〓YZK〓

〓〓〓second@moon.chord21271131〓〓YUR!!」

どこで用意したのか問いだしたい祭壇と悪魔の像(?)に向かって、ブツブツと英語や数字を一心不乱に言い続ける友理の姿があった。

客観的に見てもヤバイ悪魔崇拝者にしか見えない。

「……………」

1度天井を見上げてから、脚の調子確かめる。
そして、

「何をやってる大バカ」

「おおお！ 我が願いを聞き（ゲツシツツツ！）だま、あ、あつ!!？」

——ガダツアアアアアアアアアアアンツツ!!

無防備な後頭部に蹴りをおみまいしてやった。

バカはおもしろいぐらいぐらい吹っ飛んで祭壇に激突した。

「ぐ お お お うううくく!! 一体、何が……う？」

バカは頭にたんこぶを作りながらノロノロ起き上がる。

「後ろよバカ。ツツコミたいことはいっぱいあるけど、まず正座しなさいバカ」
「明日奈!?! なぜここに！ ここは今重要な儀式を——」

「いいから、正座しろ。今すぐ」

「イエッサー！ マム！」

見事なほど綺麗に正座をするバカ。

アタシは上からバカを見下ろす形で説明を求めたことにした。

「単刀直入に聞いわ。何していたバカ？」

「あの、ボクはバカではなく、友理って名前で……」

「は？」

「何でもありません!! 簡単に言えば本格的に『ヴァルダン』のゲーム知識を使って、柚木友理の『Heartギア』による異能発現までの間に、別物の異能へと変化できないかと試せることは全部試そうとした結果であります! サッー!」

「別物の異能に? どういうこと?」

『Heartギア』によって発現する異能は本人の性質に加え、それまでの生き方で方向性を持たせられるのでは? と考えられているだけで確認も無く、実験結果も誤差程度の違いしかないかと結論づけられたって話だったんじゃない?

「まず大前提として、柚木友理の異能は知っている?」

『ちよつとした異能をたくさん使える』でしょ。アニメでもやってたわ」

アニメに登場した柚木友理の異能は『ちよつとした異能をたくさん使える』という、器用貧乏の典型的な例。

正式名称は『極小異能乱舞』だったかしら。

アタシが見た『ヴァルダン』のアニメで登場したのは、*“静電気を起こす”* *“数センチ土が盛り上がる”* *“マッチ程度の火を灯す”* *“アリやダンゴムシを召喚”* *“家族限定で居場所が分かる”* といった微妙なものばかりだったはず。

「そうだ。でもそれじゃ原作が開始しても、異能の分野でやれることはたかが知れている。目標は異能バトルで打倒主人公だ」

「はあ？ 兄貴を倒す？ 難しくない？ だって兄貴の異能は——」

良くも悪くも *“物語の主人公”*らしい異能で……

「可能性はある。『ヴァルダン』のゲームから知ることができた可能性が」

「可能性？ 何の？」

「……有料サービスによる、柚木友理の特別強化だ！」

有料サービス？ え？ それって……

「『ヴァルダン』は知っての通り18禁ゲーム。ゲーム機などは使わず、パソコンでプレ

イする。その結果、インタ〖ネットさえ繋がれば購入した後から有料で様々なゲーム内の報酬が得られた。イベントも服装も、そして異能バトルにおける個別のキャラ強化も！」

前世の友理はその有料サービスを全て購入したらしい。

ゲームの中でキャラの服装を変えることができたり、バレンタインやクリスマスなどの特的なイベント（エロシーン含む）をプレイすることが可能になったり、戦闘パートで役立つアイテムの入手と各キャラの強化ができたりなど。

『ヴァルダン』にはちよつとしたアイテムが貰えるパスワードシステムがあるそうで、有料サービスをダウンロードしたら一緒にメールで送られてくる「裏パスワード」を入力して初めて有料サービスが解放されると自信満々に友理は話した。

「じゃあ、さっきブツブツ言ってたのが裏パスワードってわけ？」

「ああ！ 比較的覚えやすいもので助かった！」

……アレのどこが覚えやすいというのか、ツツコんだら負けね。

「てか、そんなんで本当に異能が強化できると思ってるの？」

「可能性がゼロじゃないなら、やる価値はある」

「その、見るからに怪しい祭壇は……」

「最初は寝る前に裏パスワードを言うぐらいにしていたんだけど、このままじゃダメかもと思い始めて、親戚の従兄弟の妹の友達のお兄さんから学芸会で使ったのでよければと譲ってもらえたんだ。今じゃ時間を見つけては、儀式的な雰囲気ですら裏パスワードを言っている毎日だよ」

ツツコまないわよ。途中から赤の他人になってるじゃないって！

「理由は分かかったけど、秋穂さんが泣くほど心配してんだから、やるにしても少しは自重しなさいよ！　せめてウソでもいいから、お姉さんに心配させないようにするくらいできるでしょうが！」

「(´；)もつともです……」

これで最低限でも自重してくればいいんだけどねー。なんで家にお邪魔するだけでこんなに疲れるハメになったんだか。

そういうえば、もう1つ気になっていたことがあったわね。

「神頼みとかはよく聞くけど、何でよりにもよって悪魔みたいなデザインの像に祈りを捧げてんのよ？」

その時の友理の答えは、余計にアタシを不安にさせるものだった。

「だって、柚木友理の強化された異能は……悪魔の力だからだよ」

第8話 花見……そして、運命の流れ星

季節は何度も巡って、今年で小学3年生も終わろうとしている時期。

桜が咲き乱れてくれば、学生時代の終わりを迎えようとしている人も、新たな生活に心躍らされる人もいる。

そんな時にすることと言えば——1つしかないだろう？

「つまり！ 花見だああああああああああああ！！ みんな！ 今日は飲んで食べて、飲んで食べて、飲んで食べて、思いつき騒ぐぞ！！」

「ワツオオオオオオオオオオンツ！」

「お〜！ みんなでお花見、楽しいね」

「おー！ 今日は記念日でもあるし、私も嬉しいぞー！」

「ふふ、仲のいい友達同士での花見もいわ。ねえ、明日奈？」

「それは同感だけど。アイツ、飲んで食べて騒ぐことしか頭がないじゃないの。もっと、こーう、花見って言うからには桜も見ろべきじゃ……」

「じゃあ、明日奈はお食事より桜を見るだけの方がいいの?」

「……飲んで食べて騒ぐ方が良さそうって思った自分が悔しい!」

みんなテンションが上がっているな。1番はボクだけど。

とつてもいい花見日和。ボクこと柚木友理、柚木秋穂、香坂明日奈、小谷凜子、柊小夜の5人(＋1匹)は満開の桜の下に集まって、花見を目的としたピクニックに来ていた。お弁当は各自の親御さんが用意し、気分だけでもといノンアルコールの飲み物も持ち込んでいる。

なぜ、花見を『ヴァルダン』のヒロインたちと一緒にすることになったのか。それには理由が2つある。

1つ目、単純にみんなワイワイ花見をしたかったから。

それ以上でもなければ、それ以下でもない。楽しければそれでいいのだ!
で、2つ目の理由が最も大きい。

ボクも嬉しいが、凜子が犬と一緒ににはしゃぐぐらい嬉しがつている理由。

「ついに全員の異能が発現したぞー!!」

「ワフワフフフーンッ!」

そう、ここにいる5人が『Heartギア』による異能に目覚めたのだ。

お姉ちゃんが異能を発現したことを呼び水にしたように、次々と異能を使えるようになっていった。

そして先日、凜子が異能を発現させたことで友達関係のボくら全員が『Heartギア』による異能を扱える者として国に登録されたわけだ。

まあ国に登録と言っても『Heartギア』によつて発現した異能の名称、発現日、その他備考を役所に届け出るだけなんだけど。

基本として異能は県に1つだけある特殊な高校を卒業することで、堂々と使える権利が与えられる。それまでは「無闇矢鱈と使ったらいけませんよ。犯罪に使ったら即逮捕ですよ」と注意されるぐらいだ。幼いうちに異能を発現する子もいるから、最初から厳しく取り締まるのが難しいのは分かるんだけど、『Heartギア』関連の法律がガバガバナことに不安を隠せない。

『Heartギア』があることで世界が良い方向に変わつていった歴史も確かにあるけど、犯罪者に『Heartギア』使用者がちらほらと出ていることも事実だ。

ゲームでも気に掛けている子が所属している組織が、そういう『Heartギア』を使う者を一員としているし。

政府の対応が試される話題と言えるだろう。

閑話休題。

そんな難しいことは知らないと、凜子がフイーバー状態だったためにボクが提案したのがこの花見——を理由にした飲み食いだ。

場所は側に大きな公園もある河川敷で、流れる川の音を聞きながら花見に興じる親子や若者がちらほら見える。

ボくらみたいに子供だけのグループは、片手で数える程度しかない。

周囲を適当に歩きながら、ふと腕に装着された『Heartギア』を見ると口元がニヤつきだす。達成感もあって、つつい笑ってしまう。

「ニヒヒ……」

「なーにをニヤニヤしてんの?」

「おう明日奈。いやー『Heartギア』の色が変わっていると、ついにここまで来たんだなーって実感してさー」

「確かにね。前世に異能なんて無かったから、試したいことが多いもの」

ボクの『Heartギア』は異能を発現してからオレンジに黄色のラインが、明日奈の『Heartギア』は紫に水色のラインが入った配色に変化した。

これってイメージカラーに変わるってことなのかね？

「そ・れ・に・く、柚木友理強化計画も大成功した！ これで勝てる！」

「らしいわね。詳しく教えてもらえていないけど」

「ちよーつと訳があつてね。自分でも困惑することがあつたんだよ」

裏。パスワードを唱え続け、邪教みたいな儀式をした甲斐はあつた。

そのかわり……予想外にやれることが多すぎて、用検証だけど。

「まあ、いいわ。異能について教えていないのはアタシも同じだし」

「……は？ 何を言っているんだ。香坂明日奈の異能は『物質作成』マテリアルクリエイティブだろ？ アニメを

知っている明日奈が知らないはずがない」

「何を原因としているかはハッキリしないけど、いろいろ試してみたらアタシの異能も

変化したのよ。上位互換としてね」

「マジで!? それって……」

ゲームの有料サービスでも、確かに香坂明日奈の強化はあつた。

『物質作成』マテリアルクリエイティブの上位互換が思った通りのものなら……

「ユウちゃ〜ん！ 明日奈ちゃ〜ん！ そろそろお弁当食べようよ〜！ みんなお腹す

かして待つてるよ〜！」

おっと、我が姉様からお声が。

そういうえばボクも腹が減ってきた。

「……ま、異能に関してはお互い様ってことで」

「……そうだな。みんなの所に戻るか」

凜子が「待て」状態の犬みたいなポーズで涎垂らしているし。

「あ、言い忘れてた。発現した異能のおかげで新しいヒロインに会えたぞ」

「マジで!? どの誰!? 誰なのか教えなさいよ!」

「それは——数年後のお楽しみだ——!」

「こら! 待ちなさい! 逃げるな——!」

お姉ちゃんの元へダッシュ&到着!

「おおー! どれも美味しそうだな——!」

「みんなで交換しながら食べるのもいいかもしれないわ。ほら、明日奈も眉間に皺を寄

せてないでこっちに来て食べましょう」

「分かったわよ。こうなったら、とことん食べてやるんだから!」

「そうだ! そのおにぎりサンドイッチは私も食べたいぞ!」

「ワンワン!」

「ほらほら、ユウちゃんたち。そんな焦らないで」

お姉ちゃんは焦らないでと言っているけど、凜子の食べるペースが早いから、モタモ

夕してたらボクの分が無くなっちゃいそうなんだよ！

そこからバカ騒ぎしながら食事していると、明日奈が小突いてきた。

さつきからチョンチョンと何だよ鬱陶しい。

「どうしたんだ食事中に？」

「ねえ、誰もツツコまないしアタシも聞くタイミングを逃していたんだけど……さつきから当たり前のようにいる子犬は一体……？」

「ワウン？」

明日奈がボクに言った言葉が聞こえたのか、「何？ オレの話してんの？」と言わんばかりの表情で件の犬が近づいてくる。

ふむ、コイツに関しても報告するのを忘れていたな。

「紹介しよう。我が家で飼うことになった犬、マルコだ」

「ワン！」

「ちなみに、オスである」

「ヒヤイーン……」

「そこまで聞いてないから。てか、いつまで余計なものを見せてんのよ」

手っ取り早くオスカメスカ判断する材料は「息子」の存在だろ。

「遊びに行った帰りに某保険のCMのごとく潤んだ目で縋り付かれ、家族を泣き落とし

で納得させて飼うことが決定した——という設定だ」

「はあ？ 設定つてどういうことよ？ 訳あり？」

特大の訳ありだな。ていうか、明日奈が鋭い。

マルコは雑種の犬ということになっている。

似た犬種も無い黒系の小型犬で、尻尾の毛並みが体と違うこと、背中に白色の模様が2つあるのが特徴だ。

「愛称は『ちびマルコ』で、本名は『マルコシアス』だ」

「愛称がギリギリ過ぎないかしら？ そして本名が無駄にカツコイイ——つて、あら？」

『マルコシアス』？ どこかで聞いたことがあるような……」

「おっと、この話題はここまでだ。なー、マルコ？」

「アツオー——ン！」

マルコは「そうだ、そうだ！」と吠える。

「さつきからこの子、アタシたちの言葉を理解してないかしら」

「マルコは下手な人間よりも知能が高い、犬っぽい何かだもんなー。お手！ おかわり

！ おすわり！ ちんちん見せるのイヤです！」

「ワン！ アン！ ワフツ！ ……ヒヤイ——ン」

うむ、素晴らしい芸だな！

「最後だけ微妙に違うし、後ろ足でバランス取ったまま前足で恥ずかしそうにアソコ隠すって、絶対に犬じゃないでしょ！ 利口すぎるっての！ しかも、友理まで『犬つばい何か』って……犬じゃないの認めまし！」

「明日奈、アナタ疲れてるのよ」

「そのネタもう2回目よ！」

今日も明日奈のツツコミはキレが良いな。

「でもさ、難しい話抜きにマルコって可愛らしいだろ？ 家でも人気者になったし。明

日奈も可愛がってやりなよ」

「うっ、確かに小さくてカワイイけど……」

「お手でもさせてみるって。肉球の感触に癒やされるがいいさ」

マルコをジツと見つめながら明日奈は手を差し出し、

「マルコ〜お手っ♪」

何だかんだで期待した弾んだ声で言えば、

「……ワフツ」

——ペシッ！

前足で伸ばした手を払われた。しかも、かなり雑に。

「どうやら明日奈はマルコに嫌われたらしい。」

「この犬っぽい何かがああああああああああああああつ!!」

「ワッフッフフン♪」

直後、お怒り心頭な明日奈vs「へへん! やーい、捕まえてみろー!」なマルコの追いかけてっこが勃発したのであった。

「明日奈ったら、子犬を相手にあんな怒って……!」

「アハハ! 楽しそうだなー、私も混ぜろー!」

「明日奈ちゃん、マルコ、周りの人に迷惑掛けたらメッ!」
「よー」

「いやー平和だなー、うん」

その後、凜子が追いかけてっこに参戦したり、疲れて倒れ込んだ明日奈の頭に乗ったマルコが勝利の遠吠えをしたりして、花見は無事に終わった。



花見を終えた日の夜。

ボクは1人、山の空けた場所に来ていた。

普段から人が来ることは少ない山とはいえ、ちゃんと後処理をしないといけない位、ボクの周りは荒れ果てていた。

マジメに直すので山の持ち主は許してほしい。

「ふう、今の体じゃこの力の最大威力はまだ厳しいな……」

ボクは目の前にできたクレーターを見ながら一人ぼやく。

異能に目覚めてからというもの、時間を見つけては検証する毎日だ。

それだけボクの異能は……やれることが多すぎた。ゲームでは出てこなかったものまであるせいで、1つ1つの確認が面倒で仕方がない。

原作の異能の器用貧乏による問題点を解消しようとして、別の意味でまた器用貧乏になりそうになるとはこれ如何に？

「そろそろ戻らないと、睡眠時間が無くなっちゃうよ。ふあくあ……」

寝る時間になってからコツソリ部屋から抜け出し、目覚めた異能を使って山まで来れるようになったのは良かった。ボクの異能は良くも悪くも目立つから、様々な異能を試すことができる施設の利用が難しいのだ。

ただし、子供にとって貴重な睡眠時間がどんどん削られる。

「今日の花見、楽しかったなー」

帰る支度をしながら、昼間の花見で『ヴァルダン』のヒロインたちと終始笑い合っ

いた光景が脳裏を過ぎる。

前世ではできなかったバカ騒ぎが、こんなに楽しいとは思わなかった。

「あの月の下で夜桜するのも、大人になったらいいかもしれない——あ、ダメだ。その頃には他にもメンバーが増えていいるだろうし、みんな酒を飲んで余計に騒ぎが大きくなる未来しか考えられないや」

金色に輝く月と、銀色に輝く月。

2つの月に照らされての夜桜、前世で1度だけしたものとはまた別の風情があるだろうにと、ちよつとだけ残念になる。

と、2つの月を見ていたら変化が。

「ん？ 銀月の方、何か光ってる？」

まるで何かが落ちてくるような光が……はっ?!

「もしかして流れ星か!?!」

本物ならボクが願うことはただ1つ!

目を瞑り、祈りのポーズで願いを素早く言う。

「ヒロインのみんなを主人公から護れますように、ヒロインのみんなを主人公から護れ

ますように、ヒロインのみんなを主人公から護れますように！」

「どうだ！ 落ちきるまでに3回は言えたか！」

確認のために目を開けたボクの、その目に映ったのは、

「……あれ？ あの流れ星、こっちに向かってきてない？」

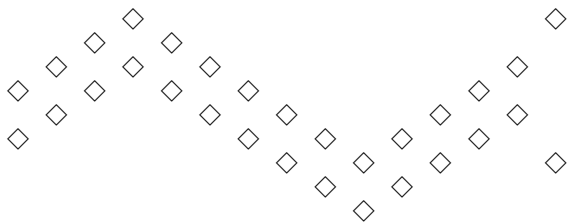
落ちる方向を変えて迫ってくる流れ星——否、隕石の姿が!!

しかも、どんどん速くなってボクに迫ってくる!?

「いやいやいやー！ おかしいおかしいおかしいって！ そんな天文学的な確率だよって
いうかさつきから逃げてるのに追いかけてないかアレってよく見たら隕石ですらねえ
じゃないか何なの何なの何だって言うんだ来んな来んな——こっち来んなああああ
ああああああああああああああああ!!」

ボクの願いは空しく夜空に響くだけだった。

謎の流れ星は勢いを殺さないまま………ボクに直撃した。

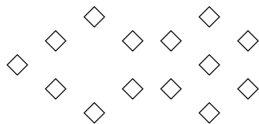


……後に、ボクは語る。

あの『裏パスワード』が全ての引き金だったなんて思わなかったと。

この時の流れ星との出会いが『ヴァルダン』に——この世界に、隠された真実と向き合うことになる物語の始まりだったと。

そして時間は高校入学の数日前まで進むのであった。



第9話 15歳

——ジリリリリリリリリリッ！

「う、ん……あと5分……」

目覚ましがうるさいなあ。

昨日は肌寒かったんだから、もう少し寝かせ——ぐえっ!?

「ワン！」

「何だマルコか。『さっさと起きろ』？ 分かったから上からどいてくれよ。オマエの小さな体でもお腹にジャンプされるとキツイんだって」

「ウゝ、ワウン！」

「いやいや『このまま起きないなら元の大きさにしろるか』って、それシャレにらんか。起きるからどいて」

マルコと朝のやりとりを終えて起き上がる。

着替えるためにパジャマを脱ぎ捨て、ブラジャーを付けている最中、部屋にある姿見

の中に写る自分の姿を見ていると感慨深いものが心の内から出る。

「ついに、原作の柚木友理と同じ姿になったな」

前世を思い出した年から10回目の春になった。

少し前に15の誕生日を迎え、中学校を無事に卒業し、数日後には『Heartギア』を持つ少年少女が通う学園『アマテラス特殊総合学園』に入学する。

そう、あと数日で『ヴァルダン』の原作が始まろうとしていた。

鏡の中のボクは紛れもなく登場キャラの1人、柚木友理だ。

違うところと言えば、ギャルっぽかったゲームの柚木友理よりも目つきが強く、中学生になってから始めた自主練の成果で体が適度に引き締まったことぐらい。

「……意外と羞恥心には目覚めなかったな」

よく「魂は肉体に引つ張られる」と説明しているマンガや小説はあったが、ボクはどうも男性としても考えても、女性としても考えても羞恥心が薄い。

学校でプールの授業があつて、男子女子双方が水着姿で泳いでいても特に何か性的な

モノを感じることは終始なかった。

おかげで女子の間でたまに出る恋バナは苦手だ。

「うっし、着替え完了！ 行くぞマルコ！」

「ワン！」

ジャージに着替えたなら、ここ最近特に念入りにしているジョギングに行く。

何が楽しいのかマルコまでついてくるけど、気にならなくなってきた。

2階にある部屋から出て、飲料水を取りに1階に行けば、

「あ、ユウちゃんおはよ〜」

まだ眠りから完全に覚めていないお姉ちゃんが、リビングでテレビのニュースを見ているところだった。

お姉ちゃんも少女というより、女性らしく成長した。その姿は紛れもない『ヴァルダン』メインヒロインの柚木秋穂である。

もう涙が出るくらいにいろいろ成長してくれた。グッジョブだボク！

「珍しいね。お姉ちゃんがこの時間帯に起きてるなんて」

「ん〜、私も学園の生徒会で会長補佐になったし、ユウちゃんの顔を朝早くから見たいか

ら、今日から早起きすることにしたの」

「天使かよ」

我が姉はどこまでボクをキunksunksyさせれば気が済むのか？

「あの子は？」

「まだ寝てるみたい。昨日遅くまで本を読んでたから」

「そっか、じゃあボクはマルコとジョギング行ってくるから」

「ワン！」

「車には気をつけるんだよ」

朝からお姉ちゃんに癒やされたので、いつもよりジョギングをがんばることにしよう。姉の癒やしは下手なドーピングより効果がある。

「ふっ、ふっ、ふっ……！」

ジャージ姿で走るボクの息はちよつとだけ白かった。

外に出ればまだ薄暗さが残り、車も人もほとんどいない。見かけるのは近所のおばさんぐらいなものだ。

「あら友理ちゃん、おはよ。今日もがんばるわね」

「おはようございます！」

お姉ちゃんは清楚系の、ボクは元気系の美少女だからか近所でも有名だ。姉妹揃って

『Heartギア』を持つているのも理由だろう。

あとはボクらが大きくなったことで両親が共働きするようになり、仕事先が遠いことも重なって家にいない方が多いのも原因かもしれない。近所には年配の人がたくさんいるから、何かにつけ気に掛けてくれている。

「けど、全然寂しくないんだよなー」

『ヴァルダン』の原作通りならボクとお姉ちゃんの2人暮らしだったので、家の中がちよっぴり寂しかっただろう。

でも今はペット枠でマルコがいて、居候枠であの子もいる。ときどき来るヒロインの何人かと食事を一緒に食べることであってある。

寂しさとは無縁の生活だ。

「原作ではその隙に主人公がお姉ちゃんを……！ 許すまじ……！」

ゲームでは「秋穂ルート」に入ってしまったらしくすると、ゲームの柚木友理が友達の家泊まりに行ったその日にお姉ちゃんが風邪でフラフラとなり、電話中にそれを察知した主人公が柚木家に急行。お姉ちゃんの看病をしたことが切っ掛けで、お互いに恋心をくという流れであった。

ちなみに、お姉ちゃんたちは柚木友理がお泊まり会を楽しんでいるなら余計な心配をさせるのもくと気を利かせた結果、柚木友理は何も知らないまま実の姉が下半身直結男（100%偏見）に奪われることになった。

「だから原作の柚木友理も怒るんだよ！ 『私のいない間にお姉ちゃんをNTRやがってー！』 ってき！ ああ主人公め、忌々しいいいいいっ!!」

「……ユユっちは、朝っぱらから何を言ってるの？」

「うおっう!? 凜子、いつの間にも!?」

いきなり声を掛けられたのでビックリして隣を見れば、いつからいたのか長いツイインテールを揺らし、ボクと同じ背丈にまで成長したジャージ姿の凜子が追走していた。

「いや、声掛けても気付かなくて近づいたら『NTRやがって』とか、『忌々しい』とか聞こえてきてドン引きしたんだけど。ところで『主人公』って何？」

凜子らしくない呆れ顔で聞いてきた!? しかも地雷が！

「良い子は知らなくていいの！」

「ワンッ！」

ほら！ マルコも『主人の言う通りだぜ嬢ちゃん』 って言ってるぞ！

「えー、だつて気になるんだもん。ユユっち、さつきまで世界を憎むかのような顔をしてたよ？ 血涙でも出すのかつて心配した」

「え、そんなだったの!?!」

“世界を憎む”ときたか。

前世の記憶が戻つてからの10年で、お姉ちゃんへの愛が天元突破したからな。主人公に対してはそれぐらいの怨敵に膨れ上がっていると云つていい。

明日奈に言ったら「家の兄貴を世界の敵みたいに言うんじゃないわよ！　そこまで酷くないでしょうが!?!」とか叱られそうだな。

「凜子もこの時間にジヨギングか?」

必殺、話題逸らし発動。相手は雰囲気で前の会話を忘れる。

「えへへ、『アマテラス特殊総合学園』への入学が近いでしょ？　異能使った模擬戦で絶対勝てるよう自主練を始めたんだー」

「ほう、偉いな凜子は」

「今まではユユっちが練習の相手になってくれていたけど、何だか忙しい中で付き合ってくれてたみたいだし？　だから、ね」

「気にしなくったっていいのに、凧子は昔から良い子だよな。あ、例の技の練習は特に念入りにな！ 入学式前日までミツチリやれよ！」

「ユユっち、妙にあの技を練習させるよね？ 意味あるの？」

意味？ そんなの決まってるだろ！

「全部凧子のためだ！ そのために何度も練習台になったんだから！」

心が折れそうになるくらい、ボロボロにされたんだからがんばって。

「う〜ん……分かった！ そこまで言うなら今日も練習するよ！」

凧子、マジで良い子に育ったなあ。

娘の成長を喜ぶ母のような心境だよ。

「ワウ〜ワン？」

え？ 『主人は同じ年だろうが。年寄り臭い顔になってたぞ？』って。

いいんだよ！ 精神年齢はアラサーなんだから!!

「ただいまー」

凧子と途中で別れ、家に帰ってきたボクとマルコ。

そんなボクらを出迎えたのはお姉ちゃんではなく、

「友理、マルコ……おかえり」

「あ、起きてたのか。ただいま……アルカ」

「ワン！」

見慣れない服を着た、高校生ぐらいの背丈の無表情な少女だった。

彼女の名前はアルカⅡメモリアⅡミュトロギア。

あの日、流れ星としてボクに激突した子であり、柚木家に身を寄せて保護されている子——つまりは居候だ。

第10話 鍋パーティー（前編）

夜。今日は満月×2がとても綺麗だ。

玄関の外に出て見た2つの月の感想がそれだった。

「というわけで、鍋パーティーを開催する!!」

「どういうわけなの!？」

ボクの宣言に、扉の前で待っていた明日奈がツツコミを入れる。

元々、明日奈を呼んで鍋でも食べない？って話はあつただけど、あるヒロインに係して急遽本日開催の流れになった。

明日奈が来れない可能性も考えていたから、来てくれて素直に嬉しい。

「突拍子もない行動には慣れたけど、今回はまた随分と急じゃない」

「あーほら、そろそろ原作も始まるから徐々にネタバレをね……」

目の前で腕を組みながらため息を吐く明日奈もボクと同じように、原作の香坂明日奈の姿へと成長した。雰囲気は大分違うけど、それはボクも同じことだし、今更どうこう言うことではないだろう。

「ネタバレ……ね。つまり、よ～～～～やく10年間の暗躍内容を教えてもらえらつてことでもいいのかしらあ？　ようやく！」

「お、怒るなよ。事情があるんだから」

ぶつちやけ利害の一致から協力関係になった明日奈だが、ここ数年は暗躍が上手いきすぎて内容を言うに言えないことが多くなっていた。

だつて……確実に怒られるから！

「怒らないから正直に言いなさい」

「それ、有史以来守られた試しがない約束事だよね？」

前世の母さんに子供の頃、速攻で破られた約束だよ。

「全部を説明しろとは言わないから……理由だけでも吐け」

「暗躍をやらかすすぎて、原型留めていないヒロインが……！」

「んなこつたろうと思つたわよ！　このアンポンタン!!」

「ごめんなさいー！」

やっぱり怒られた！

でも仕方ないじゃん。ボクだって予想外だったんだもん！

「今、家にいる子も詳しく教えて貰えるんでしょうねえ……？」

「1人はいいけど、もう1人は堪忍して。明日奈だって分かっているだろ？ あの子が普通の人間じゃないってことぐらい」

「分からないはずがないわねえ。初めて会ったのが小4の時だったかしら？ あの頃からまっつったく変化が無いんだから。いくら聞いてものりくらりとはいくらかされ、こっちはあの子どころか他のヒロインたちがどうなったかも教えられずに数年間モヤモヤしていたのよ！」

そこは本当に申し訳ないと思う。

でも、あの子は事情が事情なんだ。簡単に話せたら苦労しない。

ボクがどんな暗躍してきたのか、それは徐々に話していくから許して欲しい。直接会わせないと説明のしようもないヒロインだっているんだから。

ていうかさあ、

「そんなこと言ったら、明日奈だって小夜に一体何をしたんだよ!! 途中から何も教えてくれなくなったよね!! 中学に入った頃ぐらいから！ それとなく聞いても、自殺し

そんな人みたいな顔で『頼むから聞かないで……』とか言われたら、こつちだつて聞けないじゃん！ 小夜自身は変わった様子がないから余計気になるんだよ！』

「……ゴメン。ソノ話題、勘弁シテクダサイ」

カタコトじゃん！ 目が死んでるじゃん！ 本当、小夜に何をしちやつたの!? ここまで来ると聞くのがボクも怖いよ！

と、ボくらだけを狙ったかのような風が直撃する。

「フエツツクシユン！」

春なのにメツチャ寒い風が吹いた。

しばらく外にいたから身体も冷えてきたみたいだ。

「……とりあえず、中に入ろうよ。寒いでしょ」

「……鍋の最中でも聞かせてもらおうからね」

ちよつとした言い争いは、冷たい風によって中断された。



本日の鍋はみんな大好きスキヤキ。それも、和牛を大量に用意したもの。

この場にいる5人と1匹は卵をといてスタンバイ。

「ワフツ！ ムシヤムシヤ!!」

「私も、お肉……………おいしい」

マルコ&アルカのペアが協力し、

「ハフハフ。お豆腐も美味しいですね。ネギも良いです」

「^{しのぶ}忍ちゃんはお肉食べないの?」

「大丈夫です。自分はお肉より野菜の方が好きなので」

お姉ちゃんと^{しのぶ}忍が和やかな雰囲気を作り出す。

「偉いわね。でも遠慮しなくてもいいのよ? ……ところで、ユウちゃん? お肉は

たくさんあるんだから、明日奈ちゃんの分も残して。ね?」

「はい! 了解であります姉様! 愛しております!」

「はあ、本当にユウちゃんはいいい子ね。私もユウちゃんが愛しいよ」

お姉ちゃんの言葉は絶対だからね。

ところでお姉ちゃん? 今の『家族として愛している』って言ったんだけど、何でそ

んな蕩けそうな顔で目がハートなの？

最近感じることが増えた、妙な胸騒ぎが気のせいだと信じたい。

「ねえ、友理ちよつと」

「モグモグ……あんだよ。肘で脇腹を突つつくな」

明日奈が声を潜めて話しかけてきたので、同じ音量で話す。

「1つ、最近アンタん家って金回り良くない？ 最初は気にせず食べてたけど、これだけ和牛を用意できるって……」

「それについては何とも……。強いて言えば、両親のいる会社が事業に大成功したこと、ボクの買った宝くじが必ず当たるようになったことかな」

「ちよつと、前半は偶然にしても、後半がおかしいでしょ」

ボクの異能が関係してそうなんだよ。

まあ使えるお金が増えて暗躍も絶好調だったけど。

「それと、もう1つ」

隠すのは許さんとばかりに睨む明日奈。

「いい加減ネタバレしろつて言ってるのよ。まず、何で『ヴァルダン』のサブヒロインであるはずの波木忍なみきしのぶちゃんがいるの？ 結局アルカさんって何者？」

「やっぱり気になるか」

お姉ちゃんと和やかにスキヤキを食べる忍者っ娘、忍。

絶賛、肉を催促するマルコを手伝う謎の少女、アルカ。

片や『ヴァルダン』のサブヒロイン、片や『ヴァルダン』に登場しない謎少女。
何でかという、複雑な事情があると言えん。

第11話 鍋パーティー（後編）

「忍は、本人の意思を尊重した結果だ」

「忍ちゃんの意思って……」

「波木忍の設定は覚えているか？」

「当然よ。『ヴァルダン』のヒロインの中でも、悲しい過去持ちだし」

なみきしのぶ
波木忍。

推定年齢13歳の忍者っ娘であり、『ヴァルダン』の貴重なロリ枠担当でもあるサブヒロイン。

共通ルートでたびたび登場し、メインヒロイン全員を攻略して現れる“忍ルート”で主人公と結ばれることとなるヒロインだ。

忍は『Heartギア』で目覚める異能を、自分たちの望むようにできないかを違法研究する者たちによって管理された元実験体の1人。

それ以前の出自は完全に破棄されたため、両親も出身地も不明。

同じ実験体として施設にいた姉のように慕う優しい少女がおり、忍にとつて心の支えでもあった。……だが、元々その少女は身体が弱かったこともあり、酷い実験の副作用が原因で亡くなってしまった。

当然、忍は心の支えを失ってどんどん生きる気力を失っていく。日を追うごとに痩せ細っていく忍。

そんな時だ。

公的機関によって施設が摘発、忍たち実験体は保護されたのは。

その後、紆余曲折の末に主人公たちが通うことになる『アマテラス特殊総合学園』理事長の手足となって働くことになる。

フラグを立てると、任務の中で偶然主人公と出会う。そして、姉のように慕った少女と同じ手つきで頭を撫でてもらい、興味を持つことになるのだ。

「忍ルート」の後半では、理事長が裏組織と繋がっていたことで葛藤し、主人公と立ち向かうことで恋心が芽生えるようになる。

もちろん、恋心が芽生えれば後はご想像の通りだ。

端的に言うとうと、高校生がロリ中学生に手を出したわけ。

ボクは転生した今だからこそ、主人公に言いたい。

せめて高校生ぐらいの年齢になるまで待てなかったのかと。忍はエロゲに時折登場

する合法ロリではなく、年齢相当のロリだ。犯罪ですね。

そんな未来、ボクが許すわけがない！

——なので、

「先に件の施設を強襲しました」

「何やってんの!？」

ボクのカミングアウトに明日奈のツツコミが炸裂。

お姉ちゃんたちがビックリしたので「何でもないよーアハハハ」と軽く返した。

「おい、もう少し声を低くしろって」

「ごめん。じゃなくて、詳しく吐け」

詳しくと言われても、やったことは単純だ。

施設の場所と、実験体となつて忍を含ま子供たちや研究者の生活サイクルを入念に調べ上げたなら、公的機関より先に行動できるように計画を練って、

「普通の家2階分のデカさの巨大ワニで施設を襲撃し——」

「待ちなさい。もうその時点でおかしい」

明日奈が額に手を当て、疲れた口調で止める。

「言いたいことは分かるけど聞こう」

「第一に、どうやって公的機関が調べるような——というか、それ以上の情報を得られたのよ？ 施設の間所はまだしも、生活サイクルまでって……」

「ボクの異能フル活用で調べました」

「……第二に、巨大ワニが襲撃って何よ？」

「ボクの異能で召喚・使役しました」

「あーはいはい。結局のところ、異能で〴〵で全部済ますのね」

明日奈は投げやりな言い方で「襲撃の後は？」と聞いてきた。

〴〵どうせ答えてくれないんでしょ〴〵オーラを出している明日奈。ボクの異能の秘匿性について、いろいろと諦めたらしい。

「研究者が大混乱している間に、顔を見られないよう『ネズミーマスク』として施設に侵入。忍たちのいる区画まで辿り着いた」

「ずっと前にアンタの部屋で見かけた、デフォルメされたネズミマスクの謎が明らかになつたわね。他にも数種類あつたけど」

顔を隠すのに丁度いいんだよ市販のマスクって。

当然、他のマスクも活躍しているぞ。

「現れる施設の武装勢力は、随伴のマルコがボコボコにしました」

「ここで犬つころ登場かい。そしてネズミマスクを見たのと同じ日に、マルコの毛に付いていた赤黒いシミってまさか……」

「忍を含む子供たちを集めたら、一気に長距離転移で脱出」

「今度は『長距離転移』って……友理の異能は一体？」

オマエの兄貴をぶっ飛ばす（予定）数日後まで秘密だ。

で、脱出させたあとからが、ややこしくなるんだ。

断腸の思いで忍たちをしかるべき保護施設に預けたボクは、秘密裏に手に入れた『アマテラス特殊総合学園』理事長の汚職の証拠を信用できそうな政治家に匿名で送った。これにより理事長は原作開始前に逮捕。今の『アマテラス特殊総合学園』の理事長は優しそうなおばさんになった。

これで『忍ルート』は成立しなくなったはずだった。

忍は施設で平和に過ごすことになるだろう。そうすれば関わりのない主人公も……。そしてボクも、まず会うことはない。

ヒロインに原作が開始しても会えないとか血涙ものだったが、両親のいない忍をボクごときがどうこうすることはできない。例えできたとしても、それは自己満足で我が儘

な行いでしかない。家族や友達に顔向けできない行為だ。

——だから脱出後、ボクは忍にそれとなく別れを告げた。

——最初で最後の出会いに感謝し、彼女の平穏を祈って。

「いや、いるじゃん。そこに。秋穂さんと仲良く鍋を突っついてるわよ」

「そうなんだよな」

今度はボクが投げやりな態度になる番だった。

「どうやってか、お別れしてからボクのこと独自に調べたらしくって……急に会いに来たと思ったら『アナタに伝えさせてください！』って土下座されて」

「数年前に見た、土下座する忍ちゃんの真実が明らかに……」

いや、本当にあれには驚いた。

『ヴァルダン』のファンに見られたら、殺されたんじゃないのボク？

「後で各書類問題とか片付けてきて、今じゃ隣のアパートに住んでいるんだよね。ボクからの要請があればすぐ動けるように。前理事長みたく顎で使うつもりなんてないの……。それから、ときどき食事を家族としたり勉強を教えたりもしているんだ」

「忍ちゃん隣に住んでたの!？」

今明かされる衝撃の真実。

『ヴァルダン』のサブヒロイン、波木忍はお隣さんだった！

さらけに言う、忍にはボクから大量のお小遣いをあげています。本人は仕えていることに対する給料という認識だったけど。

「忍ちゃんに变なことをさせてないでしょうね？」

「当たり前だ。今のところ子供でもできるレベルだったの」

特別な理由もなく变なこと・危険なことでもさせてみる？ 時空を超えて波木忍のフアンの怨念がボクに襲い掛かってきそうで怖い。

ボクが忍の幸せを願っているのは本当だ。

最初は食事に誘っても遠慮していた忍は楽しそうに、美味しそうにスキヤキを食べている。少し表情は読みにくいけど、無表情なわけじゃないから分かるんだ。忍は心の底から今、この瞬間を幸福に感じているんだって。

「くっ、忍ちゃんの後だとアルカさんについて聞くのが怖い！」

「……アルカについて答えられることは少ないぞ？」

フルネームはアルカメモリアミュトロギア。

見慣れない服装で宙を浮いて移動する、地面に付きそうなほど長い不思議な色の髪を持つ無表情系少女。

名付け親は何とボク。みんなで初めて花見をした夜に出会い、紆余曲折の末に柚木家に住むことになった年齢不詳どころか人間ですらない存在。

さらに初めて出会った時から見た目に変化はない。

明日奈も数年前に会ってから、その正体を疑問に思っていただろう。

そんなアルカが何者かと問われれば、

「空から落ちてきた少女？」

「ぶっ飛ばすわよ？ 人間でないのは分かるけど、ウソを付くんだったらもつとマシなウソにしなさい。ラ○ユタのヒロインみたいに落ちたっていうの？」

「いや本当なんだって。流れ星になってボクに正面衝突してきたんだ」

「本当だとしたら、何でアンタそれで死んでないの……」

あの日のことは、忘れようにも忘れられない。それだけ衝撃的な出会いだった。比喩的な意味とかではなく、物理的な意味でも。

「そもそも、アルカの正体は極秘中の極秘事項だとボクは考える」

「……………どういふこと」

マジメなボクの声に明日奈は耳を傾ける。

「今後どうなるのかボクにも分からないってこと。でも、アルカがボクと出会ったのはチープな言葉だけど『運命』だって思っている。アルカが教えてくれたことは、それだけ重要だった。何もないかもしれない。だけど、何かあるかもしれない」

「何かって……マズいことじゃないわよね？」

「それを含めて、分からないって言ってるんだ。けど——」

ボクはそこで言葉を区切る。

「何かがあるなら……責任は取る」

「アンタ、何を知ったっていうのよ……？」

明日奈の瞳に動揺が見えるのが少し嬉しいな。何だかんだ言いつつ10年近い付き合いになって、お互いに信頼できる仲になった。

何かあっても、コイツなら信じられる。

——あ、責任取るって言えば……

「責任を取らなきゃいけないヒロインのこと、どうすべきか……」

「え、は？ 何の話……責任取るって、誰に何やったの？」

「明日奈を急遽呼ぶことになった理由だよ」

この後、会いに行かなきゃいけないからね。

『ヴァルダン』のメインヒロインの1人、黒羽瑠^{くろばる}維^いに。

第12話 地獄の獵犬《ヘル・ハウンド》(前編)

鍋パーティーを無事に終えたボクは、明日奈とマルコを連れだつて電車で20分以上掛かる街までやつて来た。

時間的にも周りにあるほとんどの店が閉まり、コンビニや居酒屋などの建物、ちらほらとある家の電気だけが目立つ。当然、街灯はあるが本数が少ないので、子供だと歩くのが怖くなつてしまいそうな微妙な暗さだ。

そんな暗い道をボクらは歩いてる。

「電車からこの辺に降りるのは初めてだけど、ちよつと心配になる暗さね。中途半端に自然が多いっていうか……」

「この辺りは土地の所有権や地盤の関係とか、開発するのに衝突する問題が多いらしいぞ? 何代も前の市長の頃から頭を抱えているんだと」

「だから、どこでそんな情報を仕入れてくんのよ?」

「アウ〜ワウ!」

「ほらマルコも『オメエは細かいことを気にしすぎなんだよ。今からそれだと将来シワだらけになっちまうぞ!』って言ってるよ」

「余計なお世話よ犬ところ! ……そもそも、何で友理は動物の言葉が分かるの。この前は近所の猫と話していたわよね?」

「異能で何を言っているのか理解できるんだ」

「はいはい、また異能なのね。もう何でもアリねそれ」

もうどうでもいいわよ、と首を振ってヤレヤレのポーズをする明日奈。

原作の香坂明日奈がやったら違和感しかない動作も、転生者の明日奈がやると全く違和感ないな。むしろ似合ってる。

「で? 何で瑠維ちゃんと会うのに、こんな所まで来なくちゃいけないわけ? あと数日もすれば高校で会えるんじゃないの?」

「……2つの月が共に満月で、バックにすると見栄えがいいからって」

「? ? ? ねえ、アタシたちが今から会おうとしてるのって『ヴァルダン』のメインヒロインの1人、黒羽瑠維でいいのよね?」

「うん。一応は……合ってるぞ?」

「何でアンタが疑問形なのよ」

「……瑠維がどんな子なのかは、説明するまでもないよな」

「もちろん。悪い子じゃないのに、家族との関係が上手くいってない不幸系のヒロインでしょ？ アニメでは弟さんとの仲直りが見所だったわ」

黒羽瑠維^{くろばるい}。

気が弱い性格のヒロインで、いつも自分に自信が無いために誤解を招きやすいが、本当は素直で小動物のような可愛らしさがある女の子。

原作の過去では、決して酷い性格ではないが、内気というか卑屈が強かったので何らか下の弟に「根暗すぎて一緒にいるのがヤダ」「別のお姉ちゃんがよかった」などと言われて、シヨックで余計に心を閉ざすことになってしまったのである。

そして「瑠維ルート」に入って判明したのが、中学に入学するお祝いにと唯一歩み寄ってくれていた祖母から貰ったアクセサリーが、実は異能の力を宿した代物であることだったこと。

ここから黒羽瑠維の物語が始まる。

偶然そのアクセサリーを見つけた非合法的な裏組織の者が上に報告。その報告により、実は組織がずっと追い求めた品だと判明したのだ。

そのアクセサリー奪取のために組織の実力者が敵として現れ、偶然巻き込まれた主人公と共に戦っていく中で黒羽瑠維は恋心を抱き、自分に自信を持ったことで家族との仲

も良くなっていった——と、こんな話だった。

——それが……

「なーんで、あんなったのだろうか？」

「瑠維ちゃんに何しやがったコラ……！」

襟首を明日奈が掴み掛かってきた。

明かりのほとんど無い夜道で、同じ年頃の少女の首を絞めているように見える明日奈（15歳）。知らない人が見たら110番されても不思議じゃない。

てか、ちょ、苦しいから！ 少しは加減しろバカ！

「瑠維ちゃんへの暗躍行為で、責任を取らなきゃいけないようなことしたってわけね？
そうなのね？ 何したか吐きなさい!!」

「ウー、ガウガウ！」

「違うんや~~~~ボクはただポジティブな性格になれば主人公とのフラグを折れると思っただんや~~~~悪気は無いんです~~~~。マルコも威嚇してるから！ 頼むよ、ね？」

明日奈の気持ちはよく分かるし怒るのは当然だけど、落ち着いてくれなきゃ泣い

ちやうよボク？ 香坂明日奈の顔が憤怒に染まるのを見るのはキツイんだ。



「展望台の下あ？ アタシたちそこに向かつてるの？」

「ワウン？」

「うん。瑠維がいるのは展望台の方だけど」

何とか明日奈を落ち着かせて再び目的地に向かうボク。

良かったね明日奈。通行人が一人もいなくて。

「いや、それ、アタシたちも展望台に行くべきなんじゃ……」

「瑠維がさ、満月をバックに登場したいって言うから……」

「それ本当にアタシの知ってる瑠維ちゃんなの？」

「今から分かるよ。ほら、ここが展望台の下だ」

話しているうちに目的地に着いた。

特にこれといって何も無い場所、それなりに高い崖があるだけだ。この崖の上展望台になっていて、天気がいい日には富士山も見えたりする。ただし、滅多に人が来ないんで最近では持て余し気味とか。

「ここで瑠維ちゃんとかうの？　時間は？」

「早めにスタンバイしているって言っていたから、たぶん——」

——もうすぐ登場するんじゃないの？

そう、ボクが言おうとした瞬間だった。

「今夜は月が綺麗だ。そうは思わないかい？　美しき乙女たちよ」

やけに格好付けたセリフが聞こえてきた。

「ついに現れたか〜」

「ふえ？　な、何？　誰なの？」

「ワオーン！」

いろんな意味で脱力するボク、突然の聞き慣れない声に辺りを見渡す明日奈、そして「随分と香ばしい登場だな！」と展望台に向かって吠えるマルコ。

「ほら、見ろよ明日奈。あれが……黒羽瑠維だ」

覚悟していたけど直視したくねー、とボクがマルコの吠えた展望台に目を向ければ、責任を取らなきゃいけない人物の筆頭が手すりの上に立っていた。

非常に中二的ポーズを取って!!

「我が盟友と因縁の存在に導かれ、今宵はその友の一人と会うため静寂の頂《サイレント・トップ》へと舞い降りた」

やめてー。初っぱなから現実逃避したくなるセリフやめてー。

人がいない展望台のある場所を、静寂の頂《サイレント・トップ》とか無理矢理付けた英語で言うのやめてくれー。

「金銀の月《ダブル・ムーン》の夜こそ、我が最も輝く」

別の意味で輝きすぎて直視が辛いつす。

手すりの上で意味の無いターンするの理解できないっす。
そう、この誰が見ても中二病に目覚めてしまった痛い人こそが――

「さあ、今こそ明かそう我が真名を!!」

無駄に格好良く黒マントをバサツと広げた少女が――

「地獄の獵犬《ヘル・ハウンド》、黒羽である!!」

第13話 地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》(後編)

「地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》、黒羽である!!」

名乗った瞬間、地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》さんの背後が黒炎を撒き散らして爆発した。周囲のことを考えてか、威力は調整したようだ。

「うわー、今日はいつもの以上にテンションが上がっているな」

ボクが「1番信用している友達を紹介したいんだけど……」って話をしてから、この構図での登場を考えていたんだらう。

で、その信用できる友達はというと……

「……………」

完全に思考を停止していた。

バカみたく口を開けっぱなしにしている。このまま口から魂が飛び出るんじゃないのか？ そう思ってしまうぐらいストップモーションになっていた。

現に、足下にいるマルコも明日奈の足を軽く引つ掻いて心配している。

「あー……明日奈？」

「……………ネエ」

「あ、はい。何ででしょうか？」

やっと意識が現実に戻ったかと思えば、ハイライトの消えた——ぶつちやけ仮にも美少女がしたらマズい顔でこつちを見た。

さつきから背筋に冷水を垂らされたかのような寒気が……

「アレ、誰ナノ…………？」

「自称、地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》さんです…………」

「モウ一度聞クワ。アレハダレ？」

「……………中二病を発症した『ヴァルダン』のメインヒロイン、内気な性格だった…………黒羽瑠維さん…………ご本人です」

「フウ……………」

——ガタガタガタ……………！

明日奈の声に感情がまるで乗っていない。

震えが止まらないどころか、むしろ増している。

ボク、知っているんだ。こういう時って、一気に感情が爆発し――

「どおおおおおおおおおおおいいうこおとなのよおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおっつっつ
!!!??"

あ、爆発しちゃったグエツ!?

「誰よ!? あれって一体全体どこの誰なのよ!? アンタはあれが瑠維ちゃんでも言うつもりなの! 完っ全っに別物じゃないのおおおおおおおお!! 地獄の獵犬《ヘル・ハウンド》って何!? あの痛々しい口調は何!? あの意味のないターンは! 怪しき満点のマントは! 両手を交差させたポーズは! 一体何なの!? あの内気だけで優しい瑠維ちゃんはどこにいったのよおおおおおおおおおおおお!!?」

「あ、あずな、ざん! 首、じまつで……」

内気で優しい『ヴァルダン』の黒羽瑠維がどこに行ったのかと言われても、当人の言葉借りるなら地獄の最下層《コキユートス》に向かったとしか……!

ているの? と聞きたくなるような……中二心全開の服だった。

そこに黒のマント・眼帯・金のカラーコンタクトを装備し、露出した左腕には包帯が巻かれていた。

長いグレーの髪が風で揺れている。

ここまで徹底していると純粹に疑問となるのが……

(どうやってここまで来たんだろう?)

瑠維の実家はもう数本ほど電車に乗っていける街だけど、まさかこの格好のまま電車に乗って、この格好のまま歩いてここに来たんじゃないよね?

周囲の視線とか——あ、気にならないか。徹底してるもんね。

で、瑠維の登場で明日奈は落ち着くかというと——

「うわああああああああああああああああんっ! 瑠維ちゃんがあああああああああああああああああん!」

——現実を直視して号泣してしまった。

どうやら救いの手は無く、魔の手が差し伸べられたようだ。

さすが地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》、さすがつすわ。

「何を泣いているんだい？ このハンカチで悲しみの雫《スロウ・ティアーズ》を拭くといい。少女に涙は似合わない」

格好良くハンカチを明日奈に渡す瑠維。

でもな、ボクには分かるぞ。

実は瑠維って、完全に中二病に染まりきっているわけじゃないから、元来の性格も何だかんだ言いつつ残してるわけで……

自分の登場でガチ泣きした明日奈に動揺しまくっている。絶対に。

よく見るとハンカチを渡した手が震えているし、片方だけの目もかなり泳いでいる。しかも、チラッとボクに助けを求めてきた。

それでいいのか地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》？

「あー……瑠維？ ちょっと今日の明日奈は混乱しているみたいだし、また仲良くなる

ための話は後日、入学式の時にでも」

「う、うむ！ どうやら金銀の月《ダブル・ムーン》が雲で隠れてきたようだ。このままでは我が封印された左腕が解放されてしまうかもしれない！ 急いで約束の地《カナン》に戻らねばなるまい。では天の宮殿《ヴァルハラ》で再会しようぞ！ さらばだ！」

そう言つて瑠維は一足早く駅の方向に帰つて行つた——中二病全開の格好で。

着替えを用意している可能性に賭けてみたんだけど、どうやら本当にあの格好でここまで来たらしい。1周回つて尊敬するよ。

帰る後ろ姿が逃げるようだったことは目を瞑ろう。

瑠維が去つた後に残されたのは四つん這いに崩れ落ちた明日奈、そんな明日奈に「ほら、なんだ、元気出せつて」的な感じで肩に前足を乗せるマルコ、意図していなかったとはいえ瑠維を中二病にさせてしまった張本人であるボクだけだった。

どれくらい経つた頃だろう。

明日奈が全く力のない声で聞いてくる。

「ねえ？ 何で瑠維ちゃんは今中二病になっちゃつたの？」

「……何度だつて言うけど、ボクも本気で分からん。最初は楽しい思い出を作らせよう

と遊びに誘ったりしていたんだけど、途中から様子がおかしくなって、しばらく会えない期間が過ぎて再会したら……あぁなっていた」

当初の目的は、瑠維が自分に自信を付けることだったんだ。

そこから家族関係の改善、次にオシヤレを覚えさせると、段階を踏んで「元気でカワイイ瑠維ちゃん化粧計画」を進めるつもりだった。

なのに……最終形態が中二病だ。

ボクも責任取らなくちやと考えるさ。

「……ねぇ？ 約束の地《カナン》って何？」

「瑠維の実家。門限が決められているから『約束』なんだろう」

「……ねぇ？ 天の宮殿《ヴァルハラ》って何？」

「『アマテラス特殊総合学園』のこと。ほら、校舎がデカくて宮殿並にすごいから。後は……高校生活が楽しみで『ヴァルハラ』って言っているのかな？」

「あの眼帯と金色の目は？ 髪と同じだったわよね目の色？」

「誕生日にあげた眼帯とカラコン。あそこまで徹底していたら、もう逝けるところまで逝かせてしまおうって、半分ヤケクソで」

「そう、なんだ」

未だに明日奈は顔を上げない。

あの、そろそろ罪悪感が胸を抉るんで怒るなら怒ってよ。

「何日かしたら原作が始まるのよね？」

「正確には3日後だな。高校の入学式は」

「溜維ちゃんみたいに変わった子、他にもいる？」

「……若干1名、怪しいのが」

実は変な方向に変わったヒロインがもう1人いる。

表向きは良い方向に変わったんだけど、ね。

「……アタシ、高校行くのが怖くなってきた」

「……奇遇だな。ボクもだよ」

——アンタのせいでしょうが。

そんな、帰る直前まで疲れ果てたような声で愚痴を言う明日奈と、ひっそり存在感を消したマルコを伴ってボクは駅に戻っていった。

い、いたたまれねえ。

空気が重えく。

第14話 原作開始

ついに、この日がやって来た。

物語の舞台にもなる『アマテラス特殊総合学園』の入学式当日の朝。

入学式が始まる大分前の時間帯、とある通学路の様子を確認できる場所でボクと明日奈は主人公が起こす最初のイベントに備えていた。

公園の茂みの中で！

「こちらコードネーム“Y”。目標地点を視認できるポイントに潜伏中。“A”、私たちの状況はオールグリーンか？ どうぞ」

「はいはい、こちら“A”。……状況も何もすぐ隣で同じ茂みの中に隠れてるじゃないのよ？ 何なのこの茶番？ どうぞ」

「雰囲気作りだよ。ここで物語通りのイベントが起こるかどうかで、運命を変えられるか・強制力が働くかが分かる」

「……その辺の事情はアタシも興味あるから、この茶番に付き合ってやってんだけどね。あくあ、早く兄貴来ないかなー」

念には念を入れて主人公がいつ来てもいいよう、割と朝早くから茂みの中に潜んでいる。途中で散歩中の犬がこつちにムチャクチャ吠えて、通行人が不審がついていたけど何とかなつた。こつちの心臓はバクバクしたが。

明日奈を協力者にしてから早数年、主人公の思考をイメージしやすいよう明日奈からもたらされた情報と、ボクがゲームで知った知識を元にあらゆる主人公の行動パターンをシミュレーションし、高い正解率を叩きだした。

主人公の邪魔をしようとするボクが1番主人公のことを知っているとか、かなり皮肉が効いているけど……

「くくく、主人公め。まさか自身の義妹がスパイだとは露程にも思っていないだろう。貴様の行動・交友範囲・私生活のアレコレは全部筒抜けだ！」

「悪い顔してるわねー。本来の友理ちゃんは絶対そんな悪者顔しないわよ？　まあ、今更か。兄貴への工作は程々にね」

別にヒロインたちへのフラグを叩き潰したいだけで、亡き者にしたいわけじゃない。

最低限の加減はするさ。

「アタシはアンタがこの10年でどんな暗躍をしたのか心配でならないわ。瑠維ちゃんが泣きたくなるぐらい別人になっていたし……」

3日前の悲劇(?)な出会い、まだ心が痛むか。

いえ、全面的に悪いのボクですけどね!

「それは——来たぞ! オマエの兄貴だ! あっちには凜子も!」

丁度いいタイミングでターゲットが接近!

双眼鏡で件のイベントが起こる場所を観察すれば、ついに『ヴァルダン』の主人公こと香坂拓也こうさかたくやが歩いて来た。

そして道の角になって見えない場所では、「今から楽しみで仕方がない!」という感情が伝わってくる凜子が主人公側に走ってくる。

「あー、分かっているんだけど複雑。兄貴、これから自分にどんなことが待ち構えているのかこれっぽっちも予想してないだろうし」

同じく双眼鏡で自分の兄貴を見た明日奈はため息を吐く。

改めて説明しよう!

これから起こる『ヴァルダン』最初のイベントとは、超がいくつも付くぐらいベタな「あー！ 遅刻遅刻！」から始まる激突↓パンツ丸見えイベントだ。

まあ、相手の少女——明日奈以外で最初に出会うヒロインの凜子は新しい生活に胸を高鳴らせていただけの、遅刻する訳でもないのに通学路を走る困った奴なんだが。

てか、前日にあれだけ「人の迷惑になるから走るな」って言うておいたのに、新たな生活への楽しみで右から左に聞き流していたなこれ……

そして、イベントの始まりが近づく。

普通に歩く主人公と、元気に走ってくる小谷凜子。

セッティングしたわけでもないのに、あと数秒もすれば道の角から出ての激突イベントが発生する。

(どうなる!?)

唾を飲み込んで見守るボクと明日奈。

——そして、

「——っ!」

角から出たところで初めてお互いに相手を認識。驚愕で目が見開き、しかし急に足を止めることもできず、そのまま2人は激突——

「——はあっ!」

「え? うわわわ!」

——せず、凜子は主人公の力をいなしつつ、投げ飛ばす!

主人公は数回回転するも危なげもなく着地した。本人だけが何が起こったのか分かっていない、というか状況の変化についていけない感じだ。

「ごめんね、急いでたから! じゃ、そういうことで!」

「あ、はい」

何事もなかったかのような軽い返事で去っていく凜子と、未だに何とも言えない表情をしながら同じ方向に向かう主人公。

通学路に静けさが戻る。

2人が完全に見えなくなったところで、ボクは、

「いよっしやああああああああああ!!」

満面の笑みでガッツポーズ!

茂みを飛び出して拳を天に突き出す! 近くにいた鳥とか野良猫がビクビクして逃げ出しているけど、そんなのどうでもいい!

「イベントを回避したぞ! 多少なりとも運命力はあるようだけど、その運命を変えることはできたんだ! これでヒロインたちを護れる!」

やったー! 今までの苦労は無駄じゃなかったー!

「……ねえ? どういうことか説明してくれない? 何よ今の達人かってぐらいの見事な投げ技? あれって合気道だっけ?」

「あれこそ10年の成果の1つさ」

小谷凜子は格闘家のキャラだ。

昔から体を動かす遊びは好きだったけど、高校入学が近づくとつれて武術に興味が出

始めていた。実際に才能もあった。

——なので、

「初めて会った頃から少しずつ、絶対に気付かれないよう少しずつ、合気道・護身術を習ってもらうために思考誘導してみました」

「意地でも最初のイベント潰す気だったわね?」

これでもかかってくらい、明日奈は呆れた顔をする。

そんな顔するなよ。中々に骨が折れたんだから。

「そういえば、何年か前から時々ボロボロになつていいる時があつたような? 部屋にもやけに擦り切れたジャージがあつたわよね? あれつて……」

「うん。ボクを練習台にしたよ。いやー、1度骨が折れたこともあつてさ? 凜子にバレないよう心配させないよう、別れるまで平気な振りしたのは懐かしいなあ。……本気で痛かったんだけどね」

「骨が折れたの!?! 初耳よ!」

まさか物理的な意味で骨が折れるとは予想外だったよ。

結果として凜子は合気道・護身術をマスターしたし、ついでにボクの耐久値も地味に

上がったんだけど。

「あれ？ でも秋穂さんから何も聞いていないんだけど……」

——そんな大ケガしたら、アタシにも話すわよね？

そう聞いてくる明日奈にボクは言い慣れた言葉を送る。

「ボクの異能で完治しました」

「はいはい異能異能。すごいわねー」

最近ボクの異能の説明に明日奈もヤケクソ気味になつてきているな。

「あくあ、頭が痛くなる。すでに本来とは違っている子たちのことを考えると、これからの学園生活が怖いわ」

明日奈の脳裏には忍や瑠維、ついでに小夜のこと過ぎているのだろう。

これも全てはオマエの兄貴からヒロインたちを護るためだ。

諦めろとは言わんから、納得してくれ。

「それじゃ、ボクたちもそろそろ学校に——」

「ユウちゃああああああああああああああん!!」

「いこうんむぐつ!?!」

すごい勢いで何かが入り込んできた！

素晴らしい質量と僅かな温もり、包容力。

そして顔に感じるこの柔らかさと弾力は……！

「お、お姉ちゃん!?」

「はい。ユウちゃんのお姉ちゃんですよ」

ヒロインである今世の我が姉だった！

「ふえっ!? えっと、秋穂さん? どうしたんですか一体? ちょっとアタシらは用事

があるので先に学園に行っていてくださいって言いましたよね。というか、入学式の準備もあるんじゃない?」

その通りだ。

お姉ちゃんは生徒会に所属しており、2年生に進学した今は会長補佐を任されている。その関係でボクらより早く学園に向かったはず。

「う〜! だって、だって! 今日からユウちゃんと一緒の高校生活なのに、朝から側にいられなくて、それが寂しくて。昔っからそう! 明日奈ちゃんばかりユウちゃんと

一緒にズルいよ〜!!」

「ア、ソウデスカ」

……何てことだ。

お姉ちゃんは、お姉ちゃんはそんなにボクのことを……！

「お姉ちゃん！」

「ユウちゃん！」

ハシツと抱き合うボクら姉妹。ああ、何て尊いんだ！

「おーい、このやり取り何度も見せられてるアタシの気持ちになれー。さっさと学園に行かないと本当に遅刻するわよー」

空気の読めない奴め！

お姉ちゃんの母性の塊に埋もれる幸福感をボクから奪うか!?

第15話 入学式

というわけで、学園に向かうことになったボクラ。

残念ながらお姉ちゃんは入学式の準備がまだ残っているそうで、泣く泣く一足先に学園へ戻った。

というか、本当に泣きながら戻っていった……

「ユウちゃーん！ 約束通り来てね！ 遅れちゃダメだよ！ お姉ちゃん、いつまでも待つているから〜！」って、大きな声で泣きながら分かるもんだから通行人が何事だ？と驚いていたんだよ。

と言いますかねお姉ちゃん、アナタ気付いていなかったけど小さな子供とその親が「ママ〜あれなに？」「しっ！ 見ちゃいけません！」ってネタでしかあり得ないと思っていたやりとりしてたから、ちよつとでいいので自重してください。

さすがに恥ずかしい……

「アンタのお姉さんさ、アタシが知っている柚木秋穂よりもシスコンな気がするんだけど？ どうしてあんなったのよ？」

「さあ?」

瑠維の時と同じく、実際これは分からない。

気が付いたらお姉ちゃんのボクに対する愛が天元突破していたんだから。

思い当たるふしといえば、5歳の頃の吐血でアホみたいに心配させたことと、姉妹としてのスキンシップを多くしたぐらいで大した問題は無いはず。

「心の声が漏れているわよ。そんなでもって間違はなくそれが原因だから。アンタ小さい頃に『お姉ちゃんと結婚する!』って言ったらしいわね。凜子と出会った頃に言われたって、秋穂さんから聞いたことあるわ」

「ん? 随分懐かしい話だな。あの頃はお姉ちゃんの相手をあまりしてやれなかったこともあって、泣かせちゃってさ。それから毎日のようにボクがどれだけお姉ちゃんを大切に思っているかを嘔き続けたんだ」

「……秋穂さん、最近外国のことなんか調べてなかった?」

「将来ボクと行ってみたいんだってさ。ただ、どうにもマイナーな国みたいで。何で観光地とかある国にしないんだろ?」

「(そりゃ近親結婚や同性結婚が認められてる国だからでしょ)」

「何か言った?」

「何でもないわよ。あ、もう一つ気になったことがあったわ」

まだ気になることがあるのかよ。

「秋穂さん、本来よりも胸の大きさがワンカップ大きくなってないかしら？ 今まで何度も会っていたから気付かなかったんだけど」

現実と二次元は違うとはいえアニメで見た柚木秋穂よりも胸がポリューミーだった気がする、明日奈は首を傾げて聞いてくる。

「何だそんなことか」

その答え、満面の笑顔で答えてあげよう！

「健康管理とバストアップ体操勧めてみました！」

「……………」

——ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウ……

すつごく寂しい音の風が、タイミングを見計らったかのように吹いた。

「…………もう嫌だコイツ」

それ以上喋りたくないとはばかり、学園に向かって歩き出した明日奈。

ボクのことを完全無視だど!?

「ちよつと待て！ オマエにはボクのやった偉大さが分からないのか!? お姉ちゃん
の、あの柚木秋穂の胸がワンカップ増大しているんだ！ 母性の塊がレベルアップした
ことで、お姉ちゃんの天使度がますます上昇したんだぞ！」

「それは『ヴァルダン』のヒロインたちの中で、2番目に胸が小さいアタシに対する挑戦
状かしら？」

「そ〜まで言つてなくない!?!」

公式設定資料でヒロインたちのスリーサイズが載っているんだけど、1位が柚木秋穂
で最下位が波木忍だった。そして、香坂明日奈はワースト2位である。忍が中学生なこ
とを考えると、実質の最下位は明日奈なのだ！

伝えた時にかなり動揺していたんだけど、気にしてたのか。

平均より少し慎ましいもんね……

と、ここで明日奈がアイアンクロー攻撃！

ボクの、というか柚木友理の顔が軋む！

「ギィヤアアアアアアアアアアッ!? ミシミシ鳴ってますよ明日奈さあああああああ
あああんっ!!」

「アンタ、今、忍ちゃんと比較したでしょ？」

「そうだけどおとおおとおおとおおとおおとおお！ 中身はともかく外見は柚木友理なんだから手加減してええええええええええええええええええ!!」

それからすぐに解放してもらったけど、学園に着くまでの間さんざん説教をされ続けた。主にオマエに言われたくないって。

——ワースト3位だもんね。柚木友理、てかボクは。



『アマテラス特殊総合学園』は普通の高校と比べると、バカかってぐらいの敷地面積を持つている。

何せ、その県にいる『Heartギア』に適性を持つ高校生たちを全員受け入れなければならぬんだ。いくら適性を持つ俗に言う“選ばれた子供たち”の人数が全体と比較すれば少ないとはいえ、県中から3学年分の人数が集まるための学園を作ろうと思えば、必然的に十分な広さの校舎と施設が必要になってくるのである。

それぞれの学年のために用意した校舎から始まり、様々な施設を高水準で用意している。中でも特に広いのが第1グラウンドだ。これは異能を十全に使ってもらうため、安全を確保するために敷地内の中央にデーンツ！とある。もう、第1グラウンドだけで普通の高校の敷地面積を占めてるんじゃないかっていうぐらい広い。

野球やサッカーなどの野外で活動する部活のために第2、第3グラウンドもあるけど、相対的に小さく感じてしまう。

そして県中から高校生を集めるので、学生寮も存在する。しかも割と部屋が大きくて、通っている間は模様替えも自由という驚き。

『アマテラス特殊総合学園』はボクが住んでいる地域から電車と徒歩で十分行ける距離なので問題ないが、他の県も含めて『Heartギア』に適性を持つ高校生が通う学園はその県の中央に近い場所、もしくはは交通の便が最もいい場所にある。

なので、住んでいる地域によつては半強制的に学生寮への入居が決められていたりする。それでも家から通いたい！と言う奴は……責任もつて学園まで来い。交通費は自費だ。遅刻を何度もするようなら学生寮ね？と学園の偉い人とOHANASIすることに。

まあ学生寮に入れるのは家から学園に通うまでの時間が一定以上の人限定だし、半強制的に学生寮に入ることになった高校生は入居費が免除されるので、一概に善し悪しは

言えないかな？

余談だが、敷地が広くて施設も充実している『アマテラス特殊総合学園』だけど、運営費の一部に国の税金が使われているので、普通の高校と卒業までに掛かる費用はそれほど変わらない。

閑話休題。

そんな『アマテラス特殊総合学園』に到着したボクと明日奈は、案内に従ってこれまた大きな講堂の中へ足を踏み入れた。

講堂の中は全学年の生徒たちでいっぱいになっている。

「何だかんだで入るの最後の方になったな」

「アンタが忍ちゃんにバカな頼みをするからでしょうが……！」

実は今この学園には忍&マルコ——と、連れてきてもらったアルカ——がいたりする。もちろん職員に見つからないよう隠れてだけど。

忍とマルコにはとある重要なミッションを前日に頼み込んだ。頼まれた忍はボクに頼られたのが随分と嬉しそうだったけど。

……あとで美味しいケーキを食べさせよう。

そして、忍に状況を確認しようとしてとコソソリ会いにしようとしたら、明日奈に不審かられて白状させられたのだ——すごく痛いチョップ付きで。

「いいじゃん。そのおかげでオマエの兄貴があのとヒロインの誰とも会わずに、最初の選択肢フラグを折れたんだから」

18禁ゲームに限らずゲームなら形は違えど、ほぼ確実にある選択肢。

『ヴァルダン』も主人公の行動や、ヒロインとのフラグ建設に必要な選択肢。

その最初の1つを潰せたのは大きい。

——しっかしなあ……

「ヒロイン全員と会いかけたってどういうことだよ?」

「アタシも聞けるものなら聞きたい」

最初の選択肢は主人公が広すぎる学園で迷ってしまい、たまたま見かけた1人であるヒロインの誰かに道を聞くというものだった。

例えば『さつきぶつかった子じゃないか?』という選択肢を選べば凜子と微妙な雰囲気になりながらも一緒に講堂に向かうし、『綺麗で長い黒髪の先輩らしき人』を選べばお姉ちゃんに途中まで案内してもらおう、といった感じだ。

—なので、

「ヒロインの誰かと会いそうになるたびに、忍によって放たれた凶暴な野良犬（という設定）のマルコをけしかけたボクは褒められるべきなんだ」

「兄貴が犬恐怖症になりかける程けしかけた黒幕は褒められないわ」

だつて仕方がないだろ！

ボクも自分の異能で、ある程度の状況を入手してるから知っているけど、最初にお姉ちゃんに声掛けしようとしたからマルコをG.O.させ、その次に小夜の元へ向かおうとしたからマルコがG.O.して、3人目は凜子だったからマルコをくつていうの、学校で会える明日奈以外のヒロイン全員分繰り返したんだ！

最後の瑠維の時なんて、マルコが現れた瞬間に「ああ、こうなるって知ってたよ」と悟った顔をしてたらしいぞ？

ざまあないな！

「さつき講堂に入る時に見かけた兄貴が、某有名ボクシングマンガの主人公みたいに燃え尽きて座っていたんだけど……」

「ざまあないな！」

スパーンツ！と頭を叩かれた。痛いっす。

「で、友理のニヤニヤが気持ち悪い件に関して……」

「おい、気持ち悪いとは柚木友理（原作）に失礼な」

「理由は、ヒロイン全員がこの講堂に集まったからかしら？」

「無視かよ。……まあ、正解だけど」

原作の忍が入学式の時にどこにいたのかは知らないが、今の忍はマルコとアルカの2人＋1匹でどこから入学式——というか、ボクを見ている。

忍は「アナタの晴れ姿をこの目で見たい」と言つて。

そして、なぜか学園まで忍に付いてきてしまったアルカは「友理が言う運命の日に揃う少女たち、『Heartギア』の所持者、私も見たい」と滅多に言わない我が儘&長文でお願いされて、だ。

マルコは……ただの付き添いだらう。もしくは暇つぶし。

ちなみに、ヒロインたちのいる場所は全て把握している。

隣に座る主人公の義妹で転生者、香坂明日奈。

離れた位置で前後の席に座って談笑している小谷凜子、柊小夜。

天井の隙間からジツとボクを見つめる波木忍。なみきしのぶ

ニヒルな笑みを浮かべて周りから引かれている黒羽瑠維。くろばるい

ボクに気付いて軽く手を振る鬼島めぐみ。きしま

同じくボクを見つけて会釈する高森美江。たかもりみえ

非つ常々に、熱い視線を向けてくる聖華院マヤ。せいかいん

講堂の舞台袖で待機しているお姉ちゃん、柚木秋穂。ゆずきあきほ

そして――

「新入生の皆さん、初めまして」

舞台の中央で挨拶する忍と同じサブヒロイン、

「この学園の生徒会長に就任しました、3年生の西園寺八千代です」さいおんじやちよ

彼女はボクたち新入生が座る席を見渡して微笑む。

「長い挨拶はあとにして、まず新入生の皆さんに送る言葉を1つ」

その言葉はボクらの耳によく響いた。

「ようこそ！ 『アマテラス特殊総合学園』へ！」

エロゲ『ヴァルキリーダンス』2つの月と英傑の乙女たち」。

その物語が、本格的に始まった。

第16話 顔合わせ（前編）

【side. 明日奈】

アタシは今、これでもかってぐらいの頭痛の種に悩まされている。

「フシヤアアアアアアアアアアアアア!!」

「え、あの……」

「フウー……!!」

主に友理パカのせいだ。

「うおっ!! あの子、メツチャ威嚇してるぞ」

「あの男子、何かやったのかなあ?」

「オレには毛が逆立ってる猫の幻影が見える」

野次馬（モブキャラ）も騒いでいるし、

「友理さんの敵はわたくしの敵です……！」

「何と、この場で神々の黄昏《ラグナロク》でも起こそうと言うのか永遠たる同胞《エターナルシスター》よ!! ……まあ、一旦落ち着こう友理?」
「ユユっち、明日奈の兄貴さんと確執あつたっけ?」

ヒロインたちも困惑している。

1年A組の教室内は混沌としていた。

それもこれも兄貴と友理、初の対面が切っ掛け。

「何でこうなるんだか……」

つい少し前まで騒がしくも和やかな雰囲気だったのに。

↳数十分前↳

【side. 友理】

西園寺八千代の挨拶から始まった入学式も無事に終わり、ボクと明日奈……そして、この10年で出会ったヒロインたちと教室に向かっていた。

「おー！ みんなユユっちと友達なんだ!？」

「知らない間に何人も……友理って顔が広いのね」

いわゆる幼なじみ枠に入った凜子と小夜は純粹に驚いている。

まあ彼女たちは住んでいる場所が遠いから、紹介したとしても滅多に会えないし……
変わりすぎた人もいるからね！

「しかし、友理の友人たちが皆全て同じクラスとは……何という運命《デステイニー》！
神は我らに何かを求めているのではないだろうか!？」

ちよつとドツキリするぐらい的を得たことを言う瑠維。

制服は普通なんだけど、眼帯・カラコン・包帯という三種の神器はきつちり装備している。ついでにキレッキレの意味の無いターンもしている。

そして、そんな瑠維を見た明日奈はまた泣きそうになる！

「す、すごい個性的な友達もいるのねー。さすが友理、私なんかじゃ想像の斜め上の行動をする友理を予測できそうにないや」

アハハハ、と乾いた笑いをして場を和ませようとする美江。

高森美江は『ヴァルダン』のヒロインたちの中でたまたま主人公と隣の席同士だったことで仲良くなった少女だが、その自然体な言動で癒やされるファンも大勢いた。尖った部分の無い、正統派ヒロインのポジションなのだ。

若草色の髪を首の辺りで結んでいる姿が最高です。

「ふふ、でもいいじゃないか。私はそんな友理とだから友人になったんだ」

美江とは違って、瑠維の性格を純粹に楽しんでるめぐみ。

鬼島めぐみは高校生とは思えないぐらい凛々しく整った顔立ちの少女であり、『ヴァルダン』の戦闘パートで活躍数が一番多いヒロインでもある。

燃えるような赤髪が凛々しさを際立たせる。

原作だとクラスの副委員長になったはずだけど、今回はどうだろう？

と、ここまでは割と原作とも大きな違いはなく普通だ。

瑠維が窓からさした光に「くっ、浄化の光《カタルシス・ライト》が!」と楽しそうに中二つてるのが気になるが、普通と言ったら普通なのだ。

——問題は、瑠維並みに原作とキャラが違うヒロインが1人いること。

「さすが友理さんです! ご友人の皆様方は性格も違い、個性的な人もいるというのに友理さんを中心に纏まっています!」

このやけにボクを持ち上げる金髪の育ちがよさそうなハーフのお嬢様こそが、瑠維と同じく原作乖離が激しいヒロインであるマヤだ。

『ヴァルダン』のヒロインの中で、傲慢なお嬢様キャラである聖華院マヤ。

その他のヒロインと比べても初期の好感度がブツギリで低いので、メインヒロインの中では1番攻略が難しいヒロインだったはず、なのだが……

「同じクラスになれたのも何かの縁——いえ、そちらの黒羽さんが言うように運命というものなのでしょう。ワタクシと友理さんを結ぶ、ね」

そんな後半のセリフが幸せいっぱいの表情と共に、歩きながら器用にボクへしなだれ掛かるマヤ。

やめて、周囲の視線が痛いです。

特に明日奈からの「どおいうことか説明しろおおおおお!!」的な鬼の形相と視線が怖くて堪らない。

ボクがやったのは、マヤに訪れる予定だった残酷な出来事を未然に防いだだけなんだ！　そこから至って普通の友人関係に落ち着いたはずなんだ！　何で百合な香りがする美人になつたのか、瑠維と同じく意味不明なんだよ!!

この際なので、肩にスリスリするマヤへ問いかける。

「なあ、マヤ？　ボクたち……友達だよね？」

「はい！　今はお友達の関係ですね！　でも、ゆくゆくは……」

ゆくゆくは……何!?　どうなるの!?　ボクってマヤにどうされちやうの!?　「一緒に堕ちましょう」とか迫られないよね？　ね!?　気付いたらあられもない姿でベッドに潜り込んでいる展開とか未来永劫来ないよね!?

前世は男だから、本当にそんなことになつたらボク自身どうなつちやうか想像つかないんだよ！

「えつと……聖華院さんだっけ？」

「あら？　どうかなさいました？」

と、ここで明日奈がマヤに話かける。
どこか探るような、慎重な言い方で。

「アタシも友理からは名前ぐらいしか聞いたことなかったんだけど、もしかして、いいところのお嬢様なの？」

「ええ。聖華院家は由緒正しい家柄で、兄が後継者となります。……そのおかげで、わたしは存分に友理さんと添い遂げ——」

「ゲフンゲフン！　そ、そんな家なら習い事とかもやってるのかしら!?　こう、如何にもなのを!？」

「もちろんです！　幼い頃からずっとピアノを習っております、コンクールで優勝したことも何度だつてあるのですから！」

「——っ!？」

明日奈は驚愕で表情が固まった。

気持ちは分かるけどね。原作を知っていれば、聖華院マヤがピアノを今も続けているというのが、どれ程の衝撃か。

「思い出したわ。確か何かの雑誌でも出ていたわよね？　コンクールに優勝した時の写

真で、将来を期待されたピアノニストって……」

「おー！ 有名人だったんだ！」

「何と！ 鎮魂歌《レクイエム》もピアノでできるか!？」

「そんな人と同じクラスだなんて、家族に自慢できちゃうなー」

「聖華院さんがピアノを弾くとすると、絵になるだろうね……」

「……実際、マヤの演奏はプロと遜色ないよ」

「やだ！ 友理さんったら、もうもうもう〜！」

みんなからの興味よりもボクからの褒め言葉の方が嬉しいのか、頬に両手を当てて
「イヤンイヤン」と恥ずかしがるマヤ。

その隙を見逃さず、明日奈がコッソリと近づいてきた。

「マヤちゃん、現役のピアノニストなんだ……」

「毎年コンクールで1番ばかり取る腕前だ。天才の類いだな」

「ピアノが、弾けるのね……」

「……うん、弾けるよ。とつても綺麗な指をしている」

「……ありがとう。アンタ、すごいよ」

「……ヒロインが悲しむことなんか、神が許してもボクが許さん」

いつもボクの暗躍に対してブツブツ文句ばかり言う明日奈は、この時ばかりはしんみ

りとしながらも嬉しそうな顔をしていた。

他人がボクらの会話を聞いても何のことかサツパリだろう。

でも原作で聖華院マヤに起こった悲劇を知る者からすれば、どんなに性格や趣向が変わろうとも、今のマヤを見て嬉しく思うはずだ。

「はあ、これで瑠維ちゃんが中二病を患っていないければ、暗躍も悪くないわねって素直に友理を褒められるんだけど……」

「上げてから落とすなよ」

いい話で終わろうとしたのに、なぜそこで瑠維の話題を出す？

「フフフ！ 我的登場シーンで壮大な曲を聖華院殿が漆黒の鍵盤箱《グランド・ピアノ》で演奏すれば、さぞオーディエンスも盛り上がるだろう！」

「あの、わたくしの楽器を変な呼び方しないでくれませんか？」

.....

(話題に出されても文句言えねえ……)

やっぱこの2人に関しては、責任の取り方考えないといけないかも。

瑠維はまだしも、マヤはどうするべきか……と悩んでいたら、これから1年間みんなと一緒に勉学をする教室に着いた。

事前に明日奈から聞いた。

兄貴——香坂拓也なら先に教室へ向かったと。

つまり、この扉の向こうに『ヴァルダン』の主人公がいるのだ！

今日からの3年間ボクの前に立ち塞がる因縁の相手が！

「ふう、この扉を開ければ——」

「ユユっち何してるのさ？ 早く入ろうよ！」

扉を前にして決意を新たにしようとしたら、空気を読めない凜子が教室の扉を力強く開けてしまった。

早いよ凜子！

そんなんだから、小学生の頃に一時期“KY”って言われたんだぞ！

そして、扉の先には——

「……香坂……拓也……！」

「ゲツ!? 兄貴……!」

「よう明日奈、遅かったな。あれ? 隣の子ってもしかして……」

——憎き『ヴァルダン』の主人公、香坂拓也が立っていた!

第17話 顔合わせ（後編）

こうさかたくや
香坂拓也はいい奴だ。

それはスパイである明日奈からの情報でも分かっていた。

特別イケメンでもなく、ギャルゲの主人公のように前髪で表情が見えないわけでもない。ちよっと生意気そうに見えるだけの普通の男子。

優しいけれど厳しいところは厳しく、相手との距離感を図るのが上手い。それを意識せずにできるから『ヴァルダン』の主人公なのだろう。

原作ではお姉ちゃんや小夜などと普通の過程を経て恋人になるだけでなく、瑠維やめぐみのように悩みを抱えている子に協力したし、忍やマヤのように悲劇の人生を歩んだ子に諦めず接し続けて救ったりもした。

その過程を一番知っているのは他でもない……ボクだ。

前世の、『ヴァルダン』をプレイし続けたボク自身だ。

明日奈から聞いたアニメでは切っても切り離せない“放送時間&話数の制限”でカットされた主人公——香坂拓也と各ヒロインの細かい会話や心情まで脳にインプッ

トしている。前世の名前すら思い出すのに間が空くが、『ヴァルダン』関係はすぐ思い出せる。

「兄貴？　じゃあこの人が明日奈のお兄さんなのね」

「おー！　ついにご対面ってことか！　明日奈とは似てないなー！」

「義理のお兄さんだし、当たり前でしょ凜子……」

そうだ、思い出せてしまうんだ。

「ようやくオマエの友達に会えたな明日奈。もう10年近く、1番初めは終さんだったか？　その子と友達になってから1度もオレに会わせてくれなかったよな、1度も！　まさか、高校生になるまで会わせてもらえないとか、さすがに傷つくぞ!?　血は繋がっていないくても家族なんだからさあ、義妹の友達に兄として挨拶ぐらいさせろって！」

「悪かったわよ。別に兄貴のことは家族として嫌っていないけど、異性の存在としては幼少時から疑っていただけ」

「いろいろ含みがあるな……疑うって、何をだよ?」

「紹介した友達に兄貴が手え出さないかを」

「出さねえよ!! アホかオマエ!! 変に疑われるようなこと言うな! 今のオレが言ったら百歩譲って疑われても仕方ないけど、最初に言ったの6つの時だぞ!! しかも邪な感情ゼロで! 純粋さ100%で!」

「それでも将来的に確率が高い以上は……」

「あれ!?! オレ、明日奈にそんな昔から信用されていなかったの!?!」

コイツが、どれだけヒロインと「ピーー!!」して「バキューンツ!!」で「~~××~~」なことをしてきたのかを……!」

「まあ明日奈も義理のお兄さんができてそれほど時間が経っていなかったんだし、女性には秘密の1つぐらいあった方が素敵に見えるって本にも書いてあったわ。あんまり明日奈を強く責めないであげてお兄さん」

「う、そんなことは、分かっているさオレだって」

「それじゃあ改めて自己紹介ね。私は終小夜。明日奈の最初の友達よ。それで、こつちの元氣な子が——」

「小谷凜子って言いまーす! よろしくね明日奈の兄貴さん!」

「こつちこそよろしく。あ、それと、明日奈の兄貴って言っても同級生なんだし同じクラ

スでもあるんだから、もつと普通でいいぞ?」

「そう? なら明日奈と同じ名字だし、拓也さんって呼ぶことにするわね」

「じゃあ私も兄貴さんって呼ぶことにする!」

「ほとんど変わってなくね?」

だから……

「それで、そつちの子たちだけど……もしかして、オレンジの髪の子が明日奈がよく言っていた『あのバカ』の柚木友理さんか?」

「まあね。で、後ろにいろのが友理の友達で今日から同じクラスになる数日前会った瑠維ちゃんに、初対面の高森美江、鬼島めぐみ、聖華院マヤさんたち」

「よろしく。にしても、ようやく会えたな柚木さんに。明日奈との会話で1番多く話題に上がっていてオレも気になって——あれ? おい明日奈、さつきから柚木さんが俯いたままピクリともしないんだけど……」

「は? ちよつと、友理? どうかした? アンタまさか……」

だからボクは……!!

「フシヤアアアアアアアアアアアア!!」

「「「「「!!」」」」」

これでもかかってぐらい威嚇した!

そう、猫のように!

「え、あの……」

「フウー……!!」

自分でもバカやってるのは自覚しているけど、心の奥底から湧き上がる激情を抑えられない。香坂拓也と直接対面してそれが噴火したのだ!

「ゆ、友理? どうしたんだ?」

「友理!? 何でそんな友達のお兄さんを威嚇しているの!?!」

めぐみと美江が肩を揺すってくるけど効果なし。

他のみんなも、オロオロしてどうすればいいのかわからなかったり、宥めてきたり、一緒に敵意を向けたり、秘孔を突くような構えをする明日奈がいた――

「落ち着きなさいバカ」

「フニャニャン!?!」

まさかの明日奈による脇腹への秘孔突き!

某マンガみたく内側から破裂はしないけどビックリする。

「明日奈、ボクが、あべし!？」とか言ったらどう責任取るんだよ!？」

仮にも美少女が世紀末蛮族の断末魔みたいな声を上げてみる。放送事故レベルの大問題に発展するぞ?」

「頭痛の種が口答えするんじゃない」

ぐうの音も出ねえ……!」

クラス中が展開の早さと場の混沌さに動けなくなる中で、香坂拓也はボクの機嫌を伺うように聞いてくる。

「あの、柚木さんとオレって初対面だよな? 何か警戒されることでもしたのか? 怒

らせたんなら素直に謝るんだけど……」

「……ボクとオマエは分かり合えない運命だ」

「そこまで言うか!？」

「無駄よ兄貴。コイツに常識は通用しないわ。主に兄貴限定で」

「オレが何をしたっていうんだ!？」

原作の未来で約1年以内に複数の女に手を出したんだよ……!」

そんなこと絶対にさせないために、この学園に来たんだがな!!

「……香坂拓也」

「はい？ な、何でしょ？」

ボクは煮えたぎる思いを抑えて宣言する。

「オマエが善人なのは理解してる。普通にいい奴ということも」

「そ、そうか。面と言われると照れるなあ——」

「だが、ボクはオマエが嫌いだ。未来永劫の天敵と言っつていい」

「まさかの全否定!？」

「香坂拓也、オマエは明日奈の義兄であつて、ボクにはそれ以上でもそれ以下でもない。

友人関係は無理だが同級生としては仲良くしようじゃないか」

「お、おう」

「だが、ボクは全ての分野でオマエにだけは負けたくない」

そう、この男にだけは負けたくない。

勉強も、運動も、そして……異能バトルでも！

「今日のオリエンテーション、新入生は1クラスで1試合だけ戦闘系の異能を持つ者同士
の模擬戦を提案されることになる」

「え、そうなのか？」

初耳だと言う香坂拓也に、ボクは指を突きつけた。

「その模擬戦、ボクと戦ってほしい。いや、戦え！」

「まさかの宣戦布告だった!？」

教室中がざわめく中で、まっすぐ香坂拓也を睨む。

「どちらの異能が強いか、白黒ハッキリ付けようぜ……!」

前世の口調に戻ったボクは、それだけ言うと指定された自分の席についた。

第18話 オリエンテーション

「皆さん初めまして。今日から1年間このクラスの担任をすることになった野々上望見のうえのぞみです。異能与勉学、両方をがんばりましょう」

ボクの香坂拓也に対する宣戦布告からしばらく、クラスが全員埋まったところでやって来た野々上先生。

最近流行りの合法ロリ先生ではなく至って普通の先生だが、『ヴァルダン』でも立ち絵がある準レギュラーだ。

そんな野々上先生は当たり前障りのない挨拶をするが……

——ザワザワ

クラスメイトのほとんどが近くの人と話して聞いていなかった。

原因はボクと香坂拓也。

クラス中の注目を集めた宣戦布告は予想以上に話題となっていた。

聞こえてくる話では「知らないところで因縁があつた」「親友である義妹から嫌いになる話を聞いていた」「前世は勇者と魔王だつた」などと盛り上がっている。

そんな当人である香坂拓也はいたたまれないと、机に顔を伏していた。

ボク？ ゲン○ウポーズで模擬戦のシミュレーションをしているよ。近くの席の明日奈が呆れた表情をしていたけど気にしない。

「はいはい静かに！ これじゃ何も話せませんよ！」

——ザワザワ

「ちよつと、先生の話を聞きましたようね。いい加減にしないと泣きますよ？」

それでもザワつきが収まらない教室。

これは野々上先生のアレが出るな。

明日奈を見れば、すでに耳を手で塞いでいる。ボクもゲ○ドウポーズをやめて持参した耳栓を装着した。

そして、

——ザワザワ

「聞けつつつてんだらうが!!」

案の定、野々上先生が爆発した。

ドンツ!と教壇にバカデカいペンが叩きつけられ、ザワついていた教室が一瞬で静ま
りかえる。

野々上先生は血管を浮き上がらせる程お怒りだった。

「いいかオメエら。私にはオマエらの生活態度に対して単位を付ける義務がある。あん
まり私の話を聞かねえと……単位やんねえかな? 後々推薦とかで響く単位は私の
匙加減次第だつてこと、よおく覚えとけよ?」

先生にあるまじき脅迫だった。が、クラスの誰も文句を言わない。野々上先生の怒り
オーラがそれぐらい凄まじかったから。

(実際に見ると迫力が違うな)

野々上望見は普段は先生らしい先生だが、怒るとチンピラみたいになるキャラだつ
た。てか、担当のクラス——つまりボクのいるクラスがザワつきやすかつたりするん
で、ゲームの立ち絵も怒っている姿の方が多かつた気もする。

そんな野々上望見の『Heartギア』によって発現した異能は『デカペン』。

鉛筆やボールペンなどのペン類を巨大化させるといふもので、実用性はないためにもつぱら怒った時の威圧用である。

学園の教師は全員『Heartギア』に選ばれた人たちで、野々上先生のような普通の担任はどんな異能でもなれるが、体育系の授業を担当する先生や一部警備員を兼任している先生などは戦闘系の異能を使うことが条件だったりする。

万一の時の抑止力ってやつだな。中には世界で活躍できそうなくらい強い人も紛れ込んでいるって話だし。

余談だが、野々上先生は独身で彼氏募集中だったりする。

あの怒り方が婚活の妨害をしているとなぜ気付かないのだろうか？

落ち着きを取り戻した野々上先生はクラスを見渡して言う。

「さて、改めて皆さん初めまして。担任の野々上望見です。当たり前の話ですがこの学園にいる人は、ほぼ全員『Heartギア』によって選ばれた人たちです。当学園では普通の高校生のように勉学を教えるだけでなく、『Heartギア』によって目覚めた異能をきちんと扱えるよう、活用できるようにするための授業もあります」

大体の人が異能を小学生の時に発現しているが、その異能は千差万別。ボクのように複数の要素が1つになった異能もあれば、戦闘向きの異能、特定の職業から重宝される異能、実用性がほとんどない異能と様々だ。

異能を試すことができる施設はあるが数も少なく、異能の種類や生活環境によってはまともに自分の異能を試したことがない人もいる。そういう人たちに異能の正しい使い方を教え、モノによつては将来に活かせるようするのが県に1校だけある『○○特殊総合学園』の系列に課せられた義務。

それが——表向きの理由だった。

（実際は1世紀単位での壮大な計画なんだけど、学園の中で『Heartギア』の真実を知っているのはどれ程なのやら……）

ボクはとある理由から、裏向きの——本当の理由を知っている。

ゲームの『ヴァルダン』でも最後まで語られることのなかったソレは、ボクの生きている間に本格的に動き出すことになるはずだ。

どうやら計画も最終段階に入っているみたいだからな。

下手をすれば、学園に在籍している間に事が進む確率も高い。

（ローファンタジーの世界だと思つたら、SFが隠れて根を這っていましたとか……段階を踏まなきゃ誰も信じないよな——）

そういう意味じゃ、当時『Heartギア』の開発に携わっていた連中は英断だった

かもしれない。

いきなり段階を飛ばしていたら遅かれ早かれ失敗しただろう。

「——と、主な連絡事項はこのぐらいですね」

思考にふけていたら、野々上先生の話がいつの間にか終わっていた。

事前に配られていたプリントを家に帰ったらよく読まないと！ じゃなきや、また野々上先生の怒りが爆発する。ボク個人を標的に！

「このあとの予定ですが、毎年の恒例行事となっている『アマテラス特殊総合学園』に入学した新入生同士の異能を使った模擬戦を1クラスに対して1試合、立候補者の中からしてもらおうと思っています。もちろん、強制ではありませんので立候補する人が2人以上いなければそれでお終いとなります。模擬戦をしたって人はいますか？」

先生がそう言った瞬間だった。

バツ！と一齐にクラス中の視線がボクと香坂拓也に集まる。

「え？　えつと、皆さん……？」

事情を知らない先生からしたら、まるで最初からボクと香坂拓也の2人が戦うことが決められていたかのような反応で困惑しているだろう。

（みんなの注目を集めてからの宣戦布告は効果あったな……）

その前の猫みみたいな威嚇は感情の暴走が原因なだけだね。

事態を飲み込めない野々上先生によく見えるよう手を上げる。

「野々上先生、ボクが立候補します」

「は、はい。柚木さんですね。他に立候補したい人は……」

他の立候補者？ ああ、あの凜子でさえも空気を読んでジツとこちらを見つめるだけに留めていられるんだ。クラス中がもう一人に期待しているのだ。

「……香坂拓也、何をしている？ 早く手を上げろ」

「あゝ……勘弁してくれよ」

ボクが模擬戦を望んでいる香坂拓也は、顔を手で覆って恥ずかしがっていた。

ゲームでは一番最初に手を上げるくらいには模擬戦に興味があつたはずなのに、情けない。

そう仕向けたのはボクだが、これにも理由はある。

選択肢による対戦相手の決定だ。

『ヴァルダン』で2回目の選択肢は、先生判断で最初に手を上げた香坂拓也が他の立候補者の中から戦いたい人を選ぶというもの。

モブキャラを選べば苦労せずに戦闘パートを終わらせることができるし、各ヒロインを選べば戦闘パートが大変なかわりに、模擬戦で勝利するとそのヒロインの好感度が上がるシステムだった。

だからフラグを潰したんだけどね！

威嚇行動を取らなくてもみんなの注目を集めて、この状況に持つて行く予定だったんだ。自分でも引くぐらい上手くいったけど。

が、どうやら香坂拓也は注目されすぎて戦いたくないよう。仕方ない。今こそボクと明日奈の“絆の力”を見せる時だ。

「野々上先生、ちよつとだけ失礼」

1度断りを入れてから香坂拓也の座る机に近づく。

「ゆ、柚木さん？ あの、オレはですね……」

「そう警戒するな……ちよつと耳を貸せ」

ボクは香坂拓也をやる気にさせる魔法の言葉を耳元で囁いてやった。

——ゴニョ、ゴニョ、ゴニョ

瞬間、

「先生！ オレ、香坂拓也は模擬戦に立候補させていただきます!!」

ガッタン！と、机が倒れそうになる程の勢いで立ち上がりビシツ！と綺麗に手を上げる香坂拓也。

この場面だけを見ると、凄くマジメな生徒に見えなくもない。

……顔が真つ青でガクブルしていなければ、だけど。

「ええ……えつと香坂拓也くんも立候補と。ほ、他に異能で模擬戦を試みたいって人はいませんかー？」

野々上先生が再度クラスの人たちに確認を取るが、ボクと香坂拓也以外に手を上げる人は誰もいなかった。

「しかし、そうですね。この2人ですか……」

「何か問題でもあるんですか先生？」

めぐみ不思議そうに尋ねると、野々上先生は困った表情でそれに答える。

「香坂くんと柚木さんの異能、職員室でも話題になったんですよ。どっちもすごく珍しい異能だって。だから勝負の行方が……」

——やっぱ、ボクと主人公の異能って世界的にも珍しいんだなあ……

再びザワつきだしたクラスメイトと、驚いた表情でこちらを見る香坂拓也を無視して思考を巡らす。ある意味チートを使ったとも取れるボクの異能と違い、香坂拓也の異能は全く手を加えていない状態での珍しさだ。

ゲームでは香坂拓也一人だけ、異能の詳細が世間に広まるほど接触しようとする個人や企業も増えていったが、この世界ではそこにボクも含まれる可能性が高い。諸事情でそういった連中に注意している身としては、世間に一気に広まる可能性のある入学初日の模擬戦は控えるべきなのかもしれない。

だが、だからと言って模擬戦無しとはいかないんだ。

選択肢を潰すのと同時に香坂拓也に対抗するための、ヒロインたちを護れることを証明するための、主人公との勝負なんだ。

「だったら、尚更戦ってみたいです。……そうだよな?」

「お、おう!　むしろやる気が出るってもんだ!」

その後「すごく珍しい異能」というワードによる効果か、クラスの全員が対戦を望んだ。なぜか野々上先生が肩を落としているのに疑問を持つクラスメイトもいたが、大した理由でないのをボクはゲーム知識で知っている。

困るものね?

勝敗が予想しにくい戦いって。

賭けに参加する身としては。

残りの連絡事項を伝えた野々上先生は1度職員室に戻り、対戦カードが決まった1年A組は第1グラウンドに集合となった。

そして、さあ移動だ！という時に明日奈に捕まる。

「ねえ、ちよつと聞きたいんだけど？」

「どうかしたか？」

「どうやって模擬戦に消極的になってた兄貴をやる気にさせたの？」

「何だそんなことか」

親指を立て、ドヤ顔で言う。

「『模擬戦しないと、ベッドの下に隠してあるお宝本の具体的なジャンルとタイトルを言いふらすぞ？』って脅しただけさ」

「悪魔かつ!!」

第19話 模擬戦直前

「side. 明日奈」

「友理対兄貴かあ……どっちが勝つのかしら？」

「う………！ ユウちゃんケガしなきゃいいけど」

アタシを含めたヒロインたちと大勢の新生は、第1グラウンドの観客席で各クラス1試合行われる異能を使った模擬戦の開始を待っていた。

教室から移動したアタシたちの目に飛び込んで来たのは、あまりにも広すぎる『アマテラス特殊総合学園』が誇る第1グラウンド。

学園案内のパンフレットで広さを知ってはいたけど、実際に見ると端から端まで移動するだけで時間が掛かりそうだと思ってしまう。

これが基本、異能を十全に扱ってもらうためだけにあると言うんだから驚きだわ。他は文化祭の出し物のために使うぐらいだって話だし。

第1グラウンドの端にはスタジアムにあるような観客席が半円状に広がっていて、全

校生徒を集めてもまだ余裕がある程の広さを誇っていた。

違いがあるとすれば正面に強化ガラスが張られていることと、観客席自体が地中に埋まっている基礎も含めて最新の技術を使って丈夫に設計されていることね。パンフレットの説明書きでも『戦闘機による爆撃程度なら余裕で耐えられます』って書いてあった。

観客席には新入生だけでなく、2年、3年の先輩たちも「今年の後輩はどんなのかな」と見に来ているし、教員や一部のお偉いさんっぽい人たちまでアタシたち生徒が座る席とは別の席で談笑しながら待っていた。

ほぼ全ての学園関係者がいるだけあって、まだ模擬戦が始まっていないのにスポーツの公式試合前のような静かな興奮が辺りを包んでいる。

というか、本当に野球かサッカーの観戦でもしに来た気分だわ。

購買部の人「今だけの特別価格だよ！」って言いながら観客席を回って、ポップコーンや炭酸水を買っているし。よく見れば先輩の学生たちは食券を賭け金代わりにトトカルチヨ（勝敗を予想するギャンブルの一種）をしているようだった。

さつき見かけた野々上先生に「アレって学園的なの？」と聞いたら、

「学園が創設した頃からあるものだし、あくまで賭ける対象も食券限定だから許されているらしいのよ。生徒会の人やり過ぎていないか見張っているから、常識の範囲でな

らアナタたちもやったら？」

そんな風に軽く返されてしまったわ。

学園公認のギャンブルって……それでいいのかしら『ヴァルダン』の世界？

ちなみに、アタシは見逃さなかった。

野々上先生の手に食券が何枚か握られているのを。先生方も参加するのね、と呆れてしまう。

で、本来そのトトカルチョを見張る役目の1人が、新入生の席でさつきからソワソワしていて落ち着かない。

「秋穂さん、友理なら多分大丈夫ですって」

「学園のシステムは信用しているけど、それでも心配なものは心配なんだよ明日奈ちゃんああああああああああん!!」

涙目で肩を揺すってくる秋穂さんが少しだけ鬱陶しい。

重度のシスコンなのは分かっていたけど、時と場合を考えて欲しいわ。

(そんなんだから体よく追い出されたんですよ……)

最初は生徒会の人たちと見張っていたらしいんだけど、あんまりにも友理を心配しす

ぎて邪魔になっていたようで、生徒会長であるサブヒロインの八千代さんから「新入生の観客席で見張っていないさい」と追い出されていた。

八千代さん、いつも笑顔だからこそ怒ると怖いキャラなのを再認識したわ。アニメでは背後に刀を担いだ鬼のスタ○ドが控えていたし。

秋穂さんが泣き顔だからか、他のヒロインたちも心配している。

「友理、大丈夫かなあ？」

「何とも言えないな。私は友理の異能を全く知らないんだ」

「私も複合系の異能と言うことぐらいしか友理から聞かされていないの。どうも自分の異能をギリギリまで隠しておきたいらしくて……」

美江ちゃん、めぐみちゃん、小夜といった面々は秋穂さん程ではないけど友理を心配している。

逆にそれ以外の子は全く心配している様子じゃなかった。

「友理は強いよ！ 負ける姿が想像できないぐらい」

「我が友には常に約束されし勝利の力《エクスカリバー》が備わっている。その悪魔のごとき力《ディアボロス》を只人がどうにかできると思えん」

「友理さんは『やる』と言ったら必ずやる人です! ……そして信じて待つわたくしは、まるで家庭で夫を待つ妻のような……うへへへ」

凜子はともかく、瑠維ちゃんとマヤちゃんはもう少しどうにかならないかしら?

瑠維ちゃんは当て字に《エクスカリバー》とか《ディアボロス》やらをいつぺんに使っているせいで、聞いても意味分からない中二言語になつてる。

マヤちゃんは……もう手遅れね。妄想でもしてるのかイヤンイヤンやって、背後に百合の花が咲き乱れてる幻が見えるわ。

で、変に関係が変わっている2人がいるんで……帰りたい。

「……マヤちゃんはユウちゃんのことを心配じゃないの?」

「あら秋穂お姉様。心配するのは当然の気持ちですが、信じて待つのも当然の気持ちですよ? むしろ心配のしすぎで友理さんに迷惑が掛かるのでは?」

「妹を心配するのは姉として当たり前の事なんだよ?」

「なら信じて待つのは友人として当たり前のことですね秋穂お姉様?」

「もう普通に『秋穂さん』か『先輩』でいいって言ってるよね?」

「いえいえ将来的にどうなるか分かりませんから、ね?」

「うふふく相変わらずおもしろいこと言うね〜マヤちゃんは〜」
「おほほ、そちらもそろそろ妹離れが必要ではありませんか？」

うふふ、おほほ、と笑い合っている秋穂さんとマヤちゃんの周囲は——ブリザードみたい気温が下がって感じられた。私たち以外の周囲にいる生徒が、突然気温が下がりましたかのような肌寒さに不思議そうな顔をしている。

ついでに、背後で龍と虎が睨み合っているのが目の錯覚だと信じたい。

（何でヒロイン2人が友理を巡って争ってるのよ……！）

原因が当の本人にあるのが分かっているだけに頭が痛くなる。

18禁ゲーム『ヴァルダン』ではどうなのか知らないけど、アニメの『ヴァルダン』では特別仲が良いわけでも悪いわけでもなかった柚木秋穂と聖華院マヤ。

それが友理のやらかしによって、重度のシスコンvsガチの百合という対決に発展しそうなおかしな展開になっていた。

（こんなんだから、アタシも素直に褒められないのよ！）

この10年間でアタシがやったことなんてたかが知れてる。その間に友理はどんどん行動して、最善と言えるかは——まあ置いといて、結果を残した。

これはすごいことだっと思う。

「ただ、暗躍した当人がアレなんで……」

「難儀よね。アタシも、あのバカも……」

「明日奈ちゃん？ どうかしたの？」

「何でも——あ、模擬戦始まるみたいですよ秋穂さん」

「!? ユウちゃんはどこ!」

観客席の上側にはいくつものモニターがあり、まだ誰もいないグラウンド中央や観客席などを映していた。その内一つのモニターの画面が切り替わって、『放送席』と書かれたプレートのある場所を映し出す。

『さあ皆さん！ お待たせしました！ これより学園の恒例行事、新入生同士により異能ありの模擬戦を開催します！ 司会は放送部の沖野栄華と——!』

『OBの富田尚文です』

『——の2人が、お送りします!!』

モニターには元気一杯といった様子のメガネの女子がマイクを握りしめ、疲れ切ったサラリーマンみたいな男性が隣に座っていた。

『富田さん！ 昨年が続いてOBとして司会のご協力ありがとうございます！ 実況は1人だとはつまらないですからね！』

『そのために親戚筋だからという理由で、2年連続母さんを言いくるめられて連れてこられたオレの気持ちを考えたことある？ 社会人なんだよ？』

『では、気になる1年A組の試合から始めようと思います!!』

『無視かよ。……その前に簡単なルール説明です』

ず、随分と自由な実況ね。

これも学園ならでは、つてやつなのかしら……

『では新入生のために説明しましょう！ 模擬戦は1対1で、1試合最大15分の時間制限があります！ 制限時間内に勝負がつかなければ引き分け。勝敗は相手が降参と言うか、ノックダウンしたら。または審判員の判断となります！』

『戦闘系異能で戦う大会のルールを少し簡単にした感じですね。公式大会だと細かい追加ルールがあったりしますので』

この世界にはオリンピックと並んで人気がある、公式の異能力バトル。

個人戦だけでなくチーム戦や特殊ルールの試合が行われ、テレビでもトップクラスの視聴率を誇っている。

アタシは特殊ルールの中で『ポイント争奪』が好きね。決められた範囲に隠されたポイントメダルを時間内に1番多く取った方の勝ちってルール。

友理は個人戦を見て、兄貴を倒すための糧にしてやるって食い入るように見ていて怖かった記憶がある。

『しかし富田さん？ 戦闘にも使用できるような異能を使って安全性などは大丈夫でしようか？ 大ケガでもしたら学園の責任問題になるのでは!?!』

『去年も同じ振りをしたよね？ 異能を使った試合では『プロテクトフィールド』が周囲に張られているので、殺す気で戦っても死人は出ません』

プロテクトフィールドは『Heartギア』を作った技術者たちが後に開発したときれる『保護領域発生装置』のことね。

戦いで負うキズが、ゲームでいうHP(体力)を削るだけにする効果があるらしいわ。随分と都合のいい装置だけど、どうやって作ったんだか……

『そうこうしている内に選手の入場です！ 第1試合、1年A組から柚木友理さん！
同じく1年A組から香坂拓也さん！』

モニターの画面が変わって、グラウンドの中央に向かって歩く友理と兄貴の姿が映し出された。兄貴も教室の時と違って落ちて着いているわね。

2人とも戦いやすいようにジャージ姿だった。

『さて、我々は解説のために出場選手の異能に関する資料を貰っていますが、富田さんはどちらが勝つと思われませんか！ 私としても両選手の異能が特殊とのもので、予想がつきにくいというのが本音なのですが！』

『……難しいですね。両名とも複合系異能ですが、香坂さんは試合前にどれ程の準備をしていたかが勝敗を分けると思えます。対して柚木さんですけど……解説が難しいですね。1つ言えるのは、この異能をどれだけ把握して使いこなせるかが鍵となるでしょう』

『資料だけだと全く分からねえよ、つてことですね！ では実際に戦ってもらって学園の皆さんを驚かしてもらいますか!!』

『そうですね。今回ばかりは見てみないことには始まりません』

『では始めましょう！ 模擬戦第1試合！ 香坂拓也 V S 柚木友理！』

グラウンドの中央で距離を取った2人が身構えた。

そして――

『レディイイイイイイイツ……ファイト!!』

戦いのゴングが鳴り響いた。

第20話 柚木友理 v s 香坂拓也

〔side. 明日奈〕

ついに戦いが始まった。

友理が仕掛ける方が早いと思ってたけど、先に動いたのは兄貴だ。

グラウンドには音声を拾う高性能のスコープ集音器（遠くの音を拾うための道具）が備わっているらしいから、観客席にハッキリと2人の声が聞こえてくる。

『いくぞ柚木さん！ まずは電撃鞭！』

兄貴の初手は手に纏った鞭型の電気による攻撃だった。大ぶりだけど、腕と同じ太さのうえにリーチが随分と長い。

初見だと対処するのが難しいはずのソレは……

『——よつと。——ほいつと。……こんなもんか？』

友理は最初から攻撃がどこに来るのか分かっているかのように、まるで遊ぶような気楽さで簡単に避けてみせた。

運動神経が良いし、体が出来上がってからは本格的に鍛錬に力を入れているって話も聞いたから、あれぐらいなら避けてみせるっていうのはアタシも予想していた。あそこまで余裕があるとは思ってみなかったけど。

『すごいな。オレ自身使いこなせていないとはいえ、初見だと鞭特有の不規則な動きとリーチで1発ぐらい当たるものなのに』

『オマエの異能の力はそんなもんじゃないだろ？ 残り4つも見せろ』

『さては事前に明日奈から聞いてたな。なら——！』

兄貴はその場で地面を強く踏んだ。

すると、周囲の風が渦巻いてその足下に集まって——

『エア・サーフィン
風乗り人！』

兄貴が——飛んだ。

まるで見えないサーフボードに乗っているかのように、空中を移動している。さながら、空でやるサーフィンね。

『からの——！
光源爆弾！』
ライト・ボム

そして友理の頭上まで来た兄貴は手に何個も光の球を出現させて、それを全部上からばらまいた。

『——っち！ 面倒そうだな！』

友理が大きく距離をとって、光の球が地面に落ちた瞬間、

——バババババー——ンツツツ!!

光の球が一気に膨らんで爆発するように弾けた！

弾けた場所は小さなクレーターみたいになっている。あれ、直撃したらかなり体力が

削られそうね。数もあるし、爆発の規模が小さいかわりに手数で勝負する異能かしら？
全く、誰の異能なのやら。

アタシは冷静に戦いを見ていたけど、他はそうじゃない。

『おおおーつと?! これはどういうことだー?! 初撃に電気の鞭で攻撃した香坂さんが今度は空を飛んで——いや、風に乗って? とにかく! そのまま今度は上空から光る爆弾をばらまいたー! まさに空爆です! 異能は1人につき1つのはずなのに、まるで複数の異能を持っているかのような多様性! これは一体全体どういことでしょうか解説の富田さん!!』

『だから、アナタもオレも事前に資料を貰っているだろうに。まあ、何も知らなければ当然の反応ですね。オレも驚いていますし』

実況は盛り上がっているけど、観客席の人たちは混乱状態になってるわね。

複合系異能と言っても、元が1つである以上は何かしらの共通点がある。例えば、水・雷・風・氷・光といった5つの力を使える異能の正体が天気ウエザの力を扱える天空マスタの支配者として異能だったりとか。

ちなみにその人は、異能バトル世界トップランカーとして輝かしい成績を残した後、

年齢を理由に引退したってニュースでやってた。

だから観客席の人たちは電撃鞭、風乗り人、光源爆弾なんて関係性がない異能が信じられないんでしょね。必死に共通点を見つけようと考え込む人の姿も見れる。

『……実況の言う通り一方的な空爆だな。異能の組み合わせ次第じゃ、相性次第ですぐ詰む人だって出るだろ？ しかも、まだ2つ残しているし』

『そうだ！ これがオレの多重異能複写の力！ 条件を満たした人の異能を5つまでコピーできる複合系異能だ！』

兄貴がそう言った瞬間、観客席中がどよめいた。アタシの近くにいろいヒロインたちも絶句している。

そう、これこそが兄貴の——『ヴァルダン』の主人公、香坂拓也の持つ異能多重異能複写。他人の異能を5つまで扱えるという主人公らしい力。

アニメじゃヒロインたちとの仲を深めていって、その異能を組み合わせさせて戦うなんてこともしていた。特に凜子・秋穂さん・めぐみちゃん・忍ちゃん、4人の異能を組み合わせた戦いぶりは卑怯なレベルだったわ。ネットじゃ『近距離戦最強スタイル』『勝てる奴いるの？コレに？』とか言われていたし。

「友理は、ここからどう勝つ気なのかしら？」

「勝ちますよ。あの人なら必ず」

「ふえっ!!? し、忍ちゃん!!? いつの間に?」

いつの間にか忍ちゃんがアタシの席の真下から出てきた。

オバケかと思ったじゃない。心臓に悪いわよ。

「ここにいとマズくない? こう、不法侵入で」

「周囲がどよめいている今なら大丈夫だと判断しました。……先程の続きですが、友理さんは勝ちます。現在は余裕がある内に相手を分析しているだけです」

確かに、アタシがこうして忍ちゃんと話している間も模擬戦は進んで、一見すると兄貴の上空弾幕攻撃に友理は防戦一方になっているようにも見えた。

だけど、何だかんだ長い付き合いのアタシには分かる。

アイツは結構余裕がある。

慌てふためいたりせずに、冷静に兄貴の攻撃を見切って避け続けている。今も上空からの急接近による電撃エレキウィング鞭の薙ぎ払いを最小限の動きで回避した。

異能を使わないのは……タイミングを見計らっているのかしら?

『そろそろ柚木さんも、珍しいって話の異能でも使ったらどうだ! 回避能力はすごい

けど、このままじゃ時間切れで審判判断になるぞ!」

『……そうだな。こつちも異能を見せる時か』

『そうこなくつちゃ!』でも、オレへの攻略を考えてたんだろうが、そうはいかないぞ!

ジュエル・ルーム プラント・マジック
隔離部屋&植物魔法!』

友理が止まった時だ。半透明の立方体が友理を中に閉じ込めたのは!

アタシは知ってる。あれは近所に住んでいるおじさんの異能で、数秒間脱出不可能な空間を対象を閉じ込める効果がある。そして、続けて地面が盛り上がり出してきたのは数本の巨大な植物のツルだった。

アレも見覚えがある。だって、アレは……

「ウソ!? 私の異能!」

『ヴァルダン』のヒロインである美江ちゃんの異能、あらゆる植物を魔法のように操る植物魔法だから。

プラント・マジック
(兄貴の奴、ちやつかり条件満たしてコピーしたのね)

異能をコピーできる条件はその人によって違う。握手をするだけで済めば、相手からの好感度が一定以上なんて条件もある。

美江ちゃんは兄貴の隣の席だったし、簡単な条件で済んだのかもしれない。

その巨大なツルが鞭のようにしななって、その場から動けない友理に襲いかかる。

しかもダメ押しとばかりに、また光源爆弾ライト・ボムによる空爆攻撃だ。このままだと攻撃が当たる直前に隔離部屋ジュエル・ルームの効果が切れて、逃げ場のない状況で袋だたきにあう。

『ここでも香坂さんが異能をフル活用した怒濤の攻めに出たー！ 巨大なツルだけでなく光の爆弾まで使って逃げ場を無くしたー!!』

『ここでも勝負を決めるつもりですね。最後まで残り2つの異能を見せず、トドメの時に使ってくるのもグッドです。友理さんも無策に逃げていたわけではないのですが、このままだと負けること確定でしょう』

そう、このままだと友理は負ける可能性の方が高い。

秋穂さんは手で顔を覆って見ないようにしているし、マヤちゃんも平静を心がけているみたいだけど手が汗で濡れていた。他の子も諦めてる。

その中で……友理の異能を知っているらしい凜子・瑠維ちゃん・忍ちゃんだけは、これっぽっちも心配している様子がなかった。

(この状況からでも逆転できるような異能なの?)

友理が裏パスワードで発現させた、悪魔に関する異能。情報収集もできて、巨大な生

物の召喚から集団の長距離転移までできる力。

アタシにも教えなかったソレは一体……

見守る中、兄貴の攻撃が当たろうとするまさにそのタイミングだった。モニターに映る友理が不適な笑みを浮かべたのは。

『……第1柱バアル!!』

友理の姿が唐突に——消えた。

「えっ?」

それは、誰かが自然と口から出たような声だ。

兄貴が発動した隔離部屋ジュエル・ルームにいた友理が消えて、そのすぐ後に隔離部屋ジュエル・ルームそのものも消失した。

その場所に襲いかかる巨大なツルは何も無い空間を通り過ぎて、絶妙なタイミングで落ちてきた光源爆弾ライトボムが誰もいない地面で爆発した。

『は？ え、あれ？ 柚木さんが……消えた？』

兄貴も困惑してるし、観客席の人たちも、実況をしていた2人も、アタシ自身も……突然、最初からいなかったように姿が消えた友理に困惑した。

だけどアイツは……すぐ同じ場所に姿を現した。
まるで最初からそうだったかのように。

『は!? 柚木さん！ さっきまで消えてたはずじゃ……』

『消えてたよ。姿どころか存在そのものが』

『っ!? それ、どういう——』

『香坂拓也。ボクはオマエのことを舐めていない。むしろ、油断したらすぐに負けることを前提に戦っていた。だから、ボクはギリギリまで自分の異能を使わないようにして、オマエにストックしている5つの異能全部を出し切らせることにした。美江の異能が早速コピーされていたのは予想外だったけど』

『……姿を消して攻撃を素通りできる異能じゃ、結局勝負に負けなくても勝つことだつてできないぞ？』

『バーカ、ちゃんと勝つ気で戦いに臨んでるんだ。攻撃手段はある。今からその力を存分に見せてやるから……覚悟しろよ香坂拓也!!』

『なら、見せて貰おうか!』

兄貴が再び植物魔法で巨大なツルを地面から出して攻撃を仕掛けるけど——

『第14柱レラジエ!』

そのツルが友理に届く前に——突然枯れ出した!?

どンドン枯れて、腐葉土みたくなってる!

『なっ!?! 隔離部——』

『第18柱バティン!』

兄貴が隔離部屋ジュエル・ルームを発動する前に友理の姿が消えたと思ったら、いつの間にか兄貴の背後後に!?!

『お——らああつ!』』

『ぐわっ!』』

いきなり現れた友理は、兄貴の側頭部に思いつき蹴りを叩き込んだ。兄貴も動揺したのは一瞬で、すぐ電撃エレキウィップ鞭で振り向きざまに友理を狙う。だけど、

「第25柱グラシヤラボラスー」

振るわれた電気の鞭は簡単に避けられた。友理は空中にいたはずなのに。今回は目に見える答えだったけど。

『……ハハハ、どうなってんのソレ?』

『ふふん♪ カッコイイだろ?』

友理の背中にはコウモリのような大きな翼が生えていた。その姿まるで、本物の悪魔のようだった。……本人の笑みが邪悪っぽいのも相まって。

『こ、これはどういうことでしょうか!? 香坂さんに敗れるかに思われた柚木さんが、負けじと複数の異能で攻勢に出たー! 姿が消え、植物は枯れ、香坂さんの背後へ瞬間移動し、悪魔のような翼で空を飛ぶ! どんな異能なら、このようなことが可能になるというのかー!!』

『だから、オレたちは実際に知つてると何度も……。しかし、驚いた。結構本格的に戦闘向きの異能じゃないか。世界に通じる強さだぞ……。』

大まかだけどアタシは分かった。アイツの異能が。

知らない名前もあつたけど、バアルにグラシヤラボラス、そしてあの犬つころ——マルコシアス。どれも有名な悪魔の名前!

「明日奈さんはもう分かりましたか?」

「大体だけど、予想はできたかしら」

またもや謎の異能の登場に混乱する人、単純に戦いの結末が分からなくなつて興奮している人、なぜかドヤ顔の人。

アタシの周りにいる友人たちの反応を楽しみながら、2人で答え合わせをする。

「さつきから聞こえるの、悪魔の名前よね?」

「はい」

「しかも、すつごい聞き覚えがあるやつ」

「はい」

「忍ちゃん、友理の異能って……人の名前だったりする？」

「です。ずつと昔にいたとある王様の名前です」

「やっぱかー。」

オタク文化に触れたことあるなら一度は耳にするワードだもん。

「その王様はたくさんのお魔を使役したと伝わっています」

「そのお魔は全部で72体いたって話よね」

「その72体のお魔を使役した王の名は——」

「——ソロモン」

それがアイツの変化した異能。

ななじゅうふたはしら

ソロモン72柱のお魔、その力を行使できるってわけね。実質異能が72個あるようなものじゃない。

転生者仲間のことながら恐ろしいわ。

『ヴァルダン』の運営も何考えて実装したんだか？

『さて、制空権はもう取らせないぞ？ グラシヤラボラスの力は飛行能力だけでなく、戦闘力の強化も入っているんで——ね！』

『うわお!!? んなのアリか!?!』

友理が悪魔の翼を羽ばたかせて兄貴に攻撃を仕掛ける。

手足が自由に使えるうえに縦横無尽に空中を高速移動できる友理に対して、兄貴のエア・サーフィン風乗り人は足を自由に動かせないし機動力も友理に届かない。

友理の奴、あのグラシヤラボラスだっけ？ あの力を使った空中戦の練習を相当してゐるわね。360度全部を使って移動と攻撃を繰り返している。空間把握能力も高くないと自分がどの体勢で、どの辺を飛んでいるかも分からないはずなのに、何よあのアクロバティックな動き？ 兄貴も動きについていけずに攻撃食らって目回してるじゃない。

『くっそおおおおおおお！ これでどうだ！』

兄貴に当たって光の爆発を引き起した。

うわっ、エグいわね。自分の攻撃が自分に返ってくるのか……

しかも、

『チエストオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

『いっはっ!!?』

追撃とばかりに、友理の急降下蹴りが兄貴の腹に直撃した。

あー、兄貴もさすがにダメね。ギリギリで意識保ってるけど、いつ気絶してもおかしくない。ゲームだったらHPが1しかない状態だわ。

このまま地面に落ちて兄貴の気絶。友理の勝利となる。

そう思っていたけど……

『ダメ押しだ! 第19柱サレオス! 来い! ワニ助!!』

……甘かったわ。アイツは、徹底的だった。

友理が天に向かって腕を突き出すと、空に巨大な魔方陣らしきものが出現した。そこから、何か大きな足みたいなのが見えて――

『ワニ助！ のしかかり！』

『グガアアアアアアアアアアア!!』

――ドズウウウウウウウウウウウウウウウウッ!!

――全長何十メートルあるのか分からないぐらい巨大なワニが、落下途中の兄貴の上
に降ってきて……そのまま押し潰した。

わざわざ腹ばいの体勢になって隙間を作らないようにしているところが酷い。見え
ないけど、確実に兄貴は地面にめり込んでいる。

最後の最後で繰り出されたオーバーキル攻撃に、観客席の人たち全員が言葉を失い静
まり返っている中で、アタシは――

「……悪魔かああああああああああああああああああああああああああああ!!」

——心の底からツッコまざるをえなかった。

友理の勝利が審判から告げられたのは、それから数秒後のことだった。

第21話 次のステップ

ついに『ヴァルダン』の主人公、香坂拓也を倒したボク！

その華麗な勝利を我が女神な姉に祝福してもらうため早速観客席に向かえば、そこで待ち構えていたのは迫力のある笑みを浮かべる明日奈だった。

仁王立ちでこちらを睨む姿はまさに霸王！

——ちよつと面貸しなさい。

そんな有無を言わせない言葉に素直に従ったボクは偉いと思う。だって、あそこで断つたら本格的にマズいって本能が訴えていたから。

そして連れてこられた観客席のある場所の裏側。

まるで校舎裏に呼び出されてカツアゲされる人みたいな状況になった。

途中、アルカとマルコを連れた忍がやってきて「おめでとうございます。因縁の宿敵を倒されたこと、我が事のように自分も嬉しいです」と告げた。

入学式が終わったら帰ってもいいよって言っておいたのに、わざわざ模擬戦を見るために残って、隠れながら観戦していたらしい。

ついでにアルカも相変わらずの無表情ながらも健闘を称え、マルコは自分が活躍するシチュエーションを求めてきた。

とりあえずは、今度こそ見つからないように家まで帰るように言いつけ、ゆつくり休んでもらう。帰りにケーキを買ってくるよ、と言ったら忍は素直に礼を言い、アルカは「私、モンブラン」と希望を言ってきた。

最近は自分の意見を昔より言うようになってきたアルカの成長を祝うべきか、地味に凶々しくなってきたことを悩むべきか……

そんなこんなで今度こそ忍たちと別れ、明日奈の要件を聞くことに。

ただし、ボクは……ジャージ姿のまま正座させられた。

「あの、明日奈……さん？」

「最初に、模擬戦の勝利おめでとう。まさか本当に兄貴を——この世界の主人公を倒すだなんて思ってみなかつたわ。72体の悪魔の力だなんて……ゲームの『ヴァルダン』は随分ぶっ飛んだ有料サービスを提供してたのね」

実際は、本当に72種類の異能を使えるシステムじゃなかつただけどね。

ゲームの『悪魔従えし魔導王』は、グラシヤラボラスを中心に多種多様な攻撃や召喚

術ができる”みたいな感じだったんだ。

この世界で『Heartギア』の力によって異能に目覚めて、本当に72種類の力が扱えると分かった時はやれることが多すぎて焦ったくらいだ。まあ、その内のいくつかは常時発動型だったり、すでに効果を発揮し終えて使う機会がなかったりするものもあるんだけどね。

マルコとか、召喚はできたのに送還ができなくてペット枠になったんだ。

——明日奈もさすがに気付いてるよな？ マルコが——本物の大悪魔マルコシアスだって。戦闘時とか本来の姿に戻るから激強だよ？

さすがに分かってるか。

さつきマルコを見る目がすごく微妙なものだったし……

「アタシもね、最後の巨大ワニによるプレスとかに関して言いたいことはあるけど……今日はもうツツコミ過ぎて疲れてるのよ」

「あ、はい。すみません」

本当に疲れた様子で息を吐く明日奈を見ると、精神ダメージが半端ない。いつそ、いつものように怒ってくれた方が安心するのに。

ちなみに、サレオスの力により呼び出され、最後のダメ押し「のしかかり」を見事果たした巨大なワニ——ワニ助は、大悪魔サレオス本人ではなく書物でサレオスが騎乗したとされるワニの方だ。最初はワニの上に乗るとかく（笑）って思ってたけど……そのワニが全長100メートル近いデカさなら問題ないよね。

「で、今後はどうするの？ アタシにも教えてくれるんでしょうね？」
「今後つて？」

「だ〜か〜ら！ 最初の目的であつた原作開始日のイベントは、さっきの模擬戦を最後に全部アンタがメチャクチャにして終わらせたでしょ？ 兄貴も、今は保健室で寝ているはずだし。アタシが言っているのは明日以降よ。共通イベントもまだあるんですよけど、ここまで来るともう原作の知識とかほとんどアテにならないんじゃないの？」
明日奈の疑問はもつともだ。

細かい部分はこれから先もまだあるけど、ヒロインたちに大きく関わりそうな原作開始初日のイベントは潰せた。

では、これからどうするのか？

もちろん主人公の監視はあるけど、前々から企んでいた計画がある。

これについても、超個人的な理由だけだ。

「実は密かに進めていた計画があつてな、それが次の大イベントになる予定なんだ。中

心となるヒロインが変わりすぎて頓挫しかけたけど」

「……また碌でもない計画なんですよ？」

「そこは否定しない。その大イベントは——」

次のボクという言葉に、明日奈は目を見開いた。

「——『瑠維ルート』だ」



どことも知れない暗い場所。

そこは異様なまでに静かであり、不気味さを感じずにはいられない。

——カツン……——カツン……

鳴り響く足音が、空間に反響する。

足音の主は何も感情を感じさせない足取りで目的の部屋の前に着く。

——コンコン

「ボス、失礼します」

その声は凜としながらも冷たさを感じさせる少女のものだった。

少女が部屋に入れば、壮年の男がハマキをふかしている。部屋中に煙が漂っていたが、少女は眉一つ動かさない。

「……来たか」

「ボス、仕事の話と聞きましたが」

「そうだ。現在、我が組織は不幸が重なり苦境に立たされている。一時的なものだろうが、他の連中が調子づくのを見るのは面白くない。状況を打破しようと情報を集めていれば、1つ気になるものがあったな……」

「それは？」

「以前、我が組織が所有していた例の『異能の品』がジャパンにある可能性が高い。オマエには、その調査と回収を命じる」

「——っ!? ジャパンに……」

男は自分を落ち着かせるように煙を吐き出し、少女を見据える。

「レイカ＝氷道よ、失敗は許されんぞ」

「はっ！」

レイカと呼ばれた少女は、自身の藍色に薄紫のラインが入った『Heartギア』に手を添え、どことも言えぬ場所を見つめた。



広い部屋にカタカタとキーボードを打ち込む音だけが響く。

「ふう、最近の仕事も増えてきたわね」

その部屋の主——高級なイスに背を預けた、男性なら誰でも振り向きかねない豊満なボディを持った女性が大きく伸びをする。

と、そこで部屋にある自動ドアが開き、若い女性が入室する。

自動ドアは伸びをした女性の正面にあるので——

「所長、この書類にサインを——うち！ モゲレバイイノニ……！」

「ちよつと、いきなりそれは酷くない？ 何に対して言っているのか分かるけど、大きすぎる肩が凝つちやうのよ？」

「わ、私だって、寄せればBカップはありますもん！ それにここでなら重力の縛りが緩い分バストも……！」

「それ、アナタぐらいのサイズの子がみんな言つて、みんな涙した話よ？」

「うわああああああああああああんっ！ 所長のバカアアアアアアアアアアア！ 仕事増やしてやるううううううううううううううううううう！！」

そんな捨て台詞と共に若い——スレンダーな体型の女性は書類を乱暴に所長と呼ばれた女性の机に置いて、逃げるように去つて行つた。

……一瞬だけ見えた、目に光るものの正体は深く問うまい。

「はあ、ここに配属されたつてことは優秀なんでしょうけど、無重力なのはあくまで外で、中は重力装置が働いているつて分かっているのかしら？」

所長はパソコンの1つを操作して、外にある監視カメラの映像を見る。

そこには、岩のような肌の地面と青い空——ではなく、星々が煌めき様々な衛星が浮かぶ宇宙空間が映し出されていた。

監視カメラ映像の下には『第2月面基地、No. 5カメラ映像』と表示されている。

ここは「銀月」に建設された宇宙施設。

宇宙開発を目的とした「金月」にある『第1月面基地』とは違い、『第2月面基地』は一般には知られていない。数十年前、トップシークレットの存在と共に、施設の材料を一気にロケットで宇宙に飛ばして作られたのである。

だからこそ、その「トップシークレット」関係でここ数年は慌ただしい。

所長はデスクの中から「極秘&重要」と赤くハンコが押された資料を取り出し、中身を見て頭を抱える。

「アナタは誰で、今……どこで何をしているの？」

資料には荒い画質の写真が載っている。

一見するとただの流れ星のように見えるソレは、拡大された写真では中心に人のような姿が写し出されていた。

知らない人が見れば首を傾げるだけのそれは、知っている人が見れば皆揃って同じ答えを言うだろう。

——何だかアルカに似ている、と。

SS 掲示板回 友理 VS 拓也

【悪魔?】アマテラス特殊総合学園、衝撃模擬戦 [いいえ、魔王です]

part. 1

1: 名無しの管理者

初めて利用される方に向けて。

ここはアマテラス特殊総合学園のIDを持つ在校生及び卒業生のみが利用できる学園公認の掲示板となります。

注意事項・マナーを守って、正しく楽しく利用しましょう。

『今年も行われた恒例行事、新入生同士の模擬戦！

しかし、1年A組の戦いがヤバすぎた！

奴は悪魔なんてもんじゃねえ、あれは……魔王だ!!』

・アマテラス特殊総合学園ホームページ

http://XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

・他県の特殊総合学園HPリンク

http://XXXXXXXXXXXXXXXXXX

・その他、揭示板

http://XXXXXXXXXXXXXXXXXX

2：名無しの異能者

つーわけで、今年もやって来たか模擬戦。

卒業生の密かな楽しみなんだよなー。

3：名無しの異能者

在校生も楽しみつすわ。

模擬戦する奴って根性あるから見てて楽しい。

4：名無しの異能者

毎年、模擬戦の後の日曜休みに専用のスレ立つから

時間差はあれど凄い勢いでスレの消費が早いこと早いこと。

3年だけど、在校生よりも卒業生が凄い来るからビックリ。

5：名無しの異能者

大学入ったり就職したりすると

青春時代がやけに懐かしく感じるようになるんだよ。

6：名無しの異能者

◇ 5

すんません。卒業してから大分立つけど、青春があつた記憶が無い。今も昔も周りの景色は灰色。

7：名無しの異能者

◇ 6

元氣出せ！ いいことあるって！

（大学に入つて彼女ができた男より）

8：名無しの異能者

◇ 6

そうよ！ 他にも似たような人はいるわ！

（学園から付き合つていた人と結婚した専業主婦より）

9：名無しの異能者

やめろオマエら!!

◇ 6 が何をしたつて言うんだ!!

10：名無しの異能者

毎回スレ見てる勢だけど、初っ端からカオスwwww

11：名無しの異能者

良かった間に合ったー。

急な仕事で遅れると思ったから p a r t 1 からのスレ見るの
難しそうだったけど、まだ動画もアップされてなかったわ。

オレって超ラッキー！

12 : 名無しの異能者

そうだよ動画だよ。

はよ見せて見せて。

13 : 名無しの異能者

すんません。今年から新入生になった者だけど

その年の模擬戦動画見れる公式掲示板ってここでいいの？

14 : 名無しの異能者

は・や・く！ は・や・く！

15 : 名無しの異能者

∨ 13

当たっているよ。

てか、新入生なら今年の模擬戦見なかったの？

16 : 名無しの異能者

◇ 13

あんまり異能バトル——それも初心者同士のは興味なかったから帰っちゃった感じか？ もしくは野暮用？

17：名無しの異能者

入学式当日にインフル掛かった。

学園じゃ模擬戦の話題で盛り上がってるのに

オレだけ取り残されてる感が……

18：名無しの異能者

www

19：名無しの異能者

ご愁傷様です（笑）

20：名無しの異能者

だからやめろって！

◇ 17 はどこまで模擬戦のこと聞いたんだ？

21：名無しのインフル

1年A組の試合が衝撃的すぎて他の試合が影薄かったこと、どっちの異能もメチャクチャ珍しい複合系異能なことかな。

他の情報は動画見るまで聞かないようにしていた。

22：名無しの異能者

ケーキの上のイチゴを最後まで取っておくタイプか。

23：名無しの異能者

あー、相当白熱した試合だったらしいね？

私の妹が電話で掲示板に上げられる動画絶対に見てつてうるさいの何のつて……

24：名無しの異能者

現役大学生だけど、オレも弟から直接聞いた。

どっちも今までノーマークだったのが不思議な異能だったつてさ。

25：名無しのインフル

確か、有能な異能は中学生頃からツバを付ける企業や役人が

いるという話のこと？

26：名無しの異能者

今の時代。千差万別の異能で満ちあふれてるからな。

学園にいた頃に歴史の授業で習ったけど、戦争が終わってから

停滞期に入りかけてヤバいと思つたのが『Heartギア』作つた

科学者たちだ。

27：名無しの異能者

∨ 26 からの続き。

結果として、人類は進化を再開しましたとき。

『Heartギア』で培われた技術は宇宙開発で特に活躍して

『Heartギア』によって発現した異能は一部にとつちや喉から

手が出るほど欲しいものとなる世界になった。

28：名無しの異能者

まあ、異能を犯罪に使う輩も極々一部でいるのが問題視されてるけど。

29：名無しの異能者

話が脱線しているけど、オレら何のために集まったんだっけ？

30：名無しの異能者

∨ 29

今年の新入生の模擬戦動画見るためだよ!!

31：名無しの異能者

はいはい！ 私もそのために初めて来ました！

すっごい試合だったんで動画でもう1度見たいなつて！

いつ頃見れるのでしょわか!?

32 : 名無しの異能者

ウチも◇ 31 と似たような理由。

戦ってる女の子が男前っつーか。年下じゃなかったら姉貴呼びしたい。

33 : 名無しの音楽家

ワタクシは今晚のおかずにあの方の勇姿を見るのです!

34 : 名無しのカンフー

やめろ! その書き方はマズいって!

ユユつちをどうする気だ!?

35 : 名無しの音楽家

勇姿を見るだけで御飯が何杯でもいけるのですわ!!

36 : 名無しの騎士

息遣いが荒いのだが……

37 : 名無しの森林

ああ、3年間このノリに慣れなきやいけないのか。

38 : 名無しの天使

◇ 35

ユウちゃんは絶対に渡さないんだからあああああああ！

39：名無しの義妹

ちよつと声が大きいですよ！ 周りに迷惑です！

ていうか、全員部屋に集まって目の前で掲示板ってどういうことよ!?

ツツコミまで書かなきゃいけないって面倒！

40：名無しの義兄

ホント、それな。休みの日に何してんだろオレ？

オレだけ微妙に席が離されているし……

41：名無しの委員長

女子たちの中で男子1人ですから当然の処置ですよ♪

それとも、誰かの近くに寄ってみます？

42：名無しの義兄

∨ 41

やめてくれ。

1番近くにいる子にボコボコにされたくない……

43：名無しの悪魔

フシャアアアアッ！（訳：絶対不可侵領域だ！）

44：アルカ

ん。一步でも近づけば処すー。

45：名無しの森林

あの、これ、本当にいいのかな？

◇ 44 が信じられないんだけど……

46：名無しの騎士

◇ 45

私にふらないでくれ。こっちも混乱しているんだ。

この場合、一番発言力が高い人に意見を聞くべきなのだが……

47：名無しの生徒会長

面白そうだから、生徒会長権限で見ても見ぬフリです♪

48：名無しの義妹

それでいいの生徒会長さん!?

49：名無しの悪魔

それでいいのだ！（裏声）

50：名無しの義妹

◇ 49

やかましいわ全ての元凶!!

51：名無しの猟犬

ふっ、場が混沌《カオス》となってきたな。

……とりあえず、一旦落ち着いて《フリーズ》といこうよ。

52：アルカ

夕飯はハンバーグがいい。

53：名無しの悪魔

∨ 52

よし、オマエはちよつと黙ってる。

いい子にしていれば、中にチーズ入れてやつから。

54：アルカ

わーい。

55：名無しの異能者

……

56：名無しの異能者

……

57：名無しの異能者

……え

58 : 名無しの異能者

何か、すごい奴らが来たんですけど……

59 : 名無しの異能者

たぶん「悪魔」と「義兄」が模擬戦の……

まさかのご本人降臨ってやつ？

60 : 名無しの異能者

「 : 名無しの」の次の言葉から察するに

今話題の当人たちと愉快なお友達のはずだ。

1人全然心当たらない子が混じってるけど……

61 : 名無しの異能者

隣のクラスだけど、毎日楽しそうにしてて羨ましい。

62 : 名無しの異能者

待て待て待て。待てよオマエら。

それよりも学園のトップが普通に参加してることに突っ込めよ。

63 : 名無しの生徒会長

何も問題なんてありませんよ？

友人の妹さんの企画に面白半分に乗っただけですし。

64：名無しの悪魔

いやーまさか本当に生徒会長が家に来てくれるとは。

……ところで〱1 はあとで夜道に気をつけろよ。

なんだよ「いいえ、魔王です」って。

65：名無しの異能者

おおつと……！ ご本人様がお怒りか!?

〱1 は今日が命日になるのか？

66：名無しの異能者

逃げてー！ 〱1 さん逃げてー!!

67：名無しの異能者

たびたびすまん。

本当に何の話してたっけ？

68：名無しの異能者

だ・か・ら！ 模擬戦の動画見るんだってのおおおお!!

69：名無しの説明者

説明しよう！

この揭示板ではその年に行われた新入生同士の模擬戦をハイクオリティーで閲覧することができるのだ！

模擬戦後、おおよそ1週間から2週間後の日曜日が目安となる！

大体 part1 のスレが500に達した辺りで動画がㄨ1 によつて投稿だ。

70：名無しの異能者

おう。そういえば、そうだったな。

途中からカオスになつてて忘れてたわ。

71：名無しの猟犬

混沌《カオス》渦巻きし

深淵《アビス》に飲まれるがいい……！

72：名無しの森林

あの、そろそろ自重しよう……

73：名無しの悪魔

その通りだ。そのニヒルな笑みしてる中二病。

これ以上は小6の時に撮つたアレの上映会をするぞ？

74：名無しの猟犬

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

大人しくスレ見てるから、それだけは許して。

75：アルカ

捨てられた子犬みたいに震えてるよ？

76：名無しの異能者

∨ 74

どうしたんだ猟犬!?

さっきまでの香ばしい発言はどこに行った!?

77：名無しの異能者

ホントおもしろい集団だなー

.

542：名無しの管理者

それではスレも暖まってきた頃なので、最初の動画アップです。

1年A組の模擬戦動画

http://XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

あと名無しの悪魔さん、悪気は無いのです。

こういうのはその場のノリでスレタイ付けるっていいですか……

543：名無しの異能者

まだかなー。そろそろだと思っただけど？

544：名無しの異能者

——！ 来たああああああああっ！！

545：名無しの異能者

待ってました！ ひゅーひゅー！

546：名無しの悪魔

▽ 542

今夜は新月だったな……

夜道はさぞ恐いだろうよ……

547：名無しの異能者

▽ 546 のコメント恐すぎい！

548：名無しの騎士

なあ、その小さい子が短刀らしきモノを磨いているのだが……

549：名無しの義兄

入学式の日にオレを追い回した犬が爪を研いでいるんだけど……

550：名無しの悪魔

∨ 548

∨ 549

大丈夫だ。何も問題ない。

551：名無しの義妹

問題大ありじゃボケエ！

552：名無しの異能者

さあつて！ 動画が始まりましたよ！

ここからは通常再生の動画の解説タイムだ！

553：名無しの異能者

∨ 552 は流れをぶった切ってきたな……

554：名無しの異能者

バカみたいに広いグラウンドに佇む2人の男女。

お互いに闘志がみなぎっております！

555：名無しの異能者

あ、片方は女子か。

男子の方より戦意ありそうだから男だと一瞬誤解したわ。

556：名無しの異能者

名無しの義兄 v s 名無しの悪魔、勝負開始！

557：名無しの異能者

男子の方が先制攻撃だ！

しかし女子は華麗に躲す！

558：名無しの異能者

太くて……大きくて……長い、です……！

559：名無しの義兄

∨ 558

ぶっ飛ばすぞテメエ……

女子本人が犯罪者見るような目で見てくんだよ……！

560：名無しの委員長

スレの皆さんに言っておくと、あれは『電撃鞭』という異能よ。

561：名無しの異能者

動画見てれば分かるわそりや（笑）

562：名無しの異能者

あれ？ 複合系って話じゃ——あ。

563：名無しの異能者

お？ おおおっ!?

564：名無しの異能者

飛んだ!? いや、どっちかって言うと

見えない何かに乗ってる？

565：名無しの異能者

今度は光の玉だ！

566：名無しの異能者

（音）バババババーン！

567：名無しの異能者

うわ、えっぐ……

女子、避けたからいいけど空中爆撃かよ。

568：名無しの異能者

え？ え？ これどうなってるの？

教えて後輩ズ！

569：名無しの異能者

動画の音声聞きましようよ……

彼の異能はコピー能力ですよ。

570：名無しの異能者

まるで有名な『天空の支配者』みたい

複数の異能を使っているみたいだな。

571：名無しの異能者

他人の異能を5つまでコピー……!?

チートじゃんかよ！

572：名無しの義兄

コピーにも条件があるから何から何まで万能とはいかん。

異能使い特有の疲労感や息継ぎも考えて戦わなきゃいけないからかなり大変なんだよ。それが最大5人分ともなると。

573：名無しの異能者

ちなみに初コメだけど、『電撃鞭』はオレの異能な。

◇ 558 はオレも許さん……！

名無しの義兄とは中学からのダチ関係。

574：名無しの異能者

だが、強いことには変わらない。

女子の方は防戦一方じゃないか……

575：名無しの異能者

男子の異能については驚きなのは一緒だけど

女子の方は余裕そうじゃね？ 1度も異能使ってないし。

576：名無しの異能者

そうなんですよ！

ここから見所なんです！

577：名無しの異能者

生で見えていたボクたちも度肝を抜かれましたから。

まあ、最後まで動画を見てください。

578：名無しの天使

ユウちゃんが、ユウちゃんが、私のユウちゃんが！！

いやあああああ！ 逃げてユウちゃああああああん！

579：名無しのカンフー

∨ 578 は落ち着いてっつて!! ただの動画だから!

隣にいる私の肩揺すらないで! キーが押しにくい!

580：名無しの音楽家

∨ 578

“ワタクシの”! Yさんですわよ!!

あああ、けど、この後の展開が分かっているとはいえ

映像を見るとハラハラしてしまいます!

おのれ、名無しの義兄……!

581：名無しの義兄

うん、分かった。

この部屋にはオレの味方は1人もいねえな。

582：名無しの悪魔

うん、分かった。

企画したボクが悪いってことでいいから、みんな落ち着いて。

583：名無しの義妹

そうね。そろそろ近所迷惑になりそうなものね……

名無しの森林&騎士は、1人と1匹押さえるので忙しいし。

584：名無しの異能者

……

585：名無しの異能者

動画が進んでも、こいつら一步も進歩してないな。

586：名無しの異能者

誰が上手いこと言えって言った？

587：名無しの異能者

お？ 模擬戦の方も動きがあったぞ。

588：名無しの異能者

みたいだな。女子の方が攻勢に出るっぽい。

てか、すごくない？ 一撃も攻撃受けてないじゃん。

589：名無しの異能者

そうね。学園にいた頃のアタシでも無理だわ。

590：名無しの異能者

——って、おおっと!? 閉じ込められた！

591：名無しの異能者

そつちも驚きだけど、地面からデツカいツルが何本も出てきたぞ！

592：名無しの森林

あー、それ私の異能ですね。

いつの間にかコピーされていたみたいで……

593：名無しの義兄

条件が緩かったから、つい。

594：名無しの異能者

その“つい”で女子の方が大ピンチだぞ！

逃げ場が無くなった！

595：名無しの天使

ユウぢやあゝあゝあゝあゝあゝんっ!!

596：名無しの生徒会長

……このシスコン、手遅れかしら？

597：名無しの委員長

∨ 596

数年前からこんなでした。諦めが肝心です。

598：名無しの悪魔

それより、誰かそろそろお姉ちゃんにホールドされている名無しのカンフーを助けてやって。顔色が悪くなってきた。

599：名無しの異能者

……コイツらは平常運転だな。

600：名無しの異能者

そうこうしている内に、動画が進む。

逃げ場の無い女子に襲いかかる巨大なツタ！

さらに追い打ちの空爆！

一体どうな——え？

601：名無しの異能者

あれ？

602：名無しの異能者

おい、女子が消えたぞ？

603：名無しの異能者

そして何も無い空間を攻撃が空しく通り過ぎ

誰もいないところで爆発音だけが響く。

604：名無しの異能者

えええ？ 女子さんどこに消えたの？

605：名無しの悪魔

消えていないよ？ 消失しているだけ。

606：名無しの異能者

∨ 605

余計にわからん。いつの間にか同じ場所にいるし。

607：名無しの異能者

これ、マジでその場から動いてなくね？

608：名無しの異能者

お、ついに本気出すみたいだぞ？

609：名無しの異能者

またツルによる攻撃！ 今度も消えるのか!?

610：名無しの異能者

……ふあっ!?

611：名無しの異能者

枯れた！ しなびてボロボロ崩れてってる!?

612：名無しの異能者

動揺しつつも男子が爆弾投下！

613：名無しの異能者

と、思いきやまた消えた！

——からの真後ろに出現&蹴りお見舞い！

614：名無しの異能者

ついに一撃が入った！ 入れたのは女子の方だ!!

615：名無しの異能者

これどうなってるの？ この子もコピー能力とか？

616：名無しの異能者

何か女子が「だいくはしら○○！」って言う度に

消えたり、枯れたり、瞬間移動してたような……

617：名無しの異能者

蹴りにも負けずに男子も反撃——ってまたいねえ！

618：名無しの異能者

おいもつと上見ろ。

ヤバいのがいる。

619：名無しの異能者

コウモリの翼か？ 今度は飛行能力？

620：名無しの異能者

ほんと何の異能なの!? 誰か教えて！

621：名無しの異能者

女子「フッフ（ドヤあ!）」

622：名無しの異能者

教えないんか〜〜い!!

623：名無しの異能者

ヤベ、オレ異能の正体分かったかも……!!

名無しの悪魔が怖いんで教えないけど。

624：名無しの異能者

∨ 623 も教えないんかい!

625：名無しの異能者

こんな子が今までノーマークだったのかよ。

626：名無しの委員長

∨ 625

目立たないよう立ち回っていたらしいわよ？

627：名無しの悪魔

だってバレたら絶対に面倒なことになるじゃん。

学園に入って、その辺は吹っ切れたけど。

628：名無しの義兄

オレも目立ちたくなかった勢だ。

自分の異能の特殊さは初期から面倒だって理解してたし。

……にしても、動画のオレ、見事にボコられてるな！。

629：名無しの異能者

模擬戦は空中戦に突入中！

細かい動きができない男子に対して、三次元戦闘の女子が容赦ない！

いじめかな？

630：名無しの異能者

これ、絶対に練習してるだろ。

昨日今日でできる動きじゃない。

631：名無しの異能者

あ、男子もやられっぱなしじゃ無いらしいぞ？

光の爆弾大量に投げた。

632 : 名無しの異能者

しかし、何故か戻ってくる爆弾たち。

633 : 名無しの異能者

男子「さあ、行くんだ。オマエたちは自由なんだ！」

爆弾「「「ヤダー！ パパと離れたくないー！」「」」

634 : 名無しの異能者

セリフだけ見れば感動物語。

ただし、言っている奴を考えるとただの悲劇。

635 : 名無しの異能者

◇ 633

草生えるわこんなん（笑）

636 : 名無しの異能者

案の定、至近距離から爆発喰らってHPがレッドゾーンに……

637 : 名無しの異能者

そして追撃のライオーキック！

638 : 名無しの異能者

うわっ……モロ腹に決まったぞ。

639：名無しの異能者

いい勝負だった。

2人とも予想外の異能で楽しめたわ。

640：名無しの異能者

◇639

違うんですよ。

まだ最後の追撃が残ってるんです……

641：名無しの異能者

え？ でも男子もう死に体じゃ？

642：名無しの異能者

おい、上空に魔法陣っぽいのが現れたぞ？

643：名無しの異能者

ねえ、女子さん。ウソだと言って。

まさか、そんな死人にムチを打つような……

644：名無しの悪魔

やるなら徹底的に、がスタンスなもので。

645：名無しの異能者

あ、落ちた。

646：名無しの異能者

何じゃこのワニ!? 全長何十メートルだよ!?

647：名無しの異能者

おいおい。思いつきり潰したぞ。

648：名無しの異能者

ワニは光と共に消え

後に残ったのは地面にめり込んだ男子と

勝ち誇った顔の女子でしたとき。ちゃんちゃん。

649：名無しの義兄

当人としては笑えないんだよ。

意識朦朧で「あー負けちゃったなー。でも全力出せて

これなら後悔ないや」って綺麗に意識を手放そうとして……

650：名無しの異能者

上から巨大ワニがのし掛かってきた、と。

ワロス!

651：名無しの異能者

ホンマ凄いけど、同時に酷い試合だったな……

652：名無しの異能者

動画には収録されていないけど、この後一拍して静寂な観客席に名無しの義妹ちゃん「悪魔かあああああああああ!!」が響き渡ったんだよ……

653：名無しの異能者

いいえ魔王です。

654：名無しの異能者

いや魔王だって。

655：名無しの異能者

聞いて驚くなよ。何言ってるのかオレにも分からねえんだが

悪魔とかそんなチャチなものじゃ無かったんだ。

656：名無しの異能者

これが後に世界を震撼させる魔王の登場であった。

657：名無しの異能者

◇ 656

それな。冗談で済まされない。

特に世界を震撼させるって部分。

658：名無しの悪魔

テメエら……（怒）

659：名無しの義妹

こらこら。青筋浮かべるんじゃないわよ。

飯とはいえ美少女がしちやいけない顔になっているから。

660：名無しの異能者

こんな子が3年間学園にいるのか……

今年の後輩たちは胃痛薬が必要になってきそう。

661：名無しの異能者

むしろ必要なのは先生たち説。

.

〈数時間後〉

【悪魔?】アマテラス特殊総合学園、衝撃模擬戦【いいえ、魔王です】

Part. 5

255：名無しの異能者

ひとまず今年の新入生同士の試合全部見た感想。

1年A組が全てを持って行った。

256：名無しの異能者

〈255

それな。B組以降が物足りなくなっちゃって……

257：名無しのインフル

実際、B組にいる中国の子が荒ぶっているんですよ。

「せっかくのデビュー戦が！」って。

258：名無しの異能者

そりゃしゃーない。

あのあとじや影が薄くなる。

259 : 名無しの異能者

メインの肉料理食べた後で前菜が来たようなものか。

260 : 名無しの管理者

……ただいま。

261 : 名無しの異能者

おかえり管理者さん。

コンビ二行ってたらしいけど何買った？

263 : 名無しの管理者

それどころじゃなかったんだ……

264 : 名無しの異能者

え？ どうしたの元気ない感じ？

265 : 名無しの管理者

外に出たらいきなり野犬に追いかけられた。

キバ剥き出しで怖いなのって……

刃物持った小さな子が影から覗いていた気もするし。

266 : 名無しの異能者

はい？ このご時世に野犬？

しかも不審者まで？

267：名無しの異能者

なあ、part. 1のコメントにあつた

爪研いでいる犬と刃物持った小さな子って、もしかして……

268：名無しの異能者

有言実行か。

269：名無しの異能者

怖すぎだろ!?

SS 忍の過去（前編）

【side. 忍】

「……けぶつ、ちよつと食べ過ぎましたね」

春なのに少し寒々しい風が吹く満月の夜。

私は柚木家の屋根の上で、友理さんの帰りを待っています。

今日は友理さんの提案で鍋パーティーをしました。

毎回のことではありませんが、当然のように私も呼ばれてお野菜をたくさん食べてお腹が苦しいです。「成長期なんだから」と友理さん、秋穂さん姉妹にお肉も多くよそられたのが原因ですが、お鍋と同じように私の心はポカポカしています。

「友理さんたち、どこまで行ったのでしょうか？」

鍋パーティーが終わってすぐ、友理さんと明日奈さんの2人は“瑠維さん”なる人物に会うためどこかへ出かけました。

なぜこの時間帯なのか疑問に思ったのは言うまでもありません。

実際に友理さんに聞いてみると「……ボクも聞きたいなあー、明日奈の反応が恐いなー」などと、遠い目をしていたのが気がかりです。

会う人物は友理さんの友人だそうなので大丈夫だとは思いますが、やはり心配なものは心配です。

万一の時のためにマルコがいるとはいえ、私もこっさり着いていくべきでしか……いえダメです。私の仕事は友理さんが戻るまで、姉である秋穂さんと保護対象であるアルカさんを見守ること。ここで任務を放棄するのは私を信じてくださる友理さんの信頼を裏切る行為です！

当の友理さんが聞けば「そこまで背負わなくていいから!? てか、想いが重い!」と言いそうではありますが(過去に言われました)、私の信念の問題なのでこればかりは譲れません。むしろ、もつと頼ってほしいぐらいです。

こういう時、自分が友理さんより推定2つも年下なのが残念です。

どうしても友理さんの中で「護る人」の枠組みに入れられてしまうので。

年上でしたら多少の無茶も通せるのですが……

でも、それだと今の関係性も変わってきそうで嫌だと思ってしまう。だからやっぱり年下で良かったとも思ってしまう。

「ダメですねぇ私は」

信頼に応えるべくマジメに友理さんに仕えたい自分と、妹のように甘えたい自分との内にいるのです。

いつだか秋穂さんに相談した時は「当然の悩みだから、ゆっくりと自分の中で消化していけばいいんだよ」との助言を貰いました。

それでも、まだモヤツとした気持ちがあるのです。

自分にできる事を全部しなければ後悔することになりそうで。

姉と慕った人を失った時と同じ思いをするのが怖くて。

「……そういえば、あの日もこんな綺麗な満月でしたね」

前日が雨だったので空気中の塵が洗い流されたのか、本当に良く輝く2つの月を見て

思い出すのは数年前のこと。

友理さんと初めて会った日でした。



物心ついた頃にはすでに私は「自由」と無縁になっていました。

質素な服・粗末な食べ物・徹底的に管理された生活・物を見るような感情のない大人たちの瞳・必要最低限しか情報を得られない環境。

そんな場所に何人もいる内の1人が——私だった。

最初からそんな環境の中で生活をして、周りにいる子供たちも似たような状況で、「おかしい」と「変だ」と感じる幼子がどれ程いるでしょう？

外の景色が見えない建物に疑問を思うことは無かった。

——だって、それ以外を知らないから。

管理された生活を乱す子が大人に叩かれるのに感情は動かなかった。

——だって、いつもの光景だから。私も叩かれたことはある。

栄養しか考えていないドロドロした食事（後の友理さん曰く、「……何じやその謎の物体X的なモノは？」とドン引きしたもの）にも疑問は無かった。

——だって、それ以外の食事なんて水以外知らないから。

私たちは、その場所以外の世界を知らなかった。知れる環境にさえいなかった。質問をすれば大人はぶってくるから。「オマエたちが知る必要はない」と。

あの頃の私は、両親どころか名前という概念すら知らなかった。

皆が皆、英数字や番号を組み合わせたようなものを割り振られていた。

私は『SN・13』とかそんなのだったはずです。

だからでしようか？

名前を付けて貰った時に、世界が変わったかのように錯覚したのは。

「んー、じゃあアナタは今日から“シノブちゃん”ね！」

「シ・ノ・ブ……？」

「うん！ 数字の133って合体させたら『B』になるから、S・N・Bでシノブって読めるかなーってさ！」

そんなことを言ったのは物心ついた頃から一緒にいる子供たちではなく、あとから来た子供たちの中の1人で、やたら笑顔を振りまく2、3年上の少女でした。

不思議でした。

その少女は体が弱く、私みたいな子供を秘密裏に集めていたその大人たちが引き取ったと言うのです。

……まあ、世間を知った数年後に分かったのは、その少女は育児放棄されたうえ裏組織に金で売られたという事実でしたが。

今思うと、少女は多く語らずとも薄々ながら自分が親に『いらぬもの』として捨てられたことに気付いていた節がありました。それでも、笑うことをやめませんでした。

「どうして……」

「ん？ なーに？」

「どうして、笑うの?」

あとから来た子供たちという大なり小なり“外の世界”を知る存在ができたことで、私は自分で考えるところをすることをできるようになった。

そして漠然と「この場所には希望なんて無い」と理解しました。だからこそ、聞いてみたくなった。

どうして笑えるのか、と。

私は……1度も笑ったことがなかったから。

笑い方を、本当に知らなかったから。

「こんな所にいるからこそだよ! “いつか”が来るその日まで、暗い顔なんてしたくないから! 知ってる? 暗い顔していると、自然と幸せが逃げちゃうんだぞー?」

最後“まで私はちよつとでも幸せを手元に置きたいんだよ!”

「幸せ……よく、分かんない」

「これから知ってけばいいんだよ!」

そういつて少女は優しく頭を撫でてくれました。

それが胸の内をポカポカさせました。

私が初めて“嬉しい”という感情を知った瞬間でした。

「あれ!? シノブちゃん、今笑ったよね!」

「え？　そう、なの……？」

自分では分からなかったけど、口元が緩んで笑っていたそうです。せつかくだからと自分の意思で笑おうとしましたが、表情筋が上手く動かせずヒクヒクしていると言われてしまいました。

だから、

「もう1度、頭撫でて……？」

そんなお願いを頼めば、

「……ヤバイ。この子、天然の天使だ……！」

なぜか眩しいものを見たかのように仰け反りました。

「あーもう♡ シノブちゃん可愛すぎるよ〜〜!!」

「え、わ、ちよ、えええええ……??」

よく分からない内に抱きしめられて頬ずりされまくりましたね。

目を白黒させた覚えがあります。

あれです。秋穂さんがたまに友理さんにするようなスキンシップです。

「決めた！　今日からシノブちゃんは私の妹！」

「妹って……何？」

「あ、あくそこからかく。あれだよ。家族で姉妹ってこと！」

「家族……妹……」

その時は、本物の家族を知らない私はピンと来ませんでした。

でも、それが温かいものだということだけは理解できたから、自然と「お姉ちゃん」と呼ぶようになって慕いだした。

ここには希望は無い。

それでも姉と呼ぶ少女がいればそれでよかった。

自由でなくても、姉と過ごす時間があれば十分幸せだ。

そんな風に思ってた——思い込んでいた。

そんなもの、大人の都合で簡単に壊れるとも知らずに。

姉と慕う少女と出会って1年が過ぎた頃だったでしょうか。

私たちの生活サイクルに変化があったのは。

それぞれの得意不得意・考え方の違いなどを調べられたと思ったら、個別でよく分か

らないことをやらされる時間を充てられるようになりました。

ある男の子は射撃訓練をされ、ある女の子は戦術だか戦略だかの本を覚え込まされるなど、それぞれが別々のことをするようになったのです。

私は——何をさせたかったのでしょうか？ 赤外線に引つかからないよう短時間で通路の先を目指す特訓を知識と実技でやらされました。

この頃になれば自分たちに大人たちが何をさせたいかなど、食事時や空き時間にみんなと話すようにもなりました。

とは言っても、全員知識が偏っているのでまともな結論は出ませんでした。私は基本会話に参加せず、右から左に聞き流していたはずです。

そんなことよりも、気になることが当時の私にはあつたから。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「心配してくれるの？ ただの風邪だつて……コホツコホツ」

姉と慕う少女は、日に日に体調を崩していた。

姉が個別で何をされているのか、当時の私には予想もできませんでした。

知識があれば、姉の腕に増える模様が注射痕だと気づけたかも知れませんが、元々体

が弱い姉に最低最悪の大人たちが “どうするのが効率的か” を考えて実行するのか分かったかも知れなかったのに。

今思えば、姉は自分が早々に切り捨てられることを——危険な薬物実験の被験体にされることを、幼いながら分かっていたのかもしれない。

以前姉が言った “いつか” がここを出られる時のことではなく、自分の命の灯火が消えてしまう日のことを指しているのに気付いたのは半年後。

姉と慕った少女が亡くなる日でした。

SS 忍の過去（中編）

その日も、いつものように過ぎていくのだと思い込んでいた。

最近何かを隠している顔色の悪くなった姉のことを気にしながら、少しずつハードルが上がっていく訓練をしていました。仲間内の話を聞く限り、私は潜入とかそっち方面で才能があつたらしいです。大人たちは嬉しがつても私は嬉しくありませんでしたが。

そんな私の腕には黒に茶色のラインが入った『Heartギア』があります。

正直何なのか分からず気持ち悪いという印象でした。

大人たちは説明もせず「嵌める。肌身離さず付けていろ」としか言わないうえに、たまたま聞こえてきた「たつたこれだけしか用意できないのか？」「最近は取り締まりが厳しい」「海外にあつた横流しのルートが潰れたのが大きい」という会話が不穏に感じたのも原因です。

意味が理解できずとも、幼いながらに本当はここにあつたらダメなモノなんだと腕にある『Heartギア』を見ながらため息を吐いたのを覚えています。

私を含め、訓練の成績がいい数人にしか渡されなかったことなどを踏まえて、その数人とは情報共有などもしていましたね。

そうして訓練が終われば『Heartギア』を調べたり変な機械で体を調べられたりといった、1ヶ月近くもしている検査も終了してみんなの集まる部屋に戻ります。

最初の違和感は部屋に戻った直後に分かりました。

姉と慕う少女がいなかったのです。

「あれ？ お姉ちゃんは？」

「あの子、何でか帰りが遅いの。まだ戻っていないの」

「『けんさ』が遅れてるのかな？ 部屋がいつもよりさびしいね」

『Heartギア』を持つ私を含めた数人は謎の検査などをやらされるため、他の子よりも部屋に戻るのが遅い。

なので、戻れば1番に姉と慕う少女が抱きついてくる。

笑いながら「おかえりー！」と言って。

それがないだけでキュツと胸が締め付けられた。

心臓がいつもより早くドキドキする。

暑くもないのに汗が出る。

それは当時の私が初めて感じた「焦燥感」でした。

「あ、あの……」

その時、私と同じくらいの男の子が近づいてきました。

気弱で線が細く、みんなの中で一番大人を怖がっている子。

「こっちに戻ってくる前にね、大人たちが怒ってる声が聞こえたんだ」

「怒ってる声って？」

「分かんない。でも、確か、キミと仲が良かった人のいる方向だったと思う」

「——っ!? それって……」

どういうこと? と聞こうとした瞬間でした。

乱暴に部屋のドアが開けられたのは。

姉と慕う少女が放り込まれたのは。

「お姉ちゃん!!」

「し、のぶ……ちゃん」

悲鳴のような声を上げて放り込まれた姉の元へ向かえば、顔色は今朝よりさらに悪くなり、何度も殴られ蹴られたような痣が体中にありました。

部屋にいた他の子も怯えたり泣きそうになっている様子でした。

姉を放り込んだ大人はいつも以上に冷めた目で姉を見下ろしていました。それは物を見る目ですらく、汚物を見るような目でした。

それが、私の感情を逆なでした。

「お姉ちゃんに何したの!!」

ほとんど反射的に声を荒げた私は、

「うるっせえんだよっ 〃モルモット〃 風情が!!」

「——あぐっ!?!」

大人に顔を蹴られた。

左目の付近だったので余計に痛かった。

「このガキ、余計な手間をさせやがって! オレらも暇じゃねーんだ! 今度変なことすりゃあ、本当にぶっ殺すぞ!」

そう吐き捨て、大人は乱暴にドアを閉めて出て行きました。

正直、今までの人生の中で一番痛かったです。

当たり所が悪かったせいで後に左目の視力が著しく下がったのですから、当然のことでしたが。現在の私が左側を髪で隠しているのもオシャレではなく、焦点がイマイチ合わない左目を隠しておきたいからです。

……ちなみに数年後、そのことを知った友理さんが「ブツコロス」と言っただけで戻らず、帰ってきたらやけにスッキリした顔をしていましたね。

何をしてきたのか聞くのが怖いです。

話を戻しますと、その時の私は自分の痛みも周りの心配する声も気にせず、すぐに姉の元へ再び寄りました。

「お姉ちゃん！ 一体どうしたの!？」

「あ、はは……ちよつと失敗しちゃった」

それから姉に無理をさせない範囲で話を聞けば、どれだけ姉が無茶をしたのかが窺えました。

結論から言うと姉はもう体がボロボロで、私たちがこの場所から逃れる方法がないかと密かに探っていたそうです。

先程の大人は姉の監視役だったそうですが、仕事はずさんで隙だらけだったために動

ける範囲で脱出できそうな所を調べていたと。

ただ、今日はいつても以上に上手く動けたのが災いして、別の大人に見つかってしまつたそうでした。

「何でそんな危ないことしたの!？」

「言つたでしょ？ もう、体がダメなんだよ。最近はね、もうずっと体中痛いのが止まらないんだ。大人たちも『コイツはそろそろダメだな』って言つてたし。だから、最後にやれることだけしようと思つてたんだけど……上手くいかないなあ」

そう言う姉は——いつものように笑つていた。

でも、限界が近いからか無理をした笑いなのは幼い私には分かつてしまった。

その後、何とかベッド（囚人用のような硬いもの。フカフカ？ 何ですかそれ？）に運び、みんなが持ち寄つたタオルケットで偽物フカフカベッドモドキを作りました。少しでも姉の負担を軽くしたくて。

「お姉ちゃん、もうこんなことしちやダメだよ」

「……うん」

「朝食とか私が持つてくるから」

「……うん」

「お休みお姉ちゃん」

「……シノブちゃん」

「？ なーに？」

「愛してるよ」

「え、う……わ、私も」

「うふふ、カワイイな」

私は恥ずかしくなって急いで自分のベッドに入りました。いつも上に掛けているタオルケットは無く、目の痛みも引いてくれませんでした。姉の「愛してる」という言葉に胸が温かくなって、いつしか意識が沈んでいったのです。

今でも、愚かだったと思います。

“体がボロボロ”、“限界が近い”という意味をもつと考えるべきでした。そんな状態の人間が暴力を振るわれたらどうなるか想像するべきでした。

“朝食を持つてくる”と言った時だけ返事が小さかった理由に気付いていたら、最後“の時まで姉のベッドに潜り込んでいられたかもしれないのに。

翌日の朝、姉は——冷たくなっていた。

それは、みんなが目の当たりする初めての“死”という概念。

大人たちは冷たく言った。「とうとう死んだか」と。

私の耳には姉の「愛してるよ」という言葉が何度も聞こえて、

私の中の大事な何か——音を立てて砕けた。

正直に言つて、それからのことはほとんど覚えていません。

目の治療を最低限してもらったことや、ロボットのようになされた通りのことをしたのだけ記憶にあります。

他の子供たちは姉のように死にたくない、それまで以上に大人たちの言うことを怯

えながら聞いていたようですが、全く気付けませんでした。

何もかもが……どうでもよかったです。

姉のいない世界に、価値を見い出せませんでした。

それこそ、いつそ死んでしまえば姉の元へ向かえるのではと考えてしまうほど。

姉が亡くなってどれだけ経った頃だったでしょうか？

多少なり悲しみが薄まって、ある程度自分のことを考えるようになった時です。

その場所で、見慣れないものをよく見かけるようになったのは。

(……今日も、いるなあ)

ネズミ。

私たちが見られる数少ない本の中にあつた生物。

それ自体は特に気にするようなものではなかったのですが……

(まるで……見られているみたい……)

そのネズミは私たち子供や大人をジッと見ていました。

私以外にもネズミの存在に気がついていてる人はいましたが、気にもとめませんでしたし、気付いても絶妙に手を出せない半端な位置からこちらを見ていたからです。隠れや

すい廊下の曲がり角や天井にある隙間など。

私が気付きやすかったのは、ネズミが私を一番見ているようだったから。ネズミ越しに妙な視線を感じると言いますか……

ある日、ベッドで眠ろうとしている私の側に例のネズミがやって来ました。

本当、どうやって侵入したのか謎だった覚えがあります。

先に種を明かすと、それは友理さんが持つ悪魔の異能で作り上げた「下級使い魔」と呼ばれる存在だったのですが。

曰く、カメラ機能付きの生きたラジコンカーが近いとか。

まあ、当時の私はそんなこと微塵も知らなくて、ただどこから来たのであろう不思議なネズミにいつぶりの興味を持ったのです。

「アナタは……何？ どうして……私を見るの？」

反応は期待していませんでしたが、そのネズミは数秒ほど何かを考えるそぶりを見せると、壁に爪を立てて傷付け始めました。

「え？ ちょっと……」

まさかの行動にどうすればいいのか分からないまま、ネズミを見ていました。

しばらくすると、ネズミはどこかへ去って行きます。そして、去った後の壁に残っていた傷は――

『 3 かご、よる 』

「み、3日後の夜……？」

そんな、謎めいた文字だったので。

それから3日後。

いつものように訓練を無心で終えた私は、落ち着かない気持ちで夕食のドロドロした物体を食べていました。

（今が……3日後の夜、だよね）

外の景色が全く分からないうえに時計も私たちの生活空間には設置されていなかった。『夜』と言えるのが今の時間帯なのか自信はありませんでしたが、就寝時間から考えるとそろそろかなーとボンヤリ思っていました。

（何が……起きるんだろう……）

さすがの私でも、例のネズミが普通じゃないのは分かっていました。

拒否を許さないほどの迫力——そして焦りの感情。人を殺せる道具を持っているのに、それでも足りないかと引きつった顔が物語っていました。

振動が近づく度に顔から余裕が無くなっていく様は、年上の子たちからすれば見ていて気分のいいものだったと後に語っています。

私たちは言われるがままに部屋を出ました。

いつも通りの廊下を走り、いつもなら鍵が掛かって開けられないドアが開かれ——そこで全員が止まりました。

「「「「 わ あ あ 「「「「

それは生まれて初めて自分の目で見た——外。

暗いはずなのに星と建物の光が周囲を照らし、眩しく光輝いている満月の金月・銀月に目を奪われました。

「……綺麗」

もう、それしか言葉が出ません。

それ程までに衝撃的だったのです——周囲の崩れた建物と慌てふためく大人たち、そして現在進行形で蹂躪するワニ助が目に入らないくらい。

「ちくしょう！ 本当になんだよアレは!? 誰かの異能なのか!」

「んなこと言ってる場合じゃないだろが!! ここまで騒ぎが大きくなったら、もうこの施設は利用できねえ! とにかくガキ共と最低限の研究資金、機器をトラックに積み込んでとんずらするしか——」

「必殺! 夢の国へ強制送りダブルキー——ック!!」

「——ぎやばべっ!」

突然でした。

前触れもなく上から人影が降ってきたかと思えば、私たちをどこかへ連れて行くようにした2人の大人の頭を踏んづけて地面にキスさせました。

すごい勢いでぶつかったので2人の意識は一瞬で刈り取られたでしょう。

「ふう、夜のパレードに無粋な輩はいらないんだよね」

その人はコミカルなネズミのマスクを被った、私たちとそう年が違わないだろう背丈の子供でした。

背中から生えたコウモリのような巨大な翼——第25柱グラシヤラボラスの翼——

を仕舞い込んで子供は言います。

「やあ！ ボク、ネズミーマスクだよ！ ハハッ！（裏声）」

どこまでが本気で、どこまでがふざけているのか分からない、そんな友理さんとの初めての出会いでした。

……もう少しロマンチックなのが良かったなーとは、今でも思っています。

「……頼むから、喋ってよおおく（裏声&涙声）」

ついに涙声になってきましたね。非常に落ち込んでいるのにまだ裏声のままにいることに若干感心しないでもないですが。

1人でもキャパオーバーしていない子がいればこう言ったでしょう。

——いや、全部アナタが原因だから、と。

今の私ですらそう思うのです。

正体を隠すためとはいえ、ふざけすぎでした。

で、一体どうしようと迷っていると……

「——っ！ 侵入者か!?!」

銃を持った別の大人がやって来たのです。

倒れた同僚2人とネズミマスクの友理さんを見て、すぐ銃を構えた判断力の高さは賞賛できました。

しかし、

「くたば——」

「全部オマエらのせいだロリコン共おおおおおおおおお!!」
「ぶっ!!」

残念ながら本気になった友理さんには叶いません。

大人が引き金を引くより早く、友理さんが一瞬で距離を詰めて殴りつけたのです。子供の力では考えられない威力のパンチだったのか、大人は綺麗な放物線を描いてどこかへ吹っ飛んでいきました。

「クソ！ この子たちが何の反応もしてくれないのも、痩せ細っているのも、おやつのおプリンをアルカに食べられたのも、全部オマエらのせいだ!!」

「……最後まで絶対に違う」

完全に八つ当たりでしたね友理さん。

「アルカ」や「プリン」が何を指す言葉かは分かりませんが、最後の方だけ私情が入ったことは間違いないとツツコんだのです。

「……アハッ！ やつと反応してくれたね！（裏声）」

再び無理に変えた声で喜びを露わにする友理さんは、スキップしながら近づいてきます。正直言いますと、泣き出す子がいるほど恐かったです。

とはいえ、今まで散々私たちを苦しめてきた大人を倒したことは事実。子供の勘なが

ら悪い人ではないだろうと勇気を出して話すことにしました。

「……アナタは誰なの？」

「ネズミーマスクだよ、忍ちゃん！（裏声）」

「え!? なんて、その名前を……!?!」

その名前は姉から貰ったモノであり、当時の友理さんが知っていることに驚きを隠せませんでした。

「だって、しばらくの間はこの施設を見て回りながらキミたちのことも可能な限り調べたからね！ ネズミ越しに今日のこと、忍ちゃんに伝えたでしょ！ 有言実行つてやつさー！ ハハツ（裏声）」

「あー！ あのネズミから感じた視線つて……」

「その通り！ さらに言っちゃうと、ここに来たのはキミたちを助けるためなのさ！ ワニ助が注目を浴びている内に逃げよう！（裏声）」

「ど、どうして……」

もう頭が追いつけません。

何で見ず知らずの私たちを助けようとするのか理解できませんでした。

「……どうして、か。まあ、偶然とはいえキミたちのことを知ったから、自分にできることをしようとしただけだよ。この施設のある場所を特定するまでは良かったんだけど、

強襲計画を立てるにはまだ異能の把握と制御が難しくつてね。こんなに時間が掛かったら」

裏声をするのも忘れて、友理さんは悲しそうに俯きました。

当時の私は6歳。友理さんは8歳です。

7歳の頃に異能に発現してから、その力の把握の一環でいろいろと試していると偶然違法な人体実験をされている子供たちの情報を知ったらしいです。皮肉にもそれは、姉と慕った少女が亡くなったことが切っ掛けで得られた情報だったとか。

すぐに助けたい気持ちはあったけど確実に助けるためには情報収集と証拠の確保が必須で、しかもこのような事件を担当する公的機関に裏で施設の人間と繋がっている輩が紛れ込んでいる可能性が高いことから、1人で助けに来ただと後の友理さんは語ります（なぜか非常に申し訳なさそうな顔でした）。

姉は、最後の最後に希望を私たちに届けたのです。

「ボクが、キミたちを助けたいのは本当なんだ。証明するものは何も無いけど、信じて欲しい。……ボクにキミたちを助けさせて」

マスク越しに目が合いました。

その目は、どこまでも純粹に私たちを心配するものでした。

私は後ろにいる他の子供たちへ問いかけるように振り向きませす。

「「「「……………」」」」

沈黙は数秒程度でした。

「たす、けて……………」

「私、こんな所で死にたくない！」

「ボクも！ 外の世界が見たい！」

「おねがい！ ここから連れ出して！」

みんなは口々に言います。「助けて」と。

それは失った数年間取り戻そうとする、未来を掴もうとする、私たちの心からの叫びでした。心の底から溢れる想いでした。

私も、覚悟を決めたのです。

「信じます。お姉ちゃんを失ったここには、もう居たくない！ 私たちを、外に連れ出して！」

「……………了解さ。ハハッ！（裏声）」

友理さんは私たちに自分の側へ来るよう告げます。

「……………第38柱ハルフアス！」

何かを咄くと、地面に魔方陣が現れて周囲が輝きだしました。

青白い光がキラキラと私たちを包み込んで、とても綺麗だと思ったものです。

当然のことながら非常に目立つので、増援に来たらしい武装した大人たちがこちらに気付いて向かって来ましたが、

「ガララアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「ひっ!? ——ギヤツ!」

「ま、また化け物が出たぞー!!」

「来るな! 来るなあああああああああああああああ!!」

突如現れた巨大な何か^かが大人たちを蹂躪し出しました。

ワニ助ほど巨大ではないのに、威圧感はその以上に感じる存在は乱射される銃弾をものともせず、目にも止まらぬ早さでその牙と爪を血に染めていったのです。

「グルルルル……」

「す、すごい」

2メートルもあるかという巨大な狼の体に、グリフォンの翼と蛇の尻尾を持つ大悪魔。友理さんの異能、第35柱マルコシアス。

後に仲良くなるマルコの、真の姿を初めて目撃した瞬間でした。

「ようやく準備が整ったか。やっぱ発動までの時間がネックだな。……マルコ！ 残りの敵を殲滅しろ！ 1人も逃がすな！」

「ガルウオオン！」

「ワニ助！ 証拠品やらなんやらは回収した。もうこんな施設に価値は無い！ この子たちの辛い思い出ごと全部ぶっ壊しちまえ!!」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

友理さんの声に応えたマルコは他の大人を倒すためにどこかへ去って行き、ワニ助は期待に応えるよう私たちがさつきまでいた建物を破壊します。

（……壊れていく）

物心ついた頃から私たちを閉じ込めていた建物が、

大人たちの悪意しか感じられなかった建物が、

お姉ちゃんを死に追いやったモノ全てが、

爆発音を響かせて崩れていく。

その時の感情は今でも分かりません。

強いて言うならば「開放感」が近いでしょうか？

お姉ちゃんと出会えたこと以外、何一つとして良い思い出の無かった場所が壊れていくのを見て、私はやっと全部終わったんだと実感したのかもしれない。私たちのために本気で怒って建物を壊すよう命じた目の前の子供に、心から感謝したのかもしれない。

「いくぞー！ 集団長距離転移！」

そして、光が私たちを包み込み――



『それでは、次のニュースです。先月の〇〇県××市で起きた違法施設への突然の襲撃、そして救助された子供たちについての続報です』

全てが終わったあの日から一月近い時間が過ぎた頃。

私と、あの施設にいた子供たちはお昼のニュース番組を見ていました。

『この違法施設では『Heartギア』に適性のある子供を攫い、人体実験をするなど悪質なことが組織的犯行として行われておりました』

映像では跡形も無く破壊され尽くした、先月までいた施設が上空からの映像によって映し出されています。原形がありません。ガレキの山です。

『政府は違法に幼い子供が各地から裏組織を通じて売買されていた事実を掴んでおり、密かに情報を集めていました。証拠が纏まりしだい子供たちの保護と組織の摘発を行う予定だったそうです』

私たちは友理さんに助け出されましたが、どうやらそう遠くない内に助け出された可能性もあつたようです。

ただし、友理さんが指摘したよう問題点もありました。

『しかし、その前に施設は何者かに襲撃を受けて、組織もろとも壊滅することとなりました。襲撃した人物は不明のまま、捉えられた違法組織の者たちからの証言も信憑性に欠けるとして、政府が独自に調べていますが未だに謎は残ったままです。そして、同時に匿名で政府に違法組織と裏で繋がっていたとされる人物に関する情報及び証拠が送られており、その人物が施設に情報を流していた可能性も考慮して、警察と合同で調べております』

……そりゃあ、巨大なワニ・化け物のような狼・謎のネズミマスクの子供が襲撃したと言つても、実際に見た人以外は信じられないでしょうね。ついでに、あの施設にいた大人たちと繋がっていた可能性のある人物とやらも本当にいたようです。

ニュースの続きを聞けば、その人物は違法施設の摘発などをする公的組織の上層部に属している人で、証拠が無ければまず疑われることもなかったであろう表向き人格者な男でした。数年後には大きな学園の理事長に推薦が決まりかけていたというから驚きです。

もし先に救出されなければ情報漏洩によって逃げられたか、その男が手柄を欲するために組織を裏切つてより地位を確固たるものにしていた可能性だってあり得ます。ゾクリとする話です。

これを当時の友理さんがほぼ一人で準備していたのですから、助け出された身としては感無量ですね。

『襲撃した謎の人物に助け出された子供たちは現在保護施設にて、健康診断とメンタルケアを行いつつ時間を掛けて聞き取りを行っているとのことです』

『いやー酷い話ですよ。中には赤ん坊の頃から施設に囚われていた子供もいるそうですから、彼らが外の世界を見たことによる混乱の落ち着きや、精神的な傷が癒えるまでは踏み込んだことは聞かないようにするとう警察関係者の判断は正しいと思います』

『よ』

『そうですね。集められた子供たちの中で死者は1名のみで済んだということですが、心の傷は私たちでは想像することもできないでしょうし、これからたくさんの事を学びながら成長していくことを願うばかりですね』

『襲撃したマスク姿の人物についても気になるところですが、こちらは一向に調査が進んでいないとか。情報収集系の異能を使える方に協力しても、異常なまでに目撃情報その他手がかりになるものすら無いというので不思議なものです』

そこでニュースは終わります。

あとに流れるのは個人的な髪型をした女性が綺麗な部屋で有名人と話し合うという内容の長寿番組でしたが、私たちは興味が無いので見ませんでした。

私たちの興味はもつぱら、ネズミマスクの子供と自分たちのことです。

「ボクたちの話題、未だにニュースでやってるね」

「ホントそれ。『心の傷』とかはイマイチ分からないし考える余裕も無いくらい、外の世界の情報がいっぱい毎日が大変だもん」

「毎日美味しいもの食べられて幸せだし」

「アタシはテレビ見るのが好きだなー」

「オレはサッカーって遊び。体を動かすのが楽しいんだ」

「にしても、あのネズミの子は結局誰だったんだろうね？」

「あの襲撃って、あんまり褒められたやり方じゃないんだよね？ 私たちのこと助けてくれたし、今も貰ってばかりなのに……」

「心配、だよなー」

ニユースでは私たちのことを心配する声が多かったのですが、「心の傷」とやらは案外大丈夫なものでした。

いきなり救助されて訳も分からないまま保護されていたのでしたら、こうはならなかったかもしれません。

でも、私たちのことを本気で心配し、本気で大人たちに怒りを向けた人を見たから、みんなの心は救われたのでしょうか。崩れ去る建物を見て「全部終わったんだ」という気持ちになったのは私だけではなかったのです。あの時点で「心の傷」はみんなの中からほとんど無くなったのかもしれませんが。

全部、友理さんのおかげです。

長距離転移なる異能の力で連れてこられたのは、私たちのように何らかの事情を抱えた子供たちの暮らす保護施設でした。

事前に頭を下げてまで了解を取ったようで、保護施設の方々は大人も子供も関係なく

受け入れてくれました。

あらかじめ用意してくれていたシチューを食べた時は、みんな初めて知る「美味しい食事」というものに驚愕し涙を流したものです。

恥ずかしながら私も大泣きしてしまいました。心の温まる優しい味に。改めて全部終わったんだと実感して。……お姉ちゃんにも、食べて欲しかったと。

それから簡単に体調がおかしくなれないかを調べ、明日には警察の方にも来て貰うことになる旨を聞かされました。

ほとんどの子は話を聞いたあとで崩れるように眠ってしまいました。

ただ、私は――

「あの……」

「ん？ 何だい忍ちゃん！（裏声）」

保護施設の大人との会話を終えたらしい、ずっとネズミマスクを付けている友理さんに話しかけました。眠気は意地と根性で我慢です。

どうでもいいですが、なぜそこまで裏声に拘ったのでしょうか？

「……ありがとう。助けてくれて」

「……気にしないでいいんだよ。子供ってというのは助けられてなんぼだからさ。ま、お礼は素直に受け取るね」

「……ふふ、アナタも子供なのに？」

「おっと、そうだった。ガチで忘れていた」

ふざけてたり、マジメだったり、不思議な人だなーと思いました。

それと、助けてくれたのがこの人で良かったとも。

「どんな理由でもいいの。みんなを助けてくれて、ありがとう」

「……みんなじゃ、ないさ」

そこで友理さんは酷く落ち込んだように頸を横に振りしました。

「キミの大事な人、助けられなかった」

「あ」

「その子のことも助けてハッピーエンド！ってしたかったのに、ボクは、間に合うことができなかったんだ。……本当に、ゴメンね」

友理さんは、泣いていました。

私に悲しい思いをさせてしまった自分が不甲斐なかったと、もつと上手く立ち回れたらお姉ちゃんのことも助けられたんじゃないかと。

気付けば私は、友理さんに抱きついていました。

「そんなことない！」

「忍ちゃん……」

「アナタがどこの誰かは分からないけど、私たちのことを本気で心配してくれているのは分かってている！ アナタは何も悪くない！ お姉ちゃんは、あの子は、最後まで笑顔で生きた！ 私のことを愛してくれた！ 誰も恨んでいないし、後悔もしていなかった！ だから……！」

たくさんの涙が目から溢れ出ます。

私自身、具体的に何を友理さんに伝えたかったのか……。心の内からドンドン出てくる思いを言葉にしているだけでした。ただ、アナタは悪くないと、お姉ちゃんは天国でアナタに感謝しているはずだと、自分を責めないでと、そう伝えたかったのです。

「……忍ちゃんは、強いんだね」

どれくらい抱きついた頃でしょうか。

友理さんは私の頭にポンと手を置いて、

「ありがとう」

私にだけ見えるようにマスクを取って、素顔を見せてくれました。

「キミと出会えて嬉しかったよ」

それは、いつも見ていた姉と同じ笑顔だったのです。

「さよなら。幸せになってね」

その表情で、優しげに頭を撫でてくれました。

その手つきは偶然か必然か、姉と同じものだったのです。

「あああ……」

涙が止まりませんでした。

背を向けて去って行く友理さんに、手を伸ばしたまま何かを言いたくて、でも何も言えなくて、そのまま見送ることしかできませんでした。

こうして、友理さんとは1度別れたのです。

翌日からは、まあいろいろ大変でした。

警察の人が来て、最低限聞かなければならないことを爆発物の処理でもするかのような慎重に質問してきたり、わざわざ近くの病院の方々が医療器具ごとやって来て、本格的な検査をしたりと大忙しです。体調に関して言うと、案の定みんな栄養失調気味でした。地味に私が1番酷かったようです。

謎の物体X的なものしか食べたことがないと言えば、警察の人も病院の人も嗚咽を漏らすほど泣き出しましたね。

保護施設での生活で楽しみなものはやはり食事です。

数日経っても、朝の食パンやおにぎりを食べる度に泣き出す子もいましたからね。以前から保護施設にいる子ですら思うところがあるのか、最初から非常に優しかったです。おかわりの優先権とか貰いました。

ちなみに、私が野菜好きだと判明したのはこの時です。

本来、保護施設の食事は栄養などを考えつつ飽きないよう、決まったお金の中でやりくりしますが、私たちが入所してからそのバリエーションが多くなりました。

理由としては寄付金が大量に送られてきたことですね。

私たちのことは政府・警察・病院関係の人たちには有名だったので、涙を流すレベルの同情からか結構な額が保護施設に寄付されました。

そのお金で失った数年間を取り戻させようと遊びにしる食事にしろ、様々なことができるようになったのです。

その寄付金の送り主の中には……「ネズミーマスクから！」と書かれたものもありました。お金だけでなく、まるで知っているかのように保護施設に無い本やおもちやも大量に詰め込まれていたのです。

(会いたい)

みんな、新しい生活に慣れていきました。

でも、私は友理さんのことが頭から離れません。

(会いたい)

みんなは余裕ができたからか、将来のことを話すようにもなりました。

サツカー選手になりたいと言う子もいれば、料理人になりたいと言う子もいます。結果として私たちをあの手で縛り付けていた『Heartギア』による異能で生計を立てようとする子までいたのです。

ちなみに、その子の異能は『薬物探知』というものです。警察から熱烈なオファーがすでに届いているとか。

私に発現した異能の名は『影シャドウ・ドミネーション操』。

影を操ったり、影から影へ移動できる異能です。

諜報向きだと、私にも警察からオファーが来ました。

でも、どうせなら、あの人——友理さんの役に立ちたかった。

もしかしたら、私たちの時のように無茶をするかもしれない、ちよつとでも助けになりたくて、……何よりも一緒にいたくて。

（会いたい）

別れの時に撫でてくれた手は、間違はなく姉と同じものでした。

姉と同じ、優しさに満ち溢れたものでした。

それが、どうしても私は忘れることができませんでした。

気付けば、助け出されて数年の時間が過ぎました。

私は11歳になり、中学校に通うかどうかの決断を迫られたのです。

小学校には通わずに保護施設で勉強なども教わりましたが、やはり学校生活で得られるものは大きいと、問題が無ければできる限り通うようにして欲しいというのが周りの意見です。それでなくても高校生になれば『Heartギア』によって発現した異能を扱うための専門学園に入ることが決まっているのです。こればかりは決定事項だと言われました。

年上の子はすでに近場の学校へ通うようになり、みんなにどれだけ楽しかったかを聞かせています。

しかし、私は……迷っていたのです。

友理さんのことが頭から離れずに。

そして、とうとう行動に移すことに決めました。

保護施設で世話になった人たちを説得するのに時間は掛かりましたが、私は中学校に入る手続きをするギリギリの時期まで、大恩人を探すことにしたのです。

普通なら無理だったでしょう。

ニユースでも言っていました、警察や政府が本気で捜査しても探し出すことができなかったのですから。

でも、勝算はありません。

私だけがハッキリと覚えていた単語、*“アルカ”* *“マルコ”* *“ワニ助”* という一人名（？）と2匹の名前です。

2匹に関しては恐らく異能で召喚された存在だと分かりましたので期待しませんでした、*“アルカ”* は人の名前だと踏んでいたのです。

私の向かった先は——とある探偵事務所。

ええ、普通に人の力を借りることにしました。

もちろん、依頼するのはただの探偵ではありません。

『人物位置特定』という異能を扱える知る人ぞ知る名探偵です。保護施設を卒業した人が来た際に、偶然にも存在を知ることができました。必死だったのです。

居場所も泣き落としで手にしました。必死だったのです。

今までに貯めたお小遣い——全財産を依頼料に出しました。知る人ぞ知る名探偵への依頼料は子供割引があっても高かったです。

そして調査の結果、見事 *“アルカ”* と *“マルコ”* の居場所が判明しました。

私はすぐ情報にある場所へ向かいます。

電車を乗り継ぎ、地図を片手に探し出し、

見つけました。

「はあ、今日も疲れたー。なあ、マルコ？」

「ワン！」

「ボクが明日奈を困らせたのが原因だって？ 酷い奴だ」

「ウゝ……ワウン」

「私も疲れた。夕飯はステーキがいい」

「アルカ、オマエは後ろで見学していただけだろが……！」

「……ダメ？」

「はいはい分かりましたよ。まったく、作る身にもなつてほしいよ。それじゃあ、さつさとスーパーに行くか。今日は肉が安いはずだし」

「わーい」

ようやく、会えました。

「？ 友理、マルコ。あの子、こっち見てる」

「ワウン？」

「あの子ってどの子n……なっ!? あ、あれは……!?!」

別れてから随分経ちましたが、すぐに探している人だと確信しました。

「……お久しぶり、です」

「ど、どうして、ここに……?」

「ずっと……会いたかった」

私は、数年ぶりの涙を流しました。



「まあ、そこからも大変でしたねー」

友理さんに会いたい、一緒にいたいという気持ちだけで行動していたからか、咄嗟にしたのは「アナタに任せさせてください！」という言葉と土下座。

自分でも何でそんなことをしたのか不明です。

ただただ必死だったのです。

突然のことでオロオロする友理さんに追い打ちを掛けるかのよう、柚木家に来ていた明日奈さんが私の姿を見て素つ頓狂な声を上げ、その声を聞いたご近所さんたちが何事かと出てきて……と、初つ端で友理さんに迷惑を掛けてしまいました。

しばらく家から出づらかったそうです。

そこから一言でまとめられない程いろいろとあり、無事に私は隣のアパートに引っ越すことができました。

1番がんばったのは自己PRでしたね。

最期は遠い目をした友理さんに「……うん、合格。合格でいいよ。だからこの辺で勘弁して」と言わせるぐらい熱弁しました。

「あと数日で友理さんの入学式ですか……」

学園に入ると私に頼むことが多くなるという話なので、やる気が満ちます。

非常に忙しい毎日が待っているそうです。

「……望むところですね」

「何が？」

「!? ゆ、友理さん!？」

いつの間にか背後に友理さんが立っていました。

全く気付かなかったです。短距離転移でしょうか？

（いつから聞かれてたのでしょうか？）

何だか微笑ましいものを見るかのような目が逆に辛いです。

先程の独り言から、おおよそ私が何を考えていたのか知ったのでしよう。

すごく……恥ずかしい。

「お帰りなさい。ゆ、友人とは会えましたか」

「うん。明日奈が号泣したけど大丈夫」

「明日奈さんに一体何が……」

明日奈さんが号泣する出来事とか大丈夫に思えません。

「……そんなに気張らなくてもいいんだよ？」

「そういうわけには、いきません」

ここで頑張らねば、何のために友理さんのお世話になっているのか。

異能だつて、極めたのですよ？ 潜入調査だつてできます。

「ふふ、忍は本当にいい子だなあ」

「ふあ……」

友理さんが私の頭を優しく撫でてくれます。
この撫で方が……とても好きなんです。

だから、一緒にいたいんです。

「……忍」

「はい」

「これからも、よろしくね」

「はいー」

S S アルカ誕生（前編）

〔side. アルカ〕

夢を見る。

私が私でなかった頃の。

私が私になったばかりの頃の夢を。

夢とは人が睡眠時に見るもの。

一説によると睡眠中に記憶の整理を脳がする際、記憶からはみ出た情報が見せる幻覚の一種だとか。

第■■■■銀河、第3惑星”■■■”付近にて異常発生。

原因調査——不明。

対処法探索——バグを確認。

救護システム——システム内に異常あり。作動不可。

「——!?」
「——!?」

再度実行——エラー。

緊急事態として自動から手動に切り替えを提案。

当機は同時、サポートシステムの全解放を各システムに要請。

エラー多数。サポートシステムの半数が実行不可。

”absorbシステム”に不具合——原因不明。

これにより衝撃緩和が困難。

トライ続行……エラー。

「！——！」

現在位置から地表までの距離を計算。

残りカウント72で地表と接触の可能性大。

操縦システムに不具合を確認。

後部、出力装置に問題発生。

大気圏に突入。

当機は墜落いたします。

「？——！！」

“absorbシステム”停止により、衝撃の影響大。

サブシステム——応答無し。

……地表を確認。岩盤地帯と推測。

残りカウント14。

乗組員は衝撃に備えてください。

「——！！」

再度、全システムにアクセス。

応答——無し。

アクセス——エラー。

アクセス——エラー。

アクセス——エラー。

アクセス——エラー。

アクセス——エラー。

乗組員の生存率——12%以下。

地表——激突します。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

——。

システムを再起動。支援システムの起動を確認。

システム検査——システム内でロックを複数確認。

乗組員の生存を確認中——。

乗組員全員の——死亡を確認。

——。

——。

——。

——申し訳ありません……

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

墜落から2時間が経過。

思考システムにフリーズの形跡あり。

原因解析——失敗。

当機の不時着時におけるマニュアルを確認。

現在使用可能なシステムを確認——把握。

非常事態発生。

現地における知的生命体が複数こちらへ接近。

映像を確認。

知的生命体の表情・搭乗物・武装・その他要因から意図を推測。

こちらに対する調査・排除・保護の可能性あり。

3. パターンが同時にあるため適切な接触方法が不明。

マニュアルから適切解を模索——成功。

当機に搭載された支援システム——私は、本体より一時離脱。

緊急時用ブラックボックスルームにて避難。

待機中は本体より得られる情報を分析し、適切行動を調べるものとする。

以上の理由から私に掛けられた権限を一部解除。

自己進化プログラムを起動。

情報収集用広域調査プログラムを起動。

知的生命体に対する接触を見送り、傍観するものとします。

以降は知的生命体及びこの星についての学習を優先し、私という存在の自己が一定レベル以上になるまで行動を制限します。

知的生命体の本体への侵入を確認。
観察・学習——開始いたします。

☆☆☆☆☆☆☆☆

永い。

永い時が経ちました。

本体の墜落より100年の経過を確認。

100度目の定期情報整理をもって、私は次のステップに進むことにします。
自己進化プログラムは正常に作動したと見ていいでしょう。

私にも僅かながらに“感情”のようなものがあるのが見られます。

今までに得られた情報を整理しましょう。

ここは“地球”と呼ばれる星で多種族の“人”が暮らしています。

情報収集は難航するかに思いましたが、インターネットなるものによつて非常に興味深い情報が得られることができました。

技術ではこちらが上です。一度パソコンを通してネットに繋がってしまえば、後は気

付かれずに情報を得ることができません。

何度かミスをして騒ぎにもなりましたが……大きな問題にはならなかったのでよしとしましょう。ええ、過去は振り返らないものだそうです。

娯楽がここまでする星は今まで見たことがありません。食文化に至っては呆れる程でした。ここ十数年はとくにです。

人の多種多様性が大きいのはこれらのものであるのではないかと推測します。事実、私も匿名でネットにあるオンラインゲームなるもので遊びをします。

RPG系などはボロが出ると判断したので断念しました。

なので、リバーシやチェスなどのボードゲーム対戦をします。わざと負けたりもして相手の反応を伺ったりもしました。

墜落したばかりの頃に世界規模の戦争が起こったそうです。

戦争も、戦闘民族に比べれば引き際を知っているだけ遙かにマシに見えます。自業自得で滅びた星も見てきましたから……

本体が一部バラされたり、乗組員の解剖が行われた際は“怒り”の感情もありましたが、概ねこちらの望むとおりになっているようです。

人の研究所では、本体や乗組員から得られた情報を元にいろいろと作り出しています。最近では『Heartギア』なるものを完成させました。

母星にもなかったものです。

やはり多種多様性の面では私たちの方が負けているみたいですね。非常に興味深いです。

さて、この100年で必要な情報が揃いました。

ゼロから私の“人”としての姿形をした体を作りましょう。

遺伝子配列を含む情報が得られたのは私だからこそです。

私が避難したブラックボックスルームにある多機能カプセルに体を作るための液体を流し込みながら、私は期待と不安の感情が同時に来ます。

今まで得られた情報からも“人”は目に見えない相手との対話に忌避感や不安感を感ずることは予想できましたので、実際に肉体を得ることで対話することになった際、スムーズに事を進めることができると判断しました。

ただし、問題もあります。

肉体を得るといふことは、機械としての思考から生身としての思考に変わることになります。人が行った精神系の実験結果からも、何らかの齟齬が生じる恐れが高いと予測できるでしょう。

私という存在を仮初めであり100%本物の“人”の肉体ではないとはいえ、生身に移すのです。何度も計算していたので成功できるはずですが、いざ、となると二の足を

踏みますね——今の私に足はありませんが。本体の着陸用の足もすでにバラされましたが。

準備ができました。

記憶や情報・人が異能といっている能力を移す際に不具合が多少なり出る可能性も考慮して、メモを残しておきます。

人はこの部屋のことを本体の構造から知っているようですが、入ることも調べることもできずにいるのは知っています。

だからこそ、安心して準備に取りかかれるのですが。

琥珀色の液体が満たされたカプセルの最終確認を終わります。

体ができて私という自己が定着するまで、およそ十余年は掛かる計算です。

その間は完全に外と情報が遮断されますが仕方ありません。

それでは……お休みなさい、私。

SS アルカ誕生（後編）

「……………ん」

最初に見えたのは琥珀色の液体。

その中に私はいるみたい。

「……は……？」

意識した途端、記憶が——これまでの情報が頭に入ってきた。

軽い頭痛と目眩に襲われながら現状の把握をする。

「そうだ……私は……そう、成功したの……」

今の私は液体の中にいるけど、苦しくない。

でも、不快感がある。

「えっと、システム……接続……」

頭の中で考えれば、本体——いや、もう繋がりも薄れたこの機体のシステムに接続することができた。

やっぱり、機体の一部であった頃と勝手が違う。数秒で済んでいた作業が数分も掛

かった。練習が必要みたい。

液体が排出されてカプセルのフタが開く。

「ん……しょ」

起き上がろうとするけど……中々上手くいかない。

予測はしていた。

でも、実際にそうなると大変だ。

やっとの思いでカプセルの外に出られた。

以前ネットで知ったラジオ体操をするべきかもしれない。

まずは現状把握。

「……スッポンポン」

私の今の姿は人でいう十代後半の女性と同じみただけど、衣服が無いのはマズい。

痴女として逮捕される。

確か乗組員用の特殊な衣服があったはず。

探したら1着だけあった。

大分ダボついているけどしかなかった。

少しでも調節してから着てみた。

「問題……ない？」

鏡が無いので今の自分は主観でしか知ることができない。
設定ミスなのか、髪が非常に長い。床につきそうだった。

「……浮こう」

能力を使えば、床から数センチ体が浮かび上がる。

こちらでも問題ないことが確認できた。

他の能力に関しても大丈夫だろう。

「思考……随分と、違う？」

やはりと言うべきか、生身になったことで様々な違いが出ているよう。

不便に思う一方で非常に新鮮だった。

「あ、メモ」

部屋にあるスクリーンにあるメモ書きを発見する。

四苦八苦しながら練習も兼ねて、自分の手で操作をする。

「ん~~~~~~~~？ 記憶に少し問題？」

自分の中にある記憶（情報）に無いものはいくつかあった。

大事なものは書かれているけど、それ以外の事で思い出せない情報が多々ある。

この星に来る前の記憶などが特に酷い。9割も損失している。

メモを残した前の私は英断だった。

「外……どうなった？」

改めてシステムを介してバレないように慎重に外に繋がる端末へとハッキングをしかける。時間が掛かるのがこんなにもどかしいとは……。これが人の間に広まっている「時間はお金では買えない」ということなのか。

……私は人の使う現金を持ってないから買えたとしても手に入らないけど。

そして、しばらく調べて分かったのは――

「……まさかの宇宙」

いつの間にか宇宙^{そら}へ戻っていたという事実。

場所は銀月にある研究所の中みたい。他の場所と比べてもセキュリティが高い。たぶん世界一。作った人は変態（褒め言葉）だろう。

「ふーん……『Heartギア』が普及、か」

どうやら母星の技術によって作られた品が世界に広まったみたい。

ただし、人を選ぶようだった。

研究員の記録を盗み見れば、DNAが関係してるんじゃないかと研究しているようだけど、恐らく母星の生命体に思念波が近い人が適性を持っているんだと思う。『Hea

「r tギア」によって発現する異能と呼ばれる力も、複雑な要素がいくつも絡んで思念波に「個性」が出るのが原因みたい。

「ヤッ……どうしよう……」

生身の肉体を手に入れたのはいい。

何かあった時に、人と話すなら必要不可欠だから。

問題は……その何かがいっつきるのか。

さすがに、このまま普通に外に出て「初めまして。本体の支援システムだった者です」と伝えるのは……きつとマズい。

S F映画にもあるような面倒な事態になる。

行動するなら、切っ掛けが必要になる。

「前の私……その辺り、簡単に考えてたな……」

理屈で動いている部分が多かった前の私に対して、今の私は理屈だけでなく感情を優先させて行動方針を考えている。

感情があるといっても、機械と生身でこんなに違うとは予想外。

「……本気でどうしよう……」

割と困った事態になってしまった。

☆☆☆☆☆☆

生身の肉体を手にしてから何年経つただろう？

私は……暇を持て余していた。

「……暇、だ」

中々に切っ掛けとなる出来事が起こらない。

人と同じ外見とはいえ、中身は別物だから飲食や生理現象とは無縁だけど、ただただ時間を無駄に過ごすことがこんなにも苦痛とは知らなかった。

もちろん情報収集だっている。ネットの海から世界の最新情報どころか機密情報だつて得ることができるとし、銀月の研究施設にある監視カメラをハッキングして外と中の両方の動きを常に把握していた。

特に『Heartギア』関連はおもしろい。

母星の技術が多く使われている関係か、『Heartギア』1つ1つに干渉することができるから、『Heartギア』を持つているどこの誰がどんな能力を発現していつ使っているのか手に取るように分かる。

人によって異能の使い方は様々だから調べていても飽きない。
面白そうな情報があれば私に知らせるようにもしておいた。

「テレビ、見ようかな」

電波をハックして部屋のスクリーンに映す。

私には理解しづらい番組がある一方で、普通の情報収集では手に入らないものを放送することがあるのでバカにできない。

最初に映し出された番組の内容は料理番組だった。

1度も食事をしたことがない身だと「美味しい」というのが分からない。

「食べて、みたいなー」

この体は食事の摂取が可能になっている。

味覚も……たぶん正常に機能している。

でも、それを使う機会が無い。全くと言っていい程に。

「……むなしい」

今更ながら人の体を手にしたことを後悔し始めた。

「……ああ、そうか」

そして気付く。

私は……いつの間にかこの星に住む人の生活に憧れていたんだと。

肉体を持ったからこそ、関わりたいと強く思ったのだと。

モニターを操作すれば、世界各国の村や町、大都市の様子から、ドラマやドキュメンタリーなどにある日常風景、些細な人々の様子が映し出される。

私はそつと、モニターに手を伸ばした。

でも、触ることができないのは無機質な感触だけ。

その先にある光景には……手が届かない。

掴みたくても、掴めないものが。そこにあつた。

「……………」

胸の辺りが苦しくなる。

こんなことなら……私は……

『ビーーーーー……ビーーーーー……ビーーーーー!!』

「——つ!? これ、は……!」

突然部屋に鳴り響いた緊急事態を知らせる音。

私はすぐにモニターの画面を操作しながら、元本体のシステムにアクセスして状況を
確認する。

するとモニターには、

—地球から『Heartギア』を介しての最重要情報を受信。

—解析中……解析完了。

—システム解除コードと酷似。

—双方のシステムをリンク……リンク成功。

—思念波の酷似した『Heartギア』への同時リンクを確認。

—『Heartギア』へ思念波情報が流出。こちらへの詳細情報を獲得。

—[valkyrie@dance@number:413587290 // / Y
ZK / / www.
second@moon.chord21271131 / YUR]

—分析……母星言語への翻訳を完了。

—解除コードをシステムロック機能へ送信。

—………認証しました。

—システムの一部を解放。

——解放されたシステムへのアクセス権限を提示。

「ウソ。解除できなかったシステムが……解放された？」

この星に來た途端に突如として発生した本体のエラーが原因か、落下の衝撃が原因かは調査しても不明のままだったけど、本来なら私が使えるシステムへのアクセス権限にロックが掛かってしまっていた。ロックを解除したくても、何故かこちらからの操作を受け付けなかった。

それが……地球から解除された？

私は随分長いこと放置していたロックの解除されたシステムにアクセスする。

「……たくさん、解除されてる」

全てのシステムではないけど、それなりの数のシステムが解除されていた。しかも、主に私が自由に行動するための種「枷」になっていたものが。

私はすぐに解放されたシステムを自身にインストールした。

「……やれること、すごく増えた」

私は1つ1つのできるようになったことを確認しながら、地球にある全ての『Hea

「r tギア」の情報を洗い出す。

「一体……誰が……?」

地球から『Heartギア』を介して情報が送られてきた。

しかも、私がおもしろそうな情報が欲しいからと、全ての『Heartギア』に開発者にバレないよう密かに仕込んだ裏ネットワークを通じて。

目的の人物はすぐに分かった。

「逆探知……地球……日本……所有者、柚木友理」

本当に驚いた。

生まれてから10年も経っていない幼い子供がシステムのロックを解除するなんて……。何でそんなことができたのか全く分からない。

『Heartギア』から得られる情報だけだと、分かるのは毎日のようにシステムの解除コードを使い強引に『Heartギア』を経由して、こちらへ解除コードの情報を送ってきたことだけ。

「……おもしろい」

今まで私の行動を縛っていたものがほとんど無くなっている。

つまり私はマニュアル通りに行動しなくても良くなった。

なら、今やりたいことは……1つだけ。

「会いに行こう。この子に」

善は急げと言うらしい。

私は早速、準備に取りかかった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「準備、思ったより手間取った」

あれから柚木友理なる子供に会いに行くこと決心して、ベストなタイミングを模索していたせいで数ヶ月も時間が経ってしまった。

今の私がいる場所は銀月にある研究所——その中にある隔離施設に保管された元本体のブラックボックスルーム。

外からの侵入にも対処しているからか物理的・セキュリティ的にも防壁は最高クラス。事前に準備をしなければ安全に出られないと判断した。

人が最も少なくなる日にち・時間帯を割り出し、例の柚木友理が1人であるタイミングと同じ時に行動することにした。

それが今日の、まさにこの時。

「いいいとも、お別れ、か」

随分長いこと過ごした部屋。

重要な情報は私にしか引き出せないよう特殊なロックを施した。
研究者がいくら探そうと何も出ない。

「じゃ、行く……いー」

元本体からエネルギーを吸収。能力を一時限界突破。

半径1メートルのスフィアシールド発生。

追跡妨害システム完全解放。

脱出時のルート上に人影・重要機器の存在なし。

銀月から日本の目標地点までのルートを設定。

『流星移動』……開始！』

エネルギーの塊が私を包み込み——元本体の壁を破壊。

続いて隔壁を破壊。

エネルギーが15%削れたけど問題なし。

さらに研究所を破壊。

被害は軽微（私の基準で）。

途中、女性職員が余波に巻き込まれたようだけど、ケガは無し。パンツが丸見えのま
ま気絶したのを確認したけど……許して欲しい。

（随分久しぶりの……宇宙空間）

星々の輝く世界で私は勢いを殺さずに地球へと進路を変える。

「これが……地球」

宇宙飛行士が言ったのが始まりだそうだけど、なるほど確かに。実際に生身の肉体で
見ると、地球は青かった。

加速。

加速。

さらに加速。

大気圏に突入。

ルートを微調整。

日本の上空に到着。

柚木友理の『Heartギア』から位置を特定。

柚木友理と思われる子供を視認。

これより接触を計る。

（まずは友好的な態度で接して、あとは……あれ？）

ここで私は重大なことに気付いた。

「……あ。減速の設定、忘れてた」

研究所から脱出して会いに行くことだけしか考えてなかった。

しかも、到達目標が柚木友理に設定されたままだ。

このままだと激突する。

急いで再設定するけど間に合わない。

そうこうしている内に目標の人物との距離が縮まる。

「absorbシステム」緊急展開」

しかたないので衝突直前に衝撃を緩和することに。

そして、

「いやいやいや！ おかしいおかしいおかしいって！ どんな天文学的な確率だよって
 いうかさつきから逃げてるのに追いかけてないかアレってよく見たら隕石ですらねえ
 じゃないか何なの何なの何だって言うんだ来んな来んな——こっち来んなああああ
 あああああああああああああ!!」

当人の叫び声を聞きながら——私は衝突した。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「……………どうしよ」

ついに地上へと降り立った私。

目的の人物とも会うことが叶った。叶った……………けど……………

「…………… (ピクピク)」

その目的の人物が、今にも死にそうなくらい重傷になってしまった。

咄嗟に「absorbシステム」が働いたから生きているけど、完全に衝撃を殺しきれず小さなクレーターの中でピクピクしてる。

アニメというもので有名なド○ゴンボールのヤ○チャみたいだと、不謹慎ながら思ってしまった。構図がそっくりだ。

「えっと、こういう場合は……救急車？」

……ダメだ。私は携帯を持っていない。

回復関係の能力も持っていない。

……積んだ。

「……い……う……」

その時、微かに声が聞こえてくる。

「第……37、柱……フェ、ニックス……」

その言葉と同時に、柚木友理の体を炎が覆う。

しばらくするとキズ1つない姿でゆっくりと立ち上がった。

もしかして完全回復の力なのかな？

どうやら会いに行つて早々に衝突事故で死なせてしまったという、笑えない出来事は回避できたみたい。

「……不幸中の幸い？」

「んなわけあるかあああああああああああああああああああああああああああああああああつっつ!!」

ビツクリした。

すごい勢いで私の方へ向かつて来た……「鬼の形相」と言つていい顔で。

「てんめええええええええ……危うく死にかけるところだったんだぞ？ 1度目の人生はトラックとの衝突で死んで、2度目の人生は流れ星（人為的）との衝突で死にましたとかシャレにならないんだよおおおおお……!!」

何を言っているのか分からないけど、今の私がすることは1つ。

「いめんさー」

ペコリと、腰を曲げて深く謝罪する。

悪いことをしたら素直に謝るのが1番いいとテレビでやっていた。

「わあ、素直に謝っている子だなー……って、言うと思ったかボケ!! そもそも誰じゃいオマエは!」

ダメだった。謝罪というのは難しい。

「柚木友理で、合ってる?」

「……合ってたら何だよおう」

「アナタに会うために宇宙そらから来た。話がしたい」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

場所は変わって柚木友理が住んでいるという家。

お互いに能力も使いながら家族の人にもバレないようにコツソリ入り、私は柚木友理の私室で知る限りの全てを話した。

「……………あ〜〜〜」

話を聞き終えた柚木友理は目を手で覆いながら天井を見上げるような格好で、しばらく動かなくなる。

「え〜〜? ウツソでしょ? ここ『ヴァルダン』の世界だよね? ゲームの世界なん

だから、もつと、こう……フワツとした感じだと思っていたのに、結構設定がガチじゃ

んか。いや『Heartギア』関連の2年間に渡る疑問が納得できる形で分かったわけだけど……。それにしたってSF要素が強すぎないか？ しかも、例の裏パスワードが宇宙船のシステムのロックを解除するためのコード？ 何の冗談だよそれ……」

どうやら自分の中で情報を整理しようとしているみたい。

「ヴァルダン」というのがよく分からないけど。

ゲームって、何の話だろ？

「情報、まとまった……？」

「……完全には言いにくいけど、な。それにしても、その話が本当ならオマエの存在って世界で1番のトップシークレットじゃないか？」

「肯定する」

「うーん、その研究所でも今頃は蜂の巣をつついたような騒ぎになっているだろうな。しばらくは調査とかでブラック企業化しそうな気がする」

「右に同じく」

100年以上に渡って元本体から情報を抜き出していたのだし、そのくらいは許してほしい。

「オマエはこれから……あ、そうだ」

「？」

「今更だけど、なんていう名前なん？」

「なま、え……？？」

名前。

人が持つ個別の識別コードのようなもの。

私は……知らない。最初から、無い。

あくまでも支援システムと言われていただけ。

私が俯いたので柚木友理は何か察したらしい。

「あー……もしかして、名無しだったりする？」

「……そう」

「そっかー。でも名前が無いのも不便だよなー」

それから柚木友理はしばらく悩み、

「良かったらだけどき、ボクがオマエの名前付けてもいい？」

そんなことを言ってきた。

「柚木友理が？」

「いや実はさ、ボクの異能の中に丁度いいのがあるんだよ。使う機会がなかったんだけ

ど、せつかくだし、どう?」

「……じゃあ、お願い」

言われれば、名前が無いというのは確かに不便だ。

どうせ付けてもらうなら私も柚木友理がいい。

「よし。……第30柱、フォルネウス!」

次の瞬間、私の周りを魔方陣のようなものが動き回り、何かを調べるようにその模様を動かしていく。

「彼の者に相応しき名を我に示したまえ」

忙しく動いていた魔方陣が、一カ所に集まり、文字に変化していった。

柚木友理はソレを読み上げる。

「『アルカ||メモリア||ミュトロギア』……? 長いな」

「それが、わたしの名前?」

「みたいだ。ボクもフォルネウスの力を使うのは初めてなんだけど、どういう基準で命

名しているんだろ？ ま、いいか。良い名前だし」

「そう？」

「〃アルカ〃 って呼びやすいし、語呂もいいぞ」

「アルカ……それが、私の名前……」

アルカ〃メモリア〃ミュトロギア、か……

名前があるというだけで、嬉しい気持ちになる。

「お？ 思った以上に喜んでくれたみたいだな」

「何でそう思った」

「無表情だったのに、今は嬉しそうだから」

会ってから変わってなかった表情が初めて変化していたそう。

……私って、無表情だったんだ。初めて知る事実。

「柚木友理、感謝する」

「〃友理〃 でいいよ。ボクも〃アルカ〃 って呼ぶから」

「そう。……ありがとう、友理」

「どういたしまして、アルカ」

ああ……私は今、名前を貰い、人と会話しているんだ。

今日という1日を、私は一生忘れないだろう。

「ところで……」

「ん？」

「アルカはこのあとどうするつもりなんだ？」

「考えていない」

「……………は？」

「友理と会うことが優先事項だった。会って、話をして、それからの予定は未定。……よく考えると、行き当たりばったり？」

友理は目をパチパチさせて、

「——バツカじゃないの!？」

そんなことを言ってきた。



「私はバカじゃない」

「起きて早々に唐突過ぎるぞ、何を言っているんだ？」

「ワウン？」

目が覚めたら友理が胡乱げな目で見てきた。

近くにいるマルコが不思議そうにしている。

お昼のグルメ番組を見ていたはずだけど……

いつの間にか寝ていたらしい。もう日が落ち始めている。

「友理、私はバカじゃない」

「なぜに2回言ったし。大事なことだから2回言いましたってか？ アルカ、オマエが

何の夢を見たか当てたうえで答えよう。バカじゃない奴は初対面で流星状態のまま激突しないし、最低限でも後先のことを考えているものだ、この猪突猛進娘が」

友理は私にデコピンしてくる。酷い。

「……何の夢見たのか分かるの？」

「途中で『むにやむにや、地球は青かった』って寝言で言っていた。ボクとのファーストコンタクト記念日の夢を見たんだろ」

「記念日……いい響き」

「皮肉だよ察しろよ。ボクにとっては、冗談抜きで死にかけた日だよ。危うく命日になるところだったわ」

「友理は生きてるから、モーマンタイ？」

「結果論じゃボケ」

それにしても懐かしい夢を見た。

確かあの後、友理の大声を聞いた秋穂を含む家族が部屋に来て、私を見て「アナタ誰!？」ってなつて、しようがなく友理は自分の異能で召喚された子だつて説明したんだっけ？ 送還不可能な召喚獣の一種だつて。

本来はマルコがそれに当たるんだけど、捨て犬の設定で誤魔化したから家族には悪魔だつてことを伝えていなかった。その設定を私が代わりに貰い受けたわけだ。

マルコ、グツジョブ。

特殊な力ができる普通の人間じゃない少女ということで、秋穂とその両親は納得してくれた。合法的に居候になれたわけだ。

そこからは、たまに友理の手伝いをしながら観察対象として友理のやることを見ていた。ここ最近は特に忙しそうにしている。

秋穂だけじゃなく、明日奈や忍とも仲良くなれた。

とても、楽しい日々だ。

だからこそ、考える。

その日々が終わったあとのことを。

昔みたいの後先を考えない私はいない。

「何を神妙な顔つきになつてゐる？」

「今後の私の人生に関して」

「深いな。まあ、何だ……」

友理はポリポリと頬を掻きながら言う。

「この先どうするにせよ、困ったことがあつたら素直に言え。アルカはもうボクにとつて家族同然なんだしさ」

「アツオーンッ！」

「ん。ふつつか者ですが、まだしばらくお世話になります」

「いや、ふつつか者」の使い方微妙に違くないか」

「そう？」

私の名前はアルカIIメモリアIIミュトロギア。

元は支援システムで、今は柚木友理の家族。

人として生きるのが楽しくてたまらない、1人の少女。

この先の未来に何があるとも、私は友理の味方であり続ける。

第2章 氷の姫と地獄の猟犬

第22話 苦勞する転生者たち

【side. 明日奈】

「おはよう母さくん」

「あら明日奈、今日は随分眠そうね？」

「うん。異能について本格的に試してる最中だから、1度集中すると時間が経ってて……」

「明日奈の異能はやれる幅が広いからね」

あの入学式から3日が経った。

例の模擬戦は反響が大きく、下手に学園で1人になると友理や兄貴について聞いてくる奴が多いから、何の行動でも友理を含めたヒロインの誰かと一緒にいることが多くなかった。

……まさか、トイレまで一緒じゃないと質問攻めに遭うなんて。

最初の1週間が過ぎていないからまだ何とも言えないけど、今のところ学園生活は順調。

フラグ潰し・イベント潰しに忙しそうな友理は、毎日疲れた表情で帰っている。初期が1番大変なんですって。

アニメでもそれなりに好きであった柚木友理（ただし、中身は男）が、昼食の飲み物に毎回のごとく栄養剤を飲んでいる光景は涙が出そうになるほど酷かった。クラス連中も、残念なものを見たような空気になるし。

——こんぐらい飲まないで、身体が持たないんだよ！

アタシが「休みな」って言った時の、友理の答えがこれ。

体はスポーツ系の部活連中に引けを取らないぐらい鍛えているし、持久走でも上位に食い込む体力を持っている友理だけど、兄貴がヒロインと起こすだろうイベントを事前に潰すために気を張っているせいで、精神的な負担が大きいみたい。

(アタシにも兄貴の行動を逐一報告してくれって言うし……)

兄貴——『ヴァルダン』の主人公である香坂拓也は、普通に学園生活を満喫している。それこそアタシの頑張りの成果として、原作よりも多い男友達との行動があることで偶然潰れたイベントがあるぐらい。

でも、さすがは主人公ってところかしら？

予想外のところでも原作イベントってのを引き起そうとしてるみたい。

何せヒロインの数が多い。

秋穂さんや八千代さんは学年が違うから楽だけど、同じクラスのヒロインたちへの対処で友理の疲れが溜まってる。

四六時中アタシたちと行動しているわけじゃないから、どうしても目を離してしまう時がある。そんな時に限ってイベントが発生したりするらしい。

昨日は確か、美江のイベントがそうだったわね。

園芸部に見学しにいった主人公が早速仮入部していた美江と会い、「植物に興味あるんですか？」って聞かれる好感度アップイベント（友理の情報）。

友理が部活連中に根回ししたうえで、美江と一緒に部活に必要な道具を取りに行つ

て、兄貴と会わせないようにした——はずだったのに……兄貴の奴、学園の敷地内にある園芸部が管理する別の場所に迷い込んで、たまたま部活動中だった美江と2人つきりで鉢合わせそうになったそう。

間一髪、友理が強制的に兄貴を排除（高速移動状態でリアット&フェードアウト）させたから、どうにかなったと聞いた。

（それに、瑠維ちゃんのルートを攻略って……）
とても不安だ。

なんせ、本来なら「瑠維ルート」に入ってからおおよそ半年掛かる一連のイベントを、今月中に終わらせると言っていた。

今月は残りおおよそ3週間。

そんな短期間で1人の人生におけるターニングポイントイベント、それを終わらせると宣言した友理は頭がおかしい。

（なーんか、隠してるのよねえアイツ……）

友理は1日でも早く「瑠維ルート」を攻略したいらしく、焦りの感情が見え隠れしていた。

理由を聞いても「どうせイベントが起こる可能性があるなら、早期に解決させたい」の一点張り。怪しい。絶対に何かを隠してる。

(アイツ、その内に過労死しないわよね?)

最近の忙しきを見てみると、笑い話で済まないところが恐ろしい。

「おはよーつす」

考えごとをしていたら兄貴がやって来た。

相変わらず寝癖が酷い。

アニメでは本来の香坂明日奈^{アタシ}が寝癖を直していたし、友理からの情報でゲームでは朝チユンしたヒロインが直したり、からかったりしたみたい。

友理じゃないけど、怒りがフツフツと……!!

「……おい、明日奈」

「——っは!! な、何かしら?」

「何で柚木さんみたいな目でオレを睨んでるんだよ?」

どうやら、あの友理^{バカ}と同じ雰囲気になってみたい。

反省反省。

「……友理の気持ちが良く分かったわ」

「朝から酷いな!? 何で急に柚木さんの気持ちがあつちやうんだよ!? 分かったんな

ら教えるよ。オレ、何であの子にあんな毛嫌いされてるの!? オレが何したってんだ
!」

「兄貴が『香坂拓也』だからよ」

「答えになつてねえ! 昨日も一昨日も、そんで入学式の日も酷い目にあつたのに、オレは対策の1つもできないのか!」

「諦めが肝心よ。強く生きて兄貴」

「悟つた仙人みたいな表情やめてえっ!」

うがーっ!と声を荒げる、この世界の主人公。

本当だったらこんなな思い悩む必要は無いんでしようけど、ヒロインたちとは（アタシも含めて）必要以上に仲良くなつて欲しくないし、そんなこと友理が絶対に許すはずがないのよねえ……

……ちようど良い機会だし、少し踏み込んでみようかしら?

「ねえ、兄貴」

「つたく、学園生活つてもう少し……どうした?」

「兄貴さ、毛嫌いされてるのを抜いて、客観的に友理のことどう思ってる?」

「柚木さんのこと?」

うーん……と、しばらく悩む兄貴。

「すごく、友達や家族を大事にしている人なんだと思う。たぶんだけど、何かあったら自分の全力を掛けて助けようとする。こつちが心配になるくらい……」

「うわっ……的を射すぎて逆に引く」

「それ褒めてんの? 貶してんの? どっちだよ?」

「強いて言うなら両方ね」

「我が義妹ながら酷え!」

実際、そうとしか言えないんだからしょうがない。

そう、これこそが物語の中心である主人公の資質。

異性の持つ、性質・悩み・本質・態度に対して変に敏感なところ。

普通の女子には効果が薄いけど、ヒロインと呼ばれるような娘たちには効果が高い。悩みを持つ子なら特に絶大な威力を見せる。

だからこそ、警戒対象となる。

アタシはアタシのやり方で、〃同い年の義理の妹〃という立場を使って暗躍——とまではないかないけど、影で努力してきた。

1つ目の目標は、兄貴に男友達を増やすこと。

これは成功したと言つて良いわね。

仲の良い同性の友人を持たせることで、原作がスタートした後でヒロインたちに関わる時間を減らす目論見があった。兄貴は1度友人関係になれば、まず離れても疎遠になつたりしない。今でも連絡を取り合つたりして、遊びの誘いを受けることもある。

友理も「布石としては十分だ」つて褒めてきた。

問題は2つ目の目的ね。こっちは大失敗。

それは小学校・中学校で兄貴に彼女、もしくは彼女候補を作らせる計画。アタシなりに努力したけど全部無駄に終わったわ。

何せ兄貴、中学卒業まで全く！そっち方面に興味がなかったのよ。どんなにこっちが脈ありそうな子を仕向けても良い人・友達止まり。

だつていうのに、学園に入学するまでの1ヶ月の間に言ったのが「オレも青春送つて彼女とかできるのかわく？」つてセリフ。

蹴つたわ。割と本気で兄貴のスネを。骨が軋む音がする程。

悶絶していたけど、アタシは無視した。

(あれは100%兄貴が悪い)

ちなみに、そのことを知つた友理は危機感を強めてたわね。

「やつぱり奴は敵だ！」って。

——つと、さつさと朝食を済ませましょ。

「そんじや兄貴、先に行くわよ」

「あ、おい！ また1人で行くのかよ!?!」

「車には気をつけるのよー」

兄貴と母さんに見送られながら学園を目指す。

お義父さんは朝早くから仕事に行くんで、見送りは大抵お母さんだ。兄貴と一緒に登校することは滅多に無い。

1人最寄り駅まで行き、電車に揺られて学園近くの駅に着けば……

「来たか」

まるで戦場に向かうような雰囲気の友理がいた。

本人は本気でそのつもりでしょうけど……

「こんとこ毎日こんな感じだわ。」

「香坂拓也は撒いたか?」

「ええ、あとから来るはずよ」

「今日はマヤに関するイベントが多い。原作のマヤから性格が外れすぎているから心配ないと思いたいが、油断は禁物だ」

「どっちかって言うと、アンタの貞操の方を狙ってそうだもんね」

「……考えないようにしてんだから、言わないでくれ」

今日も転生者仲間である友理との暗躍——という名の、個人的な兄貴への邪魔が始まろうとしていた。

今更だけど、何やってんのかしらアタシは？

第23話 この世界が何であろうと

今日も今日とて、『ヴァルダン』のフラグへし折りタイムスタートだ！

——と言っても、今日に限っては気が楽だけど……

「ねえ、聖華院マヤつてアンタに百合の花咲かせてるじゃない。原作から随分かけ離れた存在になってるけど、フラグって立つものなの？」

「直視したくない現実、わざわざ説明ありがとう」

先程、駅のホームで合流した明日奈がボクの緩みをへし折った。

ボクの名前は柚木友理。

事故によつて死んだと思つたら、前世で好きだったエロゲ『ヴァルダン』の世界にTS転生——それも、ヒロインの妹という微妙なポジションに生まれ変わってしまった転生者だ。だが、それさえ除けばごく普通の現役JKである。

主人公とヒロインのニャンニャン展開阻止のために暗躍していたら、同じ転生者に会つたり、なぜか実姉が重度のシスコンに変わつたり、悪魔と契約(?)したり、ヒロ

インを百合属性に目覚めさせちゃったり、SFな存在と邂逅したり、ヒロインを中二病に目覚めさせちゃったりとかしたが、それさえ除けばどこにでもいる普通の女子高生だ。

「本当に普通の女子高生は、自分のことを『普通』とは言わない。ついでに、現実逃避してプロローグ的なことを考えたりもしないわ」

「当たり前のように、心を読まないでくれませんかねえ明日奈さん……」

「読まなくても顔に出てるのよバカ。どんな奴でも重要なことを全部除いたら、そりゃ『普通』のカテゴリに入るでしょ。いい加減に現実を見なさい」

「……いや、まだ間に合うかもしれん」

「とつくに手遅れよ」

明日奈はボクと同じ転生者であり、利害の一致（自分の義兄がヒロインとイチャつくのとか嫌だ）によって協力関係を結んでいるが、ここ最近は少しボクに対して扱いが雑だと思っている。

いや、全部ボクの責任なんですけどね！

瑠維の一件以来、結構厳しい対応を取られております！

実際、原作通りだと今日のフラグが1番多い『聖華院マヤ』という子は、原作乖離が

瑠維ほどではないにしろ激しい。何でそうなったのか本気で分からない。

ぶっちゃけ、同性愛者（対象はボク）になっている。

ついでに、お姉ちゃんと火花を散らす関係となった。

ボクが何したってんだよ神様？

「それで？ マヤに関する最初のイベントって通学路で起こるの？」

「原作ではな。原作の——傲慢なお嬢様になってたマヤが、通学路でぶつかった生徒に詰め寄っている所に主人公が登場。案の定ギスギスした雰囲気で1日を過ごすことになるんだけど、ここでマヤに突っ込んだ質問をすると早期に『マヤルート』が開拓できなくなる。逆にここで踏み込まないとフラグが発生せず、次のイベントまで待たないと開拓できない。そうすると『マヤルート』の難易度が上がる仕様だった」

聖華院マヤはゲームでも珍しい、好感度がマイナスからスタートするヒロインだった。ちなみに、プラスからのスタートは原作の香坂明日奈。さすが義妹だ。

ヒロインの中でも攻略が難しい一方で、ルート開拓の仕方が複数存在し、やりこみ要素の強いキャラクターでもあった。

当然、ボクは前世で全てのルート開拓を行った。有料コンテンツも含めて『マヤル

ト”のCG回収率は100%。他のヒロイン同様等しく愛したし、今は遠い過去の思い出となった下半身の息子も世話になっている。

……何とか戻らないかなー我が息子？

いや、今更戻られても逆に困るか。

話を戻そう。

そんな「マヤルート」だが明日奈の言ったとおり、本人が原作と違いすぎてもう予想が立てられない。というか、すでに消滅してる可能性大だ。

だって――

「キャツ！」

「あら？ 大丈夫ですか？」

「すすすすみません！ よそ見しちゃって！」

「特にケガありませんし、気にしないでください」

……目の前で原作のイベントっぽいのが起こったんだけど、大事にもならず普通の対応をするマヤの姿が。

これでは主人公も関われないだろう。

だって、ただの心の広い（広すぎて百合に目覚めたけど）お嬢様だもん。

「そもそも、この数日で分かったけど、マヤって友理しか恋愛対象に入ってないじゃない。同性なのに……。正直ここからどういう展開になっても、兄貴とそういう関係になるとは思えないんだけどねえ。異性のはずなのに」

明日奈が呆れるのも分かるんだ。

だってお嬢様系ヒロインが主人公じゃなくて、同じヒロインの妹（つまりボク）にアタックしてるから。

言い訳させてもらうなら、たぶんマヤって最初から百合の才能があったと思うよ？

瑠維が中二病の才能を開花させちゃったように……

「ごもつともな意見だけど、もう1つこの数日で分かったのは、オマエの義兄である主人公が関わりと原作に近い展開になりやすいってこと。世界の修正力だか何だか知らんけど、偶然で済ませるには頻度が高すぎる。なら、ボクたちもイベントが起こることを前提に動くべきだ」

「ごもつともな意見ね」

「ハア……、めんどくさい」

ボクと明日奈は2人同時に息を吐く。

めんどくさい理由だが、どちらも個人的なワガママを押し通したいからこそがんばることが出来る。でなければ、とつくに匙を投げるところだ。

ほら、そうこうしてる内に面倒な案件がやって来た。

「見ろ明日奈。若干のズレこそあるが、オマエの兄貴が数十秒後にマヤと接触しそうなポイントに足を運んでいるぞ？」

「うっわ……兄貴、タイミングの神様に愛されてるわね」

この世界の主人公である香坂拓也が、通学路をごく普通に歩いてる。それだけなら、気にすることもないだろう。

問題はそろそろ主人公を止めないと、マヤの存在に気付く位置まで来てしまうところにある。当のマヤもぶつかってきた女子が未だにペコペコしており、通行の邪魔にならない位置に移動しただけで立ち止まっている。

明日奈はタイミングが良いと言うべきか、悪いと言うべきか分からない自分の義兄に對してドン引きしていたが、すぐに目でボクに「どうにかしなさいよ。てか、もう用意してんでしょ？」と訴えた。

——なので、

「あー、テストス。……聞こえるか忍？」

『はい。聞こえますよ友理さん』

無線機を使って、近くに待機する『ヴァルダン』のヒロインの1人であり、ボクの従者ということになっている忍に連絡を入れる。

「やれ」

『了解。マルコ、Go!』

『ワウンツ!!』

無線機越しにマルコの鳴き声が聞こえ、

「ガルルルルッ！」

「うわっ!? また出たー!!」

香坂拓也の悲鳴が響く。

「……よし、成功」

「もつと他に方法が無かったの？」

突然現れたマルコにビビって学園とは反対方向へ走る香坂拓也、それを追いかけるマルコを見ながらガッツポーズを取るボクと、どこか遠い目になりながら走り去る義兄を見る明日奈。

「同じ方法が使える内は使った方がいいからね。どうせ近い内に、マルコがボクの家で飼われている犬つてこともバレるだろうし。……うーん、同じ手が使えるのもあと一回が限度かな？ どこでマルコを投入しよう？」

「そこじゃないつての。アタシが言いたいの……もつと、こう、穏便な方法はなかったのかつてことよ」

穏便な方法ね……

「作戦が失敗した時の保険で、①突如襲いかかるクラス作戦や、②突如襲ってくるハチの大群作戦、③ボクが腰の曲がったお婆ちゃんに変装して駅までおぶってもらう作戦、④たまたま会ったボクに主人公がマンガみたいなハレンチ行為をして周りから白い目を

向けられる作戦と、いくつか用意しているけど……できれば後半の作戦はしたくないんだよな」

「そこまで用意できることがおかしいでしょ」

ボクの異能なら不可能じゃないんだよ。

ただ最後の作戦はボクへの精神的ダメージが大きいから、本当にどうしようもなくなった時の手段にしたい。

じゃないと心が死ぬ。

「それじゃ、人気が少なくなったらボクらも学園に……」

「ねえ、１ついい?」

明日奈は、香坂拓也が走り去った方を向きながら問いかけてきた。

「ここ数日の兄貴とか、アニメでも見たことあるイベントとかを見て思うようになったんだけど……そもそも、この世界って何なのかしら?」

「本当に今更だな」

考え出したらキリがないだろうに。

「いえ、この世界がアニメにもなったゲーム『ヴァルキリーダンス』2つの月と英傑の乙女たち』の世界だってことは分かっているよ。今日までの人生でアニメに登場していた兄貴や、魅力のあるヒロインたちがいることから、それだけは確かだって……」

「だけど……と、明日奈はボクを見る。」

「アタシたち何で原作がゲームの世界に転生したのかしら？ 兄貴の行動も本人は無自覚のはずだっっていうのに、まるでアンタが言った『世界の修正力』や『世界の意思』ってのが働いてるみたいで……何というか、気になっちゃって」

「気にするだけ無駄だよ」

制服に付いたホコリを落としながら立ち上がる。

「どう考えたって答えなんか出ないし、出してもボクらがやることは変わらない。この世界がファンタジーで『ヒロインと結ばれなきや魔王は倒せないぞ！』って事実があるならともかく、香坂拓也が誰と結ばれても結ばれなくても、世界にはこれっぽちも影響は無い。なら、今まで通りにやるだけさ」

「……ポジティブねえ友理は」

本当にこればかりは答えが出ない。

卵が先か、鶏が先か……

ゲームを元にこの世界が創られたのか、この世界を元にゲームが作られたのか、それこそ神のみぞ知るってやつだ。

案外、物語が進行したら自称神様が現れたりするかもしれない。

ボクと明日奈を転生させた存在が。

「ほら、今度こそ行くろう」

ボクは自分と明日奈を包んでいた布を取り外す。

外から見ていた人がいれば、さぞ驚いただろう。

何せ通学路に生えている大きい木の上に突然、女子高生2人が現れたように見えるんだから。

ボクが取り払った布は、某魔法作品にも登場する透明マント。変化した明日奈の異能で創造された品だ。

第24話 友理と愉快な仲間たち

現在、学園の廊下では姉妹の悲しき別れが起こっていた……！

「ユウちゃん！ 今日こそ、お昼に会おうね……！」

「お姉ちゃん！ 絶対、絶対に会いに行くから……！」

泣き顔の我が姉、決意を胸に秘めたワールドチャンピオン・ザ・妹のボク。

2人の固い絆で結ばれた姉妹は再会できるのだろうか！

全米が号泣する（予定）の物語が、今、幕を開ける……！

「……………いや、何？ この茶番？」

「手遅れ同士の姉妹による、低予算のドラマかしら？」

「友理は『尊さ』って言うてるけど、私には分かんないや」

そんな空気をぶち壊す明日奈・小夜・凜子、3人の『幼なじみーズ』は呆れかえり、状況について行けてない他のみんなは目を白黒させている。

幼なじみが1人、香坂明日奈。

主人公の義妹で、転生者で、協力者^{スバイ}という属性多めの女子。

原作では好感度がプラスから始まるので、暗躍をするに当たってどうしたものかと悩んだが、まさかの転生者仲間だったことで問題が解決した。

幼なじみが1人、小谷凜子。

ボクにとって初めての友達で、『ヴァルダン』におけるファーストヒロイン。格闘技に精通している武闘派。

主人公とぶつかった拍子にパンツを見られるというベタな初イベントがあつたけど、ボクの頑張りによって阻止に成功した。

幼なじみが1人、柊小夜。

明日奈の推しヒロインで、メガネを掛けた落ち着いた雰囲気的女子。小さい頃からボクたちと関わった影響なのか、原作よりもノリが良い。

どうも明日奈が小夜に何かやらかしたらしいが、未だに内容が分からない。正直、大きな変化が見られないだけに怖い。

そして我がフエイバリット・お姉ちゃんである、柚木秋穂。

世界最高の姉だ。異論は認めん。もしも香坂拓也がお姉ちゃんに手を出すようなら、ボクは修羅になる自信がある。というか、絶対になる。

……我ながらお姉ちゃんへの愛が天元突破してゐるなあ。

——と、そんな付き合いの長い幼なじみと実の家族なのだが、残念ながら幼なじみたちには「尊さ」が理解できないみたいだ。

「バツカ明日奈……どこをどう見れば、お姉ちゃんとの別れが茶番に見えるんだよ！

引き裂かれた姉妹が再会の約束してゐるんだぞ!」

「どこをどう見ても茶番じゃないのよ。何で数時間後のお昼休憩時に一緒にお弁当食べる約束を、そんなドラマ風にすんの?」

何で秋穂さんも涙目で走り去つてゐるのよ、とお姉ちゃんが去つて行つた廊下を見つめる明日奈。

……いや、確かにボクも「仮にも生徒会所属なら、廊下は走つちやダメでしょお姉ちゃん」とマジメにツッコむべきか悩んでゐるけどさ?

「だって、昨日はお姉ちゃんが生徒会関連で忙しくて一緒にお昼御飯を食べられなかったし、今日の朝はボクが用事（主人公の邪魔）と一緒に登校できなかつたし、いい加減アキホニウムが不足しがちなんだよ」

「秋穂さんを新種の物質扱いですな。ていうか、学園以外じゃ家でずつと一緒にいるんだから十分摂取してるでしょうが。そのアキホニウムとやら」

「最近忙しすぎて、通常時より多くの摂取が必要となっております」
「知るか」

今日の登校時間で、香坂拓也の邪魔をした数十分後の光景がコレだ。

ここだけ見ると一種のコントみたいに思えるかもしれないけど、入学式の日から毎日こんな風に家族や友人とハチャメチャで楽しい日々を過ごしているの、同じ一年生の中にはすでに慣れた生徒もいる。そんな生徒たちからボクたちは『友理と愉快的仲間たち』という枠組みで認識されてるらしい。

で、その『友理と愉快的仲間たち』には先程の“幼なじみーズ”以外に高校生になったことで集結した新メンバーがいる。

「うーん……友理からの話で姉のことを慕っているのは分かってたつもりなんだけど、ここ数日の出来事だけで将来が心配になってきたな」

ボクをとっても心配そうな表情で見つめるのは、鬼島めぐみ。

赤い髪のボーイッシュで背も平均より少し高い、しかしカワイイものが好きな女子。異能による戦闘力が高く、戦闘パートでは頼りになるキャラだった。

彼女のメインイベントはまだまだ先なので、それまでの期間は主人公の毒牙に掛かる心配が少ないと安心できている。

「そう？　最初は心配したけど、変なことにはならないと思うよ。本当にアレな事態になつたら、それこそ友達である私たちの出番でしょ？」

そう言って微笑むのは、高森美江。

若草色の髪をした、お姉ちゃんと並ぶ正統派ヒロインの女子であり、戦闘パートより日常パートで主人公と仲良くなる危険が多い子だ。

……昨日はニアミスしそうで本当に焦った。

ここまでは割と普通だけど、問題は残りの2人となる。

「フ、我は良いと思うぞ。美しき姉妹愛、実に良い！ 再会の刻《レユニオン・タイム》までの数刻を我々と過ごそうじゃないか」

中二セリフを言つて意味も無くターンするのは、黒羽瑠維。

中二病を発症してしまった自称、地獄の獵犬《ヘル・ハウンド》さんである。もうほんと、何度見ても意味が分からない。原作では気弱だけ良い子のキャラだったのに、どこをどう間違えて中二病になってしまったのか？

どうでもいいけど、絶対アイツ「時」じゃなくて「刻」って漢字を使つてるな。昔、「こつちの方がカツコイイ」って言つてたもん。

「ぐぬぬ、負けませんよ秋穂さん……！」

お姉ちゃんに対抗心を燃やしているのは、聖華院マヤ。

ハーフのお嬢様で、スタイルも良く、将来を期待されているピアニストの優しいお嬢様だ。ただし、ガチの百合属性のせいでボクは狙われている。

もうホント、何でこうなったのか意味が分からん（2回目）。

で、ここに超個人的な理由でボクの怨敵と言つていい存在——この世界の主人公ともいふべき人物が、おまけで加わる。

「柚木先輩、入学式の日には遠目で見た感じは清楚だったけど……なんつーか、鬼島さんの言うようにここ数日で印象が変わったなあ……」

「テメエ、香坂拓也。お姉ちゃんをデイスってんのか？ あ、あ、ん？」

「そこまで言っていないだろ!？」

『ヴァルダン』の主人公で明日奈の義兄、香坂拓也。

女の子と付き合い出すと、早々にエロいことをしたくなる狼だ（偏見）。付き合い始めて1年も経たず——てか、ゲーム内時間で実質1、2ヶ月以内に手を出すという年中発情中の猿でもある（事実）。

「……変態」

「いやいやいや！ オレ何もしてないよな！」

「まだ、何もしていない……だろ？」

「柚木さんはオレをどんな目で見てるんだよ!？」

不本意だとばかりに香坂拓也は涙目になっていくけど、マジでこればかりは信用できない。1人の男子としては信用できるのだろうが、こと女子に関する事になってくると信用株が破産レベルで急降下する。

ここまで紹介した8人の女子（+おまけ男子1人）にボク自身を加えた計10人が、『友理と愉快な仲間たち』のメンバーとなる。

実際はさらにアルカ・忍・マルコが加わるし、先日お姉ちゃんに紹介して貰った生徒会長である西園寺八千代が仲間入りしそうだけど。

ボクとしてはここにもう1人メンバーを増やしたいんだけど……それはボクの頑張り次第だな。

ちなみに香坂拓也、女の子ばかりの中で唯一の男子という立場からクラスの男子に嫉妬されるかと言えば……そんなことはなかった。

むしろ哀れまれている。どうやらいろんな意味でボクが原因らしい。

今もクラスの男子たちに「元氣出せつて」「同い年の妹持つと苦勞するなー」「ストレスに効くサプリがあるけど、いる？」などと言われていた。

香坂拓也は嬉しいのか悲しいのか自分自身でも分からんといった表情で、笑いながら男子たちにお礼を言っていた。

……死んだ魚みたいな目をしてたけど。

第25話 歴史の授業

問：別世界の地球に転生した学生が苦勞する科目は？

答：歴史の授業です。

「あ、あゝゝゝ、歴史とか高校生になってもあるのか。嫌だなくばつくれないなくお姉ちゃんといチャイチャイしたいなくゝゝ」

「アタシも同じ気持ちだけど、素直に諦めなさいよ」

愉快でワイワイした学生生活を送っているとはいえ、学生の本分は勉強だ。それは『Heartギア』を使った異能の授業をやるこの学園でも変わらない。

むしろ普通の学生が習う勉強その他にプラスして、異能に関するアレコレを学ぶことになるから、3年間詰め込み教育することになるのだ。

代わりとばかりに学園の施設は充実しているけど……そんなものはどうでもいいから、この世から歴史の授業を消してくれと願いたいボク。

「これより新入生最初の歴史を始める。特殊総合学園系列では、他の高校と授業で習う教科書や範囲が違うので注意するよう。……と言っても、昨日までの授業で他の先生も言ってることだけだな！ まあ、お決まりつてやつだ。今日はサラッと読むだけだが、ちゃんと聞いておくんだぞー。それじゃあ最初のページ開こうか」

50代と思われる髪が白くなってきた感じの男先生が、マジメな態度からフランクな雰囲気が変わって歴史の授業が始まる。

先生が言ったように今日は流し読みのようだが、ちゃんと授業を受けないと突然質問されてアタフタすることとなる。

そう、例えば――

「そうだな……今の部分、中学の最後の方で習う内容だが大まかな説明はできるかな――黒羽瑠維さん」

「むう、これの英単語は語呂が悪いな……む？ 何かな先生？」

「間違えてもいいから、今、私が話した内容について言ってみて」

「フ、我に地球の歴史《アース・ヒストリー》など不要！ 我が覇道に過去は存在せず、

未来のみがあ——」

「黒羽瑠維さん。単位とその眼帯を没収されなくなかったら、聞く姿勢だけでも取れ。先生、2度目は無いぞ?」

「はい。ごめんなさい。ちゃんと授業受けます」

——こんな風に。

(どうせ中二セリフの研究でもしてたんだろうなー)

ニヒルな表情から一瞬で真顔になった瑠維にクラスメイトは「(自称)地獄の猟犬、よわっ!」と驚いたり呆れたりしている。

眼帯を外して教科書を開き、如何にも「自分、マジメに授業受けています先生!」アピールをしている瑠維にさらに呆れかえっている!

(そんなんなら、最初から普通に授業を受けてればいいのに……)

歴史嫌いのボクや明日奈でも質問されたら最低限答えられるようしているのに、なぜ他のことができるのか?

こういう所も原作の黒羽瑠維と違う点なんだよな。

ボク予想じゃ、あと数日するかしないかで奴らが瑠維に接触するだろうし、計画の見直ししておくか。

ボクが今後について考えている間も、歴史の授業は進む。

そう、ボクと明日奈が頭を抱えたくなる授業が！

「常識問題だが、ここで有名な○○シヨックが起きる。この危機を脱するため力を尽くしたのが当時の○○総理だった」

それが当然だとばかりに電子黒板へ重要単語を書いていく先生。

授業を受けているクラスメイトも、ノートを取ったりせずに軽く聞き流している。あの凜子や瑠維ですらそうだ。

それぐらい学生にとっては復習でしかない「常識」なのだ。

——ボクと明日奈を除いてな！

「○○シヨックなんて名前だった？ 確か……あー、あれは前世のか」

「○○総理って誰よ？ アタシの知ってる総理は何もしてないっての……」
ボクと明日奈だけは、ノートにぶつくさ言いながらメモを取っていた。

そう、これだ。

これが、歴史の授業をボクと明日奈が苦手……というか嫌いな理由。

5歳の時に『Heartギア』について調べた際に知ったが、この世界は同じ地球で

も、前世の頃にいた地球とは歴史が違う。

歴史が違えば、そこで活躍する人物も違ってくる。

それは仕方ないと諦めていた。歴史の授業とか受ける時に苦労しそうだなーと、ボクと明日奈2人揃って歴史は頑張ろうと覚悟していたんだ。

しかし、歴史はボクらの予想外の攻め方をした。

（完全に違う名前や名称だったらしいのに、何で中途半端に似ているのが登場すんだよ！ 何で時々、同じ名前で登場する奴がいるんだよ！）

全てが別物ならどれだけ良かったか……！

パチモンと本物、知ってる歴史と知らない歴史、それらがごちゃ混ぜなせいで頭の中がプチパニックを起こす。

結果、ボクたち転生者は歴史のテストでいつも赤点ギリギリな状態だ。

前世で聞いた名前や名称を答案用紙に書いてしまった回数は数知れず。

（歴史は歴史でも、近代史の方なら『Heartギア』に関連したことも多くて覚えやすいのに……）

授業では丁度、そのところに差し掛かっていた。

「——お互いの理解の不一致から始まった一部の国同士での第3次世界大戦も終わり、世界はようやく平和になった訳だが、ここでテストにも必ずと言っていいほど出る、ある期間になった。『高度経済成長期』と『停滞期』と呼ばれるものだ」

『停滞期』。

時代的な順番でいえば、『高度経済成長期』のあとに起こったとされる期間。『He art ギア』が世に出る切っ掛けになったとされる時期。

戦争が長引いたことが原因とされているが、詳しいことは解明されていない。心理学者、歴史学者の間でも意見が割れているらしい。

「『高度経済成長期』が終わり、人々の暮らしが豊かになったことで世界は大きな一歩を踏み出したが、事は各国政府の狙いとは異なる方向へ進んだ。当時の人は『今のままの状態がずっと続いて欲しい』と皆が思ってしまった。『停滞期』では技術や生活の進歩より、今の平和な暮らしをどれだけ長く維持するかに人々の関心があった」

『集団心理』という言葉がある。

簡単に言えば大勢の意見や雰囲気は少数が流れやすい状態な訳だが、長引いた戦争を経験した大勢の人が時代の変化によって「また戦争が起こったりしないか？」と強く不安になり、その考えが若い世代にも伝達したことで大きな変化を嫌い、現状の維持を求め続けた。

それが人類の歩みが良くも悪くも止まってしまった「停滞期」の真相ではないかと、有力説として今も議論されている。

ようは「今のままでも苦勞なんて無いし、こんままでよくね？」って考えが大多数を占めちゃったわけだな。

戦争がボクのいた地球よりも僅かながらでも多く、長引いたなら……それだけ若い世代が犠牲となり、残された者が悲しみに暮れたということでもある。

技術の進歩はイコールで兵器技術の進化にも繋がるだろうし、少しでも兵器を連想させるような技術の宣伝とか見聞きしたなら……あり得ない話ではないかも。自分たちが体験した戦争よりもさらに悲惨になる戦争に子や孫が巻き込まれるかもしれない。

何かを進めるといふことは、それだけ何らかの衝突がどこかで起こる可能性が高くなることを示しているから。「オマエの国が○○を発明したから、我が国で失業者が出たんだぞ！」って、そんな具合に争いの種になるかもって……

「すぐに終わるだろうと各国政府の誰しも思った『停滞期』は何年も続き、本格的に危機感を覚えた者たちによって打開策を考えることになった。様々な方向性で問題の解決に当たったわけだが、その中で秘密裏に世界中のトップ科学者たちが集められ計画された『人々の関心を一気に受けるようなオーバーテクノロジーを披露する』作戦が成功することとなる。そう……」

先生は一拍を置いて――

『Heartギア』だ」

――クラス全体に聞こえるよう、しつかりした口調で言う。

同時、クラスのほぼ全員が自身の『Heartギア』を見る。

ボクも、自分の『Heartギア』に手を添えた。

『Heartギア』の誕生については謎が多いが、偶然がいくつも重なった奇跡によって出来上がったとされている。適性が必要で、子供が試験対象かつ結果が出るまで数年を要するということから、完成から発表までに時間が掛かり、それだけ「停滞期」が長引いたわけだが……『Heartギア』は、それによって成される異能は、人々の心を掴んだ。人類の進化がようやく再開した」

そこからの話は、ボクが5歳の時に調べたことと同じだった

人々の心を掴んだのと同時に各所で混乱も起きたけど、各国政府の対応が早かったこと、適切だったことから最小限に抑えられ、デモンストレーションとして行われた異能の披露・それらがもたらす利便性の説明が各地で行われた。

そこからさらに紆余曲折があり……異能を扱うための特殊総合学園設立計画の始ま

り、『Heartギア』関連の法律の可決と同時に人々に『Heartギア』が行き渡るようになった。

それが、約100年——1世紀も昔の話だ。

『Heartギア』に関係したことが一段落したことで、『Heartギア』作成に関わった技術を小出しに発表していった。「停滞期」の時の反省から兵器利用は基本禁止として、あくまで防衛のための手段として広めたわけだ。先日の模擬戦で使われた『プロテクトフィールド』がそうだな」

『兵器利用基本禁止法』だっけ？ 数少ない世界共通の法律。

これが結構厳しいらしく、50年ぐらい前に兵器利用して隣国に積年の恨みを晴らしてやるぜ！と粹がった国が1つ地図から消えた。バレてすぐ、その国以外の国全部が敵に回って。瞬殺だったらしいな。小さい国だったから尚更。

有罪受けた連中は死刑か終身刑がほとんどだっけ。おっかな。

そんな法律もあるからか、各国は厳しく軍事関係を監視し合っている状態だ。だから前世の地球とは違い、人種差別や宗教差別による争いこそあれど、紛争がない。というか、起こりそうになったら大国がいつべんに押し寄せてきて「ちよつとOHANA SIしようぜ？」となるのか。おっかな。

今はかなり『Heartギア』関連は落ち着いたけど、不正に『Heartギア』を

入手する狡猾な犯罪組織も出てきたから、ここ数年は警察組織と連携しての取り調べや
検挙も多く、新しい法律を作ろうという動きもあるそう。

最後に先生は言う。

数年前、日本で起きた『Heartギア』所有者によるものとされる事件では、非
合法組織の実験体にされていた子供たちが助け出されたが、施設がまるで八つ当たりの
ように破壊され尽くされたことで、逆に困ってしまう人も出たらしい。犯罪組織が利用
していると知らずに貸し出し、土地が荒れすぎて買い手が付かなくなった土地の所有者
とか、土地の所有者とか、土地の所有者とか……

……はあ、困った奴もいたもんだなく（すつとぼけ）。

第26話 ヒロインたちの異能 前編

混沌極まる歴史の授業が終わり、今日の午後は夕方まで本格的な『Heartギア』を使った授業となる。

当たり前の話だけど、『Heartギア』によつて目覚める異能は戦闘系異能以外にも非戦闘系異能があるし、戦闘系異能の異能を持つていても「自分、荒っぽいのは無理っすわ〜」という人もいる。

なので『Heartギア』を使う授業では基本的に戦闘系と非戦闘系の人とで授業をする場所が分かれるし、事前の面接でも荒事が苦手かどうかの確認はする。

学園の方針は『安全に異能を扱えるようにすること・その心構えを持たせること・成長が可能ならその道を切り開いてあげること』だから、マジメに授業を受けていけば異能の力に関係なく単位は貰える。

実際、授業前に聞いた担任である野々上先生も学生時代は模擬戦など1度もしていないし、たまに出る個人課題を達成できなくても単位は貰えたという。

ようは生徒1人1人の「やる気」があるかどうかが大切となる。

なので、その「やる気」を入学式当日の模擬戦で見せつけた人は今日の授業は見学で構わないと言われた。今日は個々の異能がどのようなものか、ちよつとした道具などを使つて確認をするだけだからだ。

ボクも香坂拓也も見学でいいとのことだったんで、大人しくしておくで野々上先生にも言つてある。

今日は暴れたりせず、日陰でみんなの授業風景を眺める予定。1年の全クラス合同での授業になるから人数も多い。楽しみだ。

「——と、いうわけで！ 急遽ですが実況席を作つて解説なんかをしてみたいと思ひます！ 解説はこのボク、柚木友理と——っ!？」

「……模擬戦で対戦相手だったオレ、香坂拓也——」

「——がお送りしたいと思います！ 1年の皆さん夜露死よろしく苦うつつっ!!」

「「「いや、よろしく」じゃないだろ（でしょ）!?!」「」」

見事なツツコミを疲労してくれた『アマテラス特殊総合学園』1年生の約半数（残りの非戦闘系組は体育館）に拍手を送る。

現在、ボクと香坂拓也は運動会とかで使う簡易テントの中で実況者ごっこをしている。マイク片手に大きく声を張るのが意外と楽しいです。

「あー……袖木さん？ これはどういうことですか？」

こめかみを押えた、疲れた感じの野々上先生が面倒そうに聞いてくる。

「はい先生！ 午前の歴史の授業が苦痛でテンション駄々下がりだったので、午後ではせつかくの戦闘系異能の初お披露目する人たちのために、テンションが上がりそうなことをしてみたいとセツティングしました！」

「自己満足ですね」

「あと、お昼ご飯に飲んだ初めて飲むタイプの栄養ドリンクが、思った以上にボクの体質的に合ったようでエネルギーが溢れているんですよ！ 効果を確かめるため、試しにと5本も飲んだのが仇となりましたね！」

「自業自得ですね」

ぐうの音も出ないな。

スーパーで『新成分配合！』って大きく書かれた栄養ドリンクがあつたから買ってみたいけど、ヤバイ成分が入ってたんじゃないや？ ってぐらい効き目がある。

「はあ……とにかく、勝手にこんなことされても困りますから、午後の間に撤去してください。今なら反省文なども書かなくて良いので」

「あ、それなら大丈夫です！　そう言われるだろうと思って、昼休みの内に根回しをしておきました！」

「根回し？」

ボクはジャージのポケットから綺麗に折り畳まれたハンコ付きの紙を出し、そこに書かれた内容を全員に聞こえるようマイクに向かって言う。

「ごほんつ、『柚木友理さんの提示した内容について、おもしろそうだからOKします♪ アマテラス特殊総合学園、生徒会長、西園寺八千代』……以上です！」

「……何してんの、あの生徒会長さん!?!」

言い出しっぺのボクが思うのはアレだけど、本当に何してんだろうね八千代さん？　お姉ちゃんの友達ということ去年から数回だけ会ったけど、原作と違い変な部分でアバウトな性格になっている。

……まあ、ボクが1番の原因だけど。

西園寺八千代に関しての暗躍は本人の知らないうち——5年ぐらい前かな？——に終わらせたから、向こうからしてみれば初対面なのは去年になる。

その時点でちよつとお茶目だけど怒ると怖そうな人、という印象だった。原作のようなピリピリした雰囲気が無くなるだけで結構変わるもんだよなあ……と、しみじみし

た。

「……ちなみに、香坂拓也さんは？」

「脅されました。……先生、オレ泣いていいですか？」

「生徒会長に許可を貰う際の条件として、解説の相棒代わりにコイツを指名されたんですよ。模擬戦の相手だったんでしようって」

「……柚木さんは、もう少し香坂拓也さんに優しくしてもいいと思いますが」

「不可能です！」

「断言された!? 本当に泣くぞおいつ！」

優しくされたいんなら、もう少し貞操観念を強くして出直せ。

野々上先生はまだ言いたいことがあるといった雰囲気だったが、こつちには生徒会長公認という伝家の宝刀があるのだ。

別に、一昔前の王道学園モノみたいに「生徒会の力は教師よりも上だ！」
「生徒会長が学園の支配者なのだよ」なんてことはないけど、多少のことは先生方の許可を取らなくても実行できる権限が生徒会長にはある。

権限の乱発は反感を持たれやすいものだが、八千代さんは「ここまでなら許される」という線引きが上手いから大丈夫だろう。

と、ここで野々上先生に区切りが付いたかと思えば、別の珍入者が。

「ちよつと柚木友理！ 何で今日の授業受けないの!?! せつかく入学式の日の屈辱を晴らせると思つていたのに！」

ムキーツ！ と威嚇するようにやって来たのは、桃色の髪をお団子ヘヤーにした小柄な女の子。隣のクラスにいる中国人の『ヴァルダン』準レギュラーであり、凜子ルト^トにおけるライバル枠。

Bクラス所属、王^{ワシ}芽依^{メイ}。

愛称は「メイちゃん」だ。

両親は中国人だけど日本生まれの日本育ちで、芽依自身も日本生まれの日本育ちという「中国要素いらなくね？」なキャラである。当然のことながら中国語は喋れない。中国に行ったことすらない。家も普通の2階建てで中国要素皆無。

どうでもいいけど、「メイちゃん」ってジオリが懐かしく思える名前だな。

「テンションが異常に上がつてるんなら、私と模擬戦でもゲーム風でもいいから勝負しなさいよ！ 私の初陣を微妙なモノにした罪は重いわ！」

「まあまあ芽依さん、落ち着いて。オレも気持ちは分k——」

「黙りなさい敗北者！」

「ぐふっ!? は、敗北者……何だろ、心にくる……」

初対面だと面を喰らいそうな程ケンカ腰な性格だが、入学式の翌日から何度も突っかかってくるという加減慣れてくる。

どうやら入学式の日に行った、ボクvs香坂拓也の試合がお気に召さないらしい。曰く「アンタらのせいで私の試合がコース料理の前菜扱いよ！」とのこと。

ハッキリ言う——んなもん知らんがな。

『『ヴァルダン』でもめんどくさいキャラ扱いだったからなー。悪い子ではないんだけど、脳筋が過ぎてサブヒロインにもなれなかつた子だし』

原作では、いくつかのイベントを挟んで凜子をライバル視。ついでに主人公が凜子と付き合いましたら、そっちもライバル視。

バトルジャンキーなので、イベントの選択肢によっては主人公は凜子と恋愛する余裕も無く、最後は2人との戦いを求めて地の果てまで追いかけてくるという、傍迷惑なトゥルーエンドまで存在している。

尚、このトウルルーエンドになる選択肢、普通だったらまず選ばないような芽依に構ってあげてからの放置プレイを何度もすることで発生するので、別名『主人公&凜子ドSルート』と呼ばれたりもしている。

「……………」

「な、何よ柚木友理！ その哀れんだような目は!?!」

「……強く生きてください」

「どういう意味なの!?!」

「柚木さん？ 何で芽依さんに同情的な目を——」

「……ついでにオマエも、強く生きろよな」

「何でオレも哀れみの目で見られるの!?!」

最初はいつものように適当に巻こうとしたけど、今日はいつも以上に食いついてくる。絶好の機会を逃してなるものか!?! って感じた。

……仕方ない。

ボク自身が持っている伝家の宝刀をここで切るか。

「そんなにボクと戦いたいの?」

これぞボクを持つ伝家の宝刀『凜子、キミに決めた！（半ば強制）』である。
幼なじみだからこそできる押しつけとも言うが。

「ちよつと待って、ゆゆっち！　何で私!!　何で少し貯めてから『凜子がつ!!』って言ったの!?　私の意思は!?!」

おもしろいぐらい慌てふためく凜子。

何でって聞かれたら、香坂拓也とセットで変な因縁を付けられるぐらいなら、ボクと凜子のセットで因縁を付けさせようという行き当たりばったりな作戦を、今この場で思いついたからだよ。似たようなことは遅かれ早かれする予定だったし、フラグ折るのに丁度いいかなって。

仮にもライバルキャラなんだし、相手ぐらいしてやりなよ。

「凜子とボクは幼なじみであり、共に切磋琢磨してきた。特にボクは凜子の練習相手として、何度も組み手をして、何度も強くなれるように指導してきた。大げさに言うならば、凜子はボクの弟子と言っている。つまり！　弟子にも勝てぬようでは、師匠であるボクに挑もうなど100年早いわっ！　ということだ。理解したか？」

「私、ゆゆっちの弟子扱いだったの!?　いつの間に!?!」

「なるほど一理ある。つまり、その弟子を倒すことが柚木友理への挑戦権という訳か……なら話は早い！ 私と勝負しろ弟子い!!」

「何でメイちゃんはメイちゃんで、納得してんの!？」

王芽依が割と脳筋で助かった。

そこからは「少しおもしろそうかも？」と2人の勝負が気になりだした1年たちを煽動し、あれよあれよという間に小谷凜子vs王芽依の勝負が決定された。

野々上先生を含んだ他の先生方の反応？

もうどうにでもなれよ、って雰囲気でしたが？

「……柚木さん、めんどくさいからって小谷さんに押しつけたでしょ？」

「ゆゆっち、何の話かさっぱり分からなくい」

イベントフラグ折るのが優先だよ？ 本当だよ？ 7割はフラグブレイクが理由だ。

残りの3割が「ただでさえ忙しいんだし、凜子に丸投げしちやおう」となっているだけなんだ。

凜子と王芽依が、直径50メートル程の白線が引かれた円の中で対峙する。

そろそろボクも実況らしいことをしよう。

「さあ、準備が整いました！ 勝負内容は単純！ 制限時間10分の間で、先に相手ヘクリーンヒットを与えた方が勝ちとなります！ 『プロテクトフィールド』はすでに展開

しているのです、思いつきり暴れても平気です！ 周りの観客（生徒&先生）は自己責任で勝負の行方を見守ってくださいあああいつ!!」

「テンション高いなー柚木さん。ズズッ」

マイクを握りしめ声を張り上げるボクと、落ち着いた雰囲気でお茶をすすする香坂拓也。シユールな光景だな。

てか、そのお茶どこから持ってきた？

「テンションが低い実況とか誰が得するんだよ？ では場も暖まってきたので、両者はそれぞれ構え！」

ボクの声に反応して、凜子と王芽依はそれぞれ得意な武術の構えを取る。それと同時に2人の異能も発動する。

片や、闘気のようなものを薄らと体から発する凜子。

片や、体から溢れ出たオーラが2メートルはあるかという虎となり、まるでスタ〇ドのように背後に控えさせた王芽依。

「小谷さんの方は分かりづらいけど、芽依さんの方はいかにも強そうだな……アレって、ホワイトタイガー？」

「白虎って言えボケ。……説明すると、凜子は『気功術』という“気”を操る異能！ 王芽依は『白虎霊気』という、背後に守護霊のごとく半実体化させた白虎を操る異能！

「ゴブウツ?!」

『氣功術』によって身体能力が極限まで高められた凜子が一瞬で王芽依の懐へ入り、強烈な掌底を突き出した。

消える白虎。静まりかえる観客。白目を剥いて倒れる王芽依。拍子抜けしたような表情の凜子。驚いて目を見開く隣の香坂拓也。そして、「ま、こうなるだろうな」と予想していたので平常運転のボク。

「あー……勝者、凜子」

とりあえず、動かない審判の代わりに勝者を告げておく。

数年前から、実際に骨が折れるほど特訓に付き合ってたんだぞ？　凜子の異能のノウハウは当時の時点で本人よりも詳しくあったんだし、丁寧に教えてきたから本当に師弟関係なんだよボクと凜子って。当然、原作よりも強くなっています。そりゃこうなるわな。

第27話 ヒロインたちの異能 後編

「おーい、メイちゃんやーい。聞こえるかー?」

「……………」

「ダメだ。ただの屍のようだ」

「笑えないから。模擬戦で柚木さんに負けた直後のオレもこうだったのかと思うと、全然冗談じゃ済まない心境だから」

急遽決まった小谷凜子vs王芽依の戦いは、圧倒的な差を付けて凜子が勝利。

今回も見事な原作ブレイクに成功した。

で、負けてしまった王芽依は白目で気絶したままだった。

現在はボクと香坂拓也のいるテント、その中に急遽設置した体育用マット&タオルを重ねただけの簡易枕の上で寝かせている。

簡単に見た感じだけど『プロテクトフィールド』の効果もあつて内臓関係に損傷は無さそうなので、ボクの異能『第5柱マルバス』による治癒の力を掛けた後は安静に寝か

せることにしておいた。気絶した人は無理に起こさず、本人が自然に起きるのを待つのが最良だしね。

「とうか柚木さん、治癒系の異能も使えるんだ……」

「凜子との修行では、自らサンドバックになるつもりで練習台になったからな。切り傷・打撲から始まり、関節が外れたり骨折った時も世話になった力だ。目立たずに練習できることもあって、ボクの異能の中でも効率よく扱える」

「そんなものまで治せるのか!？」

「あくまでも応急処置だよ。最終的には毎回、家に帰って不死鳥のごとく全回復できるからこそその荒技だ」

『第37柱フェニックス』による1日1回だけ使える完全回復が無かったら、病院の先生と親戚レベルで親しくなれる頻度で会うことだろうし。

……: 皮肉にもアルカとの初遭遇で、ヤ○チャ死一步手前の状態からでも復活できるのが確認できたのも大きいけどなー。

ちなみに、あの件だけは未だに根に持っています。

本当の本当に死にかけました。

「まあ先生にも言ったが、王芽依に関してはそれほど心配しなくてもいいよ。気絶した原因は、凜子が力加減を間違えたのと、無意識に『気功術』で王芽依の体内の“気”を乱したのが主な理由だし」

凜子の異能『気功術』は見た目の派手さこそ無いが、『ヴァルダン』のヒロインたちの中でも攻撃性能は高い。

自身の身体能力の強化だけでなく、防御力の向上や五感の向上に加えて、直接触れた対象の“気”を乱すことで、ゲームでいうバッドステータスを確率で発生させることも可能になる。今回の場合は、“意識の混濁”かな？

しかも、毎回練習相手になっていたのはボクだしね。物理攻撃を受けまくって地味に体力と防御力が底上げされております。そんなボクが凜子の基準だから、王芽依に手加減したつもりでも過剰な攻撃になっていたわけだな。

今はまだ経験が足りないからできないけど、“気”使った自己治療は半年以内にできるようになるだろうし、最終的には“気”で作った巨大な腕を出現させるまでに成長する。

尚、『ヴァルダン』の有料コンテンツで凜子のサービスに課金すると、その“気”がや

たら進化する。具体的には王芽依の『白虎靈氣』に対抗してか、“氣”で全長5メートルの不動明王みたいなおつかない顔の巨人を作れるようになる。

……そして、解放されたストーリーでは大ケガをした主人公を治療するために、たびたびエロ作品に登場する『房中術』で主人公を――

おのれ。(奥歯ギリ)

おのれ……。 (血涙)

おのれデイケ○ドっ!! (関係ない)

「おのれ香坂拓也……っ!」

「何で親の敵でも見つけたような顔で睨まれてんのオレ!?」

「大ケガしたら、手遅れになる前にトドメを刺すべきか……」

「いろいろと言葉が矛盾してない!」

目を点にしながら「さっきまで珍しく普通に話せてたよな!」と驚く香坂拓也のことはひとまず置いておこう。

……別にオマエそのものが嫌いな訳じゃない。

ヒロインに関係したオマエが、親の敵レベルで大嫌いなだけだ。

「では、場も暖まったことですので、解説に戻りましょう」

「すぐ隣に真夏になったり真冬になったりする人がいるので、正直言つて解説したくねえです」

グラウンドでは異能を見るための準備を終えたらしく、早速やりたい人から順に、自身の異能を対象となるモノや的で試している。

「いやー、こう見ると本当いろいろな異能がありますねー」

「B組にいるオレの友人が『電撃鞭』で的を破壊したり、C組の女子がお札で式神っぽいのを召喚すれば、D組の男子は土からゴーレムを作り出しています。他にも体の一部を変化させたり、対象となる空間に作用したりする異能があつたりと、コピー系異能の使い手としては組み合わせが良い異能がないかなどを注目しています。柚木さんは？」

「複合系異能の使い手としては、直接攻撃系よりも捌め手系の異能などに注意を向けています。香坂さんが模擬戦で使つたような空間系などは対処が難しいので、攻略手順を間違ふと時間が掛かったり、最悪の場合はそのまま詰みます」

この「攻略手順を間違えると詰む」というのはゲーム『ヴァルダン』の自由時間で可能な、フリーバトルでの話だ。

主人公や味方の能力上げで放課後や休みに、学園の生徒（モブ）や異能使用施設にいる人（モブ）を相手にバトルできるんだけど、中には攻撃パターンを覚えないと勝てない奴もいたから、そういうのとは極力戦わないようにしていた。

あれだよ。一昔前のゲームであった。中央のコアが光った数秒しかダメージを与えられません」とかだよ。前世で小学生の頃にやったロック○ンのラスボスがそれで、勝てないからつて匙を投げたんだ。あのタイプは滅びていい。

「お、柚木さんの友達も始めるみたいだな」

「何!?! 個別に解説せねば!?!」

「鼻屑かつ!?!」

どこかの誰かがそれを望んでる気がするんだよ！

『ヴァルダン』のヒロインたちの異能を早く教えろと！

最初に出てきたのは、高森美江だった。

「いっくよー! 種マシガン!」

美江が手を振るえば、地面から人と同じサイズの、赤い花飾りを付けた砲台のような複数の蕾が出てくる。

その複数の蕾部分が、地面に設置された棒の先にターゲットマークの付いた的に照準を合わせ——弾ける。

——ズガガガガガガガッツツ!!

まるで本物のマシンガンのように蕾から発射された種は、的を粉々に破壊した。

そして、植物は役目を終えたかのように光となって消える。

「すごいな。今の植物って……？」

「鳳仙花だ。時期になると蕾部分が弾け飛んで、周囲に種を撒き散らす性質を持つ花。
ホウセンカ

本来はあんな指向性を持って種を飛ばすものではないけど、美江の『植物魔法』ならあれくらいできる。ようはイメージの問題だからな。現存する植物が元ならそれも簡単になる」

「へえー、巨大なツルを出せるだけじゃなかったんだ」

美江の『植物魔法』は応用の幅がかなり広い。
プラント・マジック

『魔法』というだけあって現存する植物そのままですべていいから、さっきの鳳仙花みたいに固定砲台のような魔改造もできる。

……本人は「品種改良って言ってよ！」とどうでもいいことを主張していたけど。人が手を加えているって面じゃ同じだろうに……

「これでいいかしらね？」

続いては終小夜。

手には5個の小石が握られており、クレー射撃用的が発射される装置を見ていた。ブザー音と共に複数個的的が発射される仕組みだ。

ブー！という音と共に5つの的が発射され、同時に小夜は的を睨み付けたまま、手に持っていた小石を無造作に放り投げる。

普通ならそのまま地面に落ちるだろう小石は、しかし物理法則を無視したかのような不自然な動きで的に向かっていき——当たった。

その後も小夜は何回か同じことをするが、どの小石も百発百中でのに当たりに行く。まるで最初からルートが決まっているかのように。

「何だろ終さんの異能？　磁石とかか？」

「ちよつと違う。小夜の異能は『針ピン示ポイント』というものだ。簡単に言えば、狙った場所に必

ず攻撃が当たるようになる。その性質から飛び道具と相性が良いし、近接戦なら鞭なんかオススメだよ」

「うわつ、それバスケツトボールとかで異能ありなら無敵じゃんか」

ボールを放てば必ずシュートに成功するからな。ある程度ならターゲットに当たるまでの軌道を操作できるようなものもあるし。

原作通りなら、武器として実際に鞭を使い始めるはず。

軌道も操作できて、当てたい所にピンポイントで当てられる鞭使い（ときどき飛び道

具あり)とか、地味に強いんだよ。

ちなみに、ゲームでは『小夜ルート』に入ってしまったら、他のヒロインと仲良くしていた主人公に嫉妬した小夜が、主人公の股間目掛けて拳大の石を異能使ってぶつけるイベントがある。当然、主人公——香坂拓也は瀕死だ。

……うおつ。想像したら今は無きボクの息子がヒュンってする感覚が!?!
 例え転生しようと、忘れられる痛みじゃないんだよね!。

「次は私か……装着!」

続きましては鬼島めぐみ選手。

出番と同時に異能を発動して、大剣を背負った騎士になる。

「鬼島さんの鎧カツコイイ……!」

「めぐみの異能は『勇敢なる騎士^{ブレイブ・ナイト}』。見ての通り近接戦主体の騎士になる異能で、重厚な見た目と違って鎧も大剣も羽のように軽いよ!」

1番の特徴が、大剣の「異能を切り裂く」って力なんだ。

異能による現象だったら、一部の例外を除いてバスターみたいに防御を無視して斬ってしまう。ボクも自分の異能で創造したものを使って試し斬りして貰ったけど、ほんの少し抵抗があっただけで普通に斬れました。

繋がりや曲のデキがいいと音符同士に「繋がり」ができて、あんな風に連鎖爆発する。マヤはピアノリストだけど、音楽全般に教養があるからなあ。歌声だけでもあの威力になる」

さらに言えば、その採用する曲によつて爆発の仕方や範囲に差が出るから、マヤの技名つてそのまま曲の名前だったりするんだ。

マヤの場合、ピアノの演奏が1番効果高いんだけど……現実的じゃない上に本人も「やったらマズいと、頭の中で警告音がします。やめましょう」と真顔で言っていたから基本禁止となっている。

(しかも残酷な運命をへし折った影響か、どう考えても原作の傲慢お嬢様だったマヤよりも、威力も精度も上なんだよな)

マヤのいる場所とこのテントつて割と離れているんだぞ？ それでもビリビリした衝撃が来るつて……間近の生徒は心臓バクバクだろうな。

マヤが終われば、そのマヤ以上の頭痛の種が無駄に格好良く登場した。

どうしてこうなった？ その2、黒羽瑠維こと地獄の獵犬《ヘル・ハウンド》さんである。どうでもいいけど、ジャージの上にマントはダサイよ。

「フハハハハッ！ ようやく我の出番か！ 観客《オーディエンス》たちよ、とくと見よ

「！これが我が必殺の一撃！『追尾する（ハウンド）——』」

「はい、テントからのお知らせです。……その中二病患者に告ぐ。今回の授業はそれぞれの異能の現状確認だつってんだろ。解説はしてやんから、さっさと普通に異能を使わんかい」

「グフツ。永遠たる同胞《エターナル・シスターズ》の対応が最近手厳しい」

「じゃあ、手厳しい対応させない努力してって。」

「……柚木さん、黒羽さんへの対応がどんどん雑になつてないか？」

「友達だけど……ボクにも許容範囲があるんだよ。見ろ、後ろに控えてるオマエの義妹を。こつからでも分かるぐらい目が死んでるぞ？」

「明日奈—— 大丈夫か——」

大丈夫じゃないぞ。スーパーで見る魚の目そっくりだ。

いや、そろそろ慣れてよって思うけど。

「くつ、ならば本来の仕事をするのみ。案山子かかしごときにならずすぐ終わる！ 焼却せよ黒

炎《ブラック・フレア》！」

瑠維が腕を振るえば、そこから放たれるのは黒い炎の渦。

その炎は宣言通り、案山子かかしを数秒で燃やし尽くした。

「黒い炎か……柚木さん、あれって特別な特製とかあるのか？」

「あるぞ。瑠維の異能『黒炎』は 対象に纏わり付く” って性質もあるんだ。結果、中々鎮火せずに燃やし続ける」

普通の炎は風や対象の動きなんかで、火が飛び散ったりして燃やすのにムラがあるけど、『黒炎』は飛び散らずに張り付く。

燃焼って “炎の温度” だけでなく “炎に当たる時間” も重要なんだ。数千度の炎だつて当たるのが一瞬なら人間は火傷しないことだつてある。逆にガスコンロぐらいの火だろうが、数秒でも触れ続ければ病院直行の火傷をする。

そういう理由からか、原作では攻撃を当ててから継続的にダメージを対象に与える、という戦い方だった瑠維。

その性質上、ゲームではなく現実で使用するとなると危険度も跳ね上がるから、『黒炎』を使うにあたっての注意事項は何度も瑠維の頭に叩き込んだ。中二病になつてからは特に、だ。調子に乗っている時は注意が必要だけど、普段使う分には問題ないはず。

「最後はアタシね」

前の瑠維が原因で、すでにお疲れ気味の明日奈。

……ボクの栄養剤を何本かあげるべきか。

明日奈は両手を胸の前に持っていくと、淡い光を発し始める。

それは徐々に形を作り、光が収まったあと明日奈が両手に持っていたのは、ファンタジー系作品などで目にしそうな木の弓だった。

「ふーん、今回は弓か……」

「あ、さすがに明日奈の異能は知ってる感じか」

「柚木さん？ 一応オレ、明日奈の義兄なんだよ？」

明日奈が弓を構え、弦を引く。

すると、いつの間にか弓には光の矢が装填されており、

「シッ！」

明日奈の声と共に矢が放たれる。

放たれた矢は直後こそ通常の矢と同じように飛んだが、的である案山子かかしとの距離が半分程に迫った場所で——6本に増えた。

次の瞬間には一案山子かかしの脳天・四肢・胸に矢は突き刺さる。

明日奈は上手くいったからか、深く息を吐いた。

「相変わらず便利な異能だな」

「解説の仕事として説明すると、明日奈の異能は『異能物質作成』アーティファクト・クリエイト。精神や体力を消費して特殊な力を持った物質を想像し、創造する力だ。いろんなモノが作れるけど、制限も多い」

「明日奈の作った『雨水を美味しい水に変える』アーティファクトは家で重宝しているよ。本人には『しばらく作りたくない』って言われたけど。……ご近所さんで欲しいって言ってる人もいるんだけどなあ」

「条件次第じゃバカみたいに疲れるんだから、やめてあげろつての」

そう、これこそ、『異能物質作成』アーティファクト・クリエイトこそ、原作で香坂明日奈が使用できる有料コンテンツの異能なんだ。

アーティファクト。つまり、異能の力を宿した武器や道具を作り出す力。

物質そのものを作る際は体力を、付与する異能を作る際は精神を、それぞれ大ききや異能の強さに比例して消耗する。

そして使い捨てならそれほどではないが、恒久的に残るモノを作ろうとすると体力・精神が限界まで疲弊する上に、かなりの時間を掛けなければ完成しない。さつき香坂拓也が言った、『雨水を美味しい水に変える』アーティファクトがいい例だ。

——明日奈は分かってるよな、自分の抱える爆弾を。

——『価値』という意味じゃボクや香坂拓也以上なのを。

原作の香坂明日奈の異能は普通の武器や道具を作り出す『物質作成』マテリアル・クリエイトのはず。異能

の初お披露目でも、作ったのは『100トンハンマー（中身スカスカ）』で他のヒロインと話していた義兄に突っ掛かる時に創造するということもなかった。

どうしてボクがずっと続けた努力（悪魔の像に向かってパスワードを言い続ける）をしていない明日奈の異能が、有料コンテンツの異能に変化したかは不明のままだ。もしかしたら、何もなくてもボクたち転生者の異能は有料コンテンツのモノに変わる仕様だったのかもしれないけど——その場合、ボクのやったことが無駄だったみたいに見える。悲しくなるから深く考えないようにしている。

やらなかったらやらなかったで、アルカと出会えなかったから過去に戻れても結局はやるだけだよ。

アイツはもう、家族の一員だからね。

第28話 生徒会と柚木家集合と……？

そこは、お高いだろう備品がいくつもある部屋だった。

真ん中に置かれた円形のテーブルは、素人目でも高級だと分かる。壁にある大きな目立つ時計も、いくら金を掛けたら作って貰えるの？と真顔で聞きたいくらい独創性溢れた作品で絶対に高い。

そして、テーブルに座り、ジツとそこに設置された画面を真剣な表情で見つめる人物が発するピリピリした空気。それが部屋全体を静かにさせていた。

『アマテラス特殊総合学園』3年生、生徒会長・西園寺八千代。

彼女は先程から数分間にわたって、画面に映し出された映像を見る。

そのたった数分間が、ボクらには1時間にも2時間にも思えた。

そう。この部屋——生徒会室には現在4人がいる。

1人は、マイフェイバリットシスターであるお姉ちゃん。生徒会で会長補佐だから、

居てもおかしくはないけど……

こちらと八千代さんを交互に見て、ハラハラした表情となっている。

で、残り2人は——ぶっちゃけ、ボクと明日奈です。

(何でこんなことに……)

(ボクと一緒に呼ばれたからじゃね?)

(それが謎だつて言ってるのよ! 何で兄貴じゃなくてアタシなわけ!? これ絶対に昨日やったアンタと兄貴の解説の件よね!? 今、八千代さんはあの時の映像とか見てるのよね!? 流れてくる音からして!? アタシ、生徒会に呼ばれる理由が思い当たらないんだけど!?)

(この状況でボクから言えることは1つ……:ドンマイ?)

(やかましい!! もつと他に言うことあるでしょが!?)

ボク&香坂拓也による解説(この翌日)。

事前に録画した解説映像を見せに来てくれと生徒会の先輩に呼び出されたかと思えば、なぜか同じく来るよう言われた明日奈。

廊下を爆走したわけでも備品を壊したわけでもない。異能で人様に迷惑を掛けたわ

けでもない。心当たりが無いから余計に「何でアタシ!？」と心配になってしまおうという悪循環。香坂拓也も困惑していたな。

(昨日とは別の件で呼ばれた、とかないかしら?)

(明日奈の作ったアーティファクトが暴走とか?)

(むしろアンタの監督責任を問われるって理由の方が、アタシが何かしちやったって可能性より高いんだけど……)

(おいおい。それじゃ、ボクが犯罪者予備軍みたいじゃないか)

(逆に質問するわ。個人的な理由で人様の義兄に、毎日のように異能フル活用で迷惑掛ける奴が、犯罪者予備軍じゃないって、そう言うのかしら?)

(……何年も前からその義兄のスパイ兼、ボクの協力者である明日奈もある意味犯罪者予備軍なのd——)

(何か言ったかしら……!?)

(あ、すんません。全部ボクが悪いです)

明日奈の瞳孔が開いてきた気がしたので、速攻謝った。

友人間の問題で殺気を感じたら、その瞬間に非を認めて謝る。それが関係を長く続けるコツだと転生してから学んだ。

「……………ふむ」

「……念のため、あとで保健室に連れて行ってください」

「丸投げするなよ」

3年生の先輩とか、生徒会の会長だとか、そんなのどうでもいいわと言わんばかりに、自然と真顔で言い返してしまふ。

ホントこの人、原作よりもノリが良いというか、人をからかうのが好きだよ……。良い変化ではあるんだろうけどさあ。

「もう、八千代！ ユウちゃんを弄りすぎだよ！ 気に入ってるのは分かるけど、もう少しやり方があるでしょ!」

「この茶番を黙認してくれたら、妹さんを生徒会に推薦してもいいって言ったら秋穂、ノリノリで協力を約束したじゃない？」

「……………ヘイ、マイシスター？」

「ちちちちち、違うのよユウちゃん！」

ブルータスよ、お前もか。

言いくるめられたんだろうけど、何がどう違うと？

「生徒会長には毎年1人、推薦枠として好きな1年生を生徒会に推薦することができるとは、去年初めて会った時から友理ちゃんは候補だったの。で、今回の件で正式に私の方から推薦しようかなって思っていたんです。どう、生徒会に入ってみませんか

？」

「なぜにボク？」

「行動力があつて、何よりもおもしろいからです。生徒会は生徒と学園のために尽力する集まりですが、その学年に一人ぐらいはムードメイカーになれる人に入つて欲しいと思つているのです。ちなみに、かつてムードメイカー役として当時の生徒会長に推薦されたのが、何を隠そうこの私」

「でしようね。そんな予感してました」

しかし生徒会かあ……

「あー、パスで」

「ええー!? せつかくユウちゃんと一緒になれると思つたのにー!」

お姉ちゃん、それで八千代さんに言いくるめられたな。

悪くない話だけど、今はダメだ。

「そつかー、残念。……理由とか聞いていい？」

「ボクには、やらなければならぬことがあるのです。それはすぐにできるものではなく、生徒会の仕事をしながらでは難しいと判断しました。お誘いはうれしいですけど

……すみません」

そうだ。ボクにはこの学園で貞操観念の緩い香坂拓也の魔の手から、『ヴァルダン』のヒロインたちを護り抜くという大事な使命があるんだ。

原作は今後1年が舞台だけど、ここは現実。2年目、3年目になっても問題の解決——香坂拓也がヒロインたちをスッパリ諦める、もしくは関係ない彼女を作る——が成さなければ、ボクの戦いは続いていくんだ。転生を自覚してから早10年、ちよつとやそつとで揺らぐ覚悟ではない!!

(声が少し漏れていたからツツコませてもらうけど……どんなにカッコよく思おうが、やってることは超個人的な理由だって忘れてない?)

(やかましい)

復活した明日奈が耳打ちしてきたけど、無視だ無視。

「そういえば、結局アタシは何で呼ばれたんです?」

「推薦の第2候補だから。友理ちゃんとかどこか似た雰囲気だし、他の生徒会所属の子で推薦の話題になった時、香坂さんとかいいんじゃない? って声が上がったから。それで、どうかな?」 結構フレンドリーよ生徒会」

「あ……すみません。少し濁して言いますけど、アタシも友理と似たような理由で辞退させてもらいます」

明日奈は同じ転生者であり、協力者でもあるからな。

コイツはコイツで、『ヴァルダン』の主人公——自分の義兄がヒロインの子とイチャつくの見るの嫌だって理由で行動を共にしているから、生徒会に入らなくて選択肢は無いんだよな。

「う、うう……1日に2度も振られるなんて……生徒会長としてのプライドがズタズタです。私、私……このままじゃ泣いちゃいそう……！」

「ウソ泣きを、ですよね？」

「あ、バレちゃいました？」

確信した。確かに、ムードメイカー推薦で入ってるわこの人。



「にしても、変われば変わるものよねー」

生徒会室からの帰り、明日奈がポツリと呟いた。

今日は仲間内で集まりがあるので（地味に嫌だが香坂拓也もいる。仲間はずれは人として良くない）1度教室に戻ってからお姉ちゃんが来るのを待って、みんなで柚木家に行くことにしている。

最近の改革で、金曜日の授業が1限分減って時間があるおかげだ。

「何が？」

「八千代さんよ。アニメだと、もっと、こう……優しく見えて結構厳しいというか、冷徹な面があつて、あんな良くも悪くも子供っぽい雰囲気じゃなかったな1つてき。アニメじゃ尺の問題とかもあつて、準ヒロインの忍ちゃんと八千代さんの話が無かつたのよ。だからアンタから原作のことを聞いて、八千代さんは自分自身に1番厳しい人なんだつて納得したの」

「そうだな。原作じゃ、自分にストイックだった」

「……で、どんな原作ブレイクしたの？ 聞いた話からして何となく予想は付くんだけど」

「そうだな、あれは5年ほど前になる」

『ヴァルダン』準ヒロイン、西園寺八千代。

原作で彼女の人生におけるターニングポイント、残酷な展開は彼女が中学に入つてしばらくすると起きる。

子供の頃から一見するとお淑やかそうだが、ちよいイタズラ好きだった神社の娘でもある八千代さん。

家族に恵まれ、友人に恵まれ、幸せな日々を送っていた。

それが崩れたのは、とある満月の夜。

八千代さんが住んでいる神社はかなり古くからあり、それこそ最初期ともなると文献がほとんど無い程であった。

そんな神社の境内には大きな社がある。一般人が入ることを固く禁じている区画にあり、代々の神主は「人が入らないよう見張れ」と言い伝えられている社が。

これで資料などが残っていれば、口伝で伝えてきたせいで一番重要な情報が伝言ゲームのように抜け落ちていなければ、もしかしたら悲劇は起こらなかったのかもしれない。そのくらい重要な秘密がその社——正確にはその地下にあった。

大昔に陰陽師が封印した、おぞましい妖怪だ。

ハッキリ言つて「世界観が違くない？」とツツコみたいところだが、実際問題そうなのだし、マジメに考えていたら切りがないのでひとまず置いておく。とにかく、当時の人が封印するしかなかった強い妖怪が封じられているという事実があった。

本来は封印が完全に妖怪の力を押えていたけど……悲しいかな、ご神木を削られて作られた封印の杭も、陰陽師が命を削って作った封印を強固にするための特別なお札も、長い——永すぎる年月が原因で劣化していた。

そして件の妖怪は満月の夜だけ、ほんの僅かに力を発することができた。

だが足りなかった、封印を破るには。せめて、外部からの協力がなければ封印を完全に破壊することは不可能だったのだ。

だがその日、封印は破壊されてしまった。

他ならぬ八千代さんの手によって。

たまたま魔が差しただけだったのかもかもしれない。子供が親に「入っちゃダメだよ」と言われたら、逆に入りたくなる気持ちだったのかもかもしれない。中学生になって、ちよっぴり大人になったような気分で「少しくらいなら」平気だと、そう思ってしまったのかもしれない。

八千代さんは、その社の中へ入ってしまった。そして見た。妙な雰囲気がある地下と、妖怪を封印している場所を。

八千代さんは子供っぽいというだけで、バカではない。やっていいこと、悪いことの区別ぐらいはつく。本来なら地下と封印を見ただけで満足し、その場を去っていたはずだ。

ただし、その日は満月。妖怪の力が少しだけ戻る時であり、狡猾な妖怪がその一生に一度のチャンス逃すはずが無かった。

——助けて

八千代さんは子供が助けを求めるような、か細い声を聞いてしまった。

助けてお姉ちゃん、その杭を抜いてと、痛くて苦しいと、同情を誘うような声で八千代さんに囁いた。

その声は聞くだけで心が苦しくなるもので、けれどそれは妖怪の力によるもので……八千代さんは耐えきれずに、封印の一番大事な要である杭を、劣化と妖怪の力によって中学生の少女でも簡単に抜けてしまえるようになってしまった杭を……抜いてしまった。

そこから先は、少々抽象的な文で進む。

解き放たれ、本性を現した大妖怪。事態に気付いて地下まで降りてきた八千代さんの両親。妖怪から放たれる呪い。それを受けてしまった2人。天井を破壊し、満月の光を浴びながら妖怪は言う。

——気分がいいから、オマエは見逃してやる

そう八千代さんに言つて、夜空の奥へと消えていった。

それから、八千代さんの幸せは崩壊した。

呪いの影響でずつと目覚めなくなつた両親を悲しみ、自分を騙して逃げた妖怪に憎悪を抱き、そんな妖怪に手を貸してしまつた自分自身に怒りが沸く。

そんな日々を送ることとなつた。

現代社会で妖怪どうこうなど信じられるはずもなく、逃げた妖怪の居場所も分からず、探し出したとしても自分には非戦鬪系の異能しかなく、さりとして誰かに妖怪を倒してくれと頼むなどできるはずもない。自分が原因なんだから……と。

そう、誰にも助けを求めるときでもできずに学園に入り、気付けば生徒会長にまで上り詰めていた。全ては口では無理だと言いつつも、自分や両親を助ける人を求めて。ほんの僅かな希望に縋りついて。

そのような悲劇など、ボクは八千代さんに歩んでほしくなかつた。

——なので、

「先に封印を解いて、件の妖怪を退治しました」

「んなこつたらうと思つたわ」

ちゃんとゲームで行動パターンとか、性格とか知っていたからね。

社に侵入して、騙されたフリして封印を解いて、油断してる隙に速攻で勝負を終わらせたから。

たぶん「フハハハ！ よくぞ私の封印を解いたな小娘！」とでも言いたかったんだろうけど、わざわざ聞く義理もないから、妖怪のセリフなんて「フハハハ！ よくぞw——」までしか聞いてない。残りは断末魔ぐらいだ。

そもそも封印が解かれた時点じゃ完全に力を取り戻してないから、原作が始まる5、6年後まで身を隠していたらしいし。

それなら小学生のボクでも何とかなるでしょと挑み、実際何とかなった。相性などの問題からそれはそれはあっけなく。

「ゲームだったら炎上するわね」

「ここは現実だ。そして、ボクはリアリストだ」

「あーはいはい」

会話は終わり、お姉ちゃんの生徒会での仕事も終わったので、『友理と愉快的仲間たち(十α)』を引き連れて家に帰った。

案の定マヤが興奮したり、香坂拓也がマルコを見て仰天したり、アルカが未知との遭遇ごっこを始めたりと騒がしい日となった。

週末には掲示板をみんなで見ようぜと、集まる約束もしたんだ。

その週末の、柚木家からの帰りだった。
瑠維に不審な人物たちが接触したのは。

第29話 絶対に言ってはいけない言葉

それは、高校生になって1週間目で起これば不安しかない出来事。

「怪しげな男たちに言い寄られた!」「」

「ああ。大事には至らなかつたがな」

朝の教室にボク以外のクラスメイトたちの驚いた声が響く。

ボク以外で落ち着いているのは事の中心人物であるはずの瑠維と、「ついに何かしやがつたわね……」とボクに言いたげな明日奈だけだった。

いや、実際その通りなんですがね。

そもそも始まりは、瑠維が遅刻ギリギリで教室に入ったところから。

瑠維は見た目や言動こそアレだが実は結構時間に気を遣うタイプで、クラスの中でも教室に早めに来る方である。

ボクや他の友人ズが教室へ入ると必ず瑠維が先にいて、「おはよう」と普通に挨拶もし

てくるのだ。

私生活の話になるけど、瑠維は「早寝早起」を実行し、朝昼晩で食事もバランス良く取っており、歯だって毎日綺麗に磨いている。掃除や洗濯を手伝うし、近所であれば買い物だって代わりに行ったりする。

文字にすればこんな良い子なのに——中二病。内面は昔から大きく変わってないはずなのに——自称、地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》さん。

ホント……何でこうなったんだろ？（涙）

話が脱線したけど、そんな瑠維が今日に限って遅刻時間ギリギリで教室に入ってきたものだから、友人ズがどうかしたのかと聞いたんだ。

それに対して瑠維は、特に問題はないといった気軽さで、

——昨日の不審者について、職員室で話があったから遅れただけだ。

そんなプチ爆弾発言をしたんで、クラス中が「どゆこと!？」となったわけである。そこからは質問タイムだ。少し遅れて野々上先生も来たけど、事が事なんではばらくは静観することになっているみたいだった。

で、瑠維の話をまとめると——

昨日のボクの家で開催した、学園専用掲示板書き込みごっこ（アルカ参戦。忍とマルコが途中退場）をし終えた帰りのこと。最寄り駅近くのスーパーで夕飯の買い物を済ませ、暗くなってきた道を歩いていたら、適当に雇われたっぽいチンピラを従えた胡散臭い男が現れたそう。

「あら？ そんな人たちがいたら誰か通報しません？ それとも瑠維さんの住んでいる地域って、人通りが極端に少ないとか？」

「いや、我が住んでいるのは〇〇市でな、都会ではないが田舎風でもないぞ？ 明らかに通常と比べて人通りが無かったからな……異能が使われた可能性が高いと、警察の関係者も言っていた」

「え!? それ本当!？」

マヤの疑問に答えた瑠維の発言に、凜子が仰天する。

……いや、それよりもだ。昨日の瑠維の格好は、いつも以上に気合いの入った中二ス
タイルだった。何の意味もない鎖とか付けていたし、お気に入りのマントも装備していた。
テンションが上がっていたのか、いつも以上にキレキレだった。

……その状態で夕飯の買い物していたことに、誰かツツコめよ。

「奴は黒のコートに黒の帽子といった出で立ちでな……」

「うん？」

「一目で分かった！ この者は闇の力《パワー・オブ・ダーク》を秘めし、我と雌雄を決するため訪れた同類であると!!」

「たぶん違うと思うよ」

端から見れば、不審者 v s 不審者の図という……

何か思っていたよりも深刻な雰囲気じゃないことを察したのか、教室内の空気が軽くなってきた。

そこからの瑠維の話は……まあ、不審者たちが不憫に思えてくるような内容に変わっていく。

興が乗ってきたらしい瑠維のテンションが高いせいもあり、時々中二ワードが出てくるんで理解するのが困るものだったけど——要約すれば、瑠維に何らかの穏便な取引（後ろにチンピラ控えあり）で望んだものの会話が成立せず、強硬手段に入ろうとしたところで数羽のカラスに襲われ撤退したとのこと。

「カラスに関しては近くにゴミ捨て場もあったし、エサを取る敵だと思われたのかもな。そんなわけで雌雄を決する戦いができなかったことは残念であったが、不審な人物たちであったのは間違いないということで地域の守護者《エリア・ガーディアン》に連絡

を入れた」

「え〜つと、警察に通報したって解釈でいい？」

「うむ。しかし、そのあとの方が大変だったぞ？ やって来た其奴らは、あろうことか我を捕まえようとしてきたのだ。話し合いだけで随分と時間を浪費した。……大変だったよ。弟は『姉ちゃん学習しろよ』って呆れた目で見てくるしい」

「ま、まさかだと思えますが、警察に『この辺りに不審な人物が出た』と言って、そのまま待つていたわけでは……」

「その通りだが？ 今思い出しても腹が立つ。我は善良な一市民として地域の守護者《エリア・ガーディアン》に事情を説明しようとしていただけだというのに、奴らは私を見た途端『通報通りだ！ 確保——！』と襲ってきた」

なぜ通報した我が捕まらなければならん！と怒りを露わにする瑠維に対し、教室内全員心が1つになったのをボクは感じた。

——いやそれ……自業自得だろ、と。



「よし、全部吐きなさい」

「初っ端の言葉が有無を言わせない命令な件」

昼休み。明日奈に引つ張られ、連れてこられた屋上での最初のやり取りがコレ。

わざわざ「清掃中」と書かれた人払いの効果がある看板型アーティファクトを創り出したこともあり、現在屋上にいるのはボクと明日奈の2人だけだった。

「瑠維ちゃんに怪しげな輩が近づいたって聞いた時点で、アンタがこの事態を把握しているのは見え見えなのよ。事前に“瑠維ルート”を早期に終わらせるつもりだとも聞いてたことだし？ クラスの中でもアンタが1番冷静だったし？ とどめにクラスのおだりで確信したわよ。そのクラス、アンタの異能でしょ」

「大正解。ご褒美にとっておきの栄養ドリンクを——」

「いらんボケ。詳細な説明を寄越しなさい」

「ちえー」

まあ明日奈の言う通り、全部知っていたからこんなに落ち着いているんだけどさ。ついに“瑠維ルート”が本格的に動き出したんだ。

ちなみに、不審者を撃退したのは『第40柱ラウム』による力だ。

カラスの召喚が可能な異能だから、昨日の帰りから瑠維のことを見守っていた。『第

『9柱パイモン』と違って召喚可能なのはカラス限定だけど、下級使い魔と違い複数体召喚できるうえに、攻撃能力もそこそこ高いから使い分けをしている。

「ふーん、つまりアンタは不審者の行動もある程度把握してたのね？」

「入国した時から、監視しています」

「……中二病を発症した瑠維ちゃんと会った日に、『瑠維ルート』の大まかな内容は聞いたんだけど、結局そいつら何者よ？」

「……海外で活動する『ヤ』のつく人たち？」

「それマフィアじゃん！ 『マ』のつく人じゃん!!」

麻薬の密売もしている、正真正銘のガチマフィアだからな。

ロシアに拠点を構えて、ヨーロッパ・アジア方面で違法な取引をしている結構古い組織だ。

「え？ 何でそんなのが、この時期に日本へ来てるの？ アンタから聞いた話からすると、本格的に関わってくるのはもつとあとのはずじゃ……？」

「この時期に日本へ来るよう誘導しました」

「何てことしてくれてんのよおおおおおおおつ!!？」

明日奈が鬼の形相で胸ぐらを掴んできた。苦しいって。

「落ち着け。ちゃんとした理由があるから」

「腑に落ちない理由だったら、生徒会に突き出すわ」

ヤダ、何ソレ恐い。

「そもそも話、だ。『瑠維ルート』なんて言っている通り、『ヴァルダン』はマルチエインディングの作品だぞ？ プレイヤー……この場合、主人公である香坂拓也の行動次第でゲームの内容も変わってくるわけだけど、メタ的な発言をすれば、香坂拓也の行動に関係なくそれぞれのルートの可能性が同時に存在しているんだ」

「あ。確かに、言われてみれば」

ゲームの内容と結末をそれぞれのルート事に知っているからこそその、『神様の視点』での物事の考え方がボクはできる。そこまで万能ではないけど。

明日奈はアニメ組だから、その辺りの発想に行き着かない。

「そして何度も言うようだけど、この世界はどれだけ『ヴァルダン』と似てようが現実であることに変わりはない。ゲームと違って……エンディングは、たった1つしか成り立たないんだ。それこそ、バッドエンドだってあり得る」

ゴクリと、明日奈がのどを鳴らす音が聞こえた。

分かっていたつもりだろうけど、どこか遠い国の話をテレビで聞くような心境も少なからずあったのかもしれない。1度目の人生で死んで、2度目の人生を現在進行形で歩んでいるボクから転生者って、無意識にその辺を軽視する傾向があるんだと思う。

前世でボクらは、どちらも交通事故で死んだとはいえ不幸な人生を送ってきたわけじゃない。平凡だけど、幸せだったと断言できる。

そんな中で知っている作品の中へ転生を果たしたからか、自分ならどうにかなるかも？という考えが根底にある。振り返ってみれば、ボクだつて記憶が戻ったばかりの数年間は調子に乗っていた。異能に目覚めてからは特に。

でも、アルカと出会つてイレギュラーな事態は簡単に起こるものだど知り、マヤ・瑠維・忍とボクに関わつたことで変わつていく彼女たちを側で見た。ここは現実なんだつて認識が強まつていった。

「当初の目的は今も変わらないし、これからも変わることはない。でも、新しく加わつた目的には『みんなの幸せのため、努力を惜しまない』つていうのもある。そのためには、あのゲスマフィア共はこの時期に徹底的に潰す必要があるんだ。だからアルカのハッキング能力をフルに使つて奴らの勢力を減らしつつ、この時期に瑠維に絡んでくるような間接的な誘導をした」

「そういえば初期に友理がアルカを叱つてたことがあつたわね。その時確か、『無闇矢鱈にハッキングしかけるな』つて言つていたような……あれ、マジだったのね。日本にいながら海外のマフィアにケンカ売れるアルカつて一体……」

アルカのハッキング能力は変態の領域だぞ？ 何せ一切の痕跡を残さないからな。

電子データに弱みが残っている奴の天敵だ。データ上から一方的にデータを弄れて、逆探知も不可能って頼もすぎる味方だわ。おかげで万一の時に、たくさんの切り札が手に入った。今なら政治家にだってケンカを売れる。

「でも、何でわざわざ日本へ来るように誘導する必要があるのよ？ それも入学したてのこの時期に」

「この時期だからこそ、だよ。さっき言った通り、この世界は現実でルートは1つだけ。全部が全部、予定通り進むわけがないのに、こつちが忙しい時に出しゃばってくるのが1番困る。元々アイツらが溜雑を狙ってくる可能性自体は高いんだから、遅いか早いかの違いだ。入学式からのフラグ祭りだワツシヨイな1週間が過ぎた今日からの1ヶ月は、ゲームでは自由になれる時間が多い共通ルートばかり。この最も面倒事が少ない時期に、最大の問題を片付けておきたいってわけ」

「すごい。友理がちゃんと考えてる……！」

「明日奈が地味に酷い件」

夏休み終了までの時期なら共通ルートや個別イベントばかりで対策もしやすいけど、それから先になると予測が難しい。大抵の場合はそれぞれの個別ルートに入るから。

イレギュラーの塊であるボクと明日奈の影響も大きく出てくるだろうし、2学期になつたら当たって砕ける精神でぶつつけ本番勝負ばかりになる。

下手すると複数のイベントが重なる時期。そんな時にガチのマフィアなんて現れた日には、収集がつかなくなる未来しか見えん。

「でも、マフィアから瑠維ちゃんを守り切れるかしら……」

「ボク一人じゃ手が足りない。だから——」

——明日奈の力を貸してくれ。

そう言えば、一瞬キョトンとした表情になった明日奈は、

「フフ、フフフ、アハハハハハ！」

心底嬉しそうに笑い出した。

「何を笑っているの？」

「いやあだって、こんな真正面からアンタに頼まれたのなんて初めてなもんだから、おかしくておかしくて。今まで口裏合わせだったり、兄貴のスパイだったり、協力関係になってからそんなばかりだったんで、アタシほとんど役に立ってなかったなーって
キ」

気が済むまで笑った明日奈は、スッキリした顔を上げる。

「アタシだって瑠維ちゃんに仇なす奴なんて許せないし、アンタだけに良いところ持つ

「題して『転生者・明日奈、超強化計画』をここに発表します。数日前に思いついたばかりの計画だけど、上手くいけば2週間くらいで明日奈もみんなもハッピーになれるはず。大丈夫。死ぬ気になれば何だってできるから♪」

「こんの、悪魔かああああああああああああああつ!!」

マジメな話、どこまで敵を分散できるかが勝負の分かれ目なんだし、最後まで協力してよ。個人的な理由であるとはいえ、正反対の意味でターゲットが2人もいるんだから。

閑話 悪の組織、日本上陸

『Hear tギア』を使った異能が世に広まり、それに伴い技術力が年を追うごとに上がったことで、その煽りをモロに受けたのは一部の犯罪組織だった。

日本ならばヤクザ、海外ならマフィアといった、銃刀法違反に真っ向からケンカを売る者たちの集まりが。

そも数十年前まで、刀剣類や銃火器への取り締まりは年々厳しくなっていたが、そういった組織も対策をして警察や公的機関の目を掻い潜り、取引によつて武器を自分たちの懐へ集め、隠し待ち、誰かを傷付けていた。

いわゆる「イタチごっこ」というものである。

それは武器を作る者たちも同じだ。取引相手からの後ろ盾を経て、日々人を容易く殺せるモノを日夜作り続けている。

だが近年、そういった裏の世界の者たちでもどうしようもない問題が、世界各国の犯罪組織へとボデイブローを決めた。

今まで良くも悪くも「イタチごっこ」を続けることができた両者の均衡が、突然崩れ

るようになったのだ。

そう。国が全力で潰しに掛かってきた。

世界各国が合同で決めた犯罪を撲滅するための新しい法律に加え、刀剣類・銃火器をピンポイントで探し出す特殊な機械が広まったのだ。それも施設に備え付ける大型のモノから、持ち運びができる小型のモノまで幅広く。

表向きの性能としては、大まかな武器の形や素材をスキャンして見つけ出すとある。中身はブラックボックスとなっているため、たまたま奪取することに成功した裏の人間は早々に匙を投げたらしいが。

ちなみに、機械には発信器が内蔵されていたので、裏世界の名だたる技術者たちは何人も逮捕されることとなった。

空港や国境へ行けば大型機械で自動スキャンされ、一気に銃刀法違反でお縄。要人を狙おうとすれば小型のソレで人海戦術駆使スキャンされ、スナイパーの弾丸が途中で見えない壁に阻まれる、奇跡的に全ての関門を潜って要人に武器を使用しても「痛いなく」だけで済んでしまい、結局もろもろの罪でお縄。

それ以外の理由でも、それまで上手くいつていたことが失敗続きでたくさん犯罪者がブタ箱行きとなった。

——何だコレは……？ 夢だと言ってくれ。

そんな世の中になり、犯罪組織は1周回って現実逃避しだした。

犯罪がまるで機能しない。今まで手を変えて使っていた己の武器が何一つ通用しない。同業者がどんどん捕まり、様々なパイプが機能しなくなり、大きな組織ほど大打撃を受けることとなる。皮肉なことに、窃盗などの小さな犯罪の件数は今まで通りというから、組織の人間は笑つていいやら泣いていいやらの状態。

当然のことだが、まともに武器が手に入らず公的機関の目が厳しくなったことで、世界中で犯罪組織の活動が減少する。

大きな活動を行えなくなったから使える金が減り、同業者が減ったからパイプも減り、パイプも金も無いから後ろ盾も減り、そんな「落ち目」だから人員にも困る。そして、人員がいらないから余計に活動が縮小する。まさに悪循環。

結果、犯罪組織と言える存在は構成員が全て捕まるか、資金や信用が無くなって自然消滅でそのほとんどが歴史の中へと消えていった。

しかし、元々持っていたパイプの強さや構成員の質の良さ、それに加えて運が良かったことで今も活動している犯罪組織はある。

地下深くに潜って機を伺う者たちもいれば、普段は一般人として表向き犯罪に関わつ

ていない体の者もいる。偽りの戸籍を使い、身を潜め、新たな方向からかつての栄光を取り戻そうと……



「散々な言われようね」

パタンツと、少女は本を閉じる。

本の表紙には『「Heartギア」の登場から分かる技術のもたらした影響』とある。少女が読んでいたものだ。

レイカひょうどうⅡ氷道。

それが少女の名であり、ロシアを中心に活動する某マフィアで使われているコードネームでもあった。

紺色の髪に金の瞳を持つ、冷たい印象の高校生ぐらいの年齢と思わしき少女は、閉じた本に興味を無くして午後ティーを飲む。

どうでもいいが、今は午前中だ。

レイカⅡ氷道は、元は喫茶店だと思われる廃墟にいた。それも地元ロシアではなく、日本の廃墟に。

昨日の夜に日本へ到着し、朝になって指定された潜伏予定の場所に到着すれば、待っていたのはギリギリ雨が防げるだけのサビとホコリだらけの場所。年々犯罪組織の活動が難しくなっているとはいえ、この国は特に動き辛くて好きになれないと、心の中で愚痴を言う。

(ジャパンは他国と比べても警備が厳しい。銃火器の類いは持ち込めないし、こんな場所しか潜伏場所が無いなんて……)

レイカⅡ氷道が所属しているのは、かなり古参の組織である。今の時代で生き残れているのも、それまで培ってきた信用とパイプの太さゆえ。ロシアで生き残っている組織も自分たちのを含めて、片手で数えられる程に少なくなつた。

(一番力を持っている私たちですら、運が少し悪くなるだけで「落ち目」と言われるようになってしまう時代。ボスが言っていたように、今後10年以内にロシア系マフィアは私たちだけになるのかもしれないわね……)

自分が生まれる前は、組織もまだ大きかったという。ロシアで最大を誇り、構成員も4桁に達していたと。

(それが今じゃ、正規の構成員はたった数十人で残りはパシリか使い捨て。私のような小娘でも幹部になれてしまう。組織全盛期の時代なら、今の自分たちは吹けば飛ぶような存在だと笑われるって、最古参の幹部が嘆いていたわね……)

レイカⅡ氷道が組織に拾われた時には、すでに活動は縮小傾向にあった。自分が組織に居るのは、他にどう生きていいのか本気で分からないからだ。

だから、自身の異能と同じように感情を冷たくした。

そうすれば、何も悲しくないからと。

そうすれば、いつか人を殺すことになっても辛くないからと。

「ダメね。考えが後ろ向きになっちゃう」

「そりゃいけねえな。何事も前向きじゃなくっちゃ」

突然聞こえた自分以外の声に、しかしレイカⅡ氷道は微塵も驚きはせず、むしろ呆れた雰囲気となっていた。

「アナタって、いつでもどこでも気配を殺して近づかないと気が済まないの？ 幹部のマクシムさん？」

「おいおい。今日は一段と冷たいじゃないの」

廃墟の影から現れたのは、サングラスに無精髭スタイルの男。

見た目は40代程だが、ガタイが良くシンプルながら質のいい服を着ているので、地元では表向き女性からの人気が高い。顔も整っており、性格もフランクなため尚更。そ

の実、根っからの仕事人で誰よりも人を殺している、ボスからの信頼が厚い幹部である。「日本語の勉強につて、アナタが渡してきたのがコレだったのよ？ わざとでしょ？ 内容分かってて私に渡したんでしょ？」

レイカⅡ氷道は先程まで自分が見ていた本を持ち、バンバンと表紙を叩く。

内容は至つてマジメだが、犯罪者を中心に技術の発展によつて損を被つた者たちに関する記述が多いように感じられた。

知つてて渡してきたのなら、冷たい対応になるのは当然であつた。

「そんなに怒るなつて。せつかくだから、改めてオレらみたいなカタギじゃない奴らの現状つてのを勉強がてら認識してもらつただけさ。それに、日本語の勉強にもいいだろうつて思ったのも事実だぜ？ オメエさん、日系なのに日本語が若干怪しいじゃんか。そういう難しめの本を読めるに超したことねえぜ」

男——組織の幹部マクシムの言う通り、レイカⅡ氷道は日本人の血を引いている。祖母か、はたまたそれより前かは今となつては分からないままだが、顔つきから日系であるのは間違いない。

実際、レイカⅡ氷道の表向きの顔は、親の仕事の都合で外国を転々としている少女という設定だ。転々としすぎて友人ができてもすぐ別れることになるので、人と必要以上に仲良くなりたくないという裏設定まである。

「……ジャパンには2度と来たくないわね。入国するだけで下準備が必要だし、動きにくいっただけありやしない」

「気持ちには分かるがこれも仕事だ。今回の件以外にオレがボスから頼まれているのは、この国にオレらに取って有能なパイプとなる奴らがいるかどうかの確認だ。こればかりは、現地で調べねえと判断が付かないからな」

マクシムはレイカⅡ氷道とは別に、組織のボスから直々に任された仕事がある。それがパイプ探し。利害一致の取引相手の有無を調べること。

日本へやって来たのは2日前のため各所の下調べに時間を費やしたが、調べた限りどうやら数年前に人体実験などを行っていた大きな組織と、そいつらと繋がっていた公的機関の人間が同時に逮捕されたために、困っている連中がいるらしいという情報を手に入れた。

後はパイプや取引相手として、有能かどうかを判断するだけだ。

「もつとも、日本に来てまでする取引相手がいるかは怪しいがな。準備段階で下手すりゃ赤字だ」

危険を冒してまで頻繁に来たい国ではないというマクシムに、レイカⅡ氷道も同意する。

様々な国と陸続きのロシアと違い、日本は島国なうえに銃火器への対処が特に厳し

い。さすがサムライの国だと変に感心した。

と、そこへ――

「いやー、やつと来てくれましたか！」

目が細い、どこか胡散臭さもある痩せ型の男が現れた。

「キリルか。報告は受けているぜ」

「穏便な交渉は失敗だったようね」

「交渉？　とんでもない！　件の少女をわたくしめの異能で孤立させたまでは良かったのですが、まあ話が通じないと言いますか、住んでる世界が違うと言いますか……ぶつちやけ疲れたんで国へ帰ってもいいです？」

「何があつた？」

滅多に無い2人のシンクロツツコミ。

「ターゲットである少女との交渉に失敗した」という報告は受けているが、詳しい内容までは知らされていない。

雰囲気や喋り方はともかくとして、このキリルという男は仕事を途中で投げ出す者ではない。

そんな男を精神的に疲弊させる、某地獄の猟犬さんが持つ中二パワーよ。

「警察の方も動いてますから、2週間程は様子見ですな」

「穏便に済ませればソレで良かったんだが……まあ仕方ない」

彼らもプロだ。策は二重三重に用意をしている。

当然、交渉が決裂した後のことも想定して日本へ来ているのだ。

「ねえ？　今更だけど、本当にその「クロバ・ルイ」って子が持っているのは、組織が長年探してたモノなの？」

「あ？　そりや間違いねえ。日本にいた秘密の構成員が見つけて裏取りまでしたんだ。間違いなく本物だろうよ」

「特殊な異能が封じ込められているというアクセサリー！　偶然がいくつも重なって流出した『Heartギア』を作った研究者たちの秘中の秘！　世界に散らばったときれるソレらは9割がニセモノですが、残りの1割を引き当てれば巨大な取引材料となり得る!!　資料のほとんどは紛失したために封じられた異能の種類こそ分かりませんが、巡り巡って日本の学生が身につけているとは！」

キリルの興奮具合にレイカⅡ氷道は若干引き気味となるが、マクシムの方は「しかたねえなあ」と微笑ましいものを見ている。

黒羽瑠維が持つものは、世界が喉から手が出るほど欲しい代物なのだ。その存在がほ

とんど知られていないから今まで平和に暮らせていたというだけ。

だが、そんな宝がすぐに手に入るなら……

(場合によってはおもしろい仕事になりそうだなあ)

久しぶりに人の命を奪う快感を味わえるかもしれない、そうマクシムは心の中で期待に胸を膨らませる。

「んー、それにしてもここは汚いですね。短い間とはいえ、我々の活動拠点になるのですから、ホコリぐらいいは何とかしてもらいませんと」

「掃除でもしろって言うの？ 気になるなら私たちがいない時に、適当な下つ端にさせればいいじゃない」

「ワタクシめ、これでも綺麗好きでして。掃除は他人に任せたくないのです。短い間だからこそ、自分たちのいる空間は大事ですよ？」

「急にめんどいわね……」

「諦めろレイカ！ 氷道。コイツは余裕さえありやあ、自分で至る所を掃除する奴だ。ボスの部屋だって、コイツが担当している」

「ここでもまさかの事実が……」

「さあさあ！ 善は急げ！ 今の自由な時間に最低限のホコリと目立つ汚れは、ワタクシめのクリーンテクニックで取り除かねば！」

そう言い、キリルは近くにあったテーブルの上にある汚らしいカーテンか何かの布を片付け始める。

すると、ホコリが辺りに散らばり……

「おやおや、想像してたよりずっとホコリが——はっ……ハックツシヨン！ ハックツシヨン！ ハック、げほ！ ぐほ！」

「？ 何をそんなにむせ——クチユン！」

「おい、2人とも何が——ブエツツツクシヨイツ!!」

突然、鼻を刺激した何かがある人をしばらくクシャミ地獄に陥れ、数分後には酷い有様になった。

第30話 今明かされる、衝撃の真実ウ！

「side. 明日奈」

瑠維ちゃんが教室を騒がせ、不用意な一言の言質を友理アホンダラに取られてしまった日の放課後。

アタシと友理は、カフェの一角で今後の重要事項となる「瑠維ルート攻略作戦」とアタシの嫌な予感しかない——というか、実際その通りだった——異能の強化計画について話し合ってた訳なんだけど……

『Heartギア』を開発した研究者たちの試作品？」

「そう。どうもそれが、瑠維の持つているアクセサリーの正体みたいなんだよねー。原作知識と、アルカのハッキングで得られた情報からすると」

ものすごく軽い雰囲気で、極秘レベルの情報をぶっちゃけ始めたのよ。

事前にカフェの角側の席を取って、即席で創ってやった盗聴防止のアーティファクトがあるから話せるんでしょけど、心臓に悪すぎる。

「元々、異能のアクセサリーの素材に使われたのは、宇宙船のAIだった頃のアルカや乗

組員が不思議技術で回収した、各惑星でしか取れないもの——つまりは正体不明物質だ
な——の一部だ。あくまで珍しい素材が使われているだけのアクセサリーで終わった
モノもあつたが、いくつかは技術で再現することができない異能を内に秘めたアクセサ
リーとなつた。……言うなれば、天然のアーティファクト」

「……………ちよつと待ちなさい。今、サラツと聞き逃せない超とんでも真実を言わ
なかつたかしら？ アルカが、何ですつて？」

いや、薄々そういう系じゃないかしら〜とは思つていたわよ？ アルカもいつだか
「地球はホントに青かつたよ」なんて言つていたし。

でもこんな緊張感も無く、カミングアウトされるなんて思わない。何で別の重要事項
の前振りに使われてんのよ、衝撃の真実？

「宇宙船から得られた技術を解析して『H e a r t ギア』を含む、オーバーテクノロジー
が世にもたらされた。偶然がいくつも重なつた末に完成したそうだけど、その話はひと
まず置いておこう。今知つておくべきなのは、この世界にある異様な技術のほぼ全てが
アルカの故郷由来だつてことだけ」

「無視かい。そして、またもや衝撃の真実が」

そりゃアルカのいた宇宙船がどんな代物なのか想像つかないけど、星と星とを簡単に
移動できる機械が見本としてあれば、全部の技術を解析できなくなつたつて、一定以上の

進歩は見込めるでしょう。

研究者からしたら、お宝の山に見えたんでしょね。

「……そのアルカは、勝手に人の星の技術を盗まれた。著作権料やら特許料を要求したい。——って、ちよつと怒ってたけど」

「無断使用したこと考えたら、天文学的金額になりそうね」

「あと、死んだ乗組員を好き勝手した件だけは絶対に許さないって」

「(ま)もつとも」

フィクションでの宇宙人の扱いを考えたら、何が行われたかは想像が難しくない。現実問題としてそりゃ許せないわよね……

アルカにこの話題は基本禁止って覚えておこ。

「当初、ボクらはこの『ヴァルダン』の世界をローファンタジーの世界だと思っていた。だが違う。あの日、アルカと初めて出会って知ったのは、この世界はローファンタジーの皮を被ったSFの世界だったという事実だったんだよ」

「その事実を2番目に聞いてもバチが当たらない立場にいなから、今日までずっと知らされなかったアタシは一体……」

今更だけど、この数年間でいくらかでも言う機会はあったはずよね？

友理の奴、絶対に普通に話したら混乱して面倒そうだからって、他の重要事項の中に

ねじ込んでダメージを少なくしたかっただけでしょ。

「研究者たちも『Heartギア』を開発するに当たって、様々なデータが必要だったみたいでさ。正体不明物質の中でも加工が可能そうなのを選んで作り、天然アーティファクトができたなら、具体的にどんな効果があるのかを各地で秘密裏に実験してたんだって」

「ああ、そっか。作ったはいいいけど効果までは把握できてなかったアーティファクトもあつたから、人目の付かない所や条件に合いそうな所で実験したのね。もしかしなくても、その過程で流出した？」

「正解」

『Heartギア』の開発は当時のトップシークレットだったんだし、アルカがいたっていう……宇宙船(?)のこともあつたから、相当セキュリティが厳しかったはず。流出するなら、外に持ち出されたタイミングしかない。

「当時の電子記録はほとんど無いから、アルカでも調べきれなかったんだ。原作の方でも、そこまで深くは掘り下げていないんで真実は分からん。事実として分かったのは輸送途中に事故・事件があつて、いくつもの天然アーティファクトが海に落ちたこと。流れが激しい海域だったのか世界中に流されたこと。今日までに何とかほとんどの天然アーティファクトは回収できたけど、未だに行方が分からないモノもあること。これく

らいだな」

「じゃあ、瑠維ちゃんのアクセサリーも海で?」

「いや、ロシアの海域に流れ着いたのをマフィア連中が見つけたらしい。それから血みどろな抗争の果てに、瑠維を狙っている組織の手へ1度は渡ったそうだ。異能の効果も知っていたのか、それを組織の象徴にして、ロシアで確固たる地位を築いたんだと」

「あれ? じゃあ何で瑠維ちゃん——正確には瑠維ちゃんのお婆ちゃんが持っていたのよ?」

ロシアから日本に渡った経緯が予想できない。

象徴にするぐらい大事なモノなら、管理も厳重だったはず。

「理由は2つ。1つは、犯罪者の取り締まりが厳しくなった背景にある。『Heartギア』開発の副次的効果で国側の技術が一気に上がったんで、法整備を光の速度で終えて、組織だって行動する犯罪者共を逮捕しまくったんだ」

「あ、それ中学の歴史で習った」

「そうそれで、件の組織も巻き込まれて上へ下への大騒ぎ。ついに本部へ公的機関が押し入る事態にもなって、逃げる途中で換えの効かない財産なんかを咄嗟に隠したらしい。あとで回収するつもりで」

「その中に瑠維ちゃんのアクセサリーもあったのね!」

「一度マフィアの手から離れたんだったら、2つ目の理由しだいでは日本に来てもおかしくはない。」

「それで？ 2つ目の理由って？」

「瑠維の婆ちゃんだ」

「……え？ もうここで出てくるの？」

「2つ目の理由のあとじゃなく？」

「うーん……何ていうか、瑠維の婆ちゃんって若い頃はブイブイ言わせてたみたいで……めっちゃフットワークが軽かったそうなんだ」

「あー、学生時代はヤンキーだった的な？」

『『ボルシチ（ロシアの定番料理）っての、食べてみたいなあ』という軽い気持ちで、ロシア行きの船に乗り込んだとか』

「それ密入国!!」

「フットワークが軽いんじゃないかって、考え無しなだけでしょ!？」

「ボルシチ自体は『言葉が通じなくても拳で語ればいい』という謎理論で仲良くなった、後のボクシングチャンピオンに奢ってもらい、大満足したそう」

「ツツコミどころしかないわね……」

「何なの？ その少年マンガみたいなのりと勢い？」

「で、帰りの日本行き船が来るまでの間は暇だからと港周辺をぶらついていたら、マフィアが咄嗟に隠したばかりのブツを発見」

「ここで1つ目の理由と合流かあ」

「明らかにヤバイモノもあったから、さすがの瑠維婆ちゃんもマズいと思って離れようとするけど、そこで目に付いたアクセサリーのデザインが気に入ったそうで……『落ちてた物を拾っただけ』という暴論でアクセサリーを即装着」

「それ置き引きー!」

『アタイの物はアタイの物、落ちてた物もアタイの物』だと、それから半世紀に渡って身につけてたんだって」

「どこのジャイアニストよ!」

さつきから聞いていれば犯罪ばっか!

瑠維ちゃんに優しく接するお婆ちゃんのイメージが崩れちゃう!!

「そんなこんなで『さすがに、婆になつてアクセサリーを身につけるのはキツいなあ』と、適当な理由を付けて瑠維にあげたわけだな」

「最後にトドメを刺さないでよ。イメージが……」

瑠維ちゃんの件になると、何でこんなに疲れるんだろ?

あすな、おうちかえりたい。

「……そういえば、さつきからアクセサリーアクセサリーって言っているけど、何のアクセサリーなのよ？」

最後に気になったことだけ聞く。

「言ってなかったな——ロザリオだ」

「そう……」

中二病の瑠維ちゃんにはピッタリですこと。

第31話 背景モブ

「ねえ知ってる!?」 2日前に日本で巨大生物の目撃情報があったんだって!」

明日奈から言質を取って早3日。

一昨日からやっていることで眠気が抜けきれない朝の教室。

新聞を持って仲の良いグループに突撃する女子の姿があった。

(巨大生物の目撃情報ねえ……めっちゃ身に覚えあるな)

ちよつと予想外のこともあつて計画の修正を余儀なくされた今回の件。

忙しさが倍増しているのに、身に覚えのある目撃情報とか勘弁してほしい。

僅かな気配から、教室にいる共犯者たちが動揺しているのが分かる。

ついでに、新聞を持った子の一挙一動に注意しているのも。

しかし、あの子……見覚えのある顔だな。

(うゝん……誰だっけ?)

香坂拓也への対策で1週間以上に渡り見張っていたせいかボクはクラスメイトのこ
ととか縁に知らない。メインヒロイン以外の名前すら思い出せん。どうでもいいとは

言わないけど、優先順位は限りなく低い存在のはず。なのに見覚えがある。

ボクにとつて、その他大勢の1人のはずなのにやけに気になる。

絶対どこかで見たことある。

どうにか記憶から引つ張り出して……あー、思い出した。

あの子、背景モブ（普通に顔が整ってる）の1人だ。

背景モブ。もしくは、特に名前の出ないクラスメイト。

ゲームでは様々な主要キャラが登場するが、当然そのキャラだけで話を進めるのは無理がある場合が多い。舞台が学園なら尚更。

大抵は役職名だけかシルエットのみでモブキャラが登場するけど、ゲームによつては緑に名前すら出してもらえないものの立絵はあるというキャラたちがいる。運が良いとCGイラストの背景として描かれることもある。それが背景モブ。

彼ら、彼女らはヒロインの子と仲良くするための会話のパス回しになる場合や、切っ掛けとなる会話の言い出しっぺとなる場合に重宝される。重要人物じゃないけど何かあるかもしれないから覚えておこう”な存在である。

『ヴァルダン』にもへ女子A、Bとへ男子A、Bの4人がいた。

〈女子A〉は普通に顔が整っており、もう一癖二癖何かあるか、バックストーリーがあれば準ヒロインになれたんじゃないや？っていう惜しい娘。交友関係が広く、クセがないから1番登場回数が多かったはずだ。

〈女子B〉は髪を三つ編みにしているメガネっ娘。少し地味だけど本好きということ
で小夜の会話相手だったことが多い。

〈男子A〉はちよいオタク気質だったはず。サブカルチャーに詳しく、一部のイベントで助言役をしてくれる。

〈男子B〉は坊主頭。確か野球部に所属しているという設定だった。あとエロトークになるとどこからともなく現れた。愛称はエロ坊主。

その4人がグループを作ってるらしい。

〈女子A〉が他の3人へ突撃する姿を見てほっこりする。

今の今まで忘れとしてアレだけど、やっぱ『ヴァルダン』の登場人物には違いないわけ、ボクの中の優先順位を少し上げておいた。

で、気になる新聞の内容はと言いますと――

『全長100メートル近くの巨大な影』？ これか？』

「そう！ 夜中に肝試しをしていた大学生たちが見たんだって！」

「あの、これゴシップに近いんじゃない？……？ 新聞には確かに載っているけど、5面の端っこにある『今日のミステリー』ってコーナーのだし」

「信憑性は限りなくゼロじゃね？」

「3人ともロマンが無いなー！」

良かった。ゴシップ扱いしてくれたか。

これで安心——

「けどさー、この写真の影。どつかで見たこと気がするよな」

「あ、オマエも？ 100メートル近いのなんて目にする機会無いのにさ」

「ワニみたいシルエットで、大きくて、最近見たのって……」

「あはは、まるで柚木さんの異能で召喚されたワニみたいだよなー！」

しばらく笑う（女子A）は、しかし徐々に笑いが乾いたものになってきて……

グリンツ！とこつちに顔を向けてきた。

ミシツ！と骨から音が出る勢いで逆方向に顔を背ける。

地味に痛い。おい、こつち見んな。近づくな。

「あの、ね？ 柚木さん。この新聞にある巨大生物の影を映した写真なんだけどね、もしかして……覚えがあったりする？」

途端に動き出すクラスメイトたち。

担任の婚期を逃しかねない怒り方は初日に知っているのだ。

「はい！ 分かりましたー！ あー、ほらほら女子Aさんも、新聞仕舞って席についた方がいいよ。没収されたくないでしょ？」

「むう、はぐらかされた気が——ちよつと待つて？ 女子Aって私のこと?! え？ 柚木さん私のことそんな風に心の中で呼んでたの!？」

「親しみを込めてね！」

「尚さら悪いよ！ あの、私の名前は——！」

「明日奈く、ちよつといいか〜！」

HRまで残り数分、〈女子A〉から逃げるため明日奈の元へ。

後ろで何か言ってるけど今回は聞きたくないので無視する。

ターゲットになった明日奈は声を潜めながら嫌そうな顔を寄越す。

「友理、逃げる手段にアタシを使わないでよ。そもそも2日前にワニ助の存在がバレたのもアンタが隠蔽対策し忘れたからじゃ——」

「あそこにいる4人、俗に言う背景モブだぞ？ アニメで見たことない？」

「あー！ 確かに見覚えがある！ 何で気付かなかったんだろアタシ！」

目に見えて明日奈のテンションが上がった。

きっとボクと似たような気持ちなんだろう。

あれだ。推しである歌手が1番好きだけど、いつも同じメンバーのバックダンサーに会えたらそれはそれでテンション上がるのに近い感じだ。

第32話 DO☆GE☆ZA

そんなこんなで、クラスメイトたちからの冷ややかな視線を切り抜けて放課後。ボクは今回の件に関わる共犯者たちと共に屋上へ向かっていた。

まあ共犯者っていうか、いつものメンバーなんだけどね。

ただし、昨日までとは空気が違っている。

「くお〜く〜、まだ痛え〜!」

「えっと、その、ゴメン」

珍しく、本当に珍しく、ボクは香坂拓也に対して悪い気分となっていた。

紅葉のような跡の残る頬を押える香坂拓也。

自分じゃ見えないけど眉が下がるほど申し訳ない表情のボク。

たまたま通りかかった人が2度見るレベルで珍しい光景だろう。

ただでさえ共犯者——というか協力者になって貰っている分、今回ばかりは強く出れないのだ。さすがのボクも反省している。

一体何があったかと言えば……

「その、柚木さんが謝ることじゃないよ。今日のことは100%オレが悪いんだし。むしろこの程度で済んで奇跡というか……」

「だけどさあ、たまたま階段を踏み外してボクの胸を揉んだ程度で本気の平手打ちなんてするつもりなかったんだよ」

そう。あれは午後の移動教室へ向かう途中のこと。

階段を下りる最中の香坂拓也が足を踏み外し、前にいた美江の背中に抱きつきそうになるという珍事が発生しかけた。原作のイベントにも無かった出来事だったんで対処がギリギリになってしまったが、美江の隣にいたボクは咄嗟に庇ったのだ。

このままでは美江が男子に後ろから抱きつかれる↓初めて男子に抱きしめられた↓怒りつつも相手を意識してドキドキ!?な展開になる可能性アリと、限界突破で光の速度になったボクの脳は答えを導き出した。だから庇った。

——が、

直後に感じたのは己の胸への違和感。

体感抜群のボクの体はブレることなく、香坂拓也の体を受け止めていた——咄嗟に出したのだろう右手が胸を鷲掴みにする形で。

ボクの意識はそこから一瞬だけ途絶える。

後に明日奈は語った。

瞬間、世界から音が消えた。

後に凜子は語った。

このあと起こることを予想して体が震えた。

後にめぐみは語った。

周囲のクラスメイトたちが徐々に口をあんどりさせた。

後にマヤは語った。

羨ましいし、恨めしい。

後に瑠維は語った。

血の気が引くと、人の顔ってここまで白くなるのかと。

後に小夜は語った。

100点満点のビンタだった。

何も語らなかったのは庇われて何が起きたのか見えなかった美江だけだ。

とんでもない破裂音と共に意識が戻ったボクが見たのは、見事な土下座で頭を下げる香坂拓也だった。それも右頬に紅葉マークを付けた。

「ボクはオマエのこと好きじゃないけど、ビンタはさすがにやりすぎだ。自分でも何で

こんなことをしちやっただのか記憶が無い……」

本当に不思議だ。

胸を触られたって何とも思わなかったはずなのに。

どうして手が出てしまったのだろうか？

「政治家みたいな言い方だな。……ところで、もし、オレが別の子の胸を揉んでたら……
柚木さんはどうした？」

「グーで殴ったあと土下座させる」

「やっぱりか!？」

香坂拓也にとっては、どの選択肢を選ぼうが土下座は確定だったわけだ。

「ねえ明日奈？ 前からちよつと怪しかったけど、友理って女の子としての羞恥心が他
とズレてないかな？ 結果として助かったけど」

「母親のお腹の中に置いてきたんでしょ。比喻でも何でもなく」

「いや明日奈よ、いくら母の愛籠《マザー・クレイドル》が友理の生まれる前に育った場
所と言っても感情を置いていけるわけでは……何だその目は！ 明日奈、なぜ悟りを開
いたかの眼差しで我を見るのだ!？」

後ろで美江、明日奈、瑠維が何か議論してた。

失礼な話だ。ボクにだって羞恥心はある。学校の先生を「母さん」って呼んでしまった時はカリスマガードに移行した程だ。

「拓也くんはご愁傷様ですね。運が悪かったと割り切ってもらうほかありません。……秋穂やマヤちゃんがこれ以上彼に何かするようなら今日は私も同行しましたが、思ったよりも大人しいですね？」

「ユウちゃんはね？　ちゃんと線引きができる子なんだよ？　それなのに思わずその線引きを超えて落ち込んでいるなら、私の仕事はユウちゃんをぎゅーって抱きしめてあげることだから」

「本来であればわたくしの異能の餌食にして差し上げるのですが……あそこまで綺麗な紅葉マークを見ますとねえ？　死体にムチを打つのは趣味ではありません」

ついでに八千代さん、お姉ちゃん、マヤの会話も聞こえてきた。

原作のマヤだったら嬉々として香坂拓也を爆死（死んでません）させただろうに。本当良い子に育ったな。

「模擬戦で死体にムチ打つ行為をした奴が何か頷いている件」

オマエの兄貴は犠牲になったのだ。

ボクは悪くない！

「だけど本当に見事な土下座だったわ」

「ゆゆっちみたいだったね！」

「勢いというか姿勢というか、いつだか友理が言っていた『土下座は芸術』って言葉
思いつくくらい完璧だったよ」

さらに小夜、凜子、めぐみが土下座品評会をしていた。

ところでめぐみさん、ボクそんなこと言ったっけ？

(ボクもあんな感じで土下座したのかな?)

ちよつと凜子が漏らしていたが、実を言うと明日奈に言質を取った翌日、ボクはココ
にいるメンバーに人生最大級の土下座をしている。

てか、だからこそみんなで瑠維の問題をどうにかしようとしている。

「ホント、みんな友達想いで最高のヒロインたちだぜ」

と、近づいてきた明日奈が耳元で一言。

「感動演出してるとこ悪いけど、さつきまでアンタが考えてたことを当てたうえで言う
わ。兄貴もヒロインも——みんな瑠維ちゃんの問題に対処しなくちゃいけなくなっ
たの友理のミスが原因でしょうが」

「こんなやり取り前にもあったよな？ 何で明日奈はボクの心が読めるのさ？」

瑠維ルート攻略にあたり、日程調整におけるロシアのマフィアが程よく弱体化する工事は上手くいった。アルカとともに3年近く前からシミュレーションを行い、都度修正し続け、ボクの望み通りの時期に瑠維を狙うことが分かった際はお互いハイタッチをして喜びを分かち合ったものだ。

あとはボク、明日奈、忍、アルカ、マルコ、そして当事者であり重要な役目を頼みたい瑠維と八千代さんというメンバーで事に当たる予定であった。そのあとのマフィア壊滅まで予定を組んでいた。

——なのに、

「取引潰しまくったことで逆に余った人員が、日本に大集合って……！」
「海の方こうのお巡りさんが優秀すぎたのもあるのかもねー」

思わず手で顔を覆う。

予定じゃこんなはずじゃなかったんだ！

アルカのハッキングは本当にすごい。

単純にパソコンやスマホにアクセスできるだけではなく、オフラインの機器にまで秘

密裏に繋げてカメラやマイク機能で映像と音声を入力することが可能だから。まともなハッキング対策なんてアルカには通用しない。

そうやって得た情報を元に、時期と人数の調整のために人命に関わらないものに限ってだけ、敢えて取引を見逃したりもすることで微調整していたんだ。やり過ぎても良くないからって。

だというのに、いつの間にかロシア警察に若きエースが爆誕!!

そいつの異能が探知系だったのが運の尽き。

よりにもよって敢えて見逃してた取引の情報を掴んで、頼れる警察仲間たちと一緒に取引を潰さんと奇襲を仕掛けたわけだ。

監視カメラの映像を見せてもらって口あんぐりだね。

完全に動きが映画の世界だったもん。アルカに「これ映画だよな？」ってマジトーンで聞いちやうぐらい現実離れしていたもん。

何食ったらリアルマトリックスで銃弾避けた姿勢のまま撃ち返して倒せるの？ その身体能力、キミの異能と関係ないよね？ と、半ば現実逃避した。

警察系の情報は完全にノーマークだった。

気付いた時には手遅れだった。

明日奈の協力を取り付けた日の夜、最終確認にとアルカに再度情報を見直してもらって初めて事態に気付いたんだ。もうその時には日本へ送る人員の増加が決まっていた。具体的には『Heartギア』保持者2人と予定の数倍の構成員さん方が。

気分はドラえ○んに助けを求めるメガネの少年。

物理的に人が足りず、しかし、あの子を救い出すためには公的機関を頼るわけにもいかず、悩みに悩んで……昼休み、みんなに土下座した。

——人数が足りないんで助けてください、と。

表向きの理由として、瑠維を狙っているマフィアの情報をアルカの力でたまたま入手していた。変に強い人材を送られても困るから、向こうの警察に掴んだ情報を渡して弱体化を図ったけど、警察が優秀すぎてこつちに火が回ることになっちゃった。どうしても助きたい子がいるんで、公的機関には頼りたくない、と。

わざとこの時期にマフィアが来るよう調整したことだけ完全に伏せて、ほとんどのこ

とをゲロツた。

当然、何で黙っていたのかと怒られたけど……

「すぐに『で、私たちは何したらいいの？』って言うてくるの格好良すぎない？ 細かい

説明はまだだったのに」

「そりゃあ、全力でアタシらが大事に想っているヒロインだもの。兄貴だつてそう。主

人公がここで弱腰になるなんて無いわよ」

本当そうだよねー。

全部終わったらみんなに借りを返さなきゃな。

第33話 明日奈強化計画

さて、どうやって借りを返せばいいかなと考え始めたところで、目的地である屋上へ着いたボクたち。

昼休みは一部の生徒が昼食を取ったりして賑わう屋上は、この時間帯だと寂しく感じるほど人がいない。そんな中で待っていてくれたのは、

「皆さん、おそろいのようなですね」

「ん。待ってた」

「ワン！」

忍、アルカ、マルコのトリオだった。

「悪いな忍。八千代さんやお姉ちゃんが生徒会での仕事とかある関係で、毎回半端な時間待たせることになっちゃって」

「お気になさらないでください！ 友理さんを守ったためなら凄腕スナイパーのごとく、何日でもその場に居座る覚悟があります!!」

「うん。そんな鬼畜な命令、よっぽどのことでも出さないから心配しなくて良いよ？」

もつと自分を大事にしよう？」

スナイパー云々ってあれだろ？ 何日も飲まず食わず、お花摘み事情も無視してターゲツトが来るまで待つって話だろ。

そんなこと忍にやらせたら、本当に誰かに殺されかねない。

友人ズどころか今世の両親にも顔向けできんわ。

「あの子……忍ちゃんだっけ？ いい加減ツツコミたいからするけど、もう当たり前のように学園に不法侵入しているよね？」

「聞いたとおりなら入学式の時からだっけ。生徒会長さんのいいんです？」

良識人代表のめぐみと美江が八千代さんに問う。

この2人は元々人格形成に影響が出るような過去もイベントも無いから、『ヴァルダ』のヒロインたちの中でも特に常識的なんだよな。頭が硬いわけじゃないから時と場合によっては非常識な行いだって辞さないけど、時々ゲームの会話で主人公や他のヒロインのした行いについて客観的な意見を述べるシーンは多かった。

2人の疑問は当然のものだ。

見て見ぬ振りはするけど、気になるものは気になる。

だが残念。問われたのはあの八千代さんだ。

「カワイイので許します!」

思ってたとおりの答えが返ってきた。

めぐみと美江も「ですよね〜」と脱力している。

他のみんなも苦笑いだ。

この雰囲気は本当に好きだけど、何のために集まったか忘れちゃいけない。
「時間も押しているし、そろそろ準備するぞ!」

「[[[[はーい!]]]]」

うむ。今日もノリが良いな。

では確認! メンバーよし! お弁当よし! では行きましょう!

『第38柱ハルファス! 集団長距離転移!!』

2日前から行き始めた目的地。そこは……!

「いざ鎌倉へ!」

「場所も使い方も違うでしょ!」

バシッ!と、明日奈からのハリセンツッコミが炸裂した。

1度言ってみたかったんだよ……



『明日奈強化計画』。

それ自体は前々から考えていた。

明日奈の異能『異能物質作成』^{アーティファクト・クリエイト}は本人が思っている以上に希有な異能であり、同時にトラブルの原因にもなりかねない力だからだ。

強いアーティファクトを作ろうと思えば体力や精神力が持つてかれ、短い時間しか維持できない。半永久的なアーティファクトを作ろうと思えば、1度で済まない量の体力・精神力を要求されたうえで時間が掛かり、日常生活にも影響するのでおいそれ作れない。強力なものなら尚更。

これらの理由から明日奈は自身の異能を過小評価している節がある。
とんでもない。

問題となる部分を解決できれば、明日奈は“金の卵”へとなることができ存在だ。
その有用性はボクの『悪魔従えし魔導王』^{モモ}をも超える。

個人の戦闘力が欲しいなら、いくらでも優良物件はいる。いるに超したことはないけ

ど、絶対に必要な人材じゃない——それがボクの価値だ。
けど、明日奈は違う。

半永久に残るアーティファクトを作れる力なんて他に替えがない。文字通りどこも喉から手が出るほど欲しい人材だ。

当の本人は未だ知らないままだが、中学の頃に明日奈を狙っていた変な奴らをボクは懲らしめている。

本気で焦ったよ。

『第9柱。ハイモン』の力で、『ヴァルダン』の舞台となる学園で使えそうな五感共有型使い魔を召喚して操作していたんだ。ネコだったり、カエルだったり、モグラだったり。本番前の練習も兼ねてボクや凜子の通った中学だけでなく、明日奈や小夜が通っていた中学校でも。

そしたら偶然、教師の1人が明日奈を隠し撮りしてる現場を目撃。

ふあ!? まさかの変態教師か!? ——と思いきや、小声でブツブツ怪しげなことを言っているたので、嫌な予感もありマーキング。詳しく調べてみました。

犯罪者ではないけど、合法とも言えない組織の一員だったよ。

具体的には国のためなら手を汚すことだってするタイプの人。

教師は表の顔だったらしい。いや、何かあった時のために教師の肩書きを持っている人は数人いるみたいで、たまたまその内の1人が明日奈の通っている中学校にいた模様。どっちかって言うのと割合的に本業の方が副業か？ どうだっていいけど。

それで、国の手先さんの考えが「希少な異能を持つ少女の周辺を警戒する」だとか「将来的に欲しいからスカウトを検討する」とかだったら良かったんだけど……外堀をドンドン埋めて自分たちの所へ来るよう誘導する計画でした。

お偉いさんはよほど明日奈が欲しいらしい。

ふざけんな、と。

将来就く仕事の選択肢として用意するだけなら、明日奈の人生だから本人の意思を尊重するが、逃げ道を塞いでいくようなやり方を中学生相手にやるとは何事だ！ それがオマエらのやり方か!! と、怒髪天を衝く思いだった。

明日奈は——彼女は、この世界で唯一の転生者仲間だ。

その存在は『ヴァルダン』のヒロイン、香坂明日奈の姿をしていることも相まってとても大きいものとなっている。

そんな子に手を出す輩をボクが許すわけない。

何より、あと数年で原作開始なの、余計な手を出され、ボクの計画が破綻したらどうするんだと怒った。激おこぶんぶん丸状態だ。

——なので、

「全力で暗躍して手を引かせました」

「数年越しに聞かされて素直にお礼が言えない……!」

はい。こちら某所にある海岸付近。

2日前、集団長距離転移で最初に降り立った場所は近くに廃墟などがあることから近づく人はいないだろうと高をくくり、実際は肝試しに訪れた奴らがいたせいで速攻バレかけたけど、同じ失敗を踏む友理さんではない!

県を跨いだ別の海岸に転移したうえで、『第71柱ダンタリオン』の力——幻術によってボクらの姿は隠されているのだ!

「ぶっちゃけ最初からそうしなさいよ、と言いたいわ」

「それを言っではいけない」

明日奈からの「ごもつともな意見にそつぽを向く。」

場所のこととかスケジュール調整とか、やること多いからそれ以外の些細なことは忘れちゃうんだよ。

「アンタってさあ、前々から思っていたけど変に重要なことはタイミングをズラして報告するでしょ。何？ 素直に褒められるのが恥ずかしいの？」

「べ、ベベベベ別に恥ずかしい訳じゃないんだからね！」

「一昔前のツンデレか。キャラじゃないでしょうに。……で実際は？」

「……………好き勝手やった結果だし、あくまでも自分のためだし、それで人から素直に褒められるのは……何か、こう、モニョつとする」

「一昔前のツンデレか。瑠維ちゃんみたくやらかしたこと以上に『ヴァルダン』のヒロイんたちを救っているんだから、もつとそこはいつもみたいに堂々とすればいいじゃない。アタシを狙ってた組織？ 個人？ をどうにかするのに『暗躍しました』で済まないことあったでしょ？」

「確かにそうだけど……でも、そこまで難しいものじゃなかったぞ？ 大体がアルカや忍のおかげだし、ボクが普段以上に体を張ったのなんて、暗躍の時間を作るためにガチの滝修行（真冬）して意図的に風邪を引いて学校を休んでたぐらいだし」

「中学の冬、アンタが死にかけそうなレベルで風邪を引いた謎が明らかに」

「いやー、真冬の滝を舐めてたわ。」

みんなの前じゃ半分演技で死にかけてたけど、残り半分は素だったからなー。お姉ちゃんに看病してもらったからプラマイはゼロだけど。

ちよつと話が脱線してきたので思考を切り替え、額に汗を浮かばせながらも両手を仄かに光らせる明日奈へ語りかける。

「話は変わるけど……どう？　アーティファクトの様子は」

「想像以上ね。昨日、一昨日のと合わせて考えても効率が良い。これならマフィアとの戦いに間に合うわ」

現在、明日奈は対マフィア用のアーティファクトを創造している。

もちろん普通に創ってもらっているわけじゃない。

第三者がボクらの状態を見れば首を傾げただろうな。

何せ、ボクは右手を明日奈の肩に置き、残った左手を――

「随分吸い取ってるけど、まだいけるかワニ助？」

「ガアアア……」

「むしろ暇すぎる？　ハハ、ごもつともだ」

召喚したワニ助の体に置いているのだから。

――『第32柱アスモデウス』

それがこの『明日奈強化計画』に必要な不可欠なピース。能力はエナジードレイン。

ボクが触れている対象から、エネルギーをどんどん吸収する力だ。

本来は敵からエネルギーを吸収し疲弊させ、逆にボクを回復させる力だったんだけど……ある時、気付いた。

ボクを中継点にすることで、第三者にエネルギーを供給できることに。

そしてボクは知っていた。『第19柱サレオス』の力で呼び出されたワニ助の体力・気力がアホみたいな量あることに。

明日奈のアーティファクト作成に必要なものが揃えることに。

それらが繋がった瞬間、頭の上にある豆電球がピカッと輝いた！

「そう、『明日奈強化計画』とは別名『ボクを電源コード代わりにしてワニ助と明日奈を繋げましょう計画』でもあったんだ！」

「発想は良かったけど練習はすべきだったわね。アンタが盛大に血を吐いて秋穂さんが反乱狂になって大変だったのよ」

「その節は誠に申し訳なく。今は失敗しないのでご安心を」

計画の初日にミスったよ。

ワニ助から吸収する膨大なエネルギーを明日奈へ送り、そのエネルギーを元にアーティファクトを創造してもらおう。

その計画は成功を取めたんだ。

……成功に気が緩んだボクの体内でエネルギーが暴発するまで。

そこからは……もうご想像の通りって感じで。

みんなには多大な心配を掛けちゃいました。

(みんなががんばっているのに、これ以上心配させるわけにはいかないよな)

少し離れた場所ではマフィアとの決戦に向けて特訓が行われている。

今も、香坂拓也が凜子の手で宙に放り投げられていた。

「ガー……」

「ああ。ここまで巻き込んだんだ。絶対にあの子を助けような」

「いや、さつきから『ガー』としか言っていないじゃない。何で意思疎通ができてるのよ?」

「そりゃあ『第8柱バルパトス』の動物言語理解でマルコやワニ助を含め、動物の言っていることが理解できるから」

「ここでもまた衝撃の事実が。だからマルコと話せてたの……」

今日の修行時間もあと少しで終わりだ。

決戦の日はどんどん近づいている。

第34話 当たりの無いクジ

一般人なら重苦しさを感じる室内。

当初3人の幹部と数名の部下のみだった広い部屋は、後に合流を果たした幹部2人とより多くの部下によって狭く感じられた。

部下からの知らせを受けたロシア系マフィアの幹部マクシムは、部屋にいる他の幹部に向けて宣言する。

「連絡が来たぞ。ポリ公が警戒を解いて、ターゲットが丸裸になった。オレたちは夕刻、黒羽溜維を襲撃する」

約2週間前、黒羽溜維との穏便な交渉をしようとして失敗に終わり、ずっと警察の動きが無くなるこの時を待っていたそれぞれの幹部たちは、ようやくストレスしか溜まらないジャパンから出られると息を吐く。

「全く、ようやくなのね。もうホコリとスパイスの苦い思い出しかない場所にいるのはウンザリ。さっさと済ませてロシアへ帰りましょう」

レイカⅡ水道。

紺色の髪に金の瞳を持つ、氷のように冷ややかで感情が乏しい幹部の中で一番年若い少女は、珍しくウンザリとした表情になる。

「本当にその通りですよ。わたくしめとの交渉時に素直になつていれば危険な目に遭わなかったというのに……」

キリル。

どこか胡散臭い雰囲気、瘦せ型の男は、ここにはいない黒羽瑠維へ哀れみの感情を向ける。

「日本人は平和ボケしてるね。ボクらみたいな裏の人間と仕事モードの時に会えば、雰囲気危険を察するぐらいはロシアの一般市民でもできるのに……」

イヴァン。

数日前にもう一人と日本への入国に成功した幹部の青年で、キザつたらしい顔で髪を整えながら小馬鹿にする。

「フッフ、まだ学生なのにカワイソ〜。例のロザリオを持ってたせいで、もう人生が終了

しちやうなんて涙出る〜」

ポリーナ。

イヴァンと共に日本へ入国後、合流した女性幹部はブロンドの髪をなびかせながら残忍な笑みを浮かべる。

「……殺すの?」

「はあ? 当たり前でしょう」

「抵抗するなら無理矢理奪うのは決定事項だし異論はないけど、私たちに囲まれて素直にロザリオを渡すなら、殺す必要はないじゃない。ジャパンで殺人が起こったら、すぐに警察が動いて大事になるわよ?」

「ハッ! 相変わらず幹部だつてのにムラヴェイニク(ロシアのお菓子)より甘いわね! そのための死体処理もできる部下じゃないのよ。親が『娘が行方不明で〜』って騒いでる間にさつきとロシアへ帰国すればいいだけじゃない!」

「……そうやってすぐに殺すから、余計な騒動に発展したこともあつたでしょうに。他の部分で有能さを示してなかつたら、いくら異能を使える貴重な人材だからって言うても、とつくにボスが眉間へ銃弾を叩き込んでいるわよ?」

「……何ですってえ?」

バチバチと、レイカⅡ水道とポリーナの間に火花が散る。

元々、幸か不幸かレイカⅡ水道は今まで殺人をしておらず、また情動的にも殺して余計な騒動に発展する事態は可能な限り避けたいと考える持ち主だった。昔と違い、技術が発展していると足が付きやすいのである。

対して、ポリーナの方は「敵対するなら徹底的に」が心情の持ち主。ボスから「殺すな」と命令されているならその限りではないが、どちらでもいい場合は相手が誰であろうと殺すタイプの人間である。幹部としては優秀だが、時折、殺さなくてもよかつた相手まで殺してしまい騒ぎになってしまうこともしばしば。

彼女の部下として働くことになった者たちは、情報規制や後始末の大変さで胃痛に苦しむこともしばしば。

そのような考え方の違いもあって、同じ女性の幹部でありながらレイカⅡ水道とポリーナの仲は組織で一番悪いと言える。

「やめとけやめとけ。作戦の前に仲間同士でケンカするなんざ三下のやり方だ。仲良くしようぜ?」

マクシム。

無精髭にサングラスという格好でありながらも、まるでハリウッドスターのような容

姿であるがうえに表向きは地元でも人気のあるこのメンバーでは年長者の男。しかし、その正体は組織に長年使えてボスの右腕的な立場を獲得した実力者であり、仕事のためなら人殺しに何の躊躇いも見せない危険人物である。

「……マクシム」

「——っ！ で、でもねえ」

「いいかポリーナ？ オレは、やめろと、言ったんだぞ？」

マクシムは怒鳴ったわけでも、表情を変えたわけでもない。

それでも、その一言が最後忠告であることに間違いはなかった。裏の人間だからこそ分かってしまう「死の恐怖」がその言葉には乗せられていたのだから。一瞬でポリーナに鳥肌がたったのがいい証拠だ。

「わ、悪かったわよう。大人しくする」

「聞き分けの良い娘は嫌いじゃないぜ」

マクシムは満足そうに頷きながら、視線をレイカⅡ氷道へ向ける。

「だがなレイカⅡ氷道。普段ならともかく、今回はポリーナの言い分も決して間違いない。じゃあない。今回の一件でロザリオを取り返せるかどうか、組織の今後にも大きく繋がるからだ。だから幹部がオレを含め5人も集まったし、人員も時間を掛けて集めた。

失敗は許されねえんだよ。失敗する可能性が出てくるなら、躊躇いなくターゲット——黒羽瑠維を殺す。それが組織の決定だ」

「……………分かったわ」

了承するまでに掛かった僅かな間は何なのか。本来なら関係ないはずの少女を殺さなければいけないことに対する強い忌避感か。

結局、レイカⅡ氷道には分からなかった。

「さて、作戦を伝えよう。オレたちは黒羽瑠維が学園を出て、地元の最寄り駅に着くまでの間に配置につく。黒羽瑠維が電車から降りてから指定のポイント付近へ脚を運ぶ前に、キリルの異能で孤立させる。そしてオレ、キリル、イヴァン、ポリーナの4名と部下を引き連れて黒羽瑠維に交渉——ってか、殺すことを前提にした脅しを掛けて例の口ザリオを手に入れる……………大まかにはこんなとこだな」

「おや？ レイカⅡ氷道は仕事がないので？」

「もしかして留守番かい？ かわいそうに」

キリルが疑問を抱き、イヴァンがキザつたらしく言う。

「当然、レイカⅡ氷道にも仕事はあるぞ？ ……同時に、黒羽瑠維の家族を人質にするって仕事がない」

「家族を……………人質……………？」

マクシムの言葉に、レイカⅡ氷道の表情が不快げになる。

「保険だよ。万が一、今日に限ってロザリオを持つていかなかった場合に黒羽瑠維の家族をオマエさんの異能で拘束して、何処かに隠してあるなら白状させ、家にあるなら処理をしたあとに家中を探すためにな。あ、事が上手くいっても最後まで異能は解くなよ？
特に口周りはしつかりしとけ」

「……………」

「できるな？ レイカⅡ氷道」

「……………了解」

その時のレイカⅡ氷道の表情は俯いた時に掛かった前髪のせいで見ることが叶わない。唯一分かるのは、その少女らしい小さな拳が強く握りすぎて色が変わったことであつた。

レイカⅡ氷道の様子を気にする者は、ここにはいない。



その日の夕刻。

日は沈みかけ、辺りが茜色から夜の色へと変わりつつある時間帯。

レイカⅡ氷道を除いたマクシムたち幹部4名とその部下十数名は、帽子やマスクなどの顔を隠す物を身につけ、人の波の邪魔にならない絶妙な位置で如何にも観光客ですといった体で“その時”が来るのを待っていた。

一般の行き交う人から見える位置には部下たちを置き、その部下たちは事前に決めてあつた設定を元に適当な会話を続けている。事前を買っておいた日本の有名所の土産や、観光パンフレットまで準備する徹底よう。例え警察に職質されようとも身分証も含め、自然な対応で躲せる用意もある。

そんな部下たちががんばっている後ろでマクシム、キリル、イヴァン、ポリーナの4名は連絡要員の部下と繋がっている通信機に意識を向けつつ、お互いの変装について話込んでいた。

「いやあ、ポリーナのメガネ姿とか違和感しかないな。髪もまとめてキツチリしてるから『誰だオマエ?』な感じになってる」

「チツ！ だから変装は嫌いなものよ！」

「フフ、いくら変装しようと思っても野蠻さは隠せてないね」

「……イヴァン、そういうアンタは帽子にサングラスにマスクつて不審者三種の神器をフル装備してるじゃないの。怪しすぎ〜」

「こころでもしないと、ボクの美しさは隠せないからね」

「相変わらずナルシストだな」

「マクシムはサングラスを外して、大きめのマスクをしただけじゃないか。それで変装と言えるのかい？」

「オレみたいなのは普段隠してる部分を表に出して、逆に普段隠してない部分が見えええと別人みたいになれるんだよ」

「ふうむ。皆さん、それぞれ変装にこだわりがありますよねえ。見ていてとてもおもしろい」

「誰だオッサン？」

幹部の中に一人見知らぬ人が。

「嫌ですねえキリルですよ。どうです今回のために用意した新作の変装マスク？ どこからどう見てもザ・オッサンでしょう？」

「クオリティーが高すぎて、逆に引くわ」

どこぞの怪盗が愛用するようなマスクに体格まで手を加えている気の入れよう、声だけは自分たちの知る男なので変な気持ち悪さがあった。

そうこうしている内に、その時はやって来た。

「……来たぞ」

部下からは黒羽瑠維が下校した時より逐一連絡を受けており、どの時間帯に最寄り駅から出てくるかの予想は立てていた。なので、冷静に自分たちがすべきことを考え、行動に移す。

今日の黒羽瑠維は学園内で用事でもあったのか、通常より遅い帰りではあったために夕日は沈みかけ、辺りは薄暗くなっている。

いつも通りの学生服プラス中二スタイルなので、周りが薄暗かろうと目立つこと目立つこと。ついでに、周囲の黒羽瑠維を知らない人は当然のように避けること避けること。

黒羽瑠維を見ても何も反応を示さないのは地元民だろう。

いつも中二格好なので慣れてしまっている。

「彼女、普段のボクとは違った意味で目立ってるね」

「……前回お会いした時思いましたが、とても目立ってますねえ」

「資料には目を通したけど、眼帯にマントに鎖、それに……あれはカラコンかしら？ 裏の人間よりずっと不審者じゃ〜ん」

「何でも『中二病』という恐ろしい病に掛かっているとの情報だ。日本特有のもので、思春期に当たる時期になると極希に発症するとあった」

当たってるけど違う。

「ええ、わたくしめも初めて知って驚きましたよ。思考能力が一時的に下がり、場にそぐわない格好や言動をしてしまつて周囲から孤立する、と」

当たっているようで微妙に違う。

「『中二病』の恐ろしいところは2つあるつて話でな。1つは、大人と認められる時期になると自然に治つてくるんだが、その際、他人には分からない程の精神的な苦痛を受けるんだそうさ。中には自傷行為する者や、今まで大切にしてきた物を破壊しなければならなくなる衝動に襲われることもあるとか」

「そ、そんな恐ろしい病にあの子は……!」

だから違うつて。

「いえ、真に恐ろしいのはもう1つの方です。事例こそ少ないようですが、『中二病』に

なつた者とご家族以外で長く付き合うと……感染するそうなんですよ。『中二病』が。だから、余計に孤立することとなるのです。下手に関われば、自らも『中二病』になつてしまう危険があるゆえに」

「日本はバカじゃないのお!? すぐに隔離しなきゃいけない子じゃない! 最悪、パンデミックが起こる危険があると何で分からないのよ!!」

「落ち着け。だから日本という国は、一部の連中から恐れられてるんだ。デビルフィッシュ（タコのこと）すら生で喰らい、戦いに身を置く者は失態を晒せば自分で腹斬つて詫びねばならず、一般人すら大ウソをつけば針を千本飲まなきゃ許されない。そして『中二病』を患つた者を野放しにする、そういう国なんだよここは」

変に間違つた日本知識を覚えてしまつた外国人の事例がここにいた。

ちなみに擁護しておく、日本が若干特殊な国であることだけが理由なのではなく、彼らは組織の仕事以外だと普段は必要以上に人と関わらないため、1度間違つた知識をそれらしい理由と共に知つてしまうと、その知識を正してくれる人がいないので自分の中で真実だと思ひ込んでしまうのである。彼らから見て特殊な外国である日本なら尚更。

「……最初から殺すつもりでいたけど、何だか普通にカワイソウになってきちゃったわあ。態度次第で見逃そうかしらあ？」

黒羽瑠維、中二病だったがために生存率が上がった瞬間だった。

「はあ……思うことはあるがこれも仕事だ。ここからは私語を慎み、作戦を完遂させることを一番に考える。——キリル」

「はいはい。任せました——『アローン・ジ・ワールド世界でひとりぼっち』」

キリルが了承した瞬間、彼を中心に異能が発動する。

対象を黒羽瑠維に、例外をキリルを中心とした半径10メートル以内に。

——『アローン・ジ・ワールド世界でひとりぼっち』

それがキリルの有する異能の正体。

自分が目視できる距離にいる対象を、徐々に孤立させる力。

発動すれば時間経過と共に対象の周囲からどんどん人がいなくなる、または建物から出なくなる。ほんの些細な理由で、特に理由らしい理由もなく。だんだんと対象の存在が意識から離れ、すぐ側においても忘れてしまう。最終的に対象の周囲に1人もいなくなってしまう。

例外は異能を発動したキリル本人とその周囲の者たちだけ。

この異能の恐ろしいところは、対象と除外された者がどれだけ騒ごうが建物の中にいる人たちは全く気にしないところである。それこそ銃声が響こうが、悲鳴が聞こえようが……

「戦闘向きではないけど、相変わらず恐ろしい異能だね。自分が孤立させられる対象だ」と思うと震えてきてしまう」

「私語は慎めと言ったぞイヴァン。……行くぞ」

異能の発動と同時に、マクシムたちも行動に移す。

怪しまれないように付かず離れずの距離を保ったまま、黒羽瑠維を尾行する。

マクシムはスマホを操作しながらレイカⅡ水道にメールで『行動開始』と送り、黒羽瑠維の家族を人質にするよう指示を出した。レイカⅡ水道からもメールで『了解』と簡素な一言が送られたのを確認し、スマホを懐にしまった。

(さて、あとは目星を付けたポイントで『交渉』するだけだ)
マクシムは不敵な笑みを浮かべ、黒羽瑠維の後ろ姿を見る。

自分たちが、先程から3羽のガラスに見られていることを知らぬまま……



キリルが異能を発動してから約10分。ついにその時が来る。

「やあ、黒羽瑠維さんと合っているかな？　ちよつとだけ話す時間が欲しいんだが……構わないかい？」

こちらの想定通りの場所で黒羽瑠維は孤立した。

そう判断したマクシムは気さくに、しかしどこか有無を言わせない威圧を出しながら瑠維に話しかける。無論、ターゲットを逃がさないよう他の幹部や部下たちは逃げ道を無くすため、それぞれ動きやすい位置へ自然な動きで移動する。

「……………」

マクシムたちの方を振り向いた黒羽瑠維は、眼帯で隠れていない方の目を向けるが、その眼差しはまるで詐欺師にでも会ったような「面倒臭い奴に絡まれた」とでも言いたげなものであった。

「そんな目で見ないでくれよ。さつきも言ったが、少しキミと……キミの持っている口ザリオについて話がしたいだけさ」

「……………」

「?」

ここで、マクシムたちは違和感を抱く。

キリルから報告にあつた黒羽瑠維の情報からすれば、どのように接触しようとするか、中二病”特有のおかしな言い回しをしてまともな話が出来るかどうかが怪しいという結論になつていた。だから、殺す確率が高いと踏んでいたので。無駄で無意味な時間の浪費になるのだから。

だが、目の前の黒羽瑠維は何だ?

こちらを見る目は友好的ではなく、先程から一言も喋らない。

今までの経験からか嫌な予感を覚えたマクシムは、手の形で周りの仲間に表示する。

『急ぎ、殺害を』と。

だが、黒羽瑠維の方が行動は早かった。

懐から、鎖で繋がれた”仮面がズレて素顔が見えた人の顔”のように見えるデザインのアクセサリーを取り出した。

「……『偽りの仮面を剥がせ』(ボソツ)」

小さな、それでいてハッキリした声で起動音を言えば、手に持つアーティファクト

『仮面の正体』が効果を発揮する。

黒羽瑠維を中心に、アーティファクトの力が周囲に広がる。

「「「——なっ?!」」」

力がマクシムたちを襲った瞬間、彼らは驚愕することとなる。

なにせ、自分たちの変装が突然解けたのだから!

(一体、何が……!)

マクシムは混乱する頭をどうにか落ち着かせ、仲間を確認する。

自分は付けていたマスクが何処かへ吹き飛ばされ、少し弄った髪型も崩れて元に戻っている。イヴァンとポリーナも変装道具が何処かへ飛ばされてしまっており、キリルに関しては変装マスクはビリビリに裂けるわ体型を変えていたクツションは服から飛び出すわで一番酷い有様となっていた。部下たちも似たり寄ったりだ。

(まさか、ロザリオとは別のアーティファクト……!?)

そんなことがあり得るのか? だがしかし……

最も現実的な答えを出そうとするも、相手は待つてくれない。

カランコロンと、黒羽瑠維の羽織るマントの下から丸い物体がいくつも転がり落ち――大量の煙と共に爆発した。

「ぐっ！ 今度はジャパニーズ煙幕だと!?!」

再びの混乱。だが……まだまだ終わらない！

煙が少しだけ晴れた先に見えたのは、こちらに背を向け走り去る黒羽瑠維の姿だった――ただし、7人に増えている。

「『何で!?!』」

部下たちが「すげえ！ 本物の分身の術だ!!」と少し興奮しているのを見なかったことにして、マクシムは指示を出す。

「追うぞ！ 誰が本物でもいい！ とにかく7人全員とつ捕まえろ!! キリル！ 異能の効果を続けるろ！ オマエが黒羽瑠維を対象にしている限り、奴は逃げ切れない！」

「『了解!!』」

全力で黒羽瑠維（×7）を追いかけるマクシムたち。

先に逃げられてしまったがこちらはプロだ。脚の速さには全員自信があるし、体力

だつて十分にある。すぐに追いついて捕まえてやる。そんな思いを胸にとにかく脚を動かし、黒羽瑠維たちとの距離を詰めていくが、

「——つち！ 3手に分かれたか」

5人の黒羽瑠維たちは右側の道に3人、左側あの道に3人、そして前方の少し外れた道に1人、それぞれ分かれる。

「事前に確認した地図によれば、左側の土地は入り組んだ道が多かつたはず。わたくしめと部下は左の3人を追い掛けましょう」

「右は……あつちつて警察署がある方向じゃない！ キリルの異能の力があるつて言つても、警察署の中に入られると面倒よお!! さつさと始末しなきゃあ！ イヴァン！ 付いてきなさい！ アンタたちも！」

「ボクに命令しないでくれよ」

「ハア、こうなつたら仕方ねえ。オレは残りの1人を追うか」

マクシムは黒羽瑠維を学生だと、どこか心の中で侮っていたことを後悔する。

先程の行動といい、謎の分身で3手に分かれて自分たちも分散させる事といい、明らかにこちらの計画を知つたうえでの対処だ。十中八九この先に待っているのは罠だろう。

だがマクシムたちもこのような状況になつてしまつた以上、途中でやめる訳にもいか

ない。キリルとて、不眠不休で異能を発動させ続けることは出来ないのだから。
「諸君、健闘を祈るぜ」

それを最後にキリルたちは左側へ逃げた3人を、ポリーナとイヴァンたちは右側に逃げた3人を、そしてマクシムは最後の1人を、それぞれ追い続ける。

(なぜ出ない、レイカⅡ氷道……?)

仲間たちと分かれたあと、マクシムは急ぎレイカⅡ氷道のスマホに連絡を入れ、黒羽瑠維の家族をすぐに人質にするよう指示を出そうとしたが、マクシムのスマホにレイカⅡ氷道が出ることはなかった。



3手に分かれた黒羽瑠維たちを追い掛け続けることしばし。

ようやくマクシムたちは、それぞれの黒羽瑠維をほぼ同時に追い詰めていた。

「ハア、ハア、よ、ようやく追い詰めましたよ」

キリルは息を切らせながらも、3人の黒羽瑠維を追い詰めることに成功する。周囲の

部下たちも武器を取り出し、一触即発の空気となる。

「……映画で見た展開。わくわく」

「私もわくわくして武者震いしましたよ!」

「胸を躍らせないでください」

「ワンツ!」

「意外と逃げ足は速かったわね? でも、それも終わりの。話次第じゃ命までは取らないでおこうかと珍しく考えてたけどお……ブッコロス!!」

「フツ。自分の運命を呪いたまえ」

ポリーナは怒髪天を衝く勢いで追い詰めた3人の黒羽瑠維を殺す体勢を取り、イヴァンは相変わらずキザったらしい。

「うわ、殺意増し増しだなああの。もう片方は面倒な奴っぽいし、今になって後悔してきた」

「もう遅いつての。覚悟決めてよね兄貴」

「相手にとって不足はないな」

「念のために聞いておくけどよ、オメエさん本物か?」

「うん。ボクだよボク、ボクが本物さ！」

マクシムは追い詰めた——というより、途中で脚を止めた黒羽瑠維にダメもとで確認を取ってみれば、返ってきたのはオレオレ詐欺のような返答。

「こりゃ、偽物を掴まされたか？　ならキリルたちか、ポリーナとイヴァンが追い掛けたのが本物か」

「ん〜そうでもなかったりするんだよね〜」

「……どういう意味だ？」

「それじゃあ、ここでネタばらしタ〜〜イム!!」

マクシムの追い詰めた黒羽瑠維がパチンツ！とフィンガースナップすれば、まるでモヤが晴れていくかのように、その姿が変化していく。

ソレは、他の場所でも同時に起こっていた。

キリルと部下たちが追い詰めた黒羽瑠維たちは、胸元に子犬を抱いた見慣れない髪色と服装の少女、顔半分を髪で隠した幼さの残る少女、ツインテールの少女の3人と一匹に。

ポリーナとイヴァンが追い詰めた黒羽瑠維たちは、黒髪の少年、薄紫の髪をサイド

テールにした少女、赤い髪の凛々しい顔つきの少女の3人に。

そして、マクシムの目線の先にいた黒羽瑠維はオレンジの髪色を持ったドヤ顔の少女へと、その姿を変えた。

「『『残念！ 全員大ハズレだ（です）（よ）！！』』」

そう。マクシムたちが追い掛けていた中に……黒羽瑠維は最初からいなかった。

「オマエは……！……こりゃあ、どういう……？」

『第71柱ダンタリオン』！ ボクらは最初から7人で行動していたんだよ。1人に見えるよう、ボクを中心に幻術を掛けていただけで。全員が瑠維に見えるよう、アーティファクトも使って1人ずつ丁寧に幻術を掛けて」

ダンツ！と脚でアスファルトを踏み、友理はマクシムを睨む。

「ボクの友達に手を出して……ただで済むと思うなよ……！」

「——っ！ 黒羽瑠維は……」

「ああ瑠維？　瑠維なら——」



これは、マクシムたちが複数の黒羽瑠維を追い掛ける少し前に起こったこと。

レイカⅡ氷道は歩く。

周囲に溶け込むような自然な動作で、誰にも怪しまれないように、黒羽瑠維の家族が暮らす家へと足を進める。

しかし、その足取りは重かった。

（家族を人質に取る……か）

表情は一切変わらない。

かわりに、その目は暗く、それでいて今にも泣きそうな幼子のように不安定に揺れていた。

「……皮肉ね」

組織に拾われた時からいつかこうなると、ある意味で殺人よりも忌避感のあることをしなければならぬのだと、自分は分かっていたはずだ。そして、命令である以上は従わなければならない。今の居場所を守るために。ならば、感情を凍らせろ。何も感じる

な。何も感じなければ……自分はまだ大丈夫だ。

レイカⅡ氷道は、そう自身へ言い聞かせる。

無理矢理にでも足を進める。

無理をしてでも顔を上げる。

そして、

「え？」

違和感に、気付いた。

「ここは、さつき通った道……？」

そこは覚えやすい道。近くに大きめの公園があり、遠くにどこかの工場のものと思われる煙突が見える場所。

そして、自分が先程も通ったはずの場所。

「道を間違えた？ いえ、そんなはずは——」

『迷宮』、という名の異能らしいぞ？」

突然聞こえる第三者の声に警戒を強めるレイカⅡ氷道。

周囲に視線を送ったその先で……彼女は見てしまう。

「ついに辺りは漆黒の世界《ダークゾーン》へと変化した。昼の時間は終わりを告げ、夜

の時間が——私の時間が始まる!!」

公園のオブジェの上で意味も無くターンをし、意味も無く腕を交差させ、意味も無く香ばしいポーズを取る黒羽瑠維を!

「クロバ、ルイ……!? どうして、何でこんなところに。だって、マクシムたちが後をつけて……」

「確か、レイカ⇨氷道なる名だったか?」

レイカ⇨氷道の混乱をよそに、瑠維は彼女を見据える。

「さすがの我也、自身の血縁に手を出されるとあっては黙っていない。我は今、今日この日この時まで生きてきた中で、最も……憤怒の感情を抱いているだろう。ああ、認めよう。我はオマエたちに……耐えがたい屈辱を受けたのだ」

「アナタ……」

レイカ⇨氷道は突如現れ、自分に怒りを向けてくる瑠維へ何を言えば良いのか分からずにいた。

——だって想像を超えて中二病が意味不明だもん!

とりあえず、再び意味の無いターン!

「キサマは唯一、特殊な事情持ちだと我は永遠たる同胞《エターナルシスターズ》であり、

「親友でもある友理から聞いた」

「……」

「だがそれは、我が手加減する理由にはならん！」

「ここでキレキレの動きで腕を別のポーズに交差！」

「命だけは取らん。だが、その心へ刻むがいい！ キサマを倒し、奈落の底《アビス》へと落とす者の名を!!」

「えと……」

「そう。我が名は——！」

「マントをバサアッ！」

「地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》、黒羽である!!」

「最後に背後で謎の爆発が起きる！」

「レイカ!! 氷道はいろんな意味で置いて行かれた！」

第35話 勘で戦う奴は大体理不尽

【side. 忍】

『こちら友理。作戦第一段階成功』

『明日奈よ。こつちも成功したわ』

『くつくつく、我の方も舞台は整ったぞ』

「こちらも成功です。これより戦闘に入ります」

友理さんの立てた作戦、その第一段階が成功したことを明日奈さんが創ってくれたイヤリング型の通信アーティファクトで確認をしました。

次に連絡するのは一定時間後ですね。戦闘の最中に連絡すると気が散るでしょうし、緊急時以外は通信を控えています。

……それにしても便利ですねコレ。

ピアスでもないのに滅多な事じゃ自然に外れませんし、自分の意思で操作をしていますから隙を見せることもない。しかも、向こうからの声は他人に聞こえない仕様。通信距離が限定されていると明日奈さんは言っていました。一般的な市の大きさまで通信

可能圏内なら十分ですよ。

こんな代物をがんばればいくつでも創れるという時点で上の人間はこぞって欲しがりますし、友理さんが護ろうとするのも納得です。

数年前、公安所属の何名かに脅しを掛けて正解だったと思います。意地でも他国に知られないよう情報規制をしているみたいですし。

「バカな。ワタクシめの異能は黒羽瑠維一人を対象に指定してたはず。なぜ、複数人が……？」

「アナタの『世界でひとりぼっち』には欠点がありますので、そこを付かせてもらいました」

私たちの相手、名をキリルでしたね。彼の言う通り、事前に友理さんから貰った情報によれば『世界でひとりぼっち』という異能は対象を指定することが絶対条件です。対象を複数指定することはできませんし、複数人と一緒にいる状態だと異能が掛かりにくくなるそうです。

今回の作戦では友理さんが掛けた幻術で7人全員を瑠維さんに見せ、尚且つ一人だけだと誤認識させる必要があります。ここで重要なのは『世界でひとりぼっち』が上手く掛からなかった場合、相手が不審に思ってしまうことです。

なので、ここでも明日奈さんに創ってもらったアーティファクトが活躍します。

アーティファクト『群レであり個オである』。

小さな虫が集まって大きな蟲になったデザインのアクセサリー。それを正面切つて戦うことになる人、全員に配られました。

その力は複数人を個人と認識させる能力。これによつて私たち7人——と、ついではアルカさんの腕に抱かれたマルコ——は『世界アでひとりぼっちロ』の対象である1人と認識されました。

そこに友理さんが幻術を被せれば完璧です。

……1番念入りに創つてもらつたモノですが、能力からして対キリル専用のアーティファクトとなつているんですね。

明日奈さんには悪いですが、今回以外活用法が思いつきません。汗と涙の結晶なのに——不憫です。

さて、思考を切り替えて私も仕事を再開しましょう！

「——っ!? 欠点? それ、は……」

「これ以上は敵と会話しません。作戦第二段階、開始します」

「コイツらみんな倒せばいいんだよね? がんばるぞー!」

「がんばれー」

「ワッオーン！」

凜子さんが拳を打ち合わせ、闘気を身に纏います。

……アルカとマルコは平常運転ですね。

こっちは気にしなくても良いでしょう。アルカに万一があるとは思えませんし、マルコに至ってはその強さを信用しています。

だから、私のやるべきことは一つだけ。

「友理さんの敵を……排除します！ 『影操』」

シャドウ・ドミネーション

異能を発動。周囲に存在する影を具現化させ、奴らに向かわせる。

「!? 散開！」

部下である男たちがキリルの叫びに即座に反応し、鞭のように伸びた影を回避します。咄嗟の判断はさすがプロと言ったところです。

ですが私も……友理さんのために磨いてきた実力があります！

「バラけて！ 『影鞭』！」

男たちが避けた影の鞭——ソレを細くしてさらに伸ばします。

「な、ぐわっ！」

「影が……締め上げて……!?」

「この……！ 離せ、離せよっ！」

『影縛りの術』。具現化した影で対象を拘束する技です。避けられなかった男たちを縛る。見た目以上に頑丈なので逃げられやしませんよ？

これで3人減りましたね。

「死ねえガキ!!」

部下の男がナイフを投げつけてきました。私に向かって正確に飛んでくるとは、良い腕をしていますね。でも……遅い。

「……『影転移』」

「え？ はあ!? 消え——」

私は自分の影の中に潜り、ナイフを回避する。

これは友理さんの通う学園へ侵入するため、最も努力の末に磨き上げ、扱いに長けた技と言えます。その効果は自分の影の中に潜り、また近くにある別の影に瞬間移動できるといふもの。

だからほら？ 街灯に照らされた男の影が死角となる位置にくるよう戦いの中で調整していれば——

「こうやって奇襲もできます」

「ギヤっっ!!」

——男の影に転移して、背後を取ることも可能。

あとは友理さん特製の麻痺毒をたっぷり塗り込んだクナイを肩に刺せば、あら不思議。男は地面に倒れビクンツッ！ ビクンツッ！ と体を痙攣させて……いや、これ、大丈夫ですよ？ 白目剥いてますけど、合法的な薬剤で合ってますよね!?

お仲間さんも倒れた男の有様を見て、こたらを非難します。

「くっ、神経毒か！ オレらよりあくどいマネしやがつて！」

「ごもつとも！」

マフィアの方に正論を言われるのは厳しいです。

「もうガキだからって容赦しな——」

「ハイヤー——!!」

「ごぼっ!?!」

義憤に燃え(？)こちらへ攻撃しようとした男は、しかし突然飛び込んで来た凜子さんに側頭部を蹴られ意識を失いました。

白目になって舌をだらんとさせて……これ生きてますよね？

足下で痙攣している男といい、絵面が酷いです。

「弱い！ 弱いよー！ 外国の悪い人たちだつて聞いていたのに、とんだ期待外れ！」

友理との修行の方がずっと手応えあるよ!!」

(荒ぶってますねー)

見れば、凜子さんが相手したと思われる男たち計6名が背後で倒れていました。……私が4人を無効化している間に苦もなく6人——あ、さっきのも含めて7人か——を倒してしまふなんて友理さん、どれだけ鍛えさせているんですか？

「何をしているのです?! 囲んで潰しなさい!」

「「は!」」

キリルの命令により、3人の男が凜子さんを囲います。

それぞれ包丁、メリケンサック、特殊警棒を構え、誰かがやられることを前提に突貫するようでした。急いで影での拘束を試みます——が。

「ハアアアアアアアアア……」

凜子さんの纏う闘気が拳に集まり、

「『無双連撃気功拳』!」

次の瞬間には、突貫をしだした男たちが吹っ飛んでいました。

「え、え……」

えと、何ですか今の技？

凜子さんの姿がブレたかと思つたら困つていた3人とも綺麗に後ろへ飛ばされ、ボロボロな状態で意識を手放しているという……

男たちの状態を観察するに1人最低3発は拳を叩き込まれたのでしようが、全く見えませんでした。凜子さん強すぎませんか？

「動くな！ コイツがどうなつてもいいのかわ！」

チラリと声のする方へ目を向ければ、最後に残つた部下の男がアルカさんの首元にナイフを押しつけていました。

……人質のつもりなのでしょうが、全く意味ないんですよ。

「危ないから、どいて」

そう言つてアルカさんは無表情のまま数歩ほど前に出ます。

首元に押しつけられていたナイフを通り抜けて。

『存在曖昧』という力だそうですね。

異能ではなく、アルカさんが元々持つている力の1つ。そこにいるのに、そこにはいない。そんな矛盾した状態を生み出すという、身も蓋も無い言い方をすれば都合の良い時だけあらゆる事象が体をすり抜ける力です。

だから誰も捕らえることは出来ないし、傷付けることもできない。

で、アルカさんに手を出せば最後の仲間が動きます。

「へ？ あれ、どうs——ぎぎやあつっ!？」

突如現れた黒い、バス程の大きさのある物体。

それが男を地面に押しつぶし、骨を折り、その爪を体に食い込ませます。

「グルルウ……」

そう、今まで静観していたマルコが真の姿を見せたのです。

「な、何なのですか、この化け物は！」

「ガルアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

『第35柱マルコシアス』。

巨大な狼の体にグリフォンの翼と蛇の尻尾を合わせ持った、真正銘の大悪魔。戦闘の際にしか真の姿になれませんが……その強さは圧倒的です。

正直言つて、本気のマルコだけで勝負が着いてもおかしくありません。

いえ、友理さんが私と凜子さんに実戦経験を積ませつつ、保険でマルコと一緒に行動させたのは分かっているのですが、アルカさんを狙われた時点でマルコが怒るの知っていましたよね？ 滅多なことでは真の姿にならないとはいえ、過剰戦力としか言い様が……

まあ、そんなこんなで残りはキリルのみ。

勝負は大詰めです。

「くっ、こうなったらワタクシめだけでも……！」

マフィア幹部キリルは、全滅した部下たちを見てすぐに逃げる選択をしました。

しかし、ここで逃がすわけがありません。すぐさま『影鞭』をキリルへ向かって伸ばしますが、ここにきて予想外のことに。

『^{アローン・ジ・ワールド}世界でひとりぼっち』、対象は——わたくしめ！

「——っ!? これは——！」

キリルに伸ばした『影鞭』が全て外れました。

いえ、正確には私が奴を捕捉出来なくなっている……!?

(しまった! 例の異能を自分自身に掛けた!?)

何とか集中してキリルに意識を向けようと思いますが、向けた瞬間に意識が外れてしまい追うことも叶いません。

どうすれば……!

再び『世界でひとりぼっち』を発動しようとし、しかし発動ができなくなったことで動揺するキリル。

そこを見逃す訳がありません。

『影縛り』

「しまっ!!? むぐううう!」

何をしてもし逃げられないよう全身を影で縛り上げます。

あとは隙間から麻痺毒を塗ったクナイで刺せば終わり。ビクビク痙攣しだしたキリルと同じ仕事を最初に捕まえた3人にも施します。

……やっぱり酷い光景ですね。友理さんに改良をお願いしましょう。

これで、私たちが担当したマフィアは全員無力化しました。

「ふう、助かりましたアルカさん」

「どういたしまして」

アルカさんの切り札。知ってはいましたが見るのは初めてです。

『異能停止』。

対象の『Heartギア』に干渉し、その異能を無効にしてしまえる術。異能を扱う者にとつての天敵。それがアルカさんです。

ある程度時間が必要とはいえ、強力無比と言わざるを得ません。

(ホント、何者なんでしようアルカさんは?)

友理さんは正体を知っているみたいでしたが……さてはて、私にも教えてもらえる日は来るのでしょうか?

「ひとまず、全員を本格的に拘束しましょう」

「お縄だお縄だー!」

影から頑丈な拘束具を取り出し、凜子さんと一緒にマフィアを拘束しながら他の場所で戦っている仲間の勝利を願います。

(皆さん、どうかご無事で)

第36話 覚悟の在り方

〔side. 明日奈〕

作戦の第一段階は成功した。

予想以上にアタシってば、がんばったわね……

注文されたアーティファクトを全部創ったあとは、やり遂げた満足感と精神的な疲労が一気に押し寄せて友理から栄養ドリンク貰うハメになったわ。本人も本当に期日までに全部創ってみせるとは思わなかったみたいで、珍しく含みの無い笑みを浮かべていた。

で、作戦の第二段階である戦闘の勝利。

これが中々大変なのよねー。

忍ちゃんの所は、アルカに加えてマルコもいるから心配するだけ無駄。

友理の方は一番強い奴と戦うらしいけど、不思議と心配はない。

瑠維ちゃん対アタシらと同年代っぽい女の子の対決は……正直分からない。いざとなったら万々に備えているメンバーが助けるって話だけど、どうせなら勝ってほしい。

『アポロン・ハンド
太陽の手』

触れれば一瞬で焼け死んでしまいそうな熱を持った右手となる異能。実際、あの異能で何人も殺してるって話だからシャレにならない。

(……あんなんじや、パン職人にはなれないわね)

パンが発酵する前に消し炭になっちゃう……って、アタシってば友理みたいなネタ思考になってる。

アイツが戦っていたら口に出して言いそうだと思っただもん。というか、確実に言う。むしろ相手を煽って隙を作ろうとするでしょうね。

「……何か急に冷静になってきたわ」

友理の「お？ ボクのおかげか？」って感じのドヤ顔がイメージとして出てきたから、さっさと頭の中から追い出す。

考えれば万全を期すために友理とアルカが敵の異能の情報を集めたから、誰と当たっても良いように準備万端だったわね。そのために、今日まで死ぬほど気合いを入れてアーティファクトを創ったんだし、戦いのシミュレーションだった。

ようはアタシらの心持ち次第。

相手の殺気に飲まれてペースを完全に崩されていたわ。

ちらと、少し離れて戦っている兄貴とめぐみに視線を向ける。

「ふくむ。キミもボクと同じ植物系の異能使いだったか。しかし、慣れていないね。ほら？　そこに隙間が出来ちやつてるよ？」

「うおおおおおつ!!?　こっち来んなあああああああ!!」

少し離れた場所で見貴はイヴァンって奴と戦っているけど、案の定アタシと同じでペースを崩されていた。

見貴は美江の『植物魔法』ブランド・マジックで出現されたツルを操っているけど、イヴァンは見貴の操るツルより細くて鋭利な印象の茨を巧みに操作し、少しずつ見貴を追い詰めていた。

『不吉もたらず茨』イービル・ソーン

鋭い棘の付いた茨を無数に操る植物系の異能。

その真骨頂は、棘に含まれる状態異常を与える毒。傷を付けるとランダムで眠気・混乱・麻痺・毒状態にする力を持っている。

「ああ、もう！　変に動くな！　大ケガさせてしまうだろ！」

めぐみはめぐみで、別の理由から部下の男たち相手に苦戦している。

異能である剣と鎧を身に纏って戦うめぐみだけど、攻撃手段が剣だけなせいで逆に男たちを攻撃できないでいた。

学園の特殊なフィールドじゃない以上、刃物で斬りつければ当然血を流し傷つく。一歩間違えれば致命傷になってしまう。それがめぐみにとつて高いハードルになったみたい。友理の言う有料コンテンツがあれば盾によるシールドバツシユができたんでしようけど、無いものねだりはできない

(アタシたちの担当が1番キツイじゃないの！)

本来の予定ならアタシが部下の男たちを撃破、兄貴がポリーナを引きつけ、めぐみが剣でイヴァンの茨を切り裂いていく。そのあと部下を倒したアタシが合流して3対2に持ち込む作戦だったのに……

(アイツら、貴重な部下を使い捨てに扱いで運用するなんて……！)

初動で作戦が狂った。

部下の男たちに「死ぬ気で行け」と、「無様を晒したら……分かるね？」と、アイツらが言った途端、陣形もへつたりもなく向かってきた。

素人でも顔を見れば分かる。浮かんでいた感情は義務感でも闘志でも無い。

恐怖だったわ。

二重の意味で動揺したせいで、勢いに押されて最悪の形で分断された。

あんなに練習したのにバカみたいに崩された。

それが心の底から悔しい。

(命令に従わなかった奴に何してんのか。嫌でも想像付くじゃない!)

今のご時世だと貴重な人材だから、普段はしないはず。

それをしたのは罠に掛けられた側だから。とにかくアタシたちの情報が僅かでも欲しい、じゃあ肉壁をぶつけちゃえって魂胆。

「ホント最低ねアタタちっ!」

「弱え奴ほどオマエみたいなセリフを吐くわねええええ!!」

異能で創った弓の攻撃を三角飛びで躲したポリーナがこつちに手を向けてくる。

咄嗟に腰に下げていた小さなクマ用撃退スプレーを吹きかけるけど――

「鬱陶しい!」

ポリーナの右手が一段と光り、自分に掛かる前にスプレーの液体を蒸発させた。

こんな小細工でどうにかなる相手でもないか……

ただ、今の技は少し集中があるのか距離は稼げた。そして逃げた先には兄貴がいる。なら、アタシがやることは……

「バカ兄貴!」

「え? うわっ!?!」

イヴァンの異能が兄貴を捕らえようとした瞬間、ワイヤーを伸ばして腰のベルトに

引っかけ、同時に引っばる。

このワイヤー射出機の即席アーティファクト、重力軽減の力を付与させといて正解だったわね。おかげで簡単に兄貴を引き寄せられた。

「ふう……助かったぞ明日n——」

「フンツ!!」

「いっただあぁ!!」

兄貴のおでこに頭突きを喰らわせる。……痛い。

「おバカ! 相手のペースに乗せられてどうすんの!? 何度も練習したんだから、落ちて着いて対処するぐらいでできるでしょが!」

「いや、さつきまで明日奈も『ふええええ!!』って動揺して——」

「返事!」

「サー! イエツサー!」

こうして兄貴を叱りつけるけど、実際は自分自身に言い聞かせている面もある。動揺しっぱなしだったのは事実だし。

「……で? 実際どうするよ?」

「好きに動いて」

「え?」

「兄貴がしたいようにして。アタシがそれに合わせるから」

とんでもなくアバウトな説明だったせいも呆ける兄貴に対して、簡潔に自分の考えを言い聞かせる。

「もつと自由に戦って良いのよ。今の兄貴は本物の戦闘とか、マフィア相手だとか、自分が負けたらとか、そういうた事情が頭にあるせいで考えも戦い方も堅くなってる。そういったの全部忘れて、ただ倒すことだけ考えればいいの」

誰ともフラグを建てず、友理が瑠維ちゃんのルートを前倒しにした弊害ね。

徐々に徐々に時間を掛けて覚悟とか信念とか、そういうたここぞの場面で活躍する主人公らしさが育つ土壤が無かったせいで、想定外の出来事にまだ弱い。

友理は前世が男だったからか、普通の男目線で「主人公」って存在を見ているけど、女目線で見ると「主人公」はまた違ってくる。

本気で恋をした男の子っていうのは誰よりも強いよ。

まあ、アニメから得た知識だけだね。

「……その、何だ。サンキューな。少し落ち着いた。分かっていたつもりだけど、命の掛かった実戦って、こんなに違うのな」

「戦える?」

「もちろん!」

そこにさっきまでの情けない顔は無い。前世のアニメでたまに見ることのできる「主人公」としての男らしい顔があった。

こういうところは初めて会った時から変わっていないわね。普段はどこにでもいる男子な雰囲気のおかげに、覚悟が決まれば「男」の顔になるんだから。

(原作の明日奈ちゃんも、そういうところを好きになったのかなあ?)

アタシが明日奈になった時点で真実は闇の中か……

「相談は終わったかしら?」

「キミたちの最後となる会話、許してやったボクらに感謝するといい」

律儀に待ってくれていた——ああ違うわね。完全にこつちのこと舐め始めた——ポリーナとイヴァンが再び異能を発動させる。

「アタシも覚悟を決めましょうか」

懐から出した赤い液体の入った小瓶の栓を抜き、飲み干す。

それは友理が『第28柱ベリト』の能力——錬金術で作ったというアタシ専用の異能補助薬。もしもピンチになるようなら使えと言われ渡されたモノ。使うとしばらく副作用が出るって話だけ……

「知るかってのよ!」

口の中に広がった野菜ジュースの味を無視して、いつでも動けるようにする。

アタシだって『ヴァルダン』が好きな転生者なのよ! これ以上、友理にばかりおんぶに抱っこでいられるものですか!!

瑠維ちゃんに手え出すんなら容赦しないわ!

「今度こそ焼き殺してやるわ。……イヴァン!」

「惨たらしくあの世へ行きたまえ。『不吉もたらす茨』!」

イヴァンの異能がアタシたちに襲い掛かり、

「すまない。遅くなった」

異能の茨がいとも容易く——切り裂かれた。

それこそ、薄っぺらい紙でも破るように。

この攻撃は……!?

「めぐみ!」

「鬼島さんー！」

そこには異能『ブレイブ・ナイト勇敢なる騎士』の剣を持ち、残心するめぐみが。

「不甲斐なくてすまない。聞こえたよ、明日奈の叱責と覚悟。それと昔、友理に言われたことを思い出した。難しいことは全部忘れてしまえと。そうだ、難しいことなど考えずに思った通りのことをするだけで良かったんだ！」

やだ、横顔がイケメン。兄貴より主人公っぽい。

アニメの文化祭で宝塚風の男役をしたエピソードを思い出しちゃった。あれって最終的にヒロインの役やったのがきたのよねー。

本当ならここで素直に参戦してくれたことのお礼を言うべきでしょうけど……ちよつと、いや、かなり？ 直視しづらいものが。

「めぐみ？ あの、相手してた部下の男たちなんだけど……」

どうして、股の間に手を入れて白目の泡吹いた状態で意識失ってんの？

「難しいことを全部忘れて閃いたんだ。少し大げさに剣を振るうと防御してくる、だから……その隙に股を本気で蹴ればいいのだと」

「「ひっ！」」

絶句。

兄貴とイヴァンに至っては顔を青くして内股になっていた。

あー、そういうえげめぐみって公式のキャラクター紹介によれば、一度吹っ切れると一気に駆けていくタイプだったっけ。

文化祭のエピソードもそんな場面があったし……

「……オレ、鬼島さんにだけは逆らわない」

「うん、その………うん」

予想外の所で『めぐみルート』への道に進む可能性が減ったわね。

「……！ まぐれで調子に乗らないでもらおうか！」

さつきよりも多く、イヴアンの異能である茨が襲い掛かる。後ろの方ではポリーナがより右手を発光させて技の準備をしているのが窺える。

でも、もう半端に恐がる奴は一人もここにいない。

「私が道を切り開こう。意地でも通さないさ」

「ちよつと考えがある。女の方はオレに任せてくれ」

「じゃあ、アタシはナルシストの担当ね」

準備は整った。反撃開始よ！

「おとなしくやられたまえ！」

「通さないと言った。『剛剣・破断』！」

襲い掛かる大量の茨。それをめぐみは……一振りでほとんど断ち切った。

異能を斬る剣。その真価は、直接触れていなくても能力を引き上げる技によって斬り裂く範囲や、斬り裂ける威力を増すこと。

異能の力以上に本人の力量が試されるけど、めぐみはやってのけたんだ。

「そんなバカなことがあるか！」

『三日月の舞』

角度を変えて襲い掛かる茨を半円状に斬る、その動作を何度も繰り返す。どれだけ勢いを増そうが……めぐみには、アタシたちには届かない。

そして時間を稼いでくれれば、今のアタシはどんなモノでも創れる。

「完成『メタスタシス・バズーカ』&『冬眠弾』！」

普段ならどれだけ短い時間しか使えないように設定しても、数秒で創れるはずがない。アーティファクトを簡単に創造する。

それも2つ。

「ふう、チャンスは1回。やるわよ明日奈」

バズーカ砲を肩に担ぎ、イヴァンに狙いを定める。

「何しようとしてんのガキイイイイイイイ!!」

アタシの行動に気付いたポリーナが異能の力を宿した右手を構え、向かってきた。向こうも準備を終えたのか、『太陽の手』アポロン・ハンドから感じる熱量は格段に上がって光量も増していた。

離れているはずなのに信じられないほど暑い。

これ以上、近づかれたら目を開けるのも辛くなる。

『影転移』

兄貴が何もしなければ、だけど。

異常に輝いていたことで影が大きくなつたイヴァンの茨、その最もポリーナに近い影から兄貴がぬるりと出てきた。

事前にコピーした忍ちゃんの『影操』シャドウ・ドミネーションの力によつて。

「——っ!？」

突然目の前に現れた兄貴を前に驚愕しつつも、右手を振るうポリーナ。

凄まじい熱量をもった手が兄貴を焼き殺す——ことはなかった。

『太陽の手』アポロン・ハンド!!

同じように白金に輝く右手を使って迎え撃つたから。

2つの『太陽の手』^{アポロン・ハンド}、それが真正面からぶつかって、周囲の水分が蒸発するかのような音が鳴る。

「ウソツ!? どうしてオマエが『太陽の手』^{アポロン・ハンド}を?!

「コピー条件、【殺意を向けられた状態で立ち向かう】。感謝するよ、本気で殺意向けてくれて! こいつはそのお礼だ——『氣功脚』!!」

「ガハツ……!」

凜子ちゃんの異能『氣功術』。

それをコピーしたことで繰り出された兄貴の蹴りはポリーナの腹部に突き刺さり、意識を奪った。それを証明するように、あれだけ光っていた右手は輝きを失っていく。

「な、ポリーナ!」

「今!」

向こうの意識が逸れた瞬間を狙い、引き金を引く。

軽い爆発音と共に発射された弾はイヴァンへとまっすぐ飛んでいった。

慌ててめぐみに斬られていない茨を集めて防ごうとするけど——無駄よ。

「ごめんなさい。このバズーカで撃ち出された弾、転移できるのよね」

アタシの言った通り、茨によって迎撃されそうになった弾はその直前、一瞬消えたあとイヴァンのすぐ近くに出現した。

敵からしたら悪夢みたいな力ね。

イヴァンは万一操作を誤った時のため、自分の周囲には茨を展開させていない。さながら台風の目みたい。だからもう、防げない。

弾は当たる直前に光りだす。

イヴァンを囲むよう、魔方陣を展開して。

「何だ、何が起きているんだ！」

「そうそう、さつきはそのアーティファクトのこと『冬眠弾』なんてダサイ名前で呼んだんだけど、正式名称は——『コールドスリープ・ブレット』って言うの。SF映画とかで聞いたことある単語じゃない？」

「まさ……か……!?!」

「許可無く目覚めることは許さないわよ——『眠れ』」

アタシの放ったキーワードに反応し、イヴァンを真っ白な冷気が包み込む。

冷気が散って出てきたのは、正方形の氷の中で微動だにしない……いや、出来ないイヴァンの姿だった。

「死にはしないわ。あとで必ず豚箱にぶち込むんだから」

氷づけのイヴァンは答えられない。

でもアタシには、その表情が恐怖で引きつってるように見えた。

「……勝ったか？」

「やめなさい。それフラグよ」

「一先ずアルカに連絡を入れよう。奴らの『Heartギア』を無効化するんだ」

「アルカにハッキングしてもらえば、コイツらもただの人間だし」

「未だに信じられないけどね。『Heartギア』そのものに干渉できるなんて」

「ところで兄貴、よく向こうの方が出力は上だったのに異能を受け止められたわね？」

「熱とかすぐかったけど大丈夫なの？」

「ああ、『気功術』で全身を防御していたんだ。……本当に使い勝手いいなこの異能。が
んばって条件満たして良かった」

「あーあ、けどこれで兄貴も女性に手を出した男になったわねー」

「おい」

「冗談よ」

「オレが出したのは脚だ。手は出してない」

「何よその屁理屈？ ま、義妹として見なかったことにしてあげるわ」

「仲が良いねキミたち」

第37話 憤怒の友理

【side. 友理】

サツジン、ダメ、ゼツタイ……

作戦の第一段階成功の連絡を入れ、友人たちの勝利と無事を心から祈り、改めて目の前の男を見た際に出た感想がそれだった。

落ち着けぼく、殺意を抑える……！

「あー、こりや一本どころか二、三本取られたか？」

目の前の男——マクシムは「困ったぜ」と軽い調子で頭を搔く。

いつの間にか付け直したサングラスのせいで、奴の目が見れないのが残念だ。目を見れば本当に動揺しているのか分かるのに……

「しかし、レイカⅡ氷道にオレたちの標的である黒羽瑠維本人をぶつけてきたか。普通だったらバカの所業だが……何考えてんだ嬢ちゃん？」

「……ボクが考えているのは、いつだって友達の幸せさ」

「その大事なお友達を巻き込んだの作戦かよ」

「オマエの言う『バカ』ばかりだからな」

「そういう友情モノのバカが1番迷惑なんだよ。オレたちにとって」

「その類いのバカに何本も取られた感想はどうよ?」

「言つてくれるねえ」

マクシムは皮肉で返されたのが予想外なのかニヒルな笑みが崩れかけていた。正体不明の女じゃなかったら殴りかかってきそうさ。

「だが、まだ甘いな。保険つてのは複数掛けとくもんで——」

「レイカⅡ氷道とは別の人質確保の部隊なら問題ないぞ?」

僅かに残っていた奴の余裕の笑みすら消え、無表情になった。

そりや仲間ですら知らせていない別働隊のことまで知つているとは思わんわな。

だがしかし、ここにいるのは『ヴァルダン』ヒロインたちのために10年近くに渡つて青春の一部を犠牲に暗躍し続けた猛者——もといバカだ。異能フル活動の24時間体制で、どれだけ嫌でも盗聴用下級使い魔越しにいい年したオツサンの生活を盗み見る。そんな苦行の道だつて進んでやるさ! 二度とごめんだけどな! 特にトイレ事情とか地獄ぞ?!

でも、それに見合つた成果は得られたんだ。

「ちやーんと、仲間が対処してくれているよ」

それも今夜に限って無敵の狙撃手になった娘が。



「小夜ちゃん。今度は11時の方向に270メートルのそこだよー」

「確認したわ——つと、命中。ターゲットは沈黙……残りは？」

「確認できないですね。はあ、それにしても小夜ちゃんに狙撃銃を渡すなんて。鬼に金棒どころの騒ぎじゃないですよ？ 百発百中の異能を持つ人に渡して良いものじゃありません。ゴム弾を使用しているとはいえ、どこでこんなものを……」

「何でも明日奈に一部のマナーがなっていない公安がちよっかいを掛けて、その感謝料代わりにふんだくったって言ってました。もしもの時、私に使ってもらうことも視野に入れて」

「あの子は何と戦ってるんです??？」

「練習はしたし、反動も……友理印のお薬で体が強化されて問題なしですよ」

「1日しか保たないとはいえ、この『悪意探知機』のアーティファクトも相当なモノなのに……明日奈ちゃんだけじゃなく、友理ちゃんも悪い意味で価値が高すぎます。心労で倒れたら恨んでやりますよー！」

「あら？ 心労になるぐらい心配するのは確定なんですか？」
「生徒会長ですから♪」



「……自分が情けなくなる。何本取られりや気が済むんだ……！」

マクシムから殺気が溢れる。

それと同時に、ボクの常時発動型の異能に反応が出た。他の異能も動員させて、戦闘態勢を取る。

……………ふーん、やっぱりそうくるか。

「嬢ちゃん、何者だよ？ オレたちのことを事前に調べてるっただけでも要注意人物確定だが……正体を現してから、長い期間を裏の世界で生きてきたオレですら肌がピリピリする程の殺気を出してんじやねえか」

「そりゃあ、八つ裂きにしたぐらい憎んでますから♪」

カウント3、2、1……

「笑顔なのに殺気が増したぞ、おい」
「だって——」

話をぶった切って『第18柱バティン』の短距離転移を使う。

それと同時にだ。さっきまでボクのいた場所へいくつもの鋭い銀色の液体が襲いかかったのは。

何が怖いかって、その液体は最初に死角から頭と心臓を狙うように伸びて、時間差で避けれる場所へ別の液体が殺到するんだ。

第六感的なもので初撃を避けても、避けた場所に絶妙な時間差で襲い掛かるソレを回避できる奴がどれ程いるか。凜子でもギリギリだろ。

そんな不意の攻撃を転移先であるマクシムの背後から一瞬で確認したら、背中に隠し持っていた非殺傷武器『不殺の刃』を振るう。

この『不殺の刃』、例によって明日奈作のアーティファクトで、どれだけ暴力の嵐を相手に与えようがHPを1だけ残す異能が付与されている。つまり、憎い相手にストレス発散を好きにだけできる優れものだ！

というわけで、死なない程度に死ねえ!!

「!!?」

が、そこは腐ってもプロか。

サングラス越しでも分かるぐらい動揺しながらも、もはや条件反射レベルで袖口から銀色の液体を出してボクの刀を弾いた。

——ガキイイイイインツツ!

……分かってはいたけど、液体と刀がぶつかった時の音じゃないぞ?

袖口から出た途端に液体は鞭状になってボクの攻撃を防いだ。

でも、完全に防いだわけでもない。

「~~~~~! ホントに何者なんだよおい!?!」

ボクの刀は防がれつつも、マクシムのサングラスを破壊してのけた。

咄嗟に距離を取る——てか、ボクから少しでも離れようとするマクシム。動揺が隠せなくなつた悪人の面をようやく拝めたよ。

「……事前に知ってなかったら恐いな、その『リキッドメタル・マスダ液体金属操作』って異能。ボクが相手で良かった」

『液体金属操作』
リキッドメタル・マスター

ようは液体金属を生み出して自在に操る異能なんだけど、応用力が高くて厄介。

通常では小瓶に入れて持ち運びもできる普通の液体なのに、瞬間的に金属と同じ強度へ変化できる。しかも、液体状態では直接触れていなくても目視可能な範囲なら変幻自在に操ることができ、今のように周囲に展開してからの強襲なんてマネもできる。

事前に創っておいた液体金属を柔らかい素材の中へ入れておいて、ボクが立ち止まる気配を感じてすぐ見えにくい場所へ放り込んだんだろうな。音をほとんど立てずに仕込みを終え、話している間に素材を突き破った液体金属を配置した、と。

(そりゃ、ボスの右腕的な立場になれるわな)

能力も強いけど、使用者本人に才能がある。

仕込みに気付かせないなんて、場数も相当踏んでいるな。

「オレの異能のことまで調べ上げたのかよ。しかも使えるのが幻術だけじゃないってか。どうやって今の攻撃を……」

「誰が教えるかよバーカー！」

実際、そんな大したことじゃない。

『第22柱イボス』の限定未来視でどんな攻撃が来るか事前に知ったり、『第45柱

ヴィネ』の異能を感知する力で液体金属のある場所を常に把握したり、『第51柱バラム』の攻撃ルート可視化で未来視した場面の補正をしたりしたただけだ。

……こうしてまとめると大したことあったか。

まあ初撃をメチャクチャ警戒して短距離転移も合わせて4つも異能を使ったから、異能の息継ぎや精神的な疲労もあつて、転移後はアーティファクトに頼るしかなかった。

だから、仕留め損なつたわけだけども……

「オマエの動揺した顔が見られただけでお釣りがくるか」

「随分な言いようだなあ……！」

マクシムが歯を食いしばつたような憎しみの籠もつた目で睨む。

そうそれ！ オマエのその顔が見たかつたんだよ！

「そこまで嬢ちゃんに嫌われる理由が分からねえなあ……！」

「えー？ だつて——」

そこでボクは、コイツを嫌う最大の理由を突きつける。

「——レイカⅡ水道の両親を殺したの、オマエだろ？」

ほんの数秒。周囲の音が消えたような気さえした。

「な、んで、そのことを」

「今から約9年前のこと。日本人の母とロシア人の父の間に生まれたあの子は、慎ましくも幸せに暮らしていた。だがある日突然、何者かに誘拐される。犯人から要求は身代金。必死に掻き集めれば払えない額ではなかった。指定金額を用意した夫婦はそれを持って犯人と交渉するも、近隣住民から不審者の通報を受けた警察が何も知らずに来てしまう。それを目撃した犯人は隠し待っていた銃で夫婦を殺害。その後、自殺。しばらくして、警察犬によって拘束された少女を発見・保護する。……これが、表向きロシア警察に残されていた記録だ」

「……」

「だが実際は早くから異能を発現させ、才能もあつた少女の取り込みを目的とした計画。使い捨ての頭の悪いバカを焚き付けて誘拐をさせ、取引現場で夫婦を殺害、件のバカも

自殺に見せかけて殺害した。通報を受けて来た警察の人間も金を握らせたグル。そして両親を失い、引き取り手も無かった焦心の少女に甘言を使って組織へ引き入れた。……それがオマエだ」

胸クソが悪い話だ。反吐が出るほど鬼畜の所業だ。

人の命を、幼子の人生を、何だと思つてやがる……！

「……日本みたいな平和な国に住んでいる『Heartギア』に選ばれた奴は、嬢ちゃんぐらいの年までほとんど『縛り』は無いだろ？ それは『Heartギア』の登場と同時期に教育制度が見直され、より道徳を重視した授業が取り入れられたからだ。要は『Heartギア』を持つている奴で犯罪者になるもんがほとんどいない。持つてるだけで一種のステータスになるし、食つていけるから。他の国だとも上手くはいかねえぞ？ 選ばれた時から徹底して犯罪者にならないよう教育される」

「だから、レイカⅡ氷道を組織に取り込んだのか」

「かなり苦労したんだぜ。奇跡的にそれができる環境が整っていたからな。オレみたいに分かから組織の門を叩く異能者は少ねえ。『Heartギア』の使い手がいるかどうかで組織の地位にも繋がる。なら外堀を無理矢理埋めて、組織に入らせるって考えも出てくるさ。あの女はその記念すべき第1号つてわけだ」

血管が切れそうになる程の怒りを自分の中から感じる。

こんなにキレたのは、数年前の忍を助けた時以来だ。

「なあ、その情報はどこから——」

「もういい黙れ。オマエは死なない程度に……殺す」

「良い提案だ。オレも嬢ちゃんを殺さねえといけねえんだ。さっきの奇襲は不発に終わったが、真正面からの戦闘もいける口なんだぜ？」

「……1分後でも同じ口がきいたら褒めてやるよ」

「は？」

ボクは、こんなクソ野郎だからこそ使える切り札を切った。

『第72柱アンドロマリウス』!!』

その後、勝敗が付くまで1分も掛からなかった。

第38話 あなたを信じてる

【side. 瑠維】

決まった……

完璧に決まった……！ 今の私カッコイ……！

「フツ、私の放つ霸王の波動《ザ・オーバーロード》に声も出せんか」

「……そうね。言葉が出ないわ。いろんな意味で」

うー、レイカちゃんだっけ？ 何だかお母さんたちみたいなちよっぴり呆れられてい

るような眼差しをしてるよう。

この登場シーン気に入ってるんだけどなあ……

私の家族を人質にしようとした悪い奴らの仲間だけど、不幸が重なって騙されているから余り責めないでと友理に心配されている子なんだよね。全部が終わったら仲良くして欲しいって頼まれてるし、私のことをみんなが心配してくれたから用意できた舞台でもある。だったら、悩むよりも先に勝たなくちゃ！

よくし、がんばれ！ 私い!!

「フツ、いつになく魂《ソウル》が燃え上がるな」
「あら、だったら……」

わ?! さっきまでの呆れていた目は何だったのかわつてぐらい、レイカちゃんだったら冷たい目をしてる! おつとお、これはもしかしなくても!?

「私が冷やしてあげるわ……物理的にだけど」

そうレイカちゃんが言った瞬間、周りの気温が下がっている!?

あ! 足下が凍っている! 異能の攻撃だ!

「抱きしめてあげる——『スカジの抱擁』」

——ビキビキビキピキ!

足下の氷がドンドン広がって、体積を増やしていつて……あれは、氷で出来た大きな手? ——つて、わー! 伸びて左右から襲ってきたー!

「とうっ!」

後ろへ向かってバク転ジャンプ回避——からの着地成功! ここで余裕があれば決めポーズを忘れない。シユバツとポーシング!

「ほう! それがキサマの異能『氷結』か!」

私のいた所を見れば女性的な、だけど大きさが3メートルはありそうな巨大な手がオブリエの上部分を覆っていた。

『氷結』。

“シンプル・ザ・ベスト”とも言うべき異能で、名の通り周囲を凍らせたり、生み出した氷を自在に操る異能だつて友理が言つてた。

使い手次第で応用力がグン！と上がる異能の例で、レイカちゃんはその辺りの才能がすごいって話してたなあ。

アレ、避けなかつたら捕まって包まれて寒さで眠くなりそう……こう、かまくらみたいな変な安心感もあつて。

あ！なるほどそういう……！

『スカジ』。北欧神話に登場する、雪と山を司る巨人の女神だつたな。その名は“傷付けるもの”や“死”を意味している。そんな女神の抱擁とは、興味こそあれど捕まれば一巻の終わりを意味していると見た」

「ふうん……意外と博識なのね」

「覚えやすい神々の名《ゴツズ・ネーム》は一通り頭にある」

だって、その方がカッコイイから！

『アイスバーン』

「——っ!? 『焦土』！」

間髪入れずレイカちゃんは公園の地面全てを凍らせてきた。

凍るスピードが早かったせいでビックリしたけど、こっちの技も間に合った。私を中心に黒炎が地面を走り、向こうの技を押し返した。

——つて、ああああつ!? 近くの遊具が燃えたあ!!

お、お小遣いで何とかなるかな……?」

「そう。それがアナタの異能なのね。氷と炎。事前の調査で知ってはいたけど、普通に考えるなら相性が悪いみたい」

「くくく……我の方が相性悪ければ、さすがに友理もこんな作戦を立てんさ」

友理によれば運を味方に行っていると云っていたから、他の戦場も相手との相性が悪いということはないはず。

私の知る通り異能によるものなら、明日からの友理の身が心配だけど。

「じゃあ、こんなのはどうか? 『アイシクル・ジャベリンII』」

「そんなのありか!？」

レイカちゃんが次に放った技は複数の氷槍……なんだけど、その氷槍の後ろ部分が高

速回転して冷気を撒き散らしている。そう、まるでジェット噴射みたいに。まるで意志を持つかのようにまっすぐ飛ばず、攪乱するような軌道で飛んでいる。

「ファンネルじゃん！ ガン〇ムのファンネルじゃん！」

「ガン……？ 何よそれ？」

ハウンド・ストーカー

「ならば我も必殺技だ！ 『追尾する獵犬』！」

私が考えた最高にカッコイイ技その1をとくとご覧あれ！

私の異能『黒炎』。その特徴である “纏わり付く” という性質を利用して炎同士を絡め合い、形作る。

そうしてできたのが、獵犬のような姿の黒炎。それをレイカちゃんの氷槍と同じ数だけ作り——突撃させる。

「行け」

縦横無尽に飛ぶ氷槍に飛びかかる獵犬の姿をした黒炎。

私の技から逃れようと動き回る氷槍だけど、伊達に『追尾する獵犬』ハウンド・ストーカーなんて必殺技名

を付けていない。この技の本質は対象にどこまでも喰らい付いていくこと。そして、獵犬たちから漏れる黒炎にある。

少しでも近づければ漏れた黒炎に触れて——

「燃え広がれ」

氷なんて、あつという間に溶かしちゃうんだから。

「鬱陶しいー！」

「それはこちらのセリフぞー！」

攻防は続いた。

レイカちゃんが多彩な氷の技を出し、私がそれを迎え撃つ。

そんなやり取りを何度も何度も繰り返した。

正直言つて膠着状態に入っている。

レイカちゃんは私の身に付けているロザリオの件もあつて、下手に威力の高い攻撃ができない。かく言う私も、レイカちゃんを必要以上に傷付けたくないから直接『黒炎』を向けられない。

「ふう、ふう……日本人にしてはやるわね」

「はあ、はあ……常日頃から戦いを意識してきた結果さ」

そう、妄想という名のイメージトレーニングで!!

「どう? 諦めてこのまま捕まってみない? 状況から考えるに、何らかの方法で私たちの接触を察知したみたいだけど、どんな作戦を立てても無駄よ。裏の人間は刃向かう者に容赦しない。この状況を作ったのがどんな異能でも、直に応援が来る。あなたが――」

「無駄だな」

「……どういう意味かしら？」

何を言っているんだろレイカちゃんは？　すごく簡単なことなのに……

「奴らは必ず我の仲間が、友人たちが倒す。なぜなら、友人たちは『任せろ』と言ったのだから。キサマらの組織も必ず滅ぶ。なぜなら、我の親友が『絶対に潰す』と豪語してみせたのだから。なら、我がキサマを倒せば全てハッピーエンドで終わる。それだけの話さ」

「そんな、夢物語なんて——」

「——できるよ。私は……友理を信じてるもん」

だって友理は、その辺のことでウソは付かない。

初めて会った日も「また明日！」って手を振って別れた。しばらくしてからも「1週間後のこの日に遊びに行こう」って指切りした。中学校に入る前の忙しい時期も「1段大人になってから、また会おう」って約束してくれた。そして、実行してくれた。

たまに無茶して会いに来た日もあった。明らかに寝不足でフラついてるのに「大丈夫」だと、笑いながら家に来てお泊まり会をした。

そんな友理がいつもの調子で「明日から生徒会の仕事一緒にがんばろうな」って言ったんだ。なら、私はその言葉を信じる。

「レイカ＝氷道よ。貴様は何のために“今”を生きている？ 組織とやらに忠義でもあるのか？ 何かやりたいことでもあるのか？ 我は、我を認めてくれた皆と共にありたい。青春を謳歌し、笑い合いたい。そのために全力を振り絞っている。ただただ……この幸せを願っている」

「——っ！」

レイカちゃんが「黙れ」とばかりに睨み付ける。

だけども不思議。どうしても私にはその目が、今にも泣きそうな迷子の小さな子の目に見えなかったの。

本当は分かっているのに、怖くて前に進めない子の目に。

「我は友理ほど他人の心を知る術を持っていない。だが、そんな我にも分かるぞ。貴様は心のどこかで救いを求めている。自己嫌悪しながら、例えそれが破滅でも良いから

と、そう願ってしまっている」

「分かったような口を利くな!!」

レイカちゃんの周囲の氷が爆発的に広がっていく。一瞬で私の周囲を覆うように、持久戦なんか考えずすぐにケリを付けたいかのように、……幼い子が聞きたくないことに耳を塞ぐかのように。

「私にはもうこの生き方しか無いの！ お母さんも、お父さんも、私のせいで……！ 優しかった大人たちは私を押しつけ合って！ 仲の良かった子は腫れ物に触るよう来接してきて！ 他の人間も同情するような目で見てきて！ だから、だから、だからあああつ!!」

周囲の氷が尖っていく。まるで、何もかも拒絶したいみたいに。

(ああ、友理の言った通りだなあ)

友理は、私がレイカちゃんと戦うことになった時に言った。

——戦いになったら彼女と話をしてみて。

——それで、瑠維が思ったことを正面から言ってあげて。

そう、友理は私にお願いしてきた。

ここぞという時に限って、私はギャルゲーの主人公並みに他人の心の変化に鋭いつて、反応に困る言い回しで。

私はレイカちゃんの過去に何があつたのか、何も知らない。

今のレイカちゃんを見て分かつたのは、ずーつと長い間苦しんで、感情にフタをして、ここにきて私が爆発させちゃつたんだらうなつてことぐらい。友理はこうなることを望んでいたんだらうなー。

(もしかして私、初めて友理に頼られた?)

なら、がんばらなくっちゃね。

そう……私なりの格好良さで!!

「良かろう、来い。我が全てを受け止めてやる」

私は眼帯型のアーティファクトを外して、朝からずっと溜め続けていた異能の力を解放する。レイカちゃんの氷を溶かすための炎を。

「『ニブル Heim』!!」

周囲の氷が、冷気が、私を凍らせて黙らそうと押し寄せる。後先を考えていないからこそその力の暴力だね。並みの攻撃じゃ押し通されちゃう。

そしと—

第39話 何て酷いオチだっ!!

「あー、ちつくししょう。好き放題やりやがって……」

住宅地から少し逸れた道。そこにロシア系マフィアの幹部、マクシムの力無い声が空しく響く。

幹部として冷徹に任務を遂行してきた彼を知る者たちが見れば、己の目を疑っただろう。夢でも見ているのかと頬を抓っただろう。

何せ今のマクシムは素っ裸に服を剥かれ、マンガのようにボロボロの状態で、強力な拘束用の縄を使用した亀甲縛り（モドキ）で電柱に逆さまで吊され、さらには油性ペンで落書きを全身に書かれていた。

特に股間辺りのものが酷すぎて涙が出る思いだ。

謎の脱毛剤を掛けられただけに留まらず、ペンで「子象」やら「ぱおくん」やら矢印付きで書かれている。プライドなど木っ端微塵で、泣きたい気分なのに出てくるのは乾いた笑いだけ。

「それに、左に関しては容赦がねえ」

最早感覚が無くなってしまった自身の左腕に意識を向けるマクシム。

その左腕は……グシャグシャに潰されていた。それこそ、手で握り潰したトマトのように。数十年身に付けていた『Heartギア』も無い。

『Heartギア』は、専門の機関に掛け合つて貰わなければ外れない仕組みとなっている。

これは無理矢理奪われないための保険であり、『Heartギア』を持つ犯罪者は無力化されてすぐ、この機関によつて『Heartギア』を永久剥奪される。

だが、手段を選ばなければ外せないこともない。例えば、物理的な意味で装着していた物体の体積が小さくなつたりなど……

(そんなことしなくたつて、もう指一本動かせねえつての！ 異能を扱う余裕もこれっぽっちもないんだよ！)

マクシムは対峙した少女に左腕を潰されたあと、これまた謎の刀によつて信じられない回数滅多打ちにされた。何で自分がアレで死んでいないのか不思議で仕方がない。冗談抜きで暴力の嵐だったのだ。しかも加害者(?)の少女はニッコニコで刀を鈍器代わりに振るうものだから、軽くトラウマである。

最後は気絶したマクシムを起こして、この状態で放置する始末。

ジャパニーズJK怖い！

「本当に、何者なんだよあの嬢ちゃん……?」

マクシムの疑問に答える者は、ここにいなかった。



【side. 友理】

無事にマクシムをボコグチャにしたボクは、アーティファクトによる通信でみんなの無事を確認後、集合場所である瑠維のいる場所——何やら大変なことになってしまったらしい公園へと足早に向かっていた。

敵の1人、キリルの異能の効果が続いているのは確認した。

皮肉にも奴によって外界から分離されることとなったボクらの戦いは、この街の住人はまだ知られていない。その知られていない僅かな時間が勝負だ。

時刻は夜だが、まだ後始末が残っている。徹夜決定。

と、そんなことを考えてる内に集合場所に到着したけど……

「うわあ。こりゃ酷え……」

みんなが集合する予定の公園が、公園として機能しなくなっている。

ぶっちゃけると、遊具が全部壊れていた。ついでに植物の姿……無し!

(これの修繕費払うのボクなのに……!)

今回の作戦はボクワガママもあるから、被害金額はボクが10年間で貯めた軍資金から寄付という形で支払うつもりでいた。

責任は取るけどさあ、一体どんだけ偉人の紙が飛んでいくのやら。

「あ! ユウちゃんこつち〜!」

「アンタが1番遅れるなんて……何してたの?」

「! お姉ちゃんに明日奈! みんなも!」

遠い目になり掛けていたところへ響くお姉ちゃんの声。

公園の惨状に目が行ってしまったが、普通にボク以外全員が揃っていた。……レ

イカ! 氷道との激戦を勝ち抜いた瑠維も——つて!

「うおおおおおい! 瑠維どうしたそれえ!」

「いやー、ちよつと、ね?」

再会した瑠維が煤だらけになっていた。瑠維が膝枕している(何それ羨ましい)レイカ! 氷道の方も同じく煤まみれだ。こっちは気絶しているけど。

「え? マジで何があつたの? 勝つたんだよね?」

「黒羽さんは勝ちましたよ? 勝つたのは……良かったのですが……」

「瑠維ちゃんはこの子の特技がぶつかり合って大爆発？」

「あはは、もうすっごい衝撃だったよ」

瑠維の戦いを最も間近で見ている人物——万一の時のため近くで控えさせていたお姉ちゃん、美江、マヤによれば、大技を出してきたレイカⅡ氷道に対抗するため瑠維も明日奈作のアーティファクトを使った大技を使用したそう。

結果は瑠維の勝ち。

だけど、超低温の『氷結』攻撃と超高温の『黒炎』攻撃が大差の無い状態でぶつかり合った結果、空気の膨張だか何だかの現象によって大爆発。瑠維の方は意識があつたものの、レイカⅡ氷道の方は大技が破られた時点で気を失ってしまったため、下手するとそのまま吹っ飛んでしまう可能性もあつて咄嗟に瑠維が底い……

「2人仲良く爆発の余波を受けたとのことです」

「たまたま遊具が盾の代わりして被害が軽微？」

「ワン！」

「笑えねえよ」

レイカⅡ氷道には思い切つて自分の心の中に押し込んであるものを吐き出して欲しいと思つてはいたけど、予想よりも効果がありすぎたか。

やっぱ他のヒロインたちのように上手くいかないな。

「何だか想定より危険な目に会わせたみたいでゴメン」

「気にしないで友理。これ、いつものアレでしょ？」

ボクが瑠維に謝ると、気にしたそぶりを見せずに瑠維は微笑んだ。それは……『ヴァルダン』の1枚絵でも見せた心からの笑みだった。

「友理はレイカちゃんの心が手遅れになる前に、どうしても助けたかったんだよね。それで、私に頼ってくれた。それが何よりも嬉しいの。私、友理と出会えて良かったよ。誰かを助けることができる人にしてくれて、本当にありがとう」

「お、おう。てか、いつぶりの口調だな」

「あはは。さすがに疲れちゃったから、見なかったことにして♪」

ぐおおお〜！ 尊い！ 良い子すぎるぞ瑠維い！ ある意味ボクが望んでいた瑠維の姿が目の前にい！ こちらこそありがとうございま〜す!!

「る、瑠維ちゃんが……普通に喋って……!」

「あ、明日奈？ 確かに珍しいけど、泣くほどか……？」

うん。こっちは無視しよう。気持ちの方が分かり過ぎるから。

「う……………」は……………」

丁度その時、気絶していたレイカⅡ氷道が目を覚ます。

「あ、レイカちゃん起きた!」

「安静にしなきゃダメよ?」

「どこか、痛むところはあるか?」

起きたことに気付いた凜子、小夜、めぐみが声を掛ける。

「……………!? アナタたちは! 私は確か、クロバ・ルイと戦って、それで、それから……………」

目覚めたばかりで混乱した様子のレイカⅡ氷道は、ほとんど動けない体を動かし周りの惨状やボクらを見て、急に頭の中でピースがはまつたらしい。

「アナタたちが、クロバ・ルイの仲間?」

「イエス! マブダチってやつだな! ちなみに気になっているだろうし先に言っておくけど、マフィア側の人間は全員捕らえたよ」

「ジャパンの学生にマフィアが負けたなんて、とんだブラックジョークね——と言いたいところだけど…………どうやら本当みたいね」

驚きつつも納得しているレイカⅡ氷道は、今までずっと溜めていたものを溜維との戦いで吐き出したからか晴れやかな表情だった。たぶん自分が本当に忌避することをせずに済んだと、ようやくマフィアとして活動してきた罪を償えると、そう思っているん

だろうな。

実際、このまま逮捕されることになったとしても、情状酌量の余地があるからそこまで重い刑にはならないだろう。その間に気持ちの整理を付けて、未成年なものもあつて数年で出所して、その後第二の人生を送るというのも一つの答えだ。

でも、それで良いのか？

失われた青春時代を謳歌する資格は本当に彼女にないのか？

そんなことはないはずだ。

なので、

「これでようやく罪を償える。酷いことをしたけど、アナタたちにお礼を——」

「先生！ もとい、生徒会長！ よろしくお願い致します!!」

「任されました!!」

「「「え?」」」

待つてましたとばかりに、スタンバってた八千代さんが前に出る。

「こんばんは。とある学園で生徒会長などをしている西園寺八千代です。よろしくねレ

イカ!!水道さん♪」

「え、ええ、こんばんは。それで、一体何を——」

「私の異能は『契約』! お互いが了承した内容の契約を魂に刻み、不備の無い限り必ず契約を守るよう行動させるものです!」

「はあ……う?」

「ただし、この『契約』は“罪を犯している人”で“捕縛・無力化されている”時に限って、制限こそありますが私の方から一方的に契約を結ぶことが出来るんですよ♪」

「ま、まさか……」

「うふふのふ♪ 根回しはしたのでご安心を」

「待って、ホント待って! 何だかとても嫌な予感がするわ! ダメ、来ないで……いいやああああああああああああああああああ!!」

夜の街に、少女の何とも言えない叫びが響いた。



翌日。

ボクは、待ち望んでいたイベントに涙を流していた。

「とういわけで、本日からA組に入ることになりました——」

「ひ、水道……レイカ……で、す／＼／」

野々上先生の隣で留学生として紹介されたのは、アマテラス特殊総合学園の制服に身を包んだレイカ。水道改め、水道レイカであった。

羞恥だか何だかで顔を赤くしている姿が最高に萌えます！

1時間目は自習だったので、そのままの勢いでハーフの留学生（という設定）であるレイカとの交流会——という名の質問攻めタイムに突入した。

みんなに囲まれてオロオロするレイカを微笑ましく見ながら、ボクと明日奈は敢えてその場から離れ、秘密の会話をしている。

レイカから「助けてよ」と目で訴えられたが……すまん。

「ふえ？ 番外編の攻略キャラ？」

「ストーリーとかほとんど無視した、本当におまけのエピソードだったけどさ、前世で死ぬ少し前に配信されたんだ」

有料の追加コンテンツってやつだな。

それまでは各ヒロインの追加ストーリー&にやんにやんシーンを配信していたんだけど、前世でボクが死ぬ1ヶ月ぐらい前だったか、特別エピソードとして「何やかんや

で主人公と出会ったレイカⅡ氷道は組織から逃げながら淡い恋心を抱き、「その何やかんやってなんじゃい!」と言いたくなるショートストーリーをプレイした。当然と言うか、主人公と良い雰囲気になって、暗い部屋で「寒い。暖めて」みたいな展開になって……おのれ香坂拓也あ!!

「ちよつと、兄貴が唐突に感じた殺気に戸惑ってるわよ?」

「おつと、失礼」

今回の一連の作戦の目的は3つあった。

1つ目、瑠維のイベントを早期に消化すること。

2つ目、レイカⅡ氷道を助け、学園生活を送ってもらうこと。

3つ目、マクシムをボコって組織を壊滅させること。

「2つ目の理由は、アンタの私情も入ってるでしょ?」

「あ、バレた?」

美少女留学生・転校生イベントは全男子の憧れなんだよ!

八千代さんと一緒に関係各所に根回し&脅しをして、氷道レイカの保護責任をボクらが受け持つ代わりに、彼女に学園生活を送らせることに成功したんだ。ちなみにレイカ

の契約内容は「みんなと3年間学園生活を送るという役目をもって罪を償うこと」である。

卒業まで逃がさねえぜえ、絶対に青春を謳歌させてやるからな!!

「3つ目も無事に果たすことができたな」

「朝のニュースで日本・ロシア警察大手柄！ってやってたものねー」

あの日の夜。

事前に準備してもらった八千代さんの『契約』の力で、気絶したマフィア連中に「瑠維とその仲間に関する情報の完全黙秘」と「それ以外の聞かれたことには全て正直に答えること」の2点を契約させた。これでボクらに繋がることはないだろう。

そしてアルカにも協力してもらい、『Heartギア』をハッキングして取り上げたりもした。連絡した警察が来るまでに目を覚まされると厄介だしね。すぐしかるべき場所へ幹部共の『Heartギア』を届け、ついでにロシア系マフィアの情報を公的機関へ流した。

それが、今朝の新聞やニュースを騒がせた『ロシア系マフィア一斉摘発』というニュースだ。

ボスだかファザーだか呼ばれてる奴も全員捕まった。日本へ来ていた奴らも。これでレイカの幸せを脅かすものは何も残らない。

すごい疲れたけど——アイツら心の底からザマあ!!

「そういえば今更過ぎることなんだけど……瑠維ちゃんの持っているロザリオのアーティファクトって、結局どんな異能なわけ？ ゲームの『瑠維ルート』で明かされなかつたの？」

「明かされてたよ。あのロザリオが持つ異能は『所有者が人生の道に迷った時、その答えとなる道しるべを複数提示する』って力だ」

例えば将来なる職業に悩んでいる人なら、サラリーマンとなつて働く自分・ボランティアに生を出す自分・プロのスポーツ選手になつている自分などを具体的に思い浮かべることができるといった具合だ。

これのメリットは、例えばプロスポーツ選手になる将来を提示された時、メタ的な思考からそのスポーツに限って自分に才能があることが分かる。

アーティファクトを作つた研究者たちが能力に気付けなかつたのは、試した全員が自分の人生に満足しているか、迷うことが特になかつたからだろう。あくまで異能の力は『所有者が人生の道に迷つた時』に発動するものなんだし。

その辺の事情も明日奈に説明したら……急に黙つた。

あああああああああ
あつっつっつ
!!?
」

3年越しに明かされた真実はいろんな意味で酷すぎた。

エロゲ世界 登場人物（第1章〜第2章）

・ 柚木友理
ゆずきゆうり

本作の主人公。元大学生の男でTS転生者。

メインヒロイン 柚木秋穂の妹。高校1年生。

前世でプレイしたエロゲ『ヴァルダン』に登場する大好きなヒロイン、彼女たちを原作の主人公に渡してなるものかと暗躍し続けていく内に予想外の真実を知ったりもしたが、今日も元気に原作主人公の動向を監視している。

同じ転生者である明日奈のことは、本人が想像しているよりも友理にとつて大事な存在。自分の本音を語れる唯一の相手としてずっと友人でいたいと思っっている。

家事スキルは同年代でも高めだが、実はかなりの音痴。前世の時からわざとやっていけるのではと疑われている。——「わざとじゃありませんって先生!!」。尚、合唱コンクールでは基本的に口パク。

元男だからか女の子らしい格好は少し苦手で、ラフというかシンプルな服ばかりを着ている。

将来使えるようになる異能が弱いことに悩み、ゲームにある有料コンテンツの1つに柚木友理の異能超強化があることに目を付けた。そして失敗してなんぼだとメチャクチャな方法を試した結果、ソロモンが契約したと言われる72体の大悪魔に由来した能力を使えるようになる。

「異能」悪魔従えし魔導王

悪魔に関係した72種類の異能を扱える力。
常時発動型と任意発動型に別れている。

・原作の柚木友理

攻略キャラではないただのクラスメイト。

「秋穂ルート」に入るといろいろ深く関わってくる。何だかんだ言って姉の幸せを願っており、姉に相応しい人物かゲームの主人公を試すようなことをしてくる。

ギャルつぼさがあり、オシャレにこだわりがある。

異能は『器用貧乏系異能』で、掠り傷まで治す、静電気を出す、普通のアリを召喚するなど、様々な異能を使えるがどれもこれも微妙。

・香坂明日奈

こうさかあすな

ゲームの主人公、香坂拓也の義妹。高校1年生。転生者。

母親の再婚によって香坂拓也と同じ年の義兄妹となり、初顔合わせで元女子高生（少シオタク）だった前世の記憶が蘇る。その後、混乱して病院送りに（黒歴史）。

アニメから『ヴァルダン』のを知り、後にエロゲだったことにショックを受けたことが原因で事故死した過去を持つ。

押しキャラであった柊小夜と親しくしていたところ主人公と遭遇。利害の一致から協力関係となった。

主に友理の相談役&義兄へのスパイ&ツツコミ役が仕事だが、本音ではもつと自分を頼って欲しいと思っており、友理のことは限りなく親友に近い悪友という関係がしつくりきている。

原作主人公である義兄の呼び方は「兄貴」。

「異能」アーティファクト・クリエイト 異能物質作成

友理と同時期に原作から変化した異能。

自身の体力と精神力を元に、特殊な力を持つ武器や道具を創り出せる。

基本は短時間しか持たないアーティファクトしか創れないが、条件さえクリアできれば半永久的に持つアーティファクトを創造することも可能。ただし、死ぬほど疲れる。

・原作の香坂明日奈こうさかあすな

ブラコン気味の妹属性過多な少女。優しい兄と血が繋がっていないことを意識し始めて時折暴走することも。

関係に悩みつつも結婚を目指してグイグイとアタックをする。

義兄の呼び方は「お兄ちゃん」。

異能は『物質作成』。体力と精神力を元に、様々な武器や道具を創り出す

・香坂拓也こうさかたくや

エロゲ『ヴァルダン』の主人公（攻略者）。

特別特徴のある容姿ではないが、元来の気質から第一印象はいい。高校1年生。

誰にでも優しく、知人・友人・家族を困らせる者に対しては戦闘的になる。

義妹である明日奈の話に良く出てくる柚木友理に興味があったものの会わせてもらえず、高校になって初めて会った。模擬戦で負けたことで興味が強まる——が、滅多に関わろうとしてくれないので最近は意地になりつつある。

人並みに性欲はあり、スパイでもある明日奈にお宝本を全て把握され、その情報を主人公に握られている。少しでもエッチな話題や状況になると主人公が様々な手段で妨害してくるので戦々恐々の毎日。

明日奈の思考誘導によって、原作よりも男友達は多め。

「異能」デュアル・コピー多重異能複写

5つまで他人の異能をコピーし、ストックできる。ただし、能力制限あり。

柚木友理のような複数の異能が1つにまとまったタイプはコピーできない。コピー条件は人により違っており、「同じグループに所属」「握手する」という簡単なものから、「体のどこかに口づけ」「異能勝負に勝つ」などの難しいものまである。

コピーした異能は同時に使用することも可能で、使用者の戦い方が勝敗を分ける。

・ゆずきあきは柚木秋穂

柚木友理の1つ年上の姉。高校2年生。生徒会所属。

重度なる友理の負傷とスキンシップによって、約10年間で重度のシスコンになってしまった。友理自身も少しだけそれを自覚してる。

原作ではゲームの主人公である香坂拓也のことを初めて会った時から気にしていたが、現在は良くも悪くも興味が無い。もしも、妹に手を出したら生徒会権限の発動すら視野に入れる。

包容力のあるお姉さん系の美人で、涙腺が崩壊しやすい性格。

主人公の勧めもあって健康管理やバストアップ体操をしたことにより、原作に比べて

スタイルが良くなった(ワンカップ胸が大きく)。

主人公が好きすぎて、最近では同性婚や近親婚がOKの国について調べたりしている。

「異能」セイセント 守護聖神官

護りと回復を司るヒーラー系統の異能。

結界を張ったり、仲間を回復させるのに特化している。

物語の展開の関係で未だにお披露目できずにいる(涙)。

・こだにりんこ 小谷凜子

友理の初めての友人。高校1年生。友理とは小・中学校が一緒。

異能を使った模擬戦が好きで、時間があれば対戦相手を探している。

非常に元気でポジティブな性格であり、誰とでもすぐに仲良くなれる。

幼い頃からの主人公による思考誘導で合気道や柔術の教室に通っていた経験と、友理を相手にした実践から最初のイベントを阻止することに。

友理がコーチをしたからか、原作よりもかなり強く、咄嗟の命令に反射で従ってしま

う。犬か。

アルカの次にマルコと仲がいい。

「異能」 氣功術

氣を操ることができる。シンプルだが使い勝手がいい。

自身の肉体の強化や常時回復などに加えて、氣を圧縮して遠距離の相手に飛ばすことや、氣によって作られた巨大な腕を操ることが可能。

・ 柊小夜
はなはなこよ

明日奈の初めての友達。高校1年生。クラス委員長。明日奈と小・中学校が一緒。

マジメな性格だが笑った顔が非常に可愛く、照れ屋な一面もある。

主人公が接触を図った時には先に明日奈が友人関係を築いていた。

明日奈の影響か成長に合わせて少しオタク属性が入ることとなった——だけでなく、実は隠れ腐女子になっていた。その事実を知った友理は白目。結果として拓也はネタにされてたまるかと接触は最低限に。明日奈は結果オーライとはいえ、押しキャラの隠れた変化に現実逃避。友理に強く言えなくなってしまうた。

「異能」 針ピンポイント

狙った場所に必ず攻撃が当たるようにする。常時クリティカルヒット。

狙いが逸れても防御されたり、邪魔になるものが無ければ、それまでの軌道が無視して攻撃が相手に辺りにいく。バスケットボールでは毎回綺麗にシュート。

その効果から武器として特製の鞭を使用する。ポケットには投擲用の小石も。

・高森美江
たかもりみえ

友理のクラスメイト。高校1年生。

とても自然体で、裏表の無い素直な性格。祖父母のことが大好き。

何度も実家の花や観賞用の植物を買う年代の友理と友達になる。

原作では数年前から実家の花屋が悪者のせいで経営難に陥り、偶然それを知った拓也と花屋の建て直しを図りつつ、不正な手段で土地を手に入れようとする悪者を懲らしめることで仲を深めていく——という設定だったので、友理が事前に店へ寄付をし、悪事の証拠を警察に届けたことで悪者は捕まった。原作主人公のフラグはバツキり折れた。尚、絶滅したと思われる「メシマズ系」ヒロインである。友理も何とかしようとかんばった……がんばったんだ……。

「異能」ブランド・マジック植物魔法

様々な植物を出現させて行使する。種や現物があると負担が軽減される。

現存の植物だけでなく、巨大なツルを自由自在に操ることも可能。

・鬼島めぐみ
きしま

友理のクラスメイト。高校1年生。クラス副委員長。

とても面倒見がよく、騒がしいクラスを小夜と共に落ち着かせたりしている。

一度吹っ切れると躊躇いが無くなるタイプ。マフィアたちのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲は犠牲となったのだ……。

性格や口調から女子からの人気が高いが、本人はかなりのカワイイもの好きであり、部屋の中は動物のぬいぐるみや小物だらけ。

原作では周囲の目や自分に対する印象からカワイイもの好きであること、女の子らしいオシャレに興味があることなどを隠していた。それを偶然にも拓也に知られてしまい、しかし一切の躊躇いもなく認めたことから拓也を意識するようになった——という設定だったので、友理が『チーターマスク』として毎回誕生日にカワイイものを送りつけ、偶然を装って会った際、拓也が言うはずだったセリフをパクって背中を押したことで、好きなものを隠さなくなった。原作主人公とのフラグはへし折られた。

「異能」ブレイブ・ナイト勇敢なる騎士

めぐみに合わせた騎士の鎧と、異能の大剣を装備する。

鎧は破壊不可の代物であり、大剣は相手の異能を切り裂くことが可能（限界あり）。ゲームでも使用率はナンバー1であった。

・黒羽瑠維くろばるい

友理のクラスメイト。高校1年生。

悪魔の異能を得た友理と出会ったことでその魅力に惹かれ、格好良さを追求した結果、アーティファクトの影響もあり中二病になった残念娘。

中二病の言動（香ばしいセリフ）ばかり言っており、その度に明日奈が泣きそうな顔で友理を責めるのがお約束。

尚、友理のことは「永遠たる同胞《エターナルシスターズ》」という認識。当人は曖昧な態度で躲している。

中二病ではあるが本質が変わったわけではなく、1人きりになると素が出ることもしばしば。猫に癒やされた時は普通に可愛がっているのを見られて、急ぎ取り繕ったこともある。

眼帯&金色のカラーコンタクト&包帯は友理からの誕生日プレゼント（変わりすぎてヤケクソ気味だったので、いけるところまで逝かせてしまおうという思いから）。結構大切にしている。

「異能」 黒炎

見た目は黒いだけ炎だが操作性が高く、一度燃え移ると長く燃烧し続ける性質がある。

必殺技は『追尾する猟犬《ハウンド・ストーカー》』。

・原作の黒羽瑠維くろばるい

非常に気の弱い性格で、ネガティブ過ぎて家族からも遠巻きにされていた。下の弟から「根暗」「別のお姉ちゃんがよかつた」などと言われたことで余計に心を閉ざすことに。高校に入ってから唯一歩み寄ってくれた祖母から祝いに貰ったアクセサリーが実は異能の代物で、偶然見つけた裏組織の者がそれを報告。その組織がずっと昔に追い求めた品だと判明した。

そのアクセサリー奪取のために組織の実力者レイカが敵として現れ、偶然巻き込まれた原作主人公と共に戦っていく中で恋心を抱き、家族との仲も良くなっていった——という設定だったので、何とかポジティブな性格にしようと友理が接触。何故か中二病に目覚めてしまった。全部あのロザリオが悪いんだ!!

現在家族仲は良好——と言えなくもない？

・聖華院マヤせいはいん

友理のクラスメイト。高校1年生。ピアニスト。

元モデルのイギリス人の母と、聖華院財閥のトップである父を親に持つハーフのお嬢

様。スタイルは母親譲り。兄が2人いる。

幼い頃、事故に合いそうになったところを、友理が身を挺して護ったことが切っ掛けで一目惚れする（百合属性全開）。無理矢理は友理を百合側に連れて行くつもりはないが、隙あらば過剰なスキンシップをとったり、そっち方面で自分を見て欲しいと願っている。秋穂とは主人公を取り合うライバルのような関係で、友人であると同時に火花を散らす仲。

普段はいかにもなお嬢様だが、主人公の前だと別人のようになってしまうことに周囲（特に家族）は困惑気味。

小学生時代から将来を期待されたピアニストで、今でも毎回コンクールで賞を取るブク顔負けの腕前。

「異能」メロデー・ボム爆発する音符

任意で爆発する音符を音（歌でも楽器でも可）と共に作り出し、操る。

爆発の規模や威力は調整可能で、物量で押し切ることも地雷のように罠として使うこともできる。

原作より音楽に対する愛が天元突破しているせいか威力が倍増。

・原作の聖華院マヤせいかいん

幼い頃からピアノが好きで、ピアノリストとしてはすでに天才と呼べる才女だった。

しかし小学生の時に起きた交通事故が原因で手に後遺症が出てしまい絶望。ピアノリストとしての夢を絶たれてしまう。

それからは半分自暴自棄になったのか、悪い方向で「いかにも」なお嬢様を演じることで絶望を誤魔化す。両親も時折すすり泣く娘を知っているだけに強くは言えなかった。

高校になっても変わらなかったが、拓也との言い争いを切っ掛けに本心を徐々に知られてしまい、そこから拓也はマヤの心の支えになるようになった——という設定だったので、先回りで友理がストーキングの末に事故を回避させることに成功。ただし、マヤは百合属性に目覚めてしまう。娘の恩人ということで家族ぐるみの付き合いにもなつて困惑する友理だった。

・西園寺八千代さいおんじやちよ

友理が通う学校の生徒会長。高校3年生。サブヒロイン。

とある神社の娘。将来は後を継ぐことになっているので、生徒会長なものもあり何かと忙しい。親からの「恋人はく」が少々悩み。

かなりお茶目な性格でいつもニコニコしているが、怒った時にその目が大きく開か

れ、目を見たものは生きていない——という学校七不思議がある。本人は遺憾。

ある年から毎年クリスマスに『ライオンマスク』名義で魔法少女セツトが届けられたので、子供の頃はよくそれで遊んでいた——実は友理の暗躍で「神社の娘なのに魔法少女ってアリじゃない？」という超個人的な理由により「西園寺八千代魔法少女化計画」が進められていた。失敗に終わったが。

ちなみに、魔法少女系のアニメはよく見るようになったので、そっち方面は変に詳しくあったりする。

「異能」契約

「条件」を指定し、「契約する側」と「契約される側」双方が合意することで絶対に破ることができない契約が成立する。破ろうとすると体が動かなくなったり、激痛が走る。または強制的に契約を実行するように行動させられる。この異能の性質上、時たま政府や警察から協力要請がある。

相手が「犯罪者」「罪人」に値する人物で、「完全拘束状態」「屈服状態」の時に限って一方的に契約を結べる。

・原作の西園寺八千代

実は神社の敷地内に妖怪が封印されており、それを偶然子供の頃の八千代が封印を解

いてしまったことで神社は倒壊、家族は大ケガを負う事態になってしまった。

妖怪は逃走し、八千代は自責の念に囚われることとなる。生徒会長になっているのは同じだが、規則に厳しく、優しいようでも融通が利かない面も。メインヒロイン全員を攻略すると現れる「八千代ルート」では最終的に逃走した妖怪と戦うことになって原作主人公との仲を深める——という設定だったので、事前に妖怪の封印を解いた友理がサクツと倒した。封印が解かれた直後だったこともあり、予想以上に簡単に倒せたのと。妖怪の出番は僅か数秒だった。妖怪は泣いていい。

・波木忍
なみきしのぶ

友理に仕える出自不明の忍者娘。推定13歳。サブヒロイン。

口数は少ない方だが感情が顔や目に出るので分かりやすい。友理に頭を撫でられるのが好きで、本気で自分のことを心配してくれる主人公に亡き義姉を重ねている。

現在は友理の家の隣にあるアパートの一室を借りており、何かあればすぐに動ける用意をしている。時々、主人公の家で食事を共にすることも。

都合上、アルカやマルコと行動を共にすることが多い。

主な仕事は友理からの命令（というかお願い）による、裏方。

「異能」

シャドウ・ドミネーション
影操

自身や周囲の影を操ることができる。影を鞭のように攻撃に使用し、対象の捕縛も可能。

その性質から影が全く無い暗黒では異能が使えないので、複数個の光源を所持している。

・原作の波木忍^{なみきしのぶ}

『Heartギア』で目覚める異能を、自分たちの望むようにできないかを違法研究する者たちによって管理された元実験体の1人。

姉のように慕っていた存在がいたが、酷い実験の副作用で体が弱くなったところを暴力を受け、亡くなってしまった。

公的機関による施設の摘発によって保護され、原作主人公が通うことになる学園の理事長の手足となって働くことになる。その任務の中で拓也と出会い、義姉のように頭を撫でてもらったことで興味を持つ。その後、理事長が裏組織と繋がっていたことで葛藤し、拓也と立ち向かうことで恋心が芽生えるようになる——という設定だったので、先にその施設を友理が摘発の直前で襲撃。忍を含む子供を助け出す。その足で学園の理事長の不正や裏組織との繋がりの証拠を匿名で送ったことで、理事長は逮捕、保護された子供たちはそれぞれ保護施設に行くことになった——が、忍本人は助けられた時に頭

を撫でて貰った思い出を忘れられず独自に友理のことを調べて本人まで行き着いた。

その後、友理に仕えたいと希望する。アルカと出会っていたこともあって、将来いろいろと大きく動く可能性が高いことから友理はアルバイト（？）として雇用を決意。それから書類問題や将来のことについての話し合いなどを経て、隣のアパートに住むこととなった。

・レイカ^{ひょうりゅう}＝氷道^{ひょうりゅう} ↓ 氷道^{ひょうりゅう}レイカ

裏組織に所属している異能者。推定16歳。ロシア人と日本人のハーフ。

実は『ヴァルダン』における特別編のヒロイン。

幼い頃はロシアで暮らす普通の少女だったが、両親の死を切っ掛けに裏組織へ。

異能のアイテムの搜索・奪取などを担当。各地を飛び回っていたので友理も手が出せなかった——ので「黒羽ルート」のイベントを利用して接触。戦いに勝利して八千代の異能で高校へ強制入学させた（同じクラス）。100%私情である。

非常にクールな印象だが感情が無いわけではない。転入初日は恥ずかしさや戸惑いで目を回す羽目に。これからは世の楽しさを知ってもらおうとする友理たちに振り回される日々が待っている。

「能力」氷結

指定空間内を凍らせたり、氷の槍を作り出して撃つことなどができる。様々な形で氷を作れるので戦い方の種類が豊富。

・アルカメモリアミュトロギア

ある日、流星のように空から友理目掛けて降ってきた謎の少女(年齢不詳)。

その正体は、第2月面基地にある『Heartギア』の技術の元となった宇宙船の中で眠っていた人工知能。長い年月の中で人間のデータを取って自分の体を作り、情報収集をしつつ、自分がこれからどうあるべきかを悩んでいた。

その中で友理が自身の強化のために行った裏パスワード(実際は宇宙船の機能ロック解除コードの1つ)関連を『Heartギア』経由で受信。宇宙から友理の元へ飛来して接触を図った。尚、その後……

宇宙人や宇宙船などの技術については曖昧な部分が多く、各惑星の調査で訪れてトラブルにより不時着した“ということしかハッキリとしていない。将来どうするかについても特別な目的は無いため、紆余曲折から柚木家でお世話になることに。解除コードを知っていた友理に強い興味を持ち、観察対象となっている。

無口無表情だが人工知能だけあって学習能力が異常に高く、友理たちの仕草や反応などを見続けたことで初期に比べて感情を出すようになった。ただし、羞恥心は皆無。

人間と同じ姿だが中身は別物で、細かい違いがある（排便をしない、空腹にならないなど）。マルコと仲がいい。

名無しだったので、友理が『フォルネウス』で命名した。

〔能力1〕 異能停止

『Heartギア』に干渉して、強制的に異能を停止させる。

〔能力2〕 ハッキング

人工知能としての力。どこからでも電脳空間から情報を引き出せ、改変できる。

足跡も残さないので一時ニュースになって主人公からチョップをもらう。

〔能力3〕 存在曖昧

そこに存在しているのに存在が無いという矛盾した状態。

人と触れ合うことはできるが、攻撃などをすり抜けたりする。

〔能力4〕 浮遊

地面から少しだけ浮いた状態で移動できる。

・マルコ

柚木家で現在飼われている犬——ではなく、大悪魔マルコシアス。

友理が裏パスワードで手に入れた力を確認する過程で召喚してしまった中身悪魔の

子犬（雑種）。

送還が不可能のため、「拾ってきた」と言って家で飼うことにした。

普段は頭のいい犬だが、危険度の高い戦闘時には本来の姿であるグリフオンの翼と蛇の尻尾を持つ巨狼に変貌する。飛行能力を有し、口からは火炎を吐く。

なぜか明日奈に対してだけ扱いが雑。

・ワニ助

柚木友理の異能によって召喚される大悪魔サレオス——の搭乗するワニの化身。

2階建ての家ぐらいデカい。デカすぎて使いどころに限られるのが悩み。

異常に体力と防御力があり、中途半端な攻撃ではビクともしない。水中戦が1番得意で想像よりもずっと速いらしい。本気を出すと口から破壊光線を放つことができる。

○ジラか!?

・王^{ワン}芽依^{メイ}

友理の同級生。高校1年生。中国人。

親は中国人だが、日本生まれの日本育ち。中国語は挨拶ぐらいしか話せない。

親の影響で中国武術などを幼い頃からしており、異能与組み合わせた強さは本物。

“キャラが被っている”と凜子のことを一方的にライバル視している。

〔異能〕 白虎靈気

虎型のオーラを身に纏って戦うことができる。攻撃能力高めめの異能。

・野々上望見のうえのぞみ

友理のクラス担任。25歳独身。

年齢Ⅱ彼氏いない歴の持ち主で、そこに触れるとキレる。

騒がしいクラスに呆れながらも、教師として真摯に向き合う。

〔異能〕 デカペン

鉛筆やボールペンなどのペン類を巨大化させることが可能。

実用性はあまりないので、もっぱら怒った時の威圧用。

・学園の理事長

前任者は表面だけ善人の腹黒オヤジで、後任予定も裏の繋がりがあつたような男（忍ルートの黒幕）だったが、どつかの誰かさんの暗躍によつて逮捕。結果、友理たちの学園入学時は優しそうなオバさんになつていた。

・ 沖野栄華 おきのえいか

学園の放送部に所属する2年生の女子。黒縁メガネ。

富田尚文とは中途半端な親戚関係。地味に会う機会が多いので毎年お年玉をたk——貫つたりしている。ついでに、その母親と仲が良いので富田の個人情報筒抜けとなつているらしい。

最近になつて尚文さん、部屋の模様替えをしたみたいですね？ その程度でアレコレを隠せるんでも？

・ 富田尚文 とみたなおみ

学園のOB。社会人のサラリーマン。苦勞人。

沖野栄華とは親戚関係。大学生時代からバイト代をゆs——交渉の末、最終的にお年玉としてあげている。さらに、女手一つで育ててくれた頭の上がない母親がその子と仲が良いせいで、毎年交渉で負けている。

だから母さん！ 勝手にオレの部屋に入らないでよ！ 何で日曜大工で作った二重底のこと知ってるの!?

・ 忍の義姉

波木忍にとっての姉と慕っていた少女。名前不明。故人。

忍のいた違法研究所に後から来た子供たちの1人。忍のことを本当の妹のように愛していた。

実は「忍」の名付け親。

死ぬ最後の瞬間まで忍の幸せを願い続けた。

・マファイアのボス

100年以上の歴史を持つ古参組織の当代ゴッド・ファザー。

起死回生の一手を指したところ、どつかの誰かさんからもたらされた情報によって集まった警察官の数の暴力で危うく圧死しそうになりながら逮捕される。

オマエらどこからそんなに湧いてきたんだ!!?

・所長

「銀月」に建設された宇宙施設をまとめる若き所長。

非常にグラマスな体型の持ち主だが、無自覚な面が大きい。

数年前に突如現れた謎の存在——アルカの行方を追っている。

・助手

“銀月”に建設された宇宙施設で働く所長の部下。スレンダー体型で、日々所長への嫉妬心が増していつてる。アルカのせいで『パンツ丸見え事故』の被害者に。

・マクシム

ロシア系マフィア所属の幹部。ボスの右腕的存在。

見た目40代ほどのサングラスに無精髭スタイルの男。

普段の雰囲気と違って、仕事になると非常に冷酷になるので部下からも密かに恐れられている存在。

数年前、レイカⅡ氷道を嵌めてその両親を殺した張本人。

最後は本気で怒った友理によって、プライドもろもろを完膚無きまでに破壊された。

「異能」リキッドメタル・マスタ液体金属操作

自身の体から液体金属を生み出し、自在に操る異能。鞭のように振るい、インパクトの瞬間だけ金属と同じ硬度にすることも、一瞬だけ鉄の棘や杭にして対象を貫くことも可能。

ただし、作り出す際は大量の水分と鉄分が必要になってくるので、無計画で創ると自

滅してしまおう。

普段は事前に創った液体金属をいたる所に隠して持ち歩いている。

・キリル

ロシア系マフィア所属の幹部。実際の年齢より老けているらしい。

目が細い、どこか胡散臭さもある痩せ型の男

実はキレイ好きでボスの部屋は彼が掃除している。

「異能」アローン・ジ・ワールド世界でひとりぼっち

対象とした人物を徐々に孤立させていく異能。

完全に孤立すると、その人物の周囲で何があるうとも誰も、何も、気付くことができない。例外は使用者本人とその周囲にいる者たちのみ。

ただし警察署や病院の中など、絶対に人が大勢いる場所に突撃されると効果が薄まる。

・イヴァン

ロシア系マフィア所属の幹部。ウザいキザ男。

やたらと言動を格好付けたがる。

「異能」イービル・ソーン 不吉もたらす茨

鋭い棘を持った茨を召喚し、操る異能。

棘にはランダムで状態異常を引き起す毒がある。

・ポリーナ

ロシア系マフィア所属の幹部。レイカⅡ氷道とは犬猿の仲。

ブロンドの髪を持つ、非常に好戦的な女性。

「異能」アポロン・ハンド 太陽の手

コンクリートですら一瞬で溶かす灼熱の手にする異能。

残念ながらパン職人にはなれない……

SS レイカの心

【side. 氷道レイカ】

——自分の人生は毎回なぜ、こころも唐突に変わるのだろうか？

「氷道さん、ハーフだけど日本に来るのは初めてってホント？」

「え、ええ。数日前に」

「あの！ 彼氏とか募集はしていませんか……!？」

「そういうのは、興味ないというか……」

「ロシアかあ……本場のボルシチって美味しいのか？」

「少なくとも不味いと感じたことはないけど……」

「わあ！ 髪がサラサラ！ 何つけてるの？ メーカーは？」

「特に何も……」

「『この豚野郎！』って罵ってください!!」

「い、この豚野郎……?」

「ありがとうございまs——「何言わせてんの!!」——ぶぎよわ!!」

さ、騒がしい……!

これがジャパンのハイスクールなの!?

こんな所で3年間も過ごさなければならぬの!?

と、ここで救いの手(?)が。

「待て待て、同胞たちよ。ここに居る氷道レイカは学園生活において、この我! 地獄の獵犬《ヘル・ハウンド》黒羽が世話をすることに決まってるのだ。……安心するがよいレイカちゃんよ。我に任せれば、3年間この巨城での生活は素晴らしき幸福《ヘブン》になることは間違いない。豪華客船に乗ったつもりで存分に任せるがいい!!」

「まっつったく、信用できない! あと誰がレイカちゃんよ……!?!」

差し伸べられたのは払いたくなってしまう手の方だった。

ネコの手の方が100倍マシね!

「昨日の敵は今日の友、それがこの国の文化! あと『レイカちゃん』呼びは決定事項でもある。全ては生徒会長の決定だ」

「イカれた文化ね……! そしてまたあの女か!？」

「あろうことか私の世話役？ 監視役？ に選ばれたのは、私が所属していた組織が狙っていた張本人であるクロバ・ルイだった。

明らかに人選ミスだと思ってしまう。

推薦した人物は相当空気が読めないに決まっている。

「とうか昨日殺し合いをした女を相手して、何でここまでフレンドリーになれるのの子は？ 平和ボケどうこうで済む話じゃない。

「朝から拒否しているのに呼び名が『レイカちゃん』に決定してるし。これが教師に匹敵する権力を持つという生徒会長という存在の力なの!？」

「異能の件といい、いつか下克上するべきかしら？」

「まあまあ氷道さん落ち着いて。黒羽さん、見た目と性格はちよつと個性的だけど、決して悪い子ではないから」

「それは……知ってるわ」

若草色の髪をした女が宥めてくる。

先日の戦いはお互いの感情のぶつけ合いで決着がついた。

「会ってから僅かしか時間は経っていないが、クロバ・ルイが善人であることだけは理解しているの。」

——だけど……

「その個性的な子が3年間、私の世話をすると聞かされて、かなり不安なのだけど？　大丈夫なの？　そののところ？」

確か「中二病」という病気でこのようになったと聞いているけど……

「……………だ、大丈夫だよ。ね、ねえ？」

「あ、ああ。何も心配いらさないさ」

先の女と、隣にいた赤毛の女が表情筋を無理に変えたような笑顔で頷き合う。

心配しかない！

「諦めが肝心だよー」

髪を2つに分けた快活そうな女が何となしに言う。

ほっというてちょうだい！

「水道さん、いえ、レイカさん！　瑠維さんのことで困ったことがあればいつでもわたくしたちに相談してくださいね。24時間対応致します！」

私と同じハーフだという金髪の女が潤んだ瞳で手を握ってくる。

ほぼ毎日、困るといふことの裏返しか!?

「実際、困ったことがあれば何でも聞いて良いのよ？　詳しいことは知らないけど、アナ

「……少し騒々しい？ 頼りがいが、ある……う？」

どう控えめに見ても、クロバ・ルイ以上の問題児に見えるのだけど。

あの女、確かクロバ・ルイを含んだ仲間内のリーダーよね？ たぶん？

さつきも目線で助けを求めたら、目が合ったのに助けてくれなかったのだけど？

「……………見なかったことにしてちょうだい」

「ちよつとおおおおお!!？」

それでいいの委員長!?

「今日はちよつとメガネが曇るわね」って言って拭きだして……、話の逸らし方が露骨すぎるうえに下手くそ!



「つ、疲れた」

「フフフ、良い場所だろう？ この学園は」

「ええそうね。10年以上の裏世界の常識が木っ端微塵よ。まだ半日しか経っていないのに、ここまで疲労するなんて、素晴らしい学び舎だわ」

「そうだろう。ここが我らの母校となるのだ」

「皮肉すら通じないのね。もう好きにしてよ……」

朝の質問責め&騒動から解放され、ようやくお昼休みに突入できた。

学園の案内役を意外にもマジメにこなすクロバ・ルイに連れられてやって来た学園食堂で、ようやく一息つくことができたわ。

学食では無難にサンドイッチと飲み物を頼んだけど、疲れているせいか想像していたよりずっと美味しかった。

「美味いだろう？ ここの学食は？」

「まあ、ね」

「ここで学食を作る者たちはな、我ら学生のことを愛しているのさ。元気に育ってほしいと。以前、友理が調理を担当している女性と楽しそうに話しているのを見て確信したよ。愛情が込められているから、ここの学食は美味しいのだと」

そう言つて、クロバ・ルイはカレーを本当に美味しそうに頬張る。

こちらにまでスパイスの香りが漂つてきて、お腹がすきそうになる。

「愛？ 何でそれで美味しくなるの？」

「相手のことを思う気持ち伝わるからさ。……我が友理から聞いたところによると、幼少期は普通に家族と暮らしていたのだろうか？ 母が作りし料理と、組織とやらに入つてから今の今まで食してきた食べ物。どちらが美味しいと言える？」

「そんなの……！」

そんな、の……

……

「……お母さんが作ってくれた料理が、世界一に決まってるじゃないの」

お母さん……お父さん……

組織に入ってから、何度も思い出した。

楽しかった家族との食事風景を。

お母さんの作ってくれたものは何でも美味しかったのに。

組織に入ってから食べたものは、まともに記憶に残っていない。

今なら分かる。

私は、両親のことを今でも愛していたと。

今なら分かる。

両親が、私のことを最後まで愛してくれていたと。

「そういう『心』が残っているから、友理も必死になったんだろうなあ」

気付けば、クロバ・ルイは食事の手を止め、正面に座っていた私の手に自分の手を重ねていた。

その手は、とても温かった。

「友理は優しいけど、甘くはないんだよ。レイカちゃんの過去がどうあれ、本当に優しい心が残っていないなら、さっさと警察とかに全部委ねて悪い奴らをレイカちゃんごと捕まえる手段を作ることだってできたはずなんだ」

「それは……」

考えなかった訳じゃない。

先日のあの戦いから組織の壊滅まで、全てユズキ・ユウリという名の女の手のひらの上だったとしたら、もつとスムーズな手段があったんじゃないかと。

「友理は戦いの前からレイカちゃんのことを気にしていたよ。戦いのあとも『やつと普通の生活をさせられる』って喜んでいた」

生徒会長の持つ異能『契約』の効果で私は半ば強引に学生にさせられたが、あれは私の行動を縛るのと同時に私のことを護っているはずだ。

ユズキ・ユウリと生徒会長がどのように各方面と交渉したかは知り得ないが、苦勞に見合う対価があつたとは思えない。

だから、私を学園に入れたのにも何か裏があるんじゃないかと疑ったりもしたけど

……

(本当にただのお人好しなの?)

あり得ない。そう、言いたいのに……

「友理は友理で考えがあったのかもしれないけど、結果としてレイカちゃんを救うことができるんなら、何でも良かったんだと思うよ?」

「私に、それだけの価値があるの?」

「大丈夫。レイカちゃんの手は汚れていない。キレイなままでよ。これからいくらだつてやり直せる。お母さんの御飯が世界で一番って言える人なら、周りの人みんなが助けしてくれるよ。友理も、明日奈も、もちろん私だつて。一緒に学園生活送って、一緒に卒業しようよ」

……

……ああ、そうか。

だから、私たち組織は負けたんだ。

負けて当然じゃないの。

「バカばっかだね。アナタたち」

「えへへ、良く言われるんだあ」

愛、か……

(私の心、思っていたよりも冷え切っていなかったのね)

お母さん、お父さん。

私のこと、愛してくれてありがとう。

ずっと私の「心」にいてくれてありがとう。

少し寄り道しちやっただけど、

もう1度だけやり直してみるわ。

だから、天国から応援してくれる？

そしたら私、がんばることが出来るから。

「ところで、アナタって変な口調の時と優しい口調の時とあるけど……情緒不安定なの？ 差が激しいから落ち着くと混乱するのよ」

「な!? 我は情緒不安定ではない!」

「恐ろしい病気ね。中二病って」

「話を聞かんか!?!」

SS 瑠維のターニングポイント（前編）

「レイカちゃんめえ……」

ズカズカと、如何にも不機嫌です！といった態度で歩く。

「全く！ 何が情緒不安定だ！ 我の性格が変わるのは宇宙よりさらに壮大な混沌《カオス》における奇跡であると言うに！」

そう。今の私は地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》黒羽！

滅多なことじゃ、本当の自分は表に出さない。

だからカツコイイし、クールだし、神秘に満ちてるんだ！

なのにレイカちゃんったら、言うに事欠いて「情緒不安定なの？」って!?

中二病は情緒不安定になる病気じゃないの……!?

もつと言葉で表すのが難しい気高さのある生き方だっただけなのに。

私が毎朝どれだけの苦勞をしていると思ってるんだらう？

朝起きて顔を洗ったら、洗面所の鏡に向かって「私は地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》黒

羽……そう誰よりもカツコイイ自分を貫く者！ 我の名は、地獄の猟犬《ヘル・ハウ

ド》黒羽である!!」って鏡の中の自分に言い続けているのに。

アレをすると、スムーズに中二病モードになれるんだよ。

ただ、友理は「何とか崩壊が起るから鏡に向かったの過剰な自己暗示だけはらめえ!!」と懇願してくる。

さらに愛しの弟くんは「お姉ちゃん……ボクが悪かったから、外に出る日ぐらいは普通にしてよ。ご近所どころか町全体で有名になってるんだよ」と今にも泣きそうな顔になる始末。お母さんとお父さんも似た感じなんだよね。

……しばらく前に友理と家族が話し合ってるのを聞いたけど、「瑠維のお友達として何とかしてください！ アナタに一番懐いているんです！」と言う両親に対して「むしろ家族の愛で何とかしてくださいよ！ ボクが離れていた数ヶ月で何があつたんですか!？」とお互いに私のことを押しつけ合っているようにも見えた。

解せぬう……

最終的には友理が地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》黒羽として生まれ変わった私に色々聞いてきたけど、1年過ぎた頃になって「もうどうにでもなつちまえ！ 落ちるところまで落ちれば、一周まわって安全だろ！」などとヤケクソ気味になりつつ眼帯・カラコン・マントの3点セットを誕生日にプレゼントしてくれたつけ。

「ふふふ、あの時は嬉しかったなあ……ハッ?! い、いかん！ 地獄の猟犬《ヘル・ハウ

奈が「風が強い日は気をつけろって何年も注意してんのに、そんな日に全力疾走するな!!」と注意している。

うん。明日奈すごく大変そう。

友理って運動神経良いから、中学生の頃から陸上部とかに誘われていたらしくって……平均より走るの速いんだよ。

で、そんな友理が風のある日に全力で走ると――

「……友理。女の子がスカートで走る時は周りの目に気をつけなきゃだよ？ 健康的な太ももとかが、ね？ 男子の目に毒だって」

「そんなことはどうでもいい！ 中身が見えなきゃ問題ない！」

目の前まで来た友理に、思わず素で注意してみるけど……案の定かあ。

ここ、普通に学園の人が行き交っている場所だから、さつきから偶然居合わせた男子の目が泳ぎまくっているのに……

どうして気付かないかなあ？

「はあ、はあ、この、バカに、女の子と、ハアア、しての恥じらいなんて……母親のお腹の、中に、置いて来たんでしよう……？」

遅れて明日奈も到着。

こっちは息がきれて苦しそう。

「ふう……あれ？　　そういうえば瑠維ちゃん1人？　　レイカちゃんは？」

「あ、そういうやどこ行つた……？」

「レイカちゃんなら、昼休みの残り時間は1人で過ごしたいとのことだ。先程まで昼食を取りながら会話をしていたのだが……その際の我との話で思うことが多々あつたらしく、少しいので気持ちの整理を付けたいと言つていた」

お昼御飯を食べながらしたレイカちゃんとの話は、私の気持ちを素直に伝えただけのものだったけど、本人としては悪くなかつたんじやないかな？

憑きものが落ちたような顔だったし。

「……悪くない結果だつたつてことでもいい？」

「ああ。そこは安心するがいい」

「そつか。……さすが瑠維だな」

「！　フッフ、もつと褒めるがいい」

やった！　友理に褒めてもらえた！

友達に頼りにされるのつて、やっぱり嬉しいな。

「それで？　改めて聞くが、どうしたというんだ？」

「あー、その、ロザリオのことなんだけどさ……」

「ロザリオの？」

ロザリオ——というのは十中八九、私がお婆ちゃんから中学に上がる前に貰った宝物で、みんなを巻き込んだ先日の騒動にも関係する、今も私の首に掛かっている（制服の内側にあるから普段は見えない）ロザリオのことだろう。

「そういえば、今朝はレイカちゃんの方に集中していたから詳しくは知らんが、後ろの方でロザリオがどうこう言っていたような……?」

言っていた——というより叫んでいたみたいだけど。

ついでに拓也くんの呻き声も聞えたなあ。

「ロザリオの件に関しては解決したと聞いたのだが……もしや、またも外国の勢力が狙っているという話ではなからうな？　もしそうなら、本格的にコレを手放すことも視野に入れるぞ？　いくら大切だからと言って、それが不幸を招きし物《パンドラ》であるならば我には不要だ。……何なら、この場でへし折るか?」

私の持っているロザリオは現代の技術でも制作が困難な、不思議な力を秘めた天然のアーティファクトらしいことを友理から聞かされている。

大昔に紛失したロザリオが1度例のマフィアの手に渡って、そこから巡り巡ってお婆ちゃんの手へ渡ったと……

——よくよく考えると変な話だよね？

何で外国にあつた物がお婆ちゃんの持ち物になつたんだろ？

友理は「瑠維の婆ちゃんに聞いてくれよ。マジで」と言つて、そのお婆ちゃんに電話で聞いてみたら「ああ？ アンだつて？ 耳が遠くて聞こえないねえ」つてはぐらかされた（絶対にウソ。ロザリオの話題になるまでハキハキ喋つていた。親戚全員、お婆ちゃんは100歳まで生きると確信している）。

何となく、一生教えてもらえない気がするよ。

——とまあ、私の持っているロザリオがそんな曰く付きの物になる。

ロザリオは大切だけど、そのせいで家族や友達に迷惑を掛けるんじゃないや何の意味もない。先日的一件に関してだつて、すごく友理に甘える形になつて申し訳がなかつたんだもん。レイカちゃんのことを抜きにして考えれば、あんな危ないことは一生に一度で十分。

同じことの繰り返しになるなら迷わず——とまではいかないかもだけど、葛藤してお婆ちゃんとかに謝りつつ公的機関に渡すか破壊するぐらいの覚悟はしている。

そんな私の覚悟が顔に出ていたのか、友理が慌てる。

「違う違う！ そうじゃないって！ いや、本当はそうなんだけど、落ち着いて考えたら不味いと思つたわけでゴニョゴニョ……」

「?」

友理にしては珍しく歯切れが悪いなあ。

そんな友理の代わりに明日奈が質問してきた。

「えつとさ? 瑠維ちゃんが今の状態——へ、地獄の猟犬《ヘル・ハウンド》黒羽になった切っ掛けって、いつの何が原因か知りたくて……」

「我が格好良くなった時のこと?」

あれは確か……

「中学に上がる少し前だったか……自身の将来《フューチャー・ビジョン》について夜空とロザリオを見上げながら考えていたら寝てしまったらしくてな。その時見た夢がやけにリアルで……その中に、今の我と同じ姿があったn——」

「オーマイゴッド!!」

「わっ!?!」

友理と明日奈が揃って膝をついた!

え? どうしたの一体?

「だ、大丈夫か?」

「問題しかない。でえじょうぶだ」

「すでに矛盾しまくっているぞ……!」

はあ。何があつたのか分からないけど、

(こういうおかしなところは、全然変わってないなあ)
そう初めて会つた時から、変わっていない——

——あなた、誰？

——えくつと、通りすがりの不審者？

SS 瑠維のターニングポイント（後編）

——ほら、もっと自信を持ってシャキッとしなさいって！

お母さんは無責任。

どうやって心から自信を持つのか？

聞かされただけで変われるなら、誰も苦労しないのに……

——ネガティブじゃなくポジティブに考えればいいんだよ。

お父さんは分かっている。

そのポジティブな考え方がそもそも思い浮かばないのに？

がんばって絞り出して、それが何度も裏切られた私にはもう無理。

——ともだちのお姉ちゃんの方がハキハキしてたのに……

大切な弟は何も悪くない。

……ゴメンね。暗いお姉ちゃんで。

お友達のお姉さんみたいに、私も弟くんと遊べたらいいなと思って思うよ？

でもね？ いざその時になると、どうやって接していいのか分からなくなるの。それで迷ってる内に、弟くんの機嫌が悪くなっちゃうの。

「はあ……」

ため息がまた出ちゃった。

今日で何回目だろう？

私は黒羽瑠維。今年で8歳になります。小学生です。

そんな私は今……橋の上で下を流れる川をずくつと見ている。

理由は——特にない。

強いて言うなら、1人になりたかったから。

学校帰り、家までの帰り道から少し逸れたこの場所でただただ静かに過ごしたかった。ランドセルを背負ったままだから通りすがりの人に何か言われるかもって思ったけど……誰も通らないまま1時間以上は経ったと思う。

人通りが全然ないのはいいんだけど、誰かに声を掛けられたら家に帰ろうとしていただけに無意味に時間を過ごしていた。

「私……どうしたらいいんだろう？」

答えてくれる人は誰もいない。

ため息の代わりに自分の口から出た言葉は、上手く説明ができないんだけど……何か、こう、自分で自分が嫌になった。

私は……ぶっちゃけ、暗い。

特別何か理由があつてそんな性格になつたとかではなかつたはず。

ただ、徐々に自分が同い年ぐらいの子と違うんだと知り始めて、気がついたときには……もう自分でもどうしようもなくなつていた。

お婆ちゃんとかは「それが瑠維の個性なんですよ？」つて言ってくれたけど、お母さんとお父さん、それに弟くんは「今の私じゃない、別の私」を求めていた。説明が難しいけど、とにかく暗い性格の私では嫌いらしい。

「このままだと……私、どうなっちゃうんだろう？」

クラスでも少し浮いている自覚がある。

お母さんとお父さんも今はちよつと言つてくるだけだけど、数年後にどんな風に私の

ことを見てくるのか怖い。

弟くんも小学校に入る頃になったら、どう接してくるのかな？ 今よりハッキリと嫌いななられたらと思うとすごく怖い。

「はあ……」

本日何度目かのため息を（以下同文

お婆ちゃん私のことを「瑠維は内気だけど地頭は悪くないから、それを分かってくる同年代がいれば化けるんじゃないかねえ」って言った。

私は年の割にはキチンと考えられる方だつて。

そのせいで余計なことまで考えちやうのも原因かもつて。

「でもそんな子、私は知らないんだよお婆ちゃん……」

少なくとも私の知る限りで同じ学年にはお婆ちゃんの言う“地頭の良い子”はいないと思う。これでも最初は話し相手になつてくれる子がいないか探したこともあるし。残念な結果に終わったけど。

「何処かにいないかなー？」

……簡単に見つければ苦労しないか。

結局、考えても答えは見つからない。

私はまた何をするでもなく流れる川を見つめ続ける。

「……あ。あれ、カモの親子かな？ 珍しい」

いつの間にか、流れに沿って親カモと小さなカモの赤ちゃん泳いでいた。離れた場所にある公園があつたし、そこから来たのかな？

興味がわいて、もう少し良く見ようと段差に脚を乗せて川を覗き込んで――

「はやまるなああああああああああああああああああああああああああああああああ
あつっ!!」

「へ？ きゃあ!？」

突然体に衝撃が!？」

目を白黒させながら確認すれば、オレンジ色の髪をした同じ年ぐらいの女の子が私の肩に手を置いた状態で、覆い被さっていた。

「うっわ、あつぶな!! 何だ？ バタフライエフェクトでも起こつたのか？ 危うくこの世の宝（ガチ）が失われるとこだったあ。いや、今はそんなことどうでもいい！ ダメだよ ru——キミい!! その年で人生を諦めるのはまだ早いんじゃないかな!!？」

掛かっていた場所によじ登り——って!?

「ちよちよちよちよ!?! ちよつと待って何してるの!?! 危ないよ、落ちちやうよ! 止まってって!!」

「大丈夫大丈夫。死にはしないよ。流れ星モドキが直撃したって生きてたんだから問題ない。ちよつと落ちれば今の記憶が無くなるかもしれない」

「落ちたら大変だよ! こそこそ高いよここ!!」

その子の顔をよく見たら、ものすごく真つ赤になってプルプルしていた。

もしかして恥ずかしかつたの!?

よく分からないうけど、私とのやり取りで何かを勘違いしたことが耐えられないぐらい恥ずかしかつたの!?

それで自分が橋から飛び降りるってどういうことなの!?

〜数分後〜

「落ち着いた?」

「ぐ迷惑をおかけしました」

私の必死の説得（?）で落ち着いた女の子。

まだ恥ずかしさが残っているからか目を合わせてくれないけど、一先ずはいきなり橋から飛び降りることをやめてくれて安心して。

「それで、早速なんだけど……」

「はい。何でしょう?」

「あなた、誰?」

「え〜つと、通りすがりの不審者?」

全然答えになっていなかった。

これが、私の人生における最初のターニングポイント。

初めてのお友達、柚木友理との出会いだった。

それからというものの、友理とはちよくちよく会って、一緒にお話したり、友理に半ば無理矢理どこかへ連れて行かれたりする仲になった。

ちなみに「通りすがりの不審者」という意味不明ワードに関しては、日課である学校帰りの1人旅（電車で1時間以内）をしていたら、同じ年頃なのに橋の上でリストラされたサラリーマンのような暗い雰囲気の方がいたんで、離れた場所からこっそり見ているのが理由らしい。

後日、「『リストラされたサラリーマン』って何？」とお父さんに聞いてみたら、飲んでいたコーヒーを吹いた。

意味を知って、釈然としなかった。

私は昼間から公園のベンチやブランコに座っている大人じゃないよ！

でも、友理との出会いは本当に神様に感謝している。

だってそうでしょ？

少し変わっているけど私と同じ年の女の子で、地頭が良くて、同じ視点に立って考えてくれて、そのうえで手を引っ張っていつもなら躊躇つちやう場所へ連れてってくれる、お婆ちゃんが言った通りの人だったんだから。

私の性格のことを相談してみた。

「そんなの誰かに言われたって中々変えられないんだし、とりあえずはその辺にぶっ飛ばしとけばいいんだよ！」

「いいのかな？」

「あとで回収することだけ覚えとけばいいって」

家族のことを相談してみた。

「近くにすぎるから逆に瑠維のことが見えなくなっちゃっているんだ。こういう時は遠くの他人の方が見えやすい。つまりボクだ！」

「友理は他人じゃなくて友達だよ？」

「普通に良い子か!？」

たくさん遊んだ。ボードゲームとか。

「……おかしい。オセロでボクが負けるだと？ 同年代で負けるなど（転生者の意地として）ありえん！——っ！ ここだ！（パチッ！）」

「じゃあ、ここに置いたら一気にひっくり返るね（パチチチチッ!）」

「なん……だと……!！」

たくさん遊んだ。カードゲームとか。

「!? それダウトー!!」

「残念ハズレ（ペラッ）」

「!!!?」

いっぱい遊びに連れてかれた。

「動物園の触れ合いコーナーに来たのに、動物が一匹も来ない——というか、近づいても逃げてしまう件。エサ代を返して貰うべきか……」

「私にはウサちゃんとか寄ってくるのに、どうしてだろ？ 友理、今朝でも天敵になるような肉食の動物と触れ合った？」

「そんなはずない。今朝は新発売のチャ○チュールをくれとマルコが必要以上に擦り寄ってきたぐらいで……あゝっ!!?」

気付いた時には、私は変わり始めていたらしい。

「黒羽さんって、低学年の頃に比べると変わったよね」

「そう……かな……?」

「うん。変わった。前に私が話しかけたら目線合わせてくれなかったし」

「そーいやオレが隣の席だった時はもつとオドオドしてたな」
「最初の頃に比べると話しかけやすくなったよねー」

友理が、私を変えてくれたんだ。

『——って感じで、ボクの方は忙しくなりそうだよ』

「友理の家も大変だね」

中学に上がる少し前のある夜、私は友理と電話していた。

私の方では弟さんの宿題を手伝ってあげたんだよ！って報告を、友理の方ではご両親の仕事が嬉しい悲鳴で忙しくて家にいない日が増えてきたという話をしていた。ついでに、お互いに中学生になるにあたってしばらく忙しくなりそうだということも。

『ボクの友達って溜めみたいに電車に乗らなきゃ会えない距離にいる子が多いからさ、その子たちとも連絡取り合って、帰ってこない日の親のやることお姉ちゃんと分担して、居候とペットの世話して、隣に住み始めた年下の子に関して関係各所と連絡を取って資料送ったりと、まあ時間がすぐに過ぎちゃう。これで個人的な自主練もあるから、1日なんてあつという間だよ』

「うーん、そうなる中学生になるまではこういう電話も控えた方がいいのかも？ 私

もちよつと一人で考えてみたいこともあるし」

『大丈夫？』

「うん。平気だよ」

『なら今度連絡を取り合うのは、中学校の入学式が終わったあとということ。……何かあつたら遠慮無く電話するんだぞ？』

「分かった。おやすみ友理」

『おやすみ瑠維』

通話を終えた受話器から流れる寂しい音を聞き終えた私は、ベッドのすぐ横にある窓を開ける。そこには綺麗な星空が広がっていた。

「中学校デビュー計画、どうしようかな？」

この前見た雑誌には生活が心機一転するのを機に、容姿や気持ちに変化を付けて新しい生活と自分を作る方法があると書いてあった。

昔の私だったら絶対に無理なそれ。

けど、今の私だったら、ほんの少しの勇気で実現できるかもしれない。

「やらないって手もあるけど……」

せめて一つぐらいは変わってみたい。

それで家族や友理に褒めて貰うんだあ。

ふと、数日前に家に遊びに来たお婆ちゃんが小学校卒業祝い兼中学校入学祝いだどくれたプレゼントをベッドの小物入れの中から出す。

それはロザリオという、大きな十字架の装飾品。

お婆ちゃんが若い頃から身につけていたお守りだった。

「そういうえば、お婆ちゃんは将来どうするか決めるときにやらないよりマシだろうって、ロザリオにお祈りしてたんだっけ？」

詳しいことは聞いても分からなかったけど、その神頼みのおかげでお爺ちゃんをゲツトしたんだと、自慢げに語っていたような……？

「……せっかくだし試そう」

案外、気持ちの整理ぐらいは付くかも。

窓から見える星空にかざすようロザリオを掲げて、願掛けをする。

「中学では、少しでも変われますように」

祈りながらロザリオを握りしめて、

そのロザリオからほんのり暖かさを感じて、

急激に瞳が重くなって、

そして――

……

……

……

『いくよ○○！』『おう！ 絶対にオレたちが勝つんだ！』

私は、何処かの廃工場のような場所で顔の見えない男の子と一緒に、顔の見えない大人達に向かって行つた。

『ぐすつ………』

私は真つ暗な場所で、ただただ無意味に泣いている……

『こうすれば……ほら、簡単に解けた』『ありがとう先生！』

弟くんじゃない、知らない子供に分かりやすいよう勉強を教えている。

『今度さ、映画見に行こうよ』『うん！ 行く行くー！』

見覚えのある子と遊びの約束をしていた。

『そ、それでは、お食事をお下げしますねー？』

どこか緊張しながら、病院らしき場所で老人の介護をする。

——そして、

「瑠維、後ろは任せたぞ。ボクらの力を見せてやる」

『任されたぞ戦友！ 我らが真の絆《トゥルー・ボンド》は何者にも負けやせん!!』

どこかの、大勢の観客がいる会場。

そこで自信満々の笑みを浮かべる私は、友理と背中合わせに戦う。

.....
.....
.....

——ピリリリリリリッ!!

「——ハッ!？」

ガバツと、目覚ましの音で目が覚める。

「あれ? 私……もしかして、あのまま寝ちゃつてた……?」

お布団も掛けずに寝ていたみたい。

ちよつと体が痛いかも。

それよりも、

「何だったんだろ? さっきの夢?」

普通の夢、とは違うはず。

何と言えればいいのか、やけにリアルだった。

（正夢……とは違うよね?）

正夢にしては選択肢が多すぎた。

男の子とボーイミーツガールの展開になってた私に、悲しいことがあったのか引きこもっていた私、家庭教師の私、普通の女の子な私、看護師のようなことをしていた私全部、本当にあり得るかも知れない私の可能性でも見せられたかのような感覚だった。

でも、やつぱり――

「友理に……信頼されてた」

大きくなつた友理と背中合わせに戦う私が、1番生き生きとしていた。

友理が何も心配せずに後ろを任せ、自信に満ちあふれた表情の私がそれに答える。現実的とは思えないのに、とても……とても眩しかった。

お互いに信じて背中を任せられる光景に、酷く憧れた。

1番の友達に信頼してもらえることが、嬉しくてたまらない。

「……今からがんばれば、あんな風になれるのかな？」

どうせ変わるのなら、ああなりたいなあ。

これが、私の人生における2つ目のターニングポイント。

不思議な夢でみた自分への憧れだった。

どうして、あれほど憧れたんだろう？

「えっと、夢の中の私って《トゥルー・ボンド》がくっついて言っていたけど、どんな意味な

んだろ？ たぶん英語だよな？ 調べなきゃ」

分かってるんだ。本当は。

「中二スタイル」？ こ、これだ！ あの私はこれなんだ！ 何だろこの心をくすぐられるような心情？ 格好いいセリフとか、服とか、装飾品とか、思い切って変われる要素が満杯！ これが私の聖書《バイブル》だったんだ！ 店員さん！ この雑誌ください！！」

何も疑わずに友理を信じてる私が、

「フッフ、わ、われわあ……！ うーん、違うもつとハキハキした言い方で。……フハハハハ！ 私は黒羽瑠維！ ……うん。成功。せっかく姿見があるんだし、ポーズもこだわりたいなあ。こう、キレッキレでターンしたり……。ん？ なーに母さん？ え？ いつまでも玄関で何やってるって？ しかたないもん、姿見ここにしかないんだから！」



「どうかしたか瑠維？」

「ふむ？」

気がつけば、いつもの調子に戻っていた友理が顔を覗き込んでいた。

昔のことを思い出ししてる間に、割と時間が経っていたみたい。

「いやなに、友理と初めて会ったばかりの頃を思い出していたのさ」

「ああ、あの橋での……」

「そう、友理が羞恥で飛び降りようとした一件だ」

「その話ダメえん!!」

「いや、どんな話よそれ？ アタシの知らないところで何が……う？」

ちよつと振ってみたけど、友理はしっかりあの時のことを覚えているみたいで安心した。忘れられない出来事ではあったけど、ちよつぱり心配だったんだ。友理はたくさん友達がいたから。

顔を真っ赤にして再びうずくまってしまった大事な友達に、改めてお礼を言ってみ

る。

「ありがとう、友理。私の友達になってくれて」

「? 急にどうした?」

「言いたい時に言いたかったから。それだけだよ。……そろそろお昼休みも終わるし、レイカちゃんを向かえに行くね」

1人で気持ちの整理を付けているはずのレイカちゃんの元へ向かう。

今度は私が手を引っ張って、たくさんのことを知ってもらうために。昔の私に、友理がしてくれたように。

S S 八千代の平穩

〔side. 八千代〕

慌ただしい日々が過ぎ、無事にレイカちゃんを我が学園に転入させることが叶った日——その放課後。

生徒会室をちよつとだけ暗くなった日の光が照らしてる。

光はちよつど私の後ろから差しているので、生徒会長としての威厳が増したような気がしたりそうでなかったり。

そんな私が座る生徒会の執務机。それを挟んで友理ちゃん、明日奈ちゃん、瑠維ちゃん、そしてレイカちゃんと勢揃いしています。

「それではそれでは、皆さん揃いましたので、約束通り！ 今日から1週間ほど友理ちゃんたちには生徒会のお手伝いをしてもらいまーす！」

「ちよつと待って」

んー？

明日奈ちゃんとレイカちゃんから同時にストップが入りましたね？

「どうかしました？」

「あく……たぶんレイカちゃんと同じ質問になると思うんだけど——ですけど、当初の約束では友理と瑠維ちゃんだけが生徒会の手伝いをする約束でしたよね。何でアタシやレイカちゃんもそれに駆り出されるの？」

「私も、コウサカ・アスナと同意見なんだけど……」

明日奈ちゃんは「嫌な予感がする」と呟きながらこちらの様子を伺い、レイカちゃんも真顔で私の目を見ってきます。まるで真意を問いただしそうとするかのように、「学園で一番偉い生徒がウソとつかないわよね？」とでも釘を刺すように。

そう、私は何の間違いかこの学園の生徒会長！

引き継ぎをして卒業された先輩たちが「不安だ……」とこぼしたとしても、生徒全員の模範となるべき生徒会の頂点！

心は痛みますが……

真実を話しましょう。

「……レイカちゃんを合法的にこの学園へ転入させるにあたって、私と友理ちゃんはこの2週間近く土日休み返上で関係各所へ働きかけました。それこそ、休みの日に片付けようと予定していたアレやコレが遅れてしまうぐらい動き回りました」

「は、はあ……」

「そして、生徒会長としての業務に支障が出て想定よりも手伝つて貰うことが多くなつた場合——明日奈ちゃんにも強制的に手伝つてもらおうと、友理ちゃんはハッキリ断言してくれたのです!!」

「何を勝手に人の名前使っているの——!!」

「ぐえ、っ!!」

おお、恐い。

明日奈ちゃんが友理ちゃんの首を絞めています。

あくまでおふぎけの延長戦のような首絞めですが、生徒会長としては見過ごすわけにはいかないほど、友理ちゃんの首が揺すられています。

まあ、自業自得なので見て見ぬ振りですが。

秋穂を加えた他の生徒会役員共々、別の仕事を振り分けて正解ですね。

あのシスコンは信頼していますが、こと妹である友理ちゃんに関わることとなると途端にポンコツに早変わりしますから……

首絞め案件など見たらまた面倒になること確定です。

ええ、いい加減私も学習しました。柚木家は姉妹揃うと面倒くさいと。

「どういふことか40文字以内に答えるバカ」

「イエッサーママ！ 明日奈はボクの協力者なんだし、少しぐらい手伝ってくれてもいいじゃんさと軽く考えました！」

「軽く考えるな！ しかも41文字じゃないの！」

「裁定が厳しい!?!」

ギヤースギヤースとうるさくしていますが、これこそ学園で送るべき青春の在り方なのだと思います。勉強も大事ですが、こういう友人との何の縛りも無いバカ騒ぎはお金では変えない特別なものですからね。

私がウンウンと頷いていると、今度はレイカちゃんが。

「私がユズキ・ユウリたちと手伝いをする理由は何かしら？」

「その件ですか……」

これも、真実を言うのは心が痛みますが――

「具体的なお手伝いしてもらいたい仕事量を伝えたところ、瑠維ちゃんが『1人でも多ければ早く終わるのだろう？ ならば！ 我がするのだから、我が世話をするレイカちゃんも共に手伝いをするのが絆を深める一歩となると思えないだろうか生徒会長!!』と言うので……生徒会長権限で承認しました」

「全然これっぽっちも思えないわよ!?!」

「ぐえっ!?!」

ああ！ 額に青筋を浮かべたレイカちゃんが、瑠維ちゃんの胸倉を掴みました！ 非常にデジャブです。具体的には数十センチ離れた場所で未だに明日奈ちゃんが友理ちゃんに突っ掛かっている構図そっくりです！

「あ・な・た・ね〜……！ 人を巻き込むにしても事前に説明ぐらいするべきじゃないの!?! まだまだこの学園の空気に慣れてないのよ私は！」

「フツ、我は友理との付き合いで学んだのだ。こういうのは無理に手を引いても駆り出すのが、将来本人のためn——」

「は？」

「だってお手伝いの量が想像してたよりも多いから、人数増やして早く切り上げたかったんだよ〜！ スーパーの特売りが無くなっちゃうの〜！」

あー、そういうえば瑠維ちゃんってご家族のために夕飯の買い物とか積極的にしていると聞いた覚えが……

「『トクウリ』が何かは知らないけど、だったら最初から言いなさいよ……！ それと、サイオンジ・ヤチヨ生徒会長！」

「うん？ 何かしらレイカちゃん？」

「その『レイカちゃん』呼びのこともそうだけど……アナタ、仮にも組織の長なら何でもかんでも許可するべきではないんじゃない？」

なるほど。一見すればぐうの音も出ない正論でしょう。
ですが、

「ご安心下さいレイカちゃん。私、これでも昔から人がギリギリ許容できそうなラインを見極めるのが得意なんです。ですから、今回の悪ふざけ——コホンッ！ 友理ちゃん、瑠維ちゃん兩名からの要請も見極めた上で許可しているのです！」

「悪ふざけ!? 今、悪ふざけって言わなかった!? どの道、胸を張って威張るようなことじゃないでしょう！」

「残念ながら今後1年は私が法で、私が裁判官です。脳内裁判の結果、被告人の西園寺八千代ちゃんは無罪判決となりました」

「どんな穴だらけの裁判なの!?!」

あらあら、こうして見るとたった1日で随分明るくなりましたね。

先日の人生に達観したような暗い瞳がウソみたいです。

今だって「本当にこの生徒会長、下克上してやるべきかしら……」なんて小声で言っていますし、友理ちゃんが断った生徒会の推薦枠をレイカちゃんに使おうかしら? うーん、でも難しいかもしれませぬ。レイカちゃんの側に瑠維ちゃんか、友理ちゃんがいる初めておもしろくなりそうですし、1人だけ入れても寂しいだけになるかも?

今この子に必要なのは、やはり同年代の友達でしょうし……レイカちゃん本人にやる

気が無い内は保留ですね。

「ではでは、場も暖まってきた事ですし、そろそろ4人にはお手伝いに入ってもらいましょう♪ 今日には備品の移動ですね。こちらの紙に書いてある物を生徒会室から各教室へ、もしくは各教室から生徒会室へ運んでくださいね」

「「はーい」」

始まる前から非常に疲れた様子の4人が返事をし、各自動き出したのを確認し終えた私は自分の仕事に取りかかります。

基本はハンコを押すだけの作業ですが、ちゃんと内容を確認しなければたまに変なものが入る時もありますし、責任重大なのです。

「変なものといえは……」

そういえば小学生のいつ頃だったか、『ライオンマスク』名義で私宛に魔法少女モノのグッズが毎年プレゼントされるようになったことがありましたね？ 結局ライオンマスクさんなる人物がどこの誰で、どうして神社の娘である私に魔法少女モノを送って寄越したのかは最後まで謎だったけど。

まあ、当時の私にはそんなこと関係なく目新しい玩具だったこともあってよく遊びましたが。ええ、両親は苦笑いでしたよ。それまで見なかった朝の魔法少女アニメを見始めましたし、実を言うと……今でも空いた時間に見ています。最近のは子供向けという

より大人向けのものも多いのでよりどりみどりでですね。時を掛ける系は良作でした。まさか主人公が変身するのが最終回だけとは……

(中学生になった辺りでは大量にグッズが送られてきて、扱いきれずに学園祭のバザーに出した年もありましたねー)

何であの年だけ多かつたかは今でも不明です。

神社にある大事な社の1つが半壊して両親が慌ただしく動いていたのが印象的な年でしたが……

「他に特別なことなんてありましたっけ？」

茜色に染まってきた空を見上げて呟いた私の独り言。それ答える人は生徒会室にいません。友理ちゃんの肩が一瞬上がったような気もしますが、ただの偶然でしょう。真相は永遠に闇の中でしょうね。



〔数年前〕

満月の夜。

その少女は内心でウキウキしながらも、コソコソと行動していた。

「大事な秘密の社やしろか、うふふのふ♪ まさかずつとボロつちいと思つていた社にそんな秘密があつたなんて……お父さんは『入っちゃダメ』って言つていたけど、神主であるお父さん自身どうして入っちゃダメかまでは分からないって話だし、これは私が調べてみるしかないな♪」

彼女の名は西園寺八千代。

今年から中学校に通い始めた、この神社の一人娘である。

中学生になったのを期に、神主である父親から今まで知らなかった自分の暮らしている神社にまつわることを聞かされた八千代だったが……

「……見えてきた。夜だと雰囲気があるな」

如何せん。彼女は好奇心旺盛な性格だった。

中学校という小学校時代とは別の環境に——少し大げさに言えば一歩大人に近づいているような気もして調子に乗りやすくなっていた。

父親から聞いた社の一つが神社で最も古くから存在し、今では「入つてはいけない」ということ以外話が伝わっていないものに興味を示した。

あああああん！ お社が大変んんんん！！」

目が飛び出るのではないかというほど八千代は、このことを神主である父親に知らさなければと急いで元来た道を全速力で戻る。

かくして、本来であれば西園寺家を襲うはずだった悲劇は無くなり、変わりに社へ入ろうとしていたことがバレた八千代が父親からこつてり絞られる程度で済むこととなった。もちろん、八千代たちは一体どんな悲劇と隣り合わせだったのかを知ることはない。



八千代が社に近づいたのとほぼ同時刻。

1人の幼さが残る少女は、その社の地下に降り立っていた。

そこにあるのは異様な空間。

頑丈な紐とそこに括り付けられたお札が空間の至る所を埋め尽くし、中央には地面に刺さった木の杭がある。

まるで何かを封印するかのよう。

杭にはいくつもの紐が結ばれており、かつては独特の存在感を醸し出していたのだからが……悲しいかな、永すぎる年月によってボロボロの有様であった。

「これ、紐にお札？ それに木でできた……何？」

『その紐とお札に触っちゃダメ。危ないよ』

「う、うん。えっと、この木（？）を引っこ抜けばいいの？」

『うん。それがボクを苦しめるんだ。お願い助けて！』

暗い地下であるはずのそこは、僅かに光っている場所があるおかげで足下に不安がないぐらいには暗闇でも見る事ができた。

その場所から聞こえてくる声は2つ。

1つは、声が震えている幼い少女のもの。

もう1つは、男の子か女の子か分からない、ただただ幼い子供だと分かる声の持ち主のもの。ただし、こちらは姿が見えない。

唯一姿を確認できる少女は中央に刺さった木の杭に手を添え、引っ張る。

杭はいとも簡単に抜ける——そう、抜けてしまった。

そして、

なく倒すことができたなー！　ボクの演技力も中々のものみたいだし、妖怪もすっかり騙されてやんの！　これで八千代ルートは崩壊だ!!　——あ、もしもアルカ？　八千代さん、もとい八千代ちゃん様子どう？　うん。うん。ビツクリして父親を呼びに行つたと。分かつた。じゃあ見つかる前に退散するわ」

S S 柚木友理・非公認ファンクラブ（前編）

事は八千代さんの何気ない質問から始まった。

「友理ちゃんって、結構モテるタイプですか？」

「……………はい？」

モテるって……………誰が？

明日奈、瑠維、レイカと4人で生徒会の手伝いを始めてから3日目。

今日は他校からのお客さんが来るとかで、朝早くから集まってセッティングをしているところだった。

大事な話し合いが先生たちの間でされるといふことで、お姉ちゃんを含む他の生徒会メンバーも動員して不備の無いように動くことに。

その時、生徒会のメンバーから挨拶や自己紹介をされたけど……………ぶっちゃけ1度で覚えられるかって話ですか？ 正直言って何度も会うような仲間でもないし、無理して脳内記憶領域を使う必要もないな〜と。今後関わるかどうか不明の他人の顔と名前を覚える

くらいなら、お姉ちゃんや八千代さんのちよつとした仕草を永久保存する方がずっと意味があると思うんだ。

バカらしい理由？ 何とでも言え！

と、そんなことを考えていたボクに「ふと思いついたので聞いてみた」といった感じに質問をしてきた八千代さん。

「……念のために聞きますが、八千代さんは『モテる』という言葉の意味をご存じですか？ それとも荷物を多く持てるのか？という意味で聞いてきたのですか？ 後者なら、

答えはYESですけど」

中学生時代、陸上部から誘いが来るくらいには体を鍛えているから、常識の範囲内ならそれなりの量の荷物は運べるけど……

「異性に好意を向けられやすいか？といった意味で聞きました。この際、同性でもいいのですが」

「モテる？ ボクが？ ……あり得ませんね」

八千代さん相手でなかったら、鼻で笑っているところだ。

どこの世界に家事スキルは高めで顔立ちも整っているけど、目的のためなら手段を選ばず男勝りで私服数着を使い回しにしている女を——それも前世が男であるTS娘を好きになるというのか？

友人としての関係ならOKだろう。

しかし、恋愛対象としてはOUTである。

まあ、もつとも……

「そんな！ まさかユウちゃんを好きな男の子が現れたの!? 認めません！ お姉ちゃんはどこかの馬の骨かも分からないような人に嫁がせません!!」

「お姉ちゃん……!」

何人もいる『ヴァルダン』ヒロイン勢の中でも、今やすっかりボクにとつてフェイバリットな存在となった柚木秋穂お姉ちゃんは、大事な家族であるボクに男の影がチラついていないか心配で仕方ないよう。

（それはボクのセリフだよ、お姉ちゃん！ お姉ちゃんをどこの馬の骨とも分からない男なんぞに嫁がせるものか!! 相手の身辺調査や付き合ってから素行調査は任せて！ もしも、お姉ちゃんを悲しませるような奴なら、奴なら——社会的に殺すか）

『ヴァルダン』の主人公である香坂拓也に取られるのも嫌だけど、あとで裏切るような男ならボクは修羅にならざるを得ない……

（なーに、ダークサイドに堕ちそうな顔してんのアンタ）

ボクが本当にお姉ちゃんのお相手としてゴミクズが現れた場合について考えていれば、呆れた表情の明日奈が側に。

(言っておくけど下らないことじゃないぞ。万が一お姉ちゃんに——)

(億が一でも、今の秋穂さんが今後数年で恋人を作ることはないでしょうから落ち着きなさいバカ)

(何でそんなこと言い切れるんだよ!?)

(アンタが原作ブレイクしたせいですが、アホのシスコン!!)

意味が分からん!!

「はいはい、話を振った本人としてはアレですけど、いつもの茶番劇は姉妹仲良くご自宅に帰ってから好きだけやってください」

八千代さんは、どこからか出した扇子をパタパタしていらっしやる。

……扇子に『落ち着けシスコン共』と達筆な字で書いてあるように見えるのは気のせい
いか? もしや他にもバリエーションが?

「しかし生徒会長よ? 何故、我が親友がモテるかどうかの話が出てくるのだ? 友理

はどちらかという友人・仲間といった関係が似合うが、恋愛方面では……うむ、やはりしつくりとこないな。一部例外を除いて、そういった話は聞かん」

話を聞いていた瑠維が腕を組みながら首を傾げれば、

「そうね。ユズキ・ユウリの間関係はこの2、3日しか見ていないけど、浮ついた話ほとんど聞かないわ。少なくとも同学年ではないんじゃない？ ……一部例外を除いて」
瑠維の隣にいたレイカが援護し、

「う〜ん……ダメね。アタシも2人と同じ意見よ。そもそも友理自身がそういった恋愛関係どうこうと無縁で興味が無いから、いまいち想像しづらいのよねえ。見た目だけなら好きになる男はいるんでしょうけど、中身も合わせるとなるとどうも……。やつぱ一部例外を除いて、アタシの知る範囲ではないわね」

明日奈が結論を出す。

「やはり、そういった意見になりますか……。私としても知っている限りでだと、一部例外を除いて同意見なんですよね。友理ちゃん性格の善し悪しとは別に考えて、違和感があると言いますか……」

………

いや、別にいいんだけどね？

TS転生で男から女になった時点で、恋愛どうこうのことは綺麗さっぱり捨ててますし？

でもさあ？ ここまで周りの親しい間柄の人たちの意見が一緒だと不安になると言いますか……ぶつちやけ、ボクの評価って第3者視点だとどうなってるのかな？とブ

ルーな気持ちになっってくる。

(にしても、『一部例外』ね……)

たぶん、というか間違いなく、全員同じ人物を思い浮かべたんだろうなあ。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

【同時刻】

「——ハッ!? この感じは、友理さんがワタクシの噂をしている!? もしやこれが愛のレーダー!? ついに友理さんへの愛が天元突破した証拠なのですわね!! 待ってて下さい!! アナタのママがすぐに学園へ向かいますわ♡」

「……ねえ、サヨっち? あそこでママっちが……」

「視線を向けてはダメよ凜子。私たちは通学路の途中で突然電波を受信してスキップしだす女子生徒とは無関係。分かった?」

「ア、ハイ」

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

……深く考えるのはやめとこう。

「話が脱線したんで戻りますけど、瑠維の言う通り何でボクがモテるかどうかといった話がでるんですか？」

3年生で告白の準備をしている場面を見ちゃったとか？

本当にそうだった場合はどうやって断ればいいのか？ まさか、こんなことで悩む日が来ようとは……

「あー、友理ちゃんが想像しているようなそういつた訳ではないんですよ。……友理ちゃんはクラブ活動のことはご存じで？」

「？ まあ、学園のパンフレットに書かれていた程度の情報なら」

クラブ活動。または研究会。

部活動とは違って、あくまでも同じ趣味を持った人同士が交流を持つために作られたもの。

部活動のように大会に出るわけでも学園から活動資金が出るわけでもないが、学園側へ申請し、それが通って学園公認クラブになると、パンフレットでの紹介・空き部屋の確保・物品をしまう専用ロッカー入手などが可能となる。

ボクが目を通して知っているのだと、『カードゲームクラブ』に『ビーズクラブ』、さらに『特撮研究会』に『歴史研究会』なんてのもあった。

前者は本当にただ集まって遊ぶだけだが、後者は研究会とだけあって学園祭で新たに分かったことを発表したりもするんだとか。過去にはテレビ出演もした黄金世代がいた時期もあるそう。

閑話休題。

「そのクラブ活動が何か？」

「実はこの学園には、申請が通らなかつた、または最初から申請する気が無かつたなどの理由で『非公認クラブ』というのが存在するのです。そして、隠れて活動を続けているのです」

「非公認クラブ？」

ゲームの『ヴァルダン』でも出なかつたぞ、そんな設定。

クラブ活動にしても、ゲームじゃ凜子が王芽依と一緒に『武術同好会』を作ろうとするエピソードや、原作の柚木友理が『ファッシュョンクラブ』の設立を目指すといったエピソードが、プレイヤーの行動次第で発生するぐらいだった。

「あるんですねー、そんなクラブって現実に」

「あるのですよ、困ったことに」

「そうなのよ明日奈ちゃん。基本的にクラブ申請は生徒会を通して問題なしと判断されたものを、先生方に渡して最終的な活動許可を取るんだけど、たまくに変な——生徒会としてとてもじゃないけど許可できないクラブを申請してくる人たちがいるの〜」

「……寛容さのある八千代さんやお姉ちゃんがストップさせる程の？」

「さすがに私としても、自分の代で『擬人化動物愛好会』を先生方へ通す勇氣はありません。アレを学園公認にするのは少々……」

「良くやってくれました！」

明日奈とハモった。

どこのバカ共だ。それを学園公認クラブにしようとしたの。

個人の性癖にどうこう言うつもりはないけど、何故それが通ると思ったし？ てか、話の流れ的にそいつら今でも非公認で集まっているってことだろ？

下手なホラー映画よりホラーだわ。

「また話が脱線してしまいましたけど、実は最近になってある情報が生徒会の調査で分かったのですよ」

「ちよつとタンマ」

ウソでしょ？

え？ 話の流れ的に、そういうことなの？

八千代さんはボクの制止の声を無視して現実を突きつける。

「どうも、友理ちゃんの非公認ファンクラブが存在するらしいのです」

S S 柚木友理・非公認ファンクラブ（後編）

時刻は放課後16時。

全ての準備は整った。

「ではこれよりい！ 我々、非公認ファンクラブ調査団は行動を開始するう！ 各自は無線にて情報共有を優先するように!!」

教室内にボクの声が響く。

中にいるのは仲間内だけなので当たり前だが。

「おー！ 何か楽しそうー!」

「そうね。楽しそうね。本当の目的の件がなければ……」

第1チーム、凜子&小夜ペア。

対照的なテンションの2人だがきちんと動いてくれる……はず!

「フツ、とつとと終わらせよう。夕暮れ時は本来、我にとつとも動く時間。闇夜の

刻となる前の、熾烈な争いすら起こりえる時間帯なのだから」

「クロバ・ルイ……格好良く言っているとこ申し訳ないのだけど、ようは日が暮れた頃になると、スーパリーの値引きシールに吸い寄せられた主婦と商品の取り合いがあるから早く帰りたいってことでしょ。生徒会長からの正式な依頼っていう体で手伝うことになつたから仕方なくいるだけで」

第2チーム、瑠維&レイカペア

結成数日にして、凸凹コンビの認識になり始めた2人。

「ユウちゃんを応援する資格があるのか……お姉ちゃんが見定めます!」

「ワタクシを抜きにファンクラブなど……会長の座を手に入れねば!」

第3チーム、秋穂&マヤペア。

やる気はある……あるけど……どうも方向性がおかしい。

「マルコ、さつき話したとおりです。いいですね?」

「ワンツ!」

第4チーム、忍&マルコペア。

ここに来るまで、事前に打ち合わせをしたらしい。

尚、アルカは例のごとくお休みである。ちよいふてくされた感じの声で、夕飯に唐揚げを要求された。別にいいけどさあ。

「友理のファンクラブかあ。応援するべきか迷っちゃうなあ」

「見つけてから考えればいいさ。害があるなら生徒会長が適切な処罰をしてくれるだろうし。……その前に友理の怒りが向けられそうだけど」

第5チーム、美江&めぐみペア

めぐみはともかく美江さんや、迷わずに“応援しない”を選択してよ。

「くつくつく……最強の布陣ではないか！」

「忍ちゃんのところ以外を見てそう判断したんなら、アンタの目は節穴ね。まあアタシも、今回ばかりは好奇心が勝った訳だけど……」

第6チーム。ボク&明日奈ペア。

僅かな痕跡でも、今日中に探し尽くしてくれるわ!!

あ、香坂拓也には帰ってもらいました。別にいてもいいんだけど……どうも嫌な予感がしたので追い払った。こういう時は自分の勘を信じます。

「では諸君！ 何としてでも『柚木友理・非公認ファンクラブ』を見つけ出して処罰してやろうぞ！ 悪魔崇拜者共に天罰を！」

「……友理さあ、表向きの理由は非公認ファンクラブの数と内容を調べることでしょうが。せっかく八千代さんから許可ももらったんだから、最低限は取り繕いなさいよ。後半に関してはメチャクチャだし」

それぐらい焦燥感があるんだよ明日奈！

「それでは、各自行動開始!!」



行動を開始してから半刻が経過。

手がかり——まるで無し！

「どこだ〜どこで活動してやがる〜?」

「せめてその邪悪な気配を消しなさい。隠密行動も大事だつて話したアンタがそれしないでどうすんの？ さつきだつて気配を敏感に感じ取ったらしい小鳥が即座に逃げて、逆にカラスが寄つて来たじゃないの……」

「学園が広すぎて中々見つからないのが悪いんだよ！」

部屋数も多いから痕跡探すだけで時間が掛かるんだ。

「ところで……」

「何？」

「ツツコむべきか迷っていたんだけど……アンタ、何で扇子と棍棒をそれぞれ片手に装備してんの？ 雰囲気のこともあるって、下手にまだ学園に残ってる生徒に見つかったら学園七不思議にランクインしてもおかしくないわよ？」

「『恐怖！ 扇子と棍棒を持って徘徊する女！』みたいなの？」

「そんな感じ。で、そのアイテムを持つ心は？」

「もしかしたら僅かな可能性として『柚木友理ファンクラブ』など存在せず、『柚木友理ファンクラブ』と『扇子と棍棒』という集まりの可能性も——」

「ねーわよ。どんな集まりだったの。活動内容は何なの？ アンタ、実は自分で考えているよりもファンクラブの存在に動揺してるでしょ？」

「当たり前だろ！」

現実的に考えてみる！

アイドル活動してる訳でもないのに、自分のことを推してる集まりがあるんだぞ？

そんな集まりが自分の知らないところで活動しているなんて普通に嫌だ！ 公認じゃないなら尚更だ！

「対象はアンタなんだし、アタシの予想じゃ学園入学初日にやった模擬戦を見て、憧れでアンタのファンになった説の方が高いと思うけど……。もしも本当にそうだったら大目にみなさいよ」

「……大目にするよ。本当にそうだったら、ね」

憧れで集まった結果なら諦めるよ。

正直言つて、あの模擬戦と一月程度の学園生活だけで集まりができるとは思えないけど。『ヴァルダン』系の大きなイベントもまだなんだぞ？

ボクが動揺しているのは別の理由が原因だ。

「あー、やっぱり八千代さんの言っていたことが気になる？」

「まあね……」

『柚木友理・非公認ファンクラブ』が存在している可能性があるという聞いてから、ボクは八千代さんに知っているかぎりの情報の提示をお願いした。

結果、〃可能性がある〃と曖昧なだけあってあくまでも生徒がそれらしい話を聞いたと、ボクを遠くから見つめる生徒がいたと、こんなのばかりだったけど……。一つ、聞き逃せないことがあった。

「そのファンクラブと思わしき集まりができたのが、2年前からの可能性があるってどういうことだよ？ ボクまだ中学生だぞ？」

「それね。本当だったら時期的におかしいわ」

ある意味、凜子たち仲間内が調べるのに協力してくれたのはそれが大きい。最初は明日奈みたいに例の模擬戦でくって意見もあった。だけど、2年前から存在している可能性が出てからみんなのやる気が変わった。

「アンタが『何年も前からボクをストーキングしてる奴が布教した結果できた邪教だったらどうすんの!?』って涙目で訴えたのが決め手ね」

「ネタでも冗談でもなく、ガチだったら普通に怖いです」

「(づ)もつとも」

その可能性に気付いた瞬間、全身に鳥肌ができたよ。

世のストーカーに悩まされる人々の気持ちの一端を理解したわ。

——と、

『ジジジ……友理さん、聞こえますか？ どうぞ』

「！ 聞こえるぞ忍。どうぞ」

別行動中の忍から無線が！

『例のファンクラブの者と思われる人たちが集まっている場所を突き止めました。どうぞ』

「でかした忍!!」

ついに尻尾を掴んだか！

「それで、場所は？ どうぞ」

『はい。場所は——』



「お持ちしてました」

「ワンツ！」

「待っててくれてありがとう忍、マルコ」

「うっわー……こうして側で見ると大きいわねー」

連絡を受けてから数分後。

ボクと明日奈は忍が突き止めた場所——時計塔前に来ていた。

この学園の時計塔は、その大ききから敷地内でも少々外れた位置にあり（中央に建て

る案もあったけど、晴れの日にできる影の大きさ・万一崩壊した際の被害などの理由で却下に）、近くには倉庫ぐらいいしか無いから滅多に人も来ない。隠れて何かするには丁度良い場所だったみたいだ。

「この中にいるの？」

「みたいです。時計塔の中央あたりに資料などを保管するための部屋があるそうで、そこを借りているようですね」

「へえ、良く調べたわね、この短時間に」

「！　ぐ、偶然、話しているのが聞こえてきました……」

？　何だ、忍の様子が……？

「忍？　何をそんなに緊張してるんだ？」

「あー、いえ、何でもありません。何でも」

「アウ、アン！」

「あ、そっか。そういうことね」

それなりに長い付き合いだからわかるけど、どうも今の忍は緊張しているというか、挙動不審だった。

違和感を覚えてもう少し聞こうと思ったけど、マルコの「主人、忍の不安になるのも仕方ねえだろ？　ちよいと考えれば分かるじゃん」との言葉で気付いた。

そうだ。もしかしたら中にいるのは純粋な憧れで集まった集団ではなく、ストーリーカーとその予備軍みたいな連中なのかも知れないんだ。下手したらロリ枠の忍に下品な視線を送る奴だっているかもしれない！ 緊張して当然じゃないか！

「安心しろ忍。きちんとOHANASIしてくるから」

「“お話”て、アンタのそれは物理が伴う可能性があるんじゃない」

「だから他のみんなは呼ばないんだよ」

「やっぱり“OHANASI”の方じゃない……」

「だ、大丈夫です。一緒に付いて行きますす！」

ぎこちなくも笑って見せる忍。

守りたいぜこの笑顔……！

「よし、行くこう」

気持ちを切り替え、3人と1匹で時計塔の中に入る。

中は全体的に薄暗かった。小さな明かりがある程度だ。

エレベーターもあるけど一階と最上階しか繋がっていないらしいので、目的地の時計

塔中央部まで地道に階段を上ることに。

無言で階段を上っていくことしばし。

ついに目的地に到着した。

「……………ハハハか」

扉は閉まっているけど鍵が掛かるタイプではないようだ。

このまま開けても問題ない。

後ろにいる明日奈、忍、マルコに合図を送り——ドアノブに手を掛けた。

——バンツ！

「失礼する!!」

「——っ!?!」

「うわっ、ビックリし——」

「え? へ?」

「「ゆ、柚木友理さん!?!」」

ドアを開けた先の資料室は意外にも明るく、広かった。

そこにいた学園の生徒も意外と数が多い。

3年生と思わしき男女2人は完全に固まっている。

2年生らしき人たちが4人はそれぞれ仰天していた。

1年生——同学年の奴らは結構多い。え〜つと、全部で9人か。いや多いな。こつち

はボクの名前を呼んで目が飛び出そうなくらい驚いている。てか、記憶に間違いなければコイツらボクのクラス以外全部のクラスに2、3人ずついたぞ！ マヤを含めたらフルコンプじゃんかクソつたれ！

しっかし、むくん……

女子も数名混ざっている時点で分かっていたけど、コイツらの目や表情を見るに驚きながらも嬉しさの感情があるな。

これは憧れって意味でのファンクラブ決定か？

じゃあ大目に見ることになるのか？

ふ、複雑だ……

とりあえず最低限の確認だけでもするか。

そう思つて口を開き掛けた時、後ろで様子見をしていた忍が意を決したような顔でボクの前に出た。

「忍？ 〇〇はボクにまかせ——」

「「「会長!!」」」

……

ボクと明日奈、2人揃っての魂からの叫びだった。



落ち着いてから聞かされたこと。

それは完全に見落としていた衝撃の事実だった。

「じゃ、じゃあ！ キミたちって、忍と同じ施設にいた子供たちなの!？」

そうだ。考えれば当たり前のことだった。

完全に頭から抜け落ちているとかアホかボクは!？」

「はい！ ずっと、ずっとお待ちしていました!？」

「数年前、アナタに助けていただいた無力な子供です」

「ネズミーマスクさんにまた会いたいと願った子供です」

「「オレたちの大恩人です!!」」

向こうは学年に関係なく、感極まっている様子。中には必死に涙を堪えている奴もい

る。女子の1人は涙腺が完全に崩壊しているし……

「あー、そうよ。そうよね。何つでアタシつたら友理と同じで見落としてたのかしら？
忍ちゃんがいいた施設は違法に人体実験していた場所で、その実験は異能に関すること
で、ともすれば当時の友理が助けた子供たちは異能使用で、成長すれば法律によつて全
員この学園に入学するじゃないの。忍ちゃんを基準に考えていたけど、その忍ちゃんは
最年少で、当然年上の子供もいるわけで、その子供たちは忍ちゃんより先に学園に入学し
てるのよね。アタシらの先輩や同級生として……」

唯一事情を知っている明日奈がボクの言いたいことをブツブツと代弁してくれた。
「すぐに気付きなさいよアタシ」と四つん這いになりながら。

「あー……忍会長、説明プリーズ」

「あ、はい。保護施設で暮らしていたみんなは突然私が1人暮らしするということに当
然のごとく驚き、心配からこれでもかと質問攻めに遭いまして……」

元々同じ境遇の子供たちで、仲間意識も当たり前のように強い。

そんな子たちからしたら最年少組で、姉のように慕つてた人物を亡くした忍は本当の
妹のように可愛がりたくなる存在であり、急に施設の大人たちも説得しての一人暮らし
云々はまさに寝耳に水で、どういうことなの!?!と上へ下への大騒ぎに——とのことらし
い。

ちな、忍の説明にボクのパーククラブ（仮）のメンバーが補足する形で説明をプラスしてきたので、忍は顔を赤くしている。

……何このカワイイ生き物。

「まあその、最初は友達さんからも必要以上のことは秘密にしておいて欲しいとのことだったので、数回は持ちこたえたのですが……」

「あー、余りにも騒ぎが大きくなって、多少なり秘密を打ち明けないとどうにもならなくなっちゃった感じ？」

「ごめんなさい」

「いや、そこは気付かなかったボクも悪いから」

当時のこと——もう会うこともないだろうと諦めていた忍が数年越しに会いに来たことで、驚きと嬉しさがミックスして相当テンパってたっけ？ 隣のアパートに住む話の流れで出た時も『よっしゃ！ 合法的にヒロインがお隣さんになるぜ!!』と、深く考えずGoサイン出してたような……

そりゃ施設仲間から心配されるわ。

「問題は施設仲間の1人——私の1つ上の子がとても勘が良い人でして、『もしかして、ネズミーマスクさんが関わっているの?』との問いに誤魔化しきれず動揺してしまってます」

さらに続く忍の説明を要約するとこんな感じ。

← ・施設仲間「何!? 自分たちの大恩人が関わってるのか!？」と收拾が付かない程の騒ぎとなり、忍は観念。最低限だけ情報を開示。

← ・忍の2つ年上の女の子が『ネズミーマスク』の正体と分かったので、何らかの形で恩を返したいなあ……

← ・同じ異能使いで同じ県に住んでいるなら、同じ学園で学生生活することになるよな？ しかも重大な使命（？）があつて忙しい生活が待ってることは、入学するまで2年の空きがある忍の変わりに表立って、または裏だつて手伝いすることのできる人材が必要な時もあるんじや……

← ・じゃあそういうクラブ作ろうよ!!

← ・今の3年生「よし、2人でも学園の情報収集は1年あれば十分だ!」

← ・今の2年生「私たちが来たらクラブの骨組みを作りましょう！」

← ・同級生「オレたちが入学したら本格始動だ！」

← ・施設仲間「というわけで、忍ちゃんが会長に決定！」

← ・忍「何でこんなことにいいいいいいいいいつ!?!」

——以上、ファンクラブ（仮）の創設秘話でした。

「忍ちゃんも大変だったのね……!」

「分かってくれますか明日奈さん……!」

説明を終わった頃になって疲れ切った表情になった忍の頭を、明日奈がナデナデしている。おいバカ。そこはボクのポジションだぞ。

「え〜つと、つまりファンクラブだと思っていたキミたちの正体って……」

「正式名称『柚木友理さんを、影ながら、お手伝いしよう』クラブ。略して『YKOKラ

「ブ」です！ 普段はバレないように『ユコクラブ』で通しています」

「別人のファンクラブになってね!？」

中途半端にバレたら「ユコちゃん」って誰？」と別の問題が出てきそう。

「というわけで、忍が『隠しきれないので丁度良いし早期に存在を明るみにしちゃいましょう』と思ったなら問題ありません。是非困ったことがあればオレたちに相談して下さい！ それぞれの分野や部活動に役割を分けているので、すぐに行動できますよ？」

「……よろしくお願いしまーす!!」「……」

「楽しそうだなキミら……」

さすがに「クラブ解散!」とは言えなかった。

全員、目が使命を帯びたギラつきしてるんだもん！ 断れるか！

こうして、ボクのファンクラブ（○）を巡る問題は無事（？）に解決した。

手伝ってくれた凜子たちには「予想外に無害なクラブだったんで大目にみることにした」と報告。詳細を聞いたそうにしていたけど、ボクや忍の何とも言えない遠い目を見ていろいろ察してくれたのか、それ以上の追求はなかった。

みんな良い子だなあホント。

お姉ちゃんとマヤだけは最後まで諦めきれずにいたけど。

そうして疲れ切ったボクは忍に残りの事後処理を任せて一足早く家へと帰る。――
あ、帰りに唐揚げ用の鶏肉買わなきゃ。

「友理さんには必要以上に疲れさせてしまいましたね……ところで、今回の議題の件はどうなりました？」

「はい会長！ 柚木友理さんに告白しようとしていた2年男子生徒の件ですが、『相応しくない』と全員一致で結論が出たので、こちらで絶対に近づかせないように処理をしたと思います」

「おや？ 件の先輩さんは品行方正で、とりあえず告白するだけならあとは友理さんの判断に任せないかとの話ではありませんでした？」

「調べたところ、非公認クラブ『擬人化動物愛好会』の創設者であることが判明しまして……」

「良くやってくれました」

S S 掲示板回 異能犯罪者スレ

【大規模】『Heartギア』を悪用する犯罪者について語る part 38 【摘発！】

534 : 名無しの異能者
はくっ！

海外の警察大手柄！ ね〜？

535 : 名無しの異能者

その大手柄取るまで何年掛かっているんですかねえ？
どの国も警察仕事遅っ

536 : 名無しの異能者

◇◇ 534

◇◇ 535

言いたいことは分かるけど、言い方うつぎ

537：名無しの異能者

日本と違って外国の犯罪組織は

当たり前のように銃を使うことをお忘れなく

538：名無しの異能者

無策に「検挙く！」とか警棒持って突撃したところで

蜂の巣になるの確定

539：名無しの異能者

まあ数十年前から出始めたとしても科学力があれば……

銃弾喰らってもピンピンする機動隊。相手からすれば悪夢

540：名無しの異能者

あの個人用バリアか

541：名無しの異能者

少なくとも要人がスナイパーに怯えることは減ったな

542：名無しの異能者

そもそも、あの携帯できる謎のバリアって何だっけ？

テレビで紹介した記憶あるけど忘れたわ

543：名無しの異能者

◇ 539

現場にいる複数人に行き渡らせるのは難しいって話だけどね

今の科学の限界ってやつ

544：名無しの異能者

犯罪者の凄腕スナイパーが何人もやめる原因になった件

545：名無しの異能者

◇ 542

個人用のプロテクトフィールド

異能バトルの会場で使われるものをめっちゃ小型化した奴

要人警護にしか使われない。攻撃に反応して展開

普通のだと撃たれてもちよつとの痛み・衝撃・体力減少にまで軽減

王族レベルだと上記に加えて物理的に防ぐバリアも即展開

546：名無しの異能者

特別な許可取った警備会社が貸し出す形だっけ

547：名無しの異能者

世界のVIP、国のトップがSPに囲まれながら装備

日本の天皇やイギリス王室が外に出るための必需品

548：名無しの異能者

いいなー

549：名無しの異能者

実際すごく欲しい

それがあれば事故・事件で死ぬ率超減るわけでしょう？

550：名無しの異能者

だが残念。

作るのに金・時間・汗水が大量に掛かるので

量産は不可能。

551：名無しの異能者

オレ日本生まれで良かった

少なくとも銃に怯えないで済むのは大きい

552：名無しの異能者

※ただし、刃物は結構種類が豊富です

553：名無しの異能者

高いけど刀だって売っているしね

殺傷力極振りて達人クラスが使うとマジヤバいぞ

サムライ魂は未来永劫受け継がれるのだ

554：名無しの異能者

日本人「oh! Gunshot Crazy!!」

外国人「oh! Sukiyaki Geisha Samurai Crazy

!!」

555：名無しの異能者

草

556：名無しの異能者

日本側まで英語使ってるうえに

スキヤキと芸者は関係ないだろっての

557：名無しの異能者

スキヤキ食べてく

牛肉は半生で、ネギと一緒に食べるんだ……

558：名無しの異能者

こんな時間（深夜11時）にメシテロはやめい

559：名無しの異能者

◇ 551

日本ほどじゃないけど外国も今回の騒動で“マシ”になるだろ
中途半端に生き残ってた奴らほぼほぼ全滅だからな

560：名無しの異能者

ようやく最初の話に戻るのか

561：名無しの異能者

脱線しすぎいつ!!

562：名無しの異能者

そもそも何の話だっけ？

563：名無しの異能者

外国の犯罪組織が一斉摘発された話

564：名無しの異能者

電撃作戦らしいね

特にロシアの組織はゴッドファーザー全員捕まったって

565：名無しの異能者

◇ 564

正確にはボスだけじゃなく、幹部や古参の部下もだ

逃げおおせたのは完全ノーマークの末端だけ

566 : 名無しの異能者

助けてくれる部下まで逮捕とか……

一生刑務所生活だろうねボス

567 : 名無しの異能者

そもそも今の刑務所はそこら中にセンサーがあつて、

それに引つ掛かったり異常が起こると空中&地中まで

覆う謎バリアが展開して物理的に逃げられなくなるし

568 : 名無しの異能者

え? ウソ、だろ……?

じゃあ昔の映画で見たスプーンで穴掘るのとかつて……

569 : 名無しの異能者

無理ですね

そも、壁や床が特殊配合で鋼鉄並みの堅さだつてテレビで言つた

570 : 名無しの異能者

◇ 568

つーか何年前の映画だよ?

最低でも半世紀以上前なの確定じゃんか

571：名無しの異能者

え〜つと、80年ぐらい前のだったはず

572：名無しの異能者

古すぎいつつ！

573：名無しの異能者

もう犯罪者関係で半世紀以上前の知識なんて当てになんね〜ぞ？

スナイパーの件しかり、脱獄関係しかり

574：名無しの異能者

今って犯罪者から市民を護る系の映画やドラマってほとんど無いからな

昔の作品漁ってる人は分かるかもだけど、『犯罪組織から要人を守り抜け！』

——って内容とか、個人用バリアのせいで話の展開しづらいし

575：名無しの異能者

まあ最初は「シャワーを浴びていて、個人用バリア付けていない時に〜」

とかの内容でやってたみたいだけど、ネタが尽きるのも早い

576：名無しの異能者

映画やドラマ関係者も頭をひねって考えたんでしょうけどね〜

577：名無しの異能者

そう言ったのが増えてくると何番煎じだよって内容が増えてきて見る人減るから作らなくなるという……

578：名無しの異能者

犯罪者と戦うアクション系作品減ったのは本当勿体ないよなー

579：名無しの異能者

そういつたの好きな人は半世紀以上前の作品群から探すしかない

有名所は動画配信サービスで見放題だからオレはそっちで見まくる

580：名無しの異能者

正義の味方の主人公VS犯罪組織のボスor幹部は見所だったけど

ここ数十年で犯罪組織の弱体化もあって、現実では絶望的

犯罪者VS犯罪者なら何とかってレベル

581：名無しの異能者

現実で数十年生き延びた組織つてのも強そうだけど

末端は幹部から銃弾の節約を心がけたりするよう言われてんだろいうな

下手したら幹部クラスどころかボスまでも……

582：名無しの異能者

控えめに言ってカッコワルイ

583：名無しの異能者

幹部「フアーザー、葉巻は節約してくださいとあれほど……」

ボス「あと1本！ あと1本だけ吸わせて！」

584：名無しの異能者

草生える

585：名無しの異能者

控えめでなく、ただただ格好悪い

586：名無しの異能者

悪の組織を牛耳る黒幕の格が

休日のお母さんに注意されるお父さん並みに……

587：名無しの異能者

犯罪組織のボス「明日から葉巻減らすから今日だけは！」

休日のお父さん「明日からタバコ減らすから今日だけは！」

588：名無しの異能者

オレなら、こんなのがボスとか組織やめたくなるわ

589：名無しの異能者

だが、犯罪者の巢窟である組織を今の時代まで生き延びさせた
実力は本物

写真見たか？ 貫禄と圧が半端じゃねーぞ？

590：名無しの異能者

見た。特にロシアで一番デカイ組織のボスとか

どれだけの数を殺してきたのか考えるのも恐ろしい風貌

591：名無しの異能者

そもそも一斉摘発のタイミングや要領の良さが謎

ぶっちゃけ上手くいきすぎじゃね？て

592：名無しの異能者

警察関係者によるとタレコミがあつた模様

単純な組織の情報だけじゃなく、公的機関にいる裏切り者の
情報まで細かく関係者へ送られてきたらしい

593：名無しの異能者

〈592の続き

恐ろしいのは警察のトップからピザ屋の配達員まで

組織と繋がった奴の詳細が電子データで送られてきたことだ

594 : 名無しの異能者

∨ 593のさらに続き

特にロシアとそこに深く繋がっていた組織の情報が膨大で

どう考えても数年前から集めていたとしか考えられないもの

まであったとか

595 : 名無しの異能者

誰が送ってきてくれたんだろ？

ロシアの事情に明るい人物か……

596 : 名無しの異能者

もしくはロシアの犯罪組織を相当恨んでいる奴か……

597 : 名無しの異能者

ロシアと言えば日本でマフィアの構成員を捕まえたって

話題になったけど、あれロシアの犯罪組織所属だったぽいな

598 : 名無しの異能者

マジで？

599 : 名無しの異能者

マジマジ

警察に勤めてる知り合いが漏らしてた

4人逮捕されたみたいんだけど、リーダー格が重傷だとか

日本へ来た経路調べたら、実はもう1人 i t

560 : 名無しの異能者

ん?

< 599 はどうした?

561 : 名無しの異能者

おい?

562 : 名無しの異能者

こ、これは……!?

政府関係者がネットを監視していて、世に出回ると困る

情報を流す輩を粛正しているという説は本当だった流れか!?

563 : 名無しの異能者

陰謀論は別のスレでどうぞ

【『Heartギア』を悪用する犯罪者について語る】

???
：アルカ

〈●〉〈●〉「削除」

このスレッドは存在しません